

4人目の奉仕部員は平穩  
に過ごしたい…

レッドクロス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺ガイルのアンチ作品に触発されて書きました。

pixivでも、ユーザー名『ブルーバード』として連載しています。

この作品は非常に賛否ある作品ですので、閲覧は自己責任でお願いします。

# 目次

キャラ設定	1
ああ、こんな事で平穩を脅かされたくない。	10
部活に入部させられたけど平穩を脅かされたくない。	20
他人は頼れないから平穩を脅かされたくない。	56
クラスの女王に平穩を脅かされたくない。	87
厨二病のラノベ作家に平穩を脅かされたくない。	111
テニス部の男の娘に平穩を脅かされたくない。	111
ない。	150
傲慢な女王様に平穩を脅かされたくない。	184
勝つために卑劣な手段を使っても平穩を脅かされたくない。	217
悪質なチエーンメールに平穩を脅かされたくない。	274
犠牲なくして解決はないから平穩を脅かされたくない。	320
成り行きと末路を見ても平穩を脅かされたくない。	381
恐れを抱いても平穩を脅かされたくない。	410

自分のために平穩を脅かされたくない。

441

仮面の魔王に平穩を脅かされたくない。

502

遊戯部とのゲームに平穩を脅かされたく

ない。

544

理解できなくても平穩を脅かされたくない。

千葉村に行くけど平穩を脅かされたくない。

591

い。

身勝手と理不尽に平穩を脅かされたくない。

628

い。

一人の少女に平穩を脅かされたくない。

732

# キヤラ設定

名前：富良野英理華（ふらのえりか）

所属：総武高校2年F組

身長：174cm

体重：47kg

スリーサイズ：89／56／78

容姿：雪ノ下雪乃と川崎沙希を足して黒髪にして冷たい雰囲気にした感じ

人物：異常なまでの強い自己愛と他人に対しての猜疑心と嫌悪感の持ち主。

幼い頃に両親が事故で死亡し、母方の祖父母に引き取られた、母方の祖父母が病死すると自分の両親が残した莫大な遺産を引き継ぐ。

だが、祖父母が死ぬ直前にその遺産を狙って自分の父親の弟がやって来て、今の自分の父親が遺産と引き換えに自分を引き取るという条件を祖父母に提示した。

祖父母もその条件を飲んで祖父母の死亡後に父親の弟の元に引き取られる。

そこで義理の家族ができるが、その家族から虐待まがいの扱いを受け、さらに学校でも中学3年生の時に成績が良い、教師から気に入られていることで同級生から嫉妬を買

いいじめを受ける。

それらから、友達など自分の周りに人がいると厄介な事に巻き込まれるという認識を持ち、自ら1人でいることを選んでおり、他人は頼れないものだと思っっている。

自分の身の安全を最優先としており他人に情けをかけることはほとんどない。

義父たちとの生活から身についてた要領の良さと元々持っていた器用さから他人に気に入られることがとても上手く、いちいち媚を売らなくても大抵の人から良い印象を持たれる。

奉仕部に依頼を持ってきた人たちの本質を見抜く事や、物事の裏側に隠された真実に気づく事など、洞察力や推理力も高い。

また、かなりの嘘つきで、自分の平穩のためなら他人の貶める嘘でも平気で吐き、比企谷や雪ノ下を騙すほど上手く嘘を使う。

だが、自分のプラスにならないことは絶対にしないなど強い損得勘定も持っている。かなりの努力家で、自分の将来のために暇さえあれば勉強に励んでいるため勉強は得意であり、雪ノ下雪乃に並ぶほどの成績をとるほど。

義父たちから受けた虐待や学校でのいじめから『平穩に過ごせること』をいつも強く願っているため、自分の平穩を脅かす人が嫌い。

今のところは依頼に関わった人たちや奉仕部の雪ノ下たちからは好印象を持たれて

いるが、八幡からは良い感情は持たれていない（葉山は微妙）。

## イメージ画像

名前：富良野信頼（ふらののぶより）

所属：比企谷小町や川崎大志と同じ中学の3年生

身長：167cm

体重：66kg

容姿：School Daysの伊藤誠を小太りにしてニキビ面にした感じ

人物：女主人公の義弟、幼い頃に引き取られてきた女主人公を義父母と一緒に虐待している。

幼い頃に両親に言われたことを間に受けて、両親と共に女主人公を虐めるだけでなく、性のはけ口の対象として女主人公を見ており、中学2年生の時に女主人公の処女を

奪った。

女主人公とは違う意味で自己愛が強く、何も根拠がないのに『自分は偉い』と思っており、自分の思い通りにことが運ぶと思っている節がある。

太った外見から想像できるように、運動はからきしダメで、学力も中の下と川崎大志や比企谷小町より低く、学校生活では自己中心の性格が災いして友人はかなり少ない。

また、同じクラスの比企谷小町に好意を寄せており、常に露骨なアプローチをかけているが、大志のようにスルーされている。

両親に溺愛されていることが自慢であり、両親のヘソクリを盗んでも叱られないことを女主人公に話した（それを利用して女主人公がこっそりヘソクリを盗んでいることは気づいてない）。

自分の姉をゴミ呼ばわりすることが日常茶飯事で小町とはその面では気があったことがある。

富良野父：女主人公の義父、自分の息子の信頼LOVEで女主人公を虐待を率先して



虐待している男。

女主人公の父親の弟で、幼い頃から優秀で周りから慕われていた自分の兄と比較されて育つたため、兄を心底毛嫌いしていた。

そのコンプレックスをなくすために、両親や周りの目を盗んで、今までも兄に散々な嫌がらせをしたが、それらは全て暖簾に腕押しで兄は都内の国立大学に現役合格し、そこでの仲間たちと会社を立ち上げたことにより、若くして一流実業家として成功した。

さらに、兄から『大学時代から交際しており、現在は女優として活動していた女主人公の母と結婚した』と聞かされた時は抑えていた兄への不満が爆発し、祝いの席で酒に酔った勢いで兄と嫁の悪口を言いまくったほど。

だが、それが原因で自分の両親からは見放され、親戚や兄夫婦の友人たちからも嫌悪されるようになる。

優秀な兄に比べて自分は普通より偏差値の低い普通科の高校から、専門学校に進学したが、就職に失敗してやむなく兄のツテを使って兄の後輩が立ち上げた会社に就職をした。

兄に対するコンプレックスは日に日に大きくなっていったが、会社の同僚たちと参加した合コンで知り合った信頼の母と結婚して信頼を授かった。

自慢の息子を授かったことに有頂天になり、一度だけ親戚の集まる正月に半ば強引に

参加して信頼を自慢しまくったが、自慢話に呆れた親戚の興味は兄の子供である、当時2歳であった女主人公の方に向いてしまう。

その時に女主人公と始めて会い、女優の母を持つだけあって容姿端麗（この時は目は綺麗）な女主人公を見て兄の娘の女主人公を一方的に毛嫌いするようになる。

だが、その後自分にとって喜ばしいことが起こる。

自分の両親が病気で相次いで死に、さらにその翌年に兄夫婦が交通事故で死んだからだ。

散々妬ましかった兄が死んだことと、自分を見放した両親が死んだことに大喜びし、その日は家族でお祝いをしていた。

その数年後に兄の娘である女主人公が家に引き取られてきたことにより、散々妬ましかった兄の莫大な遺産を横取りできた上に、兄の子供甚振ることができると胸を躍らせた。

その後は女主人公をただで使える家政婦のように扱い、自分たちの機嫌取りをしていることに兄への当てつけのようで優越感を得ている。

ちなみに、女主人公の遺産と女主人公が中学3年生の頃に虐められた時に慰謝料として貰った金は、母親が管理しているため自分は手をつけてない。

富良野母：富良野父と同じように信頼LOVEで夫と息子と共に女主人公を虐待している女。

初めは虐待に乗り気では無かったが、女主人公の母親が学生時代に自分がリーダーとして虐めていた女だと知って共謀した。

女主人公の母とは高校の時のクラスメイトで、容姿が良く地味な性格が鼻について女主人公の母を虐めた。

だが、その虐めがとうとう露見してしまい、推薦合格していた大学の合格が取り消されてしまうという苦い経験をしている。

その後、浪人するも結局は合格出来ずに地元の私立大学に進学したが、周りからの視線に耐えきれずに半年も経たずに辞めてしまう。

2年ほどニート生活をしていたが、両親から『働かないなら勘当する』と脅されたこ

とにより渋々就職のための資格取得のために専門学校に通い始める。

専門学校を卒業後、小さな企業に就職した時に、自分が虐めていた相手が女優として活動しているのをテレビで目撃する。

会社で開かれた合コンで今の旦那と知り合い、結婚して信頼を授かる。

旦那と共に有頂天になり、旦那の親戚の集まる正月に顔を出すと、そこに一流実業家と結婚して娘を抱きかかえて幸せそうな女主人公の母と再開する。

女主人公の母親は自分の存在に気づくと気まずそうにしていたが、自分は大きな敗北感を味わっていた。

あの女は一流実業家と結婚してセレブな生活を送っている、しかも容姿端麗な母の血を受け継いでいるだけあって娘の方も綺麗な顔立ちをしていた。

一方、自分はいえ、小さな企業なため自分も旦那もお世辞にも給料が良いとは言えない。

信頼が生まれた今でも共働きでその会社で社畜のように働いているが、あの女と比べたら天と地ほどの差がある。

『あの時にコイツとの虐めの件が露見しなければ』と女主人公の母親に恨みを向ける。

その後、女主人公の両親が死んだ時は旦那と同様に『いい気味よ！ ザマア見なさい！』と喜んだ。

さらに、疎ましく思っていたあの女の娘である女主人公が家に来た時は、女主人公を自分の憎い女主人公の母に重ねて旦那と息子と共に甚振ろうという考えに至った。

今では、女主人公が自分たちに尽くしているのを見て、高校時代の憂さ晴らしと同時に、あの女を再び自分の奴隷に置けたようで、大いなる優越感を得ている。

ちなみに、女主人公の遺産と女主人公が中3の時に虐められた慰謝料は自分が管理しており、自分たちの遊興費と自分の美容のお金にあてている。

まだ、そのお金はかなり残っているため、これからどう使おうかと胸を躍らせている。

ああ、こんな事で平穩を脅かされたくない。

ーオリ主 side ー

窓から気持ちの良い夕日が差し込んでくる帰りのショートホームルームが終わった後の放課後の教室、高校生の放課後と言えばこの後友人たちと遊びに行くかでの談笑、何もしないで帰宅、友人と一緒に部活に行く、この3つが主な行動だろう。

この総武高校の2年F組の教室でもそれは同じだ。

スクールカーストという教室内での地位に従って教室の中の頂点に立つグループがざわざわと喧しく騒いでいる。

騒いでいるグループの中心にいるのは葉山隼人、このクラスの、いやこの学校でも有名な名である。

その隣には葉山隼人にべったりくっついていてるクラスの女王の三浦優美子を始めと

したグループのメンバーだ。

なにやらこの後にどこに遊びに行くかで盛り上がっているご様子、しかしもう少し静かに話してほしいと思うのは私だけだろうか？

まあ、クラスのカーストの底辺の位置にいる私からしてみればそんなこと言っても針のむしろにあうだけだから何も言わないけど。

クラスのカーストの底辺、もう分かるかもしれないけど私は世間でいうところのぼっちだ。

別に私はいじめられている訳でもハブられているわけでもない、その証拠に2年生に進級してからも今まで何度もクラスの女子や男子、葉山くんまでもが私と『仲良くしよう』と話しかけてきた。

でも、私はその誘いを全て断りぼっちを選んだ、自らぼっちになったのだ。

私はクラスの人たち、いわば他人とはほとんど関わり合いを持たない、でも『クラス

の人たちは自分と釣り合わないから仲良くしない』や『学校の人たちは愚かだから付き合わない』などというそんな考えは持つてない。

私がぼつちを選ぶのは、私の流儀、もとい願いの『何事もなく平穩に過ごすこと』というものに基づいてだ。

私は友達を持つことで普通の平穩が脅かされる確率が高くなると考えている。

別に友達を持つことが悪いとは言わない、だが友達というワードは他人を無自覚に悪質な事態に結びつける鎖にもなり得るのだ。

その鎖は生半可なことでは切れることができない、良い意味でも悪い意味でも強くて丈夫な鎖なのだ。

分かりやすい例を挙げるといじめがそうだ。

そもそもいじめという物は、枠内の強者が自分の強さを知らしめる、または自分の娯楽のために周囲の自分の取り巻きたちを巻き込んで行うものだ。

逆にいうと、いじめという物は1人が1人をいじめるというケースはあまり起こらない、いじめをする人間というものは大抵群れをなして行う。



そしてその群れを繋ぎ止める鎖というものが『友達』だ。だが、この鎖は悪い方にも転じる。

いじめが発覚して正しい対処をされ、いじめをした者が然るべき罰を与えられればその『友達』という悪質な鎖に繋ぎとめられた者たちもいじめに加担していなくても罰を与えられてしまうのだ。

そして、そのいじめの加害者たちの末路は漫画などより悲惨なものだ。

発覚した場合は学校側も問題を大きくしたくないためにテレビで取り上げるほどの騒ぎにはならないが少なくともこの町にはいられない。

人の噂は七十五日という諺があるが、そんな風に都合よく人はそのことを忘れない。

当時の同級生や教師はもちろん、学校関係者や近隣住民はそのことを忘れない。

さらに人の噂にはネットワークのように広がっていき曲解さえもしていきありもしない事実さえ伝聞の中で真実となる。

いじめられつこが針のむしろだったのが、逆になりいじめつこたちが針のむしろになるのだ。

学校にいられずに転校するのは当たり前だし、この町にいられずに引越す人も珍しくない。

もともといじめの首謀者は1人だとしても、いじめに加担した者はみんなその首謀者と『友達』という鎖に繋ぎとめられたからそうなったのだ。

いじめに限ったことでなく『友達』というものは平穩を脅やかす危険要素になるかもしれないのだ。

そのため『平穩に過ごすこと』が何よりの願いの私にとってはその『友達』という物は避けたいものなのだ。

私はそのいじめのケースを自分の目で見たことがあるからそう言える、といってもその時の被害者は私だったのだが。

いじめっこたちの末路を見た日から私はこう思うのだ。

『こいつらに平穩を脅かされたくない』

『友達という鎖によつてあんな風になりたくない』

『いじめの加害者たちと同じようになりたくない』

いじめの加害者たちが転校してだんだん騒ぎが沈静化するといじめをしなかったが

私を見捨てていたクラスメイトやいじめを黙認していた教師が責任逃れのために手のひら返したのように私を気にかけるようになった。

私は安堵していた。

でもそれは、クラスメイトや教師たちから気にかげられたからではないし、いじめが終わったからでもない。

そもそもそのクラスメイトも教師たちもいじめっこたちと鎖で繋がれてなかったから助かっただけなのだ。

クラスメイトも『友達』という鎖で繋がれていればいじめっこたちと同類に扱われあんな悲惨な結末を迎えていたのだ。

私はその時こう思っていた。

(いじめられる側でよかった、私がそっちじゃなくてよかった)

私は平穩に過ごしたい、私はそちら側ではなかったのだから安堵したのだ。

私にとっていじめっこたちがどうなったのかはもうどうでも良い。

だって私が被害を被る受けるわけじゃないんだから、私の平穩が無事なら他のことなんてどうでもいい。

「むしろ今なら自分の平穩を守るためなら何であろうとできるだろう。」

私はだからクラスメイトや教師たちに囲まれながらこう呟いたのを覚えている。

「ああ、こんな事で平穩を脅かされたくない」と

だからこそ、私は悪質な鎖にもなり得る『友達』という危険要素を避けるためにスクールカーストの底辺だろうがぼっちを貫き通し通して学校生活を送っている。

そうして私は目立たないようにいつものようにただの影となつて、周囲の景色に溶け込んで日常を送る。

さて、今日の授業も終わったことだし私は図書館で進学校の生徒らしく勉強に励むとしましょうか。

教室で未だに騒いでいる声を聞きながしながら帰り支度をすまし、教科書諸々をカバンに入れて教室を出ようとすると。

「富良野、ちよつと良いか？」

その時、後ろから誰かに肩を叩かれて私の名前を呼ばれた。

呼び止められ男らしい声に振り返ると、白衣を着た背の高い女性が立っていた。

滅多に呼ばれることのない私の名前を呼んだし、肩を叩かれたことから呼び止めた相手は私で間違いない。

私を呼び止めたこの人は確か、現代文の教師の平塚先生だ。

「はい、何でしょうか…?」

「私がいとも人前でするような口調で返答すると平塚先生は片眉をあげて私に言った。

「君に話がある、生徒指導室に來い」

そう言つて、平塚先生は私の返答も待たずに『ついてこい』と言つて歩き出した。

私は平塚先生の後をついて行きながら呼ばれる理由を考えた。

(いきなり『生徒指導室へ來い?』つてなにか私まずいことをしたかな? 成績は良い方だし、普段の授業態度も良い方だと思う、問題も起こしてないし何のために呼ばれたのだろう)

そうして私の頭の中をクエスチョンマークが回っている間にいつのまにか生徒指導室に着いた。

平塚先生に「入れ」と言われて中に入る。

この時は私はまだ知らなかった。

これが私の平穩を脅かす始まりになるのだということをして…

部活に入部させられたけど平穩を脅かされたくない。

―平塚 静 side 1

私は生徒指導室に着くと椅子に座り対面に富良野を立たせた。

「なあ、富良野英理華（ふらのえりか）、君はどうしてここに呼ばれたんだと思う？」  
私がそう問いかけると富良野は疑問に満ちた顔で私の問いに返答した。

「心当たりがありません、私、何か問題起こしましたっけ？」

本当に心当たりがなさそうに答える。

はあ… 呆れる… これじゃあダメだ。

「自覚なしか…」

私はそう呟くとポケットから煙草を取り出して火をつけて吸う。

富良野が一瞬嫌そうな顔をしたが君のためにこうやって時間を割いているんだ、1本  
くらい吸わせろ。



私は煙草を吸いながら口を開いた。

「富良野、君に友達がいるか？」

私の問いかけに富良野は予想外の質問をされたのか面食らった顔をしたが、私の『友達はあるのか？』の問いかけにすぐに返答した。

「いえ、とくに友達と呼べるような親しい人はいませんが……それが何か？」

富良野は返答とともに『友達がないことの何が悪い？』と言いたげな視線を私に向けてきた。

私が富良野を呼んだ理由は彼女の孤独体質にある。

私は国語の教師であると共に生活指導を担当しており生徒たちには楽しい学校生活を送ってほしいと思っている。

その楽しみの一つが友達と過ごすことなのだ。

友達がいるからこそ学校生活は楽しくなる。

なのにこいつは私が見てきたところ友達を作ろうとしていないどころか、クラスメイ  
トともほとんど関わろうとしない。

教師の噂では、学校行事などにもほとんど参加しておらず、授業の時しか真面目に取  
り組まない。

彼女は『学校』に通っているのではなく通っているのは『予備校』だというような態  
度をとっており、まるで学校には授業を受けにきているだけのような態度だ。

よつて、私は友達がいらない、または欲しがついていない富良野の孤独体質をなんとかし  
たいと思い、同時に学校行事などに参加しない事を罰するために呼んだのだ。

「いや……別に友達がいなくても何も困ることはないと思いますよ、現に私自身が友達  
がいなくても困ったことはほとんどありませんし」

だが、富良野はこの調子である。

別段捻くれている性格でもないだろうに他の生徒たちと群れることができない。

私は富良野の瞳に視線を移す。

「君の目はなんだか吸い込まれそうな目をしてるな」

そんな富良野に私は富良野の目を見て言う。

富良野の顔はかなり整っている。

抜けるような白い肌にすんなりとした鼻筋、切れ長の目が少しキツそうな印象を与えるがそれでも美人の部類に入るだろう。

身長も170センチはあるだろうと女子にしては高く細くて長い手足も高めめの身長にマッチしておりスタイルもそれなりに良い。

何度か男子から告白されていてもおかしくはないルックスをしている。

それに加えて成績も優秀であり、定期テストでは入学以来トップクラスの10位以内から落ちたことはないし、中でも数学に関してはほぼ毎回満点で学年トップを譲ったことはない。

成績や授業態度だけを見れば何も問題のない優秀な生徒として見られてもおかしくない生徒だろう。

だが、それは瞳が普通であればの話だ。

私から見た富良野の目はとても普通ではなかった。

彼女の目は、先日私が捻くれた性格と孤独体質を叩きなおすために入れたどこかの誰

かとは違い、腐った目とかそういうレベルじゃない。

彼女の目を一言で言うなら『闇のような真つ暗な目』だ。

目に輝きは一切なく、周囲を何も写しておらず写しているのは自分だけだというよう  
な、何事にも興味のない無関心の塊のような真つ暗な瞳だ。

だからこそ私は吸い込まれそうだという表現をしたのだろう。

「そうですか？ まあ、褒め言葉として受け取ります…」

私の『吸い込まれそうな目だな』という発言にも特に怒る様子も傷ついている様子も  
なく富良野はそう返答した。

私はそれを聞いて頭を抱えなくなった。

「その様子だと社会出てから苦労するぞ、君が優秀な生徒だということは知ってるが、も  
う少し人と接することを学ぶべきだな」

「まあ、そう言われても困ってるわけじゃないですよ」

「屁理屈を言うな、小娘」

私がそう言つて睨むと富良野は肩をすくめた。

「すいません、でもまあ先生からしてみれば私はガキですからね」

ヒュオツ！

「次はあてるぞ……！」

私は富良野と顔のすぐ横に拳を叩き込んだ。

富良野の顔を私の拳がかする。

こいつ、女性に対して年齢の話はご法度だつて事を知らんのか、まあ、だから友達もいないし友達がいないせいで学校行事も休んでるのだろうな。

まさか、あの腐り目の男と同じような奴がまだいるとは……

そんな奴は私が矯正してやらなければならない。

「ともかく君の発言で私は傷ついた、それに加えて君の不真面目な学校生活への態度に罰を与える。」

私がそう言つて椅子から立ち上がると富良野は一瞬眉をひそめて嫌そうな顔で私を見つめ返した。

「なんだ、その顔は？ 異論反論口答えは認めないぞ、口答えするならば3年で卒業できると思うなよ」

「いえ、何でもありません。私のことを思つてのことなんですよ？ それなら平塚先生のその好意をありがたく受けとらせてもらいますよ」

私が嫌そうな顔をした富良野を睨み付けると富良野は途端に笑顔になつて私の好意を受け取ると言い出したのだ。

なんだ、あの腐り目のバカとは違って思ったより素直で聞き分けがいいじゃないか。

「案内する、ついていこ」

「はい」

私はあの腐り目の奴とは違って私の指導を好意的なものだと言うことに気づいてくれた。

あいつと違って何も不満そうについてくるわけでもなさそうだし、根は素直な奴ならあいつらともすぐに打ち解けて仲良くなれるだろう。

私はそう期待を膨らませながら良い気分で富良野を連れて生徒指導室を出た。

だが、私は気づかなかつた。

後ろについてくる富良野が私のことを冷めた目で見ながらついてきていることに…

―平塚静 side end―

―富良野英理華 side―

「……だ」

平塚先生に同行し、着いたのは特別棟3階の教室だった。

私の記憶が正しければこの特別棟はクラスルームとしては使われておらず主に部活棟として使われている筈だ。

ということとは、教育的指導、もしくは罰だと称して私をどこぞの部活に強制的に入れるつもりなのだろう。

本来なら平塚先生に連れられる意義は私にはないけれど、あの場で断つてもこの教師は私にしつこくつきまとして強引にでも自分の罰を受けさせていたはずだ。

ならば、あの場合は平塚先生の機嫌をとってその教育的指導とやらを受けた方がまだ合



理的だ。

たとえ、それが平塚先生の身勝手であってもね。

まあ、平塚先生に言ったとしてもどうせ信じてくれないだろうしどっちみち部活にいられるだろう。

そう考えている間に平塚先生が無遠慮に扉に手をかけてその教室の中に入っていく。

「邪魔するぞ、雪ノ下」

「先生、入るときはノックを…」

「いやーすまんすまん。」

部屋の中からの会話だとおそらく平塚先生の行動はいつもみたいだ。

さっきの声は雪ノ下という生徒の声だろう、冷たい声から察するにスポーツをするような人ではないみたいだ。

ということは、文化系の部活だ。

運動が苦手な私は少しだけ安心する。

「それで今日はどのような用事で来たのですか？ 平塚先生」

しばらく雑談をした後、部員であろう男子の声が聞こえた。

「ああ、そうだ、入ってきたまえ」

平塚先生に言われて私は部室に入った。

そこには3人の生徒がいた。

ネクタイの色が同じ色なため3人とも私と同学年だろう。

1人は長い黒髪の女子生徒、こちらを睨み付けるようにして見ている、おそらく彼女が平塚先生と話していた雪ノ下という生徒なのだろう。

1人は茶髪でお団子ヘアの女子生徒、見た目だけだとあまり賢そうじゃない。

最後の1人は黒髪でアホ毛の生えた男子生徒、見るからにやる気がなさそうで目が腐っている。

幸い3人とも交友関係の狭い私でも一応名前くらいは知っていた。

長髪の黒髪ロングの女子生徒は雪ノ下雪乃さんだ

入学当初から学年トップの成績を維持し続けている総武高校でもトップクラスの秀才だ。

茶髪の女子生徒は由比ヶ浜結衣さん、私の所属している2年F組の中でもトップカーズのグループに所属しているリア充の一員だ。

最後の黒髪のアホ毛が生えた男子生徒は確か比企谷八幡君だ、クラスで誰とも交わらずに常に一人でいる。

私と同じように見えるけどこの人と私は違う気がする。

それぞれに対して私が認識を持っていると平塚先生が私の肩を抱いて3人の方へと向けた。

「彼女は新入部員だ。比企谷と同じ、いやそれよりも酷い孤独體質を持っているんだから、その性格を改善したいんだ。」

平塚先生はそう言うのと私に視線を向けた。

自己紹介しろという事だろう。

「2年F組の富良野英理華です。よろしくお願いします」

「あー！ ふうらのんじゃん！ にしても、なんかヒツキーみたいだね……」

私が自己紹介した瞬間、茶髪のを揺らしながら由比ヶ浜が私の事を『ふうらのん』と呼んだ。

おそらく渾名だろうが、あなたとは渾名で呼び合う仲ではない。大して親しくもないのに……

失礼だけど、彼女は頭が良さそうに見えなかった。

というか、ヒツキーって誰のこと指しているんだろう……？

「おい。 本人の前で悪口みたいに言うなよ、泣いちゃうだろう?」

そんな事を思っていると、やる気のなさそうな雰囲気を放つ比企谷君が由比ヶ浜さんに突っ込んだ。

ああ、あなたがヒツキーなんですね、確かにそんな渾名が似合いそうだ。

そもそもヒツキーという言葉は『引きこもり』の蔑称だ。

だから、見るからに引きこもっていきそうなイメージを持っていきそうな彼の見た目からそんな渾名をつけたのだろう。

なんとも皮肉な渾名だな。

「まあ、あとは3人でいろいろ説明してやってくれ、私は仕事があるので失礼するぞ」

ヒツキーの渾名のことを考えていると平塚先生は部室から出て行った。

ちよつとここに連れてきたのはあなたでしよう？と思うが平塚先生に何を言つても聞いてくれないだろうし無駄だろう。

彼女は本当に放任主義なんだなと思いつつもこれから一緒に活動する3人に向き直つた。

「とりあえず座つたらどうかしら？」

「あ… ええ、どうも…」

雪ノ下さんに言われて私はすぐ近くにあつた由比ヶ浜さんの椅子に座る。

「まずは自己紹介ね、私は雪ノ下雪乃よ、この部活の部長を務めているわ」

「やつはろー！ あたしは由比ヶ浜結衣だよ！ よろしくね！ ふらのん！」

雪ノ下さんに続いて由比ヶ浜さんが私に挨拶をする。

しかし、どこかぎこちない様子だ。

私の目や態度に若干引いているのだろうか？

「比企谷八幡だ」

最後に少し離れた席に座っている男子生徒、比企谷君が挨拶をする。

自己紹介が終わると少し沈黙が続いた。

この部活の趣旨は平塚先生から聞かされていないが何もしないところを見ると帰らなければ好きにして良さそうだ。

現に雪ノ下さんと比企谷君は本を読んでいるし、由比ヶ浜さんは携帯をいじってる。

ならば、私も時間を有効活用するために鞆から教科書とルーズリーフを取り出して今日の復習をする。

それを見て由比ヶ浜さんが声をあげた。

「へえ〜… ふらのんって部活中でも勉強するなんて真面目だね！」

「そう…？ 私は授業についていけないから復習するだけだよ」

「へえ… この間は学年1位を取ったのに随分と余裕がないのね、あれはまぐれだった

のかしら？」

私が由比ヶ浜さんに適当に返事をするとう度は雪ノ下さんが話に割り込んだ。しかし、その視線は気のせいかもしれないが見下しているように見える。

雪ノ下さんが私を見下した態度を取ったのは、私が彼女に近い成績を取っているからだろう。

自慢じゃないが私は成績が良い、1年生の学年末考査では『惜しかったな、あと1点でお前が学年トップに勝つたの』と考査結果を返すときに担当の教師は私に言った。張り出された成績表を覗くと確かに私の成績は学年トップと同点だった。

それで一時期、教師から目をかけられたこともある。

雪ノ下さんもそれを知っているだろう、だからこそ彼女は私にそんな態度をとったのだ。



学年トップの成績、つまり雪ノ下さんに並ぶ成績だということを意味する。

雪ノ下さんは凡人とは少し離れた程度の人間だ。

彼女の雪ノ下という名前はそれなりに有名である。

千葉県 の 県 会 議 員 の 名 前 が 雪 ノ 下 な の だ か ら 、 恐 ら く 彼 女 は そ の 議 員 の 娘 な の だ ろ う。

故に彼女は優秀な人間の元で生まれて育てられた。

そんな優秀な雪ノ下さんは幼い頃から優秀だったのだろう。

だからこそ、一度でも優秀な自分の地位を脅かした私が地道に勉強を重ねている姿を見て嘲笑っているのだ。

まあ、私にどんな態度をとろうが勝手だけど。

雪ノ下さんの視線をスルーし、由比ヶ浜さんが周りで喧しくキャンキャン言うのを適当に流しながら私は勉強に集中する。

勉強は自分のためにやることだ、周りがどう思っていようが関係ない。

そうやってしばらく勉強しているとまた彼女が突っかかってきた。

「そういえばあなたは、ここがどういう部活なのか平塚先生から聞かされたのかしら？」

「いえ、ただ罰を与えるとしか聞かされていないよ」

あの教師は碌に説明もせずに私をここにつれてきたからね。

「どこかの誰かさんと同じようなシチュエーションなのね」

雪ノ下さんはクスリと笑って私を見たあと比企谷君へと視線を移す。

ということとは、私は最初の強制入部じゃなかったのか。

そんな私の視線に気づいたのか比企谷君は私に哀れみと同情が混じった視線を向け  
てくる。

おおかた、『あの人の目をつけられたか、ドンマイだな』的な事を思っているのだろう。

「あの、比企谷君は何で罰を与えられたの？」

興味本位で聞いてみる、すると比企谷君の代わりに雪ノ下さんが答えてくれた。

「その男はね、1ヶ月前にふざけた作文を平塚先生に提出したのよ、『高校生活を振り

返って』っていう題目のね、それでその罰を受けているのよ」

雪ノ下さんは楽しそうに笑いながらそう言った。

でも、それだけで強制入部だなんてどんな作文を書いたんだろう？

「その作文がこれよ」

「おい、何でそれをお前が持つてやがるんだ」

合点が合わず私が首を傾げていると雪ノ下さんから作文用紙を渡された。

比企谷くんのツツコミからするにこれがその問題の作文なのだろう。

雪ノ下さんに渡された作文用紙を受け取ると、読み始める。

そこにはこう書かれていた。

高校生活を振り返って

2年F組 比企谷八幡

青春とは嘘であり、悪である。

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺いて、自らを取り巻く観念を肯定的に捉える。

彼らは青春というの二文字の前にはどんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば、嘘や秘密も、罪咎や失敗も、青春におけるスパイスでしかないのだ。仮に失敗することが青春の証であるならば、友達作りに失敗した人間もまた、青春のど真ん中でなければ、おかしいではないか。

全ては彼らのご都合主義でしかない。

結論を言おう。

青春を謳歌せし者たちよ。

砕け散れ

私はこれを読み終えると比企谷くんに視線を移したが、彼は気まずそうに目を逸らした。

「どうかしら？　かなり頭のおかしい事を書いた作文でしょう？」

比企谷君が書いた作文を指差して嘲笑しながら雪ノ下さんは私に話しかける。

なるほどね。納得がいった、確かにこんな作文なら教師に目を付けられるのもおかしくない。

私も1ヶ月くらい前にこんな題目の作文を書いた記憶が蘇ってきたが、私は至って普通の作文を書いた。

ていうか、普通ならみんなそうする。

こんなものを書くなんて自分を危険視して欲しい、嘲笑の対象にして欲しいと言って

るようなものだ。

私は雪ノ下さんの方を見て口を開く。

「確かに嫌な事を書いている作文だよね。平塚先生から問題視されるのも納得したよ」

「そうでしょう?」

「ヒツキーはこんなふざけた作文を書いた上に平塚先生に年齢の事を言ったから、平塚先生から殴られて部活に入れられたんだもんね!」

私がそう返答すると雪ノ下さんはさつきと打って変わって上機嫌で比企谷君に嘲るような視線を向けた。

由比ヶ浜さんもそれに加えて比企谷君に笑顔で見下した視線を送る。

年齢の事を言ったのは私もだけどね、てか、平塚先生は比企谷君のことを殴って連れてきたの…

私がそう思っていると、比企谷君は「当たり前前の事を書いただけなのに…」と呟いていたが聞かないことにした。

「それで、この部活がどういうものなのかという話だけれど」

自分の発言に私が賛同したからか機嫌を良くした雪ノ下さんは本題に戻した。

「ゲームをしましょうか、ここがどんな部活なのか当ててみなさい」

雪ノ下さんがそう言うと、比企谷君が嫌そうな顔を雪ノ下さんに向けた。

なるほど、恐らく比企谷君も入部した時に同じようなゲームを行ったんだろう。

そして、その態度からすると外したんだろうな。

にしても、この部活を当てろって言われても情報が少なすぎるし、これで当てられる人はいるの？

まあ、ダメ元で考えてみよう。

私は孤独体質の改善が目的でここに連れてこられた。

ということとは、それを改善できる部活だということだけど、それは限られてくる。

この部活棟や部室の雰囲気から察するに運動部とは考えにくいからやっぱり文化系の部活だ。

となると、文芸部とかかな？

いや、由比ヶ浜さんは携帯をいじってたし、私の勉強についても特に咎められなかつ

た。

それに文芸部の活動である読書などをすることは孤独体質の改善とはほぼ因果関係はない。

従って文芸部は違う。

なら活動内容から考えてみよう。

といつても今日の部活ではほぼ部員たちは活動らしいことは何もしていなかった。

従ってこれで答えを出すのは無理だ。

やっぱり、孤独体質の改善という目的から考えるべきだ。

文化系の部活で孤独体質の改善というと、「部員同士で親睦を深める」、もしくは「何かしらの共同作業をして協調性を学ぶ」の2つに縛られる。

でも、前者は今日の部員たちの様子を見る限り親睦を深めているとは思えなかった。

ならば後者の共同作業で協調性を学ぶためだ。

となると、ボランティア部か奉仕部だろうか？

まあ、どうせダメ元だし言うだけ言ってみよう。



「ボランティア部とか、奉仕部かな？」

そう言ううと雪ノ下さんと比企谷君は私に驚きの視線を向けてくる。

「ど、どうして分かったの？」

雪ノ下さんの態度からすると正解だったらしい。

問題を出した時とは違い意表を突かれた顔をしている。

比企谷君も同じような顔だ。

私は頭の中で考えた推測を話すと由比ヶ浜さんはクエスチョンマークを浮かべていたが、雪ノ下さんと比企谷君は驚きの視線を私に向けた。

「驚いたわ…… 正解よ。どこかの誰かさんと違って頭のつくりが少しは良いよね、まあ私には及ばないけど」

「ほつとけ、なんでもかんでよ比較対象を俺にするな」

やっぱり雪ノ下さんは比企谷君にも問題を出していたようだ。

でも、比企谷君は何と答えたのだろう。

表面だけで見たとおりの文芸部とかかな？

まあ、そんなことはどうでも良いや。

そう思っていると雪ノ下さんが急に立ち上がって口を開いた。

「持つ者が持たざる者に慈悲の心を持つてこれを与える。人はそれをボランテニアと呼ぶわ。途上国にはODAを、ホームレスには炊き出しを、モテない男には女性との会話を、コミュ症の女子にはその改善の練習を、このような困った人に救いの手を差し伸べる、それがこの部活の活動よ」

途中から声を高めながらのご高説が終わり、雪ノ下さんは私を見下ろしながら言う。

「ようこそ奉仕部へ、歓迎するわ」

「はあ…」

はつきり言つて雪ノ下さんの急なご高説についていけなかったが、なんとか話を合わせるためにも相槌をうつ。

私の反応に御構い無しに雪ノ下さんは続ける。

「平塚先生曰く、『優れた人間は哀れな人間を救う義務がある』のだそうよ。頼まれた以上は責任を持つてあなたの問題を改善してあげる。感謝しなさい」

笑顔で雪ノ下さんは私に言った。

それを聞いて比企谷君はため息を吐いて雪ノ下さんから読んでいた文庫本に視線を

移し、由比ヶ浜さんは「ほえ〜」と間の抜けた声を出して雪ノ下さんを見ていた。

いや、由比ヶ浜さんのあれは理解していないだけだね。

雪ノ下さんの言いたいことは大体分かった。

要はこの奉仕部という部活は強者が弱者を救う義務がある、だからこそ強者は弱者を強者にするために導かなければならない。

でも、100%干渉するのではなく弱者の自立を促すような行動をとる必要がある。ということだろう。

まあ立派な理念だと思う。

でも、私はそれには大きな問題があると思う。

それは彼女自身がその強者として弱者を導くような器があるかどうかだ。

こう言ったら悪いけど、私にはとても雪ノ下さんにその器があるようには見えない。

私が見るに雪ノ下さんは『私が正しいと思うことは全て正しいのだ』、『私の意見は正しいのだから受け入れなさい』とこんな風に自分の意見を他人に押し付ける独裁者ような考えを持つ人だと思う。

さすが県会議員の娘であるだけあってプライドご高くて、実際に周りから見ても優秀で

あることもそれに拍車をかけている。

つまり雪ノ下さんは違う意味で周囲に溶け込めない面倒な性格だろう。

文庫本を読みながらため息を吐いている比企谷君を見るとあまり彼は雪ノ下さんのことを好意的に思っていないようだね。

私も含めてこの部活の人たちはみんな何かしらの問題を抱えているのだと思う。

「まあ、雪ノ下さんのような優秀で頼れる人に私の事を解決してもらおうのなら間違いないでしょう、よろしくお願いします」

納得できないことは多々あるが、ここで反論したら雪ノ下さんのせいで平穩に過ぎることができなくなるかもしれない。

そんな非合理的なことは私はしたくない。

ならば、この部活で一番の権力を持つ雪ノ下さんにゴマすりをして従っていた方が良い。

部活に入れられても大人しくしていれば良いだけのことなのだから。

私が平塚先生にしたような笑顔で雪ノ下さんに言ったら比企谷君が驚いた表情で私を見てきた。

多分、反論すると思ったのだろうけど、残念だったね。

私は平穩に過ごすことが目的なんだ、荒波を自ら立てることはしないよ。

雪ノ下さんは私のゴマすりに気を良くしたのかさつきより上機嫌で口を開く。

「あら？ その屑谷くんとは違って素直な性格なのね。分かっているじゃない」

「だから俺を比較対象に引き出すな、富良野が可哀想だろうが」

さつきから思ってたんだけど、何で雪ノ下さんは比企谷君をここまで罵倒するのだろう？

見た感じ悪意があるようには見えないし、むしろ平然と日常会話のように言っているように見える。

それを平然と受けている比企谷君もすごいけど…

「他人を平然と罵倒するような人に他人を救うことはできないと思うけど」と思ったの

は心の中だけに閉まっておこう。

そう思いながら、私は再び教科書を開いて勉強を始めた。

下校時刻のチャイムが鳴り、ちょうど部活の時間が終わった。

部活が終わりいつもの帰り道を歩いていると私は今日の事を思い返していた。

それは言うまでもなく奉仕部のことだ。

その中でも未だに気になることがある。

納得できないことはたくさんあるがその中でも特に気になることがある。

それは比企谷君の作文だ。

確かに、あの作文は彼の性格を表していた。

彼はぼつちで友人がいなくて周りを常に捻くれた視線で見ているのだろう。それなら、教師から目をつけられてもおかしくはない。

平塚先生も彼を無理矢理部活に入れたのもそれが原因だろう。

でも、あの作文を見た後に私にはもう一つ疑問が浮かびあがった。

それは…

何で比企谷君はあんな当たり前の事を書いたのだろうか？  
ということだ。

雪ノ下さんや平塚先生はこの作文を低評価した。

それは大体の人なら当然のことだろう。

でも、私から見ればこの作文は当たり前前の事を書いているにすぎない。

でも、それならば何で比企谷君はわざわざそんな当たり前の事を作文にまでして提出したのだろう。



比企谷君の書いた通り、『人間という物は自己と周囲を欺く』『自らを取り巻く環境を肯定的に捉える』。そんなの当たり前のことだ。人間というものはどれだけ綺麗事を言っても最後は自分さえ幸せならそれで良い、私が平穩を守るみたいに自分が大切に他人なんてどうでも良い。

最後はみんなそうだ。

そんな事を何で『高校生活を振り返って』という題目なのに書いたのだろうか？

こんな事を書いたところで目をつけられるのは目に見えている。

今日、見たところでは比企谷君はそれほど雪ノ下さんや由比ヶ浜さんと仲が良いようには見えないし、口を開けば罵倒されるような空間に入っていて喜んでいるようにも見えない。

それならば、私のように普通に普通に適当に当たり障りのないことを書けば目をつけられずにすんだはずなのに…

それなのに何故…？

いや、考えてもキリがないから辞めておこう。

私は私の心配だけしてれば良い。

比企谷君とは何の関係もないんだ。  
彼の心理なんかどうでも良い。

ああ、もうこんな時間だ。

早く帰らないと：

そう思いながら私は帰る足を早めた。

平穩を愛する少女は油断していた。

私の平穩は脅かされる心配はないと。

部活に入部させられても大人しくしていれば良いと、そうすれば平穩は守られると：  
でも、それは違う。

彼女はこれからたくさん厄介事に巻き込まれていく。

そこで彼女は思い知る。

平穩を守るには大人しくしているだけでは守らないと、自分から動かないと守れない  
ということを知る……

他人は頼れないから平穩を脅かされたくない。

「ふふ、今日はいろいろあつたな…」

奉仕部のことなどで今日はいろいろあつたなと思いつながら私は帰宅した。

家に入り、洗面所で顔を軽く洗うと、脱衣所のタンスを開けて制服からいつも家で来ているジャージに着替えながら一息をつく。

私の家はどこにでもあるような普通の一般家庭だ。

家族構成は父と母、それに弟が1人いる。

職場や学校に通うだいたい人間は『早く自分の家に帰って来たい』と思うだろう。

自分の家とは、家族か一人暮らしなら自分以外は誰もいない自分だけの空間だ。

厳しい現実からホッと一息をつけるような安らぎを与えてくれる空間だ。

でも、私にとってはこの空間は『自分の家』という名の地獄だ。

なぜなら…

「おい、帰ってきてるのならただいまくらいは言ったらどうなんだ？ 愚姉」

その時、無遠慮に脱衣所のドアを開けて、私に野太い声が飛んだ。

ため息を吐きたい気持ちでグツと飲み込んで振り返るとそこにはくちやくちやくと行儀悪くガムを噛みながら、ジトリとした細い目を私の方に向けて、自身の太った身体をドアの淵にあずけている男がいた。

この男は私の弟の富良野信頼（ふらののぶより）だ。

信頼はニキビの出来た顔を書きながら、下品な視線を私に向けてきた。着替えている最中なので今の私は下着姿だ。

ニヤニヤと笑いながら私に近づいて唾を飛ばしながら続ける。

「おく…… 女子高生になったらさらに胸は成長したな！ にしても、中学生の頃は俺の『息子』でヒイヒイ言ってたのによ！」

「……」

しかし、私が反論せずに黙っていると信頼は近づいて私の胸を手汗だらけの手で触った。

「やっぱりデカくなってやがる！ 使えないダメ姉だが、身体は良いからなあ！」

信頼はそう言うときさらに下衆な笑みを浮かべた。

（我慢… 我慢だ…）

私にも当然ながら生理的嫌悪はある。

でも、それを抑えるためにそうして自分に言い聞かせた。

その後も信頼にいろいろ身体を触られた、胸だけでなく脚、脇もさらに下半身まで…

一通り楽しんで満足したのだろう、信頼はニヤニヤ笑いながら私に言った。

「あー、ここでお前を抱きたいが生憎と今は避妊具がない、買ってくるのも面倒だから今

回はこれで勘弁してやるよ、だから早く晩飯の支度しろ、今日は俺の好きな唐揚げな！」

そう言うと、私を突き飛ばして脱衣所から手を振って出て行った。

信頼に触られた所が気持ち悪かったが、私は信頼に逆らうことは出来ない。

それに、これは私の平穩を守るためでもあるのだから：

それは何故か。

実は私はこの家の本当の娘ではないのだ。

といつても漫画などでよくある父親か母親の『隠し子』とか言うわけではない。

私の本当の親は信頼の父親の兄、つまり、今の父親の兄の子供なのだ。

つまり今の家族は、私にとっては義理の家族ということだ。

本当の私の父親、つまり今の父親の兄は私の本当の母親と一緒に私が産まれてばかりの時に交通事故で死んだそうだ。

事故処理の本当の父親と母親の葬式が終わった後、残された私の今後についての議論が始まった。

本当の父親と今の父親の両親、つまり父方の私の祖父母はもう死んでおり、私は母方の祖父母に引き取られた。



私の本当の父親は結構大きな会社を経営していたため収入は多かった。

そのため父親の遺産は相当多くあり、それに加えて母親の資産も含めた遺産は相当額あり、私の学費などは賄えるようになった。

生活費などは祖父母に頼ることになるが学費は自分で賄える蓄えがあったらしい。

でも、その母方の祖父母も私が8歳の頃に病気で相次いで亡くなってしまったのだ。

さらに悪いことにその母方の祖父母には身寄りが他におらず私は再び独りぼっちになった。

本当ならば、ここで私は施設に引き取られるのだが、ここで名乗りを上げたのが私の本当の父親の弟、つまり私の義父である。

義父は『そいつが引き継いだ、俺の兄の遺産を俺たち家族が貰う代わりにそいつを引き取る』と言いつ出したのだ。

義父は私を引き取った母方の祖父母が病死する前に祖父母に言い、祖父母は私のことを大切に育ててくれたため、私に身寄りがなくなり施設に引き取られるより、まだ義父に引き取られた方がマシだと思ったのか義父の要求を飲んだ。

そうして、私は母方の祖父母が病死した後、今の家に引き取られたのだ。

でも、ここからが私にとっての辛い日々の始まりだった。

私はこの家では世間で言う『ネグレクト』もしくは『虐待』という扱いを受けている。旅行や外食に連れて行かれないのは当たり前、親が参加する学校行事にも、義弟の信頼の時は参加するが私の時は参加したことはない。

旅行などに行つた時にも、残された私に何もしてくれないため、私は買いだめしておいた食料を料理して食べてなんとかしている。

自分の部屋なども与えられていない。

私の服や下着などは最低限しか与えられておらず、その服や下着は部屋がないため自分のタンスなどはないため脱衣所のタンスに入れている。

ダイニングの隅に制服は掛けて、納戸に高校生になつてから自分でバイトをして買った教科書や参考書を邪魔にならないようにしまひ。

連絡用を買ってもらつた型落ちの安い携帯の充電器を廊下のコンセントに刺している。

寝るときは納戸から使つてもいいと言われた、古い布団を廊下に敷いて寝ている。

家族として見られたことは唯の一度もない。

私が引き取られてからすぐにそれらは行われた。

祖父母の葬式が終わった後、義父は私を家に連れてくると私を育ててくれた祖母から受け取った金の入った通帳を自分の家族、私にとつての義母と信頼に見せつけた。

義母は予想以上の金に大喜びして当時3歳だった信頼を抱きしめていた。

この時は、私はまだ『愛情』を育ててくれていた祖父母からもらっていた、だからこ

の家の人たちが、私の新しい家族だと思っていた。

私は喜んでいて義母たちを見て嬉しくなった。

だから、私は義父に信賴のように抱きつこうとした。

でも、それは甘かった。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

義父は私を拳で殴ったのだ。

5歳の私が大人に殴られて無事ではいられるはずもなく私は壁まで吹っ飛び、頭を打った。

頭が割れるような痛みが走り、激痛に頭を抑えて蹲る。

私が頭を上げて呆然と義父を見ていると、義父は私に指を突きつけて吐き捨てるように言った。

『勘違いするな！ お前を引き取ったのはこの金のためだ！ お前なんかのためにこの金をもつたらない！ この金はウチの信頼のために使うのだ！ 金が手に入った今は今もうお前に用はない！ 本来ならば今すぐ施設に捨てたいが、そうなると世間から俺たちが白い目で見られる！ だから、この家にいさせてやるだけだ！ お前など厄介者以外の何物でもない！』

義父はそう言うと、信頼を抱いている義母が私を見下ろしながら言った。

『全く居候になる身のくせに、身の程知らずも甚だしいわね、あなた、信頼、沢山のお金が入ったから景気付けに焼肉にでも行きましょう。この子のお金から抜き取れば良いでしょう』

義母はそう言うと言を頭を踏みつけて言った。

『バーカ！ おまえなんかきえろ！』

義母の腕の中から見ていた信頼と私を見て、あつかんべーをして言った。

私の目から涙が出た、でも、私は頭の痛みから何も言えなかった。

義父はそんな私を見下ろすと、自分の妻と信頼に視線を移す。

『さあ、嫌なことなんて忘れて、外に食べに行こう！』

『そうね…』

『わーい！ おそとでおしよくじうれしいな！』

私に向けたようなとは、打って変わったような笑顔で信頼たちに言った。  
義母と信頼も私のことなど目に入ってないかのように義父の言葉に同調する。

『ま、待って… 私もおなかすいてるの…』

私は最後の力を振り絞って義父に手を伸ばす。

しかし、そんな私の手は…

『よるな！ 汚らわしい！』

『ああああっ!!』

義父が踏みつけた。

踏みつけた腕からバキツと嫌な音が聞こえたと同時に踏みつけられた腕に激痛が走

る。

義父は私に振り返ると、蹲る私を蹴飛ばした。

『腹が減つただと!!? 居候の分際で飯まで集ろうつていうのか!!? 飯食わなかつただけで死にはしないぞ! それに、俺と母さんと信頼の家族の邪魔をするな!』

義父は私にそう吐き捨てると『嫌なもん見たな』と義母と信頼に言いながら玄関を出て行った。

それからの記憶はない。



次に私が目が覚めたのは病院のベッドの上だった。

私の担当医の先生が言うには、なんでも路上に血を流して倒れている、女の子がいると近所の人が発見して119番してくれたらしい。

おそらく、助けを呼ぼうと外に出て力尽きたのだろう。

幸い頭蓋骨にヒビは入っておらず、右腕を骨折した程度だったらしく、後遺症も残らないそうだ。

でも、全治1ヶ月の大怪我だと言った。

ホツとしたと同時に両親がいない今、助けを求めるチャンスだと思った。

私は両親にこうされたと言ったが医者は『嘘をつくな』と私に怒った。

その医者は『むしろ両親に感謝しなさい』と言ったのだ。

なんでも、私が病院に運ばれたと知らせが行った時、飛んできたのだと言った。

そして、『何が何でも、こいつを助けてください』と言ったのだと言う。

普通ならば喜ぶべきなのだろうが、私は喜ばなかった。

なぜなら、まだ8歳だった私でも、義父にされたその時のことは忘れられなかったからだ。

その時、義父と義母が部屋に入ってきた。

そして、義母は私に抱きつき、義父は『良かったな』と私の頭を撫でた。

医者はそれを見て『君は良い両親を持って幸せだね』と私に微笑むと病室を出て行った。

でも、医者が病室を出て行った後、2人の態度は一変した。

私を抱きしめていた義母は私を突き飛ばすようにしてベッドに倒し、義父は私の私の頭を撫でていた手を振りほどいた。

私が見上げると、そこにはあの時と同じ表情の義父母がいた。背中に気持ちの悪い汗が流れる。

また殴られるのだろうかと思わず身を固くした。

義父が私に対して顔を近づけて言った。

『全く、お前って奴は本当に疫病神だ、よりもよってウチの前で倒れやがって！ それ

のせいで俺たちが虐待してらって警察から疑われたじゃねえか!』

『そうよ、私たちの仕事や信頼の将来に影響が出たらどうするのよ』

義父に乗じて義母も言う。

さすがに病院ということもあり、義父母からは殴られなかったが、代わりに自分に対する罵詈雑言が降りかかった。

なんでも、私が倒れたところは富良野家の玄関先だったらしく、発見した人が、頭から血を流して腕が折られた幼女を見て、この富良野家の人たちが虐待をしているかもしれないと警察にも通報したそう。

疑われた義父母はそんな事実はないと否定し、証拠ないため警察も引き上げたそう。

警察は、『この幼女は不運にも通り魔に襲われた』と結論付けたいらしい。

近所にも虐待への噂が立ったため、その噂を消すために、義父は『英理華は私たちの

兄の娘だ、ところが、兄が死んでしまったため私たちが引き取った大切な娘』と公言したのだそうだ。

もともと、義父母は私を引き取ったら頃合いを見て私を施設に捨てるつもりだったらしい。

でもそれが、今回の私のことでそれができなくなつて私を育てるしかなかった。

自分たちや信頼にまで被害が出るのは堪らないらしい。

義父母は散々私に恨み言を言うと、病室を出て行つた。

気分を変えるために、ふと病室の日めくりカレンダーを見るとあの日から1週間経つていた。

1ヶ月後、怪我が治り、私が退院すると、義父は『迷惑をかけたお詫びとして、今後の家の家事は全てお前がしろ!』と言った。

義父も義母も共働きなので家のことが疎かになりがちだった。

そこで私をタダで使える家政婦として目をつけたのだ。

祖父母の家でたまに家事を手伝っていたのが功を奏したのか簡単な家事は一通りこなせた。

私自身がもともと器用だったということもあり、この家の家事も1週間も経てばほとんどこなせるようになった。

でも、料理だけはなかなか上手くいかなかった。

器用だったとはいえ、料理は人によって好みが異なる。

義父から『家事をしろ』と言われた日の夕食で、私は祖父母によく作っていたカレーライスを作ったのだが、義父や信頼はカレーライスが嫌いだったらしく、『まずい物作るんじゃないねえ! 馬鹿!』と2人は言い私に皿ごと投げつけた。

さらに、義父は『俺たちの嫌いなモン作りやがって! ああ!?? これが引き取ってやった大恩人に対する態度かあ!??』と言い私をカレーが溢れた床に押し付けた。

信頼もそれに便乗して私を踏みつけて『やーい！やーい！ 屑虫女！』と私に唾を吐きながら言う。

さらに義父は

『お前がまずいモン作るからこうなったんだ！ 責任とって溢れたモン全部お前が食べ！ 信頼、嫌なもの見ちまったな、俺たちは外に食べに行こう』

と言い、信頼を連れて外に出て行った。

義母は私の作ったカレーライスを食べ終わるときつきと自室に戻っていったので、助けてくれなかった。

残された私は義父母が見てない好きを見計らって溢れたカレーライスを急いで片付けた。

その日から私は考えた、どうしたらこの家で安全に過ごせるのか。私を守ってくれる人はいない、私を助けてくれる人はいない。ならば自分の身は自分で守るしかない。

その日のことから、私は義父母と信頼が好きなるものを調べるようになった。それだけでなく、家事にも積極的に取り組んだ。

これは、機嫌取りのためだ。

どうやっても、私がこの家にお世話になっている限り義父母には逆らえない。間接的に義父母に溺愛されている信頼にも。

私がこの家にいる限り義父母と信頼の言うことを聞く、奴隷になるしかないのだ。

そう思ったら、この家に引き取られた当初に持っていた、『信賴のように義父母から愛されたい』などという感情は持たなくなつた。

むしろ私の中にあるのは『愛されたい』という要求ではない別の感情だつた。

それは義父母、いや他人に対する『恐怖』だ。

幼少期からこのような扱いを受けていたが、義父母の言うことを聞いていれば、安全に過ごせた。

だからこそ、私はその『恐怖』から自分の身を守るために義父母と信賴の機嫌取りを積極的に行うようになった。



そのために、自分の処女も信頼に差し出した。

中学生となった信頼は思春期真っ只中だ。

だからこそ、その性欲を発散させるために、犯しても問題のない存在、つまり私に目をつけたのだ。

正直にいうと嫌だったが、自分の平穩のためなら処女くらい安いものだど割り切った。

それからの信頼の性処理は私が行なっている。

義父母にも、この生活のうち身に就いていった観察眼を駆使して最大限の機嫌取りを行った。

義父の好きな酒を買ってきたり、義母の好きな俳優の出演するドラマのDVDを借りてきたり、様々なことを行った。

ここまですると、義父母の私に対する以前のような暴力はなくなつた。

もちろん、お礼を言われることも労われることもないが、以前のようにながなくなつただけで私は満足していた。

義父母や信頼のために尽くしていれば、あの人たちは私に関わらない。

1人でいれば何もされない。

暴力を振るわれることもなければ何をされることもない。

この時間こそが私にとって何よりもかけがいの無い愛しい時間に感じられた。

引き取られてからの新しい小学校に通っても、私は今の家族にされたことが忘れられなかった。

だから、自分に寄ってくる他人が義父母や信頼に見えて次第に他人を避けるようになつた。

義父母からされた行いの恐怖を避けるために学校での友達を作らなかつた。

いや、作れなかつた。

他人と付き合うことで、またあんな思いを味わうくらいなら1人でいた方が良い。

それほど、根深いトラウマになっていた。

そして、自分にいじめなどの問題が起こるのを避けるために勉強に励むようになった。

家事がない時などは全てそのために費やした。

成績が良い生徒は次第に優秀な生徒として教師からも周りからも見られ、周りから一目置かれる存在として見られるため、教師や同級生から目をつけられることもなくなると思っただからだ。

小学生や中学生の時は信頼の使わないノートをこつそりくすねて勉強に取り組んだ。

それ以外にも義父母たちとの生活で培った観察眼をフルに駆使して教師たちの機嫌取りもした。

そのため、小学校でも中学校でも優等生として学校からは注目された。

でも、中学3年生の冬、それが裏目に出て私の恐れていた事態がとうとう起こってしまった。

私が平穩に過ごしたいという考えが完全に定着するきっかけになった『いじめ』だ。いじめっ子たちが言うには、『お前、ぼつちの癖に○○先生に好かれてんのがムカつく』や『何でアンタなんかアタシより成績良いわけ!?』というものだった。

いじめの原因は所謂嫉妬だ。

まあ、いじめっ子たちの言い分もわからなくはない。

中学3年生といえ、殆どの生徒たちが始めて受験を控えてピリピリする時期だ。もしかしたら志望校に向けて勉強をかなり前からしていた生徒もいたのかもしれない。

そして、その苛立ちから嫉妬も相まって私にあたったのだろう。

ぼっち、教師から気に入られる、私はいじめっ子たちからしてみれば格好の標的だった。

それから、私は毎日のように殴る蹴るの暴力をそのいじめっ子たちから振るわれた。いじめのことを両親には相談していない。

どうせ相談したところで対処してくれるとは思えないし、下手すれば『信頼にいじめの手が伸びるだろ!!?』と義父にまた殴られるかもしれない。

あれだけ私に目を掛けていても、教師たちも大ごとになって、自分の評価が下げられたくないからいじめのことを見て見ぬ振りをする。

従って、他人に助けを求めただけ無駄だ。

だから、自分で何とかするしかない。

よくあるドラマや漫画とかではいじめの証拠を持ち出して教育委員会、もしくはネットに告発することは私はしない。

あれが出来るのは限られている。

失うものがない人。

すぐにでも1人で生きることが出来る人。

または、親など自分を守ってくれる人がいる人だ。

私にはその3つのどれも無い。

それに告発を失敗したら私は家族からも学校からの世間からも袋叩きにあう。

だから私ができる1番良い方法はいじめが治まるのを待つことだった。

どっちみち、そのいじめが起こったのは、中学3年生だ。

いじめっ子たちとの付き合いももう終わる。

そう思えば良い。

でも、それより前に前述の3つのうちに当てはまる心の優しい人が私のいじめを証拠付きで教育委員会に告発してくれた。

その時の映像は、私が暴力を振るわれている時の映像だったため教育委員会も動かさ

るを得なかった。

大ごとになるのを防ぐために、学校ではすぐに緊急集会が開かれた。

その時は、流石に私の義父母も出席したが面倒くさそうな顔をしていた、私はいじめの解決より、義父にまた暴力を振るわれるかもしれないということに震えた。

でも、その心配はなかった。

緊急集会の時にいじめっ子の一人が資産家の子供であったため、子供のいじめの贖罪としていじめに対しての多額の慰謝料を払うと言ってくれたのだ。

そのことに義父母はニヤリと笑った。

その後は『さもいじめを許さない良い親』の顔でいじめっ子の親たちに怒鳴っていた。

おそらく資産家の払う多額の慰謝料に目が眩んだのだろう。

つまり、最終的には得をしたから私に暴力を振るう理由がないのだ。

暴力を振るわれなかったことに私はホッとした。

その後のいじめっ子たちは転校するなり退学するなりの悲惨な結末を迎えた。

そして、そのことが私の『平穩に過ぎたい』という考えが完全に定着するきっかけになった。

そうして、今の私の性格が形成されたのだ。

緊急集会のあつた日の夜、私はもう一つの事実を知つた。

それはこの家に引き取られてからずっと私が気になつていたことだ。

それは『どうして義父は私のことをあそこまで蔑ろにするのか』ということだ。

いくら私が本当の娘でないとはいへ、あそこまでするなんておかしいと……

それを考えていると、幸か不幸か義父が自ら喋つた。

その日は資産家の親から多額の慰謝料をもらったことに上機嫌になり義父と義母、そして信頼の3人で焼肉屋に行ったのだ。

当然、私は家で1人で自分の作つた夕食を食べた。

そして、その日の深夜に義父母がリビングで酒を飲んでいた。

その時に義父が自慢するようになにかを義母に自慢げに語つていた。

おそらく、酔つた勢いで義母に自慢していたのだろう。

廊下で布団を敷いて寝ている私には嫌でも会話が聞こえてくる。

私は思わず聞き耳を立てた。

それこそが私の知りたい事実だつた。

義父は昔から優秀で皆から慕われていた自分の兄、つまり私の実の父親を妬ましく思っていたそうさ。

そのため今までも義父は私の父親に対して多くの嫌がらせをしてきたそうさ。

でも、義父の思い通りに事は上手く運ばずに私の父親は大学の在学中に友人たちと立ち上げた会社が大ブレイクし、若くして一流実業家として成功した。

そして、一流実業家として成功した私の父親は当時、女優として活動していた私の母親と交際して結婚した。

そうして産まれたのが私だった。

でも、そう言った矢先に不慮の事故で私の両親は死んでしまった。

その時は義父は皆さん妬ましい兄が死んで『ザマア見ろ!』と思ったそうさ。

そして今度、義父が目をつけたのは両親の莫大な遺産を受け継いだ私だ。

義父は自分の兄の残した遺産を狙ったのだ。



そして、祖父母が死ぬ直前に祖父母に私を引き取るから私の受け継いだ遺産をもらおうと申し出たのだ。

莫大な遺産を横取りできた上に憎かった兄の子供の私を甚振ることができると、この上ない快感を得たのだと言っていた。

義父はそれを自慢げに義母に語ると義母と共に高笑いをした。

それを廊下から聞いていた私は義父に対して特に怒りは湧かなかつた。逆に冷静になった。

これが理由なんだと心にストーンと落ちた。なるほど、それならば納得だ。

そして思った。

ああ、やっぱり『他人は頼れない』のだと…

「おい！ 早く飯の支度をしろ！」

つと… 昔のことを考えていたみたいだ…

いけない、こんな事を考えている暇はない…

早く夕食の支度をしなきゃ…

# クラスの女王に平穩を脅かされたくない。

―昼休み―

昼休み―それは四限目の授業が終わり午後の授業に向けて生徒たちが昼食をとりながら共に英気を養う時間だ。

友人と机を囲って食べる者

購買に昼食を買いに行く者

はたまた教室から出て行って食べる者

生徒たちは昼休みを生徒たちは思い思いの過ごし方で英気を養う。

それは、私の所属する2年F組でも同じだ。

いつも通りの喧騒に包まれながら、それぞれの昼休みを過ごしている。

私？

私はいつもの通り自分で作った昼食を食べているよ。

それにしても昼食時となるとクラスのグループ関係がよく分かるようになる。

このクラスも様々なグループに別れるが、その中でも華やかな雰囲気醸し出しているのがクラスの後ろにいるグループだ。

彼らは『トップカースト』と呼ばれている。

いわばクラス内で最上位の立場にいる者たちだ。

男子がサッカー部の2人と野球部に1人とラグビー部に1人、そして女子が3人の計7人。

ちなみに、由比ヶ浜さんもここに所属している。

「ねえ、隼人お。今日は雨降ってるし、部活なしであーしらと遊びに行かない？」

「いやー、今日は無理そうだな。部活があるし……」

「別に一日くらいはよくない？ 今日ねサーティワンの割引キャンペーンでダブルが安いんだよ。あーしシヨコらとチヨコのダブルが食べたい」

「それって、どっちもチヨコじゃん（笑）」

「ええ、全然違うし。ていうか、超お腹減ったし」

どうやら大声で何かを話し合っている。

どうやら、放課後にどこに遊びに行くかの話し合いのようだ。

大声で話しているので聞きたくなくても会話の内容は聞こえてくる。

そして、そのグループの中でも特にまばゆい輝きを放つ2人。

グループの中心にいるのは葉山隼人くんだ。

サッカー部のエースで次期部長候補。

さらに成績も良く雪ノ下さんと同じくらいの成績を取るほどらしい。

それに加えて、親は弁護士らしく、容姿も今風のイケメンのタレントのような容姿を持ち学校内でも有名人だ。

その隣にいて葉山くんと話しているのは三浦優美子さんだ。

金髪の縦ロールにこれでもかというくらいに着崩した制服。

街中にいそうなギャルを連想させる派手な格好と気の強い性格。

そしてトップカーストに属しているだけあってその顔立ちは綺麗で整っている。

その為、彼女はクラス内では女王のような扱いをされている。

そんな彼女と対等に話している葉山くんはさしずめクラスの王様というべきだろう

か。

まあ、言ってみれば美男美女の王様と王女様というような組み合わせである。

「悪いけど、今日はパスするよ」

葉山くんが言うのと三浦さんがキョトンとした表情になる。

「俺ら、今年はずで国立狙ってるから」

葉山くんがイケメンによく似合う爽やかな笑顔で三浦さんに言う。

「それにさー、優美子。あんまり食べすぎると後悔するぞ」

「あーし、いくら食べても太んないし。あー、やっぱり今日も食べまくるしかないかー、ねえ、結衣」

「あくあるある。優美子スタイル良いよね。でもさ、今日はあたしちよつと用事があるから…」

「だしよ？ もう今日から食いまくるしかないでしょー」

「食べ過ぎて腹壊すなよ」

「だーかーらー、いくら食べても平気なんだって。太んないし。ねえ、結衣」

「やーほんと優美子マジでスタイル神ってるよねー脚とか超キレイだし。でね、あたしちよつと…」

「え、そうかな、雪ノ下さんとかいう子の方がヤバくない？」

「あ、確かにゆきのんやば……」

「……………」

「あ、や、でも優美子の方が華やかというかなんというか……」

……………女王様のご機嫌をとるのも大変ですね……

今の一連の会話を聞いた私の感想はこうだ。

キョロ充、強者の中の格差、見ていてこれほど馬鹿らしいものはない。

私が義父母にしているのと同じように周りの人の雰囲気に合わせてるだけで何も自分の意見を言わない。

由比ヶ浜さん自身がどう思ってるのかは知らないけど、私が彼女と変わりたいかと問われれば答えはNOだ。

今でさえ周りに愛想振りまくの大変なのにこれ以上なんてまっぴらだ。

でも、由比ヶ浜さんは私と反対で強者に従うクセがついているようだ。

その証拠に、三浦さんが由比ヶ浜さんの発言に黙って眉根をピクリと動かすと由比ヶ浜さんが慌てたように三浦さんを煽てる。

まるで女王に仕える侍女のようだ。

「ま、いいんじゃない？ 部活のあとでいいなら俺も付き合うよ」

張り詰めた空気を察したのか、葉山くんが軽いノリでそう言った。

すると、女王の機嫌も直ったらしく「オツケー、んじや、メールして？」なんて笑顔で会話が再開した。

それにホツとしたように由比ヶ浜さんが胸をなでおろした。

あなたもトップカーストに居続けるのに苦労してるんですね…



そう思いながら自分で作った弁当をパクリと食べる。

うん、我ながら美味しい。

葉山グループの会話を聞き流しながらそう思っていたら、今度はメンバー内では黒髪ロングに眼鏡をかけた地味な女子が由比ヶ浜さんに声をかけた。

「結衣？ どうしたん？ 具合悪そうだよ？」

三浦さんの機嫌をとるのに一生懸命である哀れな由比ヶ浜さんの様子を察したのか声をかける。

おお、彼女は割と周りをよく見てるらしい。

「う、ううん… 大丈夫だよ…」

由比ヶ浜さんは眼鏡をかけた女子の心配そうな顔を見て、遠目にもわかるような作り笑いで首を振って答える。

どうやら、彼女のオロオロした態度は三浦さんの機嫌取りだけではなかったらしい。

機嫌をよくした三浦さんにより再び会話が始まる。

そして、またしばらく経つたら由比ヶ浜さんがおずおずと声をあげた。

「あの、あたしお昼はちよつと行くところあるから…」

「あ、そーなん？　じゃさ、帰りにアレ買ってきてよ、レモンティー。あーし、今日飲み物持ってくるの忘れててさー。　パンだし、お茶ないとキツイじゃん？」

「え、え、けどあたし戻ってくるの五限になるっていうか、お昼まるまるいないからそれはちよつとどうだろーみたいなの……」

「……はあ？」

由比ヶ浜さんがそう言うのと、三浦さんの顔が硬直した。

それと同時に教室内の空気が凍る。

「はあ……………」

今の会話を聞いていて、人事にもかかわらず思わずため息が出た。

やっぱり彼女は馬鹿だ。

そんな風に言っても三浦さんのようなタイプが納得するはずがない。

後で他のクラスの友達に捕まったとかと言って誤魔化せばいいのに、彼女ならそういう相手は大勢いるだろう。

折角のチャンスが無駄にして…

おまけに言い訳も最悪だ。

ほら、三浦さんの顔がさつきより怖くなってるよ。

「はあ？ え、ちよつと、なにになに？ なんかさー結衣こないだもそんなん言つて放課後バツクれなかった？ ちよつと最近付き合い悪くない？」

「やー、それはなんて言うかやむにやまれぬというか、私事で恐縮ですというか……」

三浦さんの返答にしどろもどろで答える由比ヶ浜さん。

だが、その反応は三浦さんにとって腹立たしいものだったらしく、苛立たしげにカツと爪で机を叩く。

クラスの女王様の突然の機嫌の急降下にクラス中の空気が凍る。

それまでお喋りに興じていた人たちは押し黙り、すでに食事を終えた者は教室から逃げように出て行く。

終いには、周りにいた葉山くんやその取り巻きたちも視線を床に落としている。

「それじゃあ分からないから。言いたいことがあるならばつきりと言いなよ。あーしらつて友達じゃん、隠し事とかよくなくない？」

三浦さんの言っていることは字面では美しいものだが、それは仲間意識の強要でしかない。

友達だから、仲間だから何を言っても良い。

そんなことは微塵にも思っていないせに、よく言うものだ。

そうでなければ、由比ヶ浜さんが雪ノ下さんのスタイルを称賛した時に不機嫌な態度をとるわけがない。

私が見たところ、三浦優美子という人間は自分が何よりも可愛い人間だ。

短絡的でわがままで自己中心、自分につき従わないものは嫌。

三浦さんの考えは少し雪ノ下さんと似ているかもしれない。

結局、三浦さんが不機嫌なのは由比ヶ浜さんが自分と異なる行動をとるのが不愉快なだけだ。

でも、三浦さんはそんなのを『友達』だと言っている。

はつきり言ってそんなのは『友達』ではなく『奴隷』と呼んだ方が良いだろう。

「ごめん……」

「だーかーらー、ごめんじゃなくて何か言いたいことがあるんでしよう？ あーしのこ  
と嫌いなん？ そこんところはつきり言っただけだ」

「えつと…… その……」

そう言われて由比ヶ浜さんはさらに縮こまる、まるで蛇に睨まれた蛙だ。

クラス内での立ち位置からしても貴女にそう言われて言える人なんていない、こんな  
ものは会話ではなく恐喝だ。

と言っても、私には由比ヶ浜さんを助ける事は出来ない。

というか、する気もない。

だって、所詮は別世界の話だ。

由比ヶ浜さんがどうなったところで私は痛くも痒くもないのだ。

むしろ、クラスの女王様に関わって目をつけられるなんて真つ平ごめんだ。

それに、助けに行つたとしても三浦さんに一蹴されるのがオチだ。

それに、今この教室にいる人たちみんなも私と同じ考えなのだろう。

クラスを中心人物である三浦さんを敵に回したくないから、クラスメイトの誰も由比ヶ浜さんを助けようとしない。

由比ヶ浜さんは未だに俯いたままだ。

三浦さんは何も言わない由比ヶ浜さんの心情を理解できずに『はっきり言えし!』と威圧的に詰め寄っている。

周りにいる葉山くんたちでさえも三浦さんを止めようとはしない。

由比ヶ浜さんはグループからも見捨てられてるのか?

ここまできると哀れを通り越して呆れてくる。

さつきまでの騒がしく会話していたような賑やかなムードはなんだったのだろうか?  
?

誰にも助けてもらえないなんて由比ヶ浜さんの周りの信頼関係は随分と薄いんです

ね。

でもまあ、この状況を見れば私の流儀は間違っていないことが自分でも分かる。

『友達という鎖は時には悪質な鎖にもなる。』

今の状況がまさにそうだ。

三浦さんは友達なら常に一緒に行動するべきと思ってる、相手のことも考えずにね。

由比ヶ浜さんは用事があると言っているのに理由を聞こうともせず、自分の一方的な要求ばかりだ。

それだけじゃない、由比ヶ浜さんに限ったことではないが、さっきの三浦さんを異常に褒めていたのもそれに当てはまる。

友達の中にも力関係はある。

三浦さんはその最上位に位置するのだ。

会社で例えるなら取締役くらいの立場。

だからこそ、下の役人たちが機嫌取りを行う。

上司の機嫌を損ねればクビになったり、白い目で見られるようになる。



これと同じように、立場が上の三浦さんに由比ヶ浜さんは機嫌取りを行わなければならない。

三浦さんの機嫌を損ねてしまえば、メンバー内からも嫌われるかもしれない。下手をするとグループからも追い出される可能性もある。

由比ヶ浜さんは人間関係に重点を置いているようだから尚更だ。

だからこそ余計な気を使わなければならなくなる。

これらは『友達』という鎖があるからだ。

なんとまあ、ご苦勞なことだ。

私は家ではそうしているからその辛さはよく分かるけど、学校でもそれをするなんてまっぴらだ。

ならまだ一人でいた方がマシだ。

由比ヶ浜さんは上手い言い訳が思い浮かばずに、未だに三浦さんに詰め寄られてる。

なんとも哀れな姿だ。

といつても、人事だから由比ヶ浜さんのことなんてどうでもいいけど…

さてと、お弁当も食べ終わつたことだし、教室内の修羅場な空気にこれ以上いる必要なんてないよね。

私は由比ヶ浜さんたちのいざこざには関係ないんだ、これ以上いる必要なんてないよね。

この様子だと昼休みの終わりまでこの殺伐とした空気は続きそうだ、なら、昼休みが終わるまで教室から避難するでしょう。

安物の弁当箱を片付けて様子を見計らいながら教室の扉へと移動していた時。

「！」

なんと、当の由比ヶ浜さんと、偶然にも目が合ってしまった。

しかも、その視線は助けを求める小動物のようだ。

ちよつとやめてよ、三浦さんの火の粉がこちらにも飛んできたらどうするの？

由比ヶ浜さんの視線を無視して教室から出ようとすると。

「……………おい、富良野」

……………遅かった。

はあ、関わる気なんてないのに。

聞こえないフリして逃げようと思ったけど無理だ、いつのまにか近くまで来て腕を掴まれてるから。

「うん？ 何かな、三浦さん」

しようがない、ここは上手く合わせて切り抜けるか。

平塚先生らにした営業スマイルを顔に貼り付けながら、柔らかい口調で三浦さんに返

答する。

こうすれば、大抵の人は好印象を持つてくれる。

しかし、三浦さんには効果はなかったらしく私を鋭い目で睨みつけた。

「…何か？　じゃないし、あんたどうして結衣っつーかあーし達の方見てたし、何か用でもあんの？」

いや、あなたたちというか由比ヶ浜さんの方が見てきたんだけど…

とまあ言ったところで無駄なので営業スマイルを貼り付けて言い返す。

「いや、別に…」

「はあ？　だつたらいちいち見てくんなし、マジ気持ち悪いから」

三浦さんは腕を掴んだまま、私を目を鋭くしてで睨みつけながらそう言った、気持ち悪い以外に罵倒語思いつかないのかな？

私の方が背が高いので三浦さんを見下ろした形になっている。

でも、どうやら彼女にはそれが気に入らなかつたらしく私を掴んでいる腕に力が入った。

ちよつと、ゴタゴタに巻き込まれるのは勘弁してよ…

さつきから三浦さんに掴まれてる腕も地味に痛いし、早く腕を離して…

「まあまあ、優美子もおちついて、富良野さんも困ってるし」

その時、クラス一のイケメンでみんなの王子様、葉山くんが仲裁に入った。

イケメンらしい人好きのする良い笑顔を浮かべて私の腕を掴んでいる三浦さんの腕を解いた。

うわっ、少し手形がついてるし…

三浦さん握る力強すぎでしょ…

「大丈夫かい？ 富良野さん」

「あ、うん。 ありがとう、葉山くん」

優しい言葉と共に私に笑顔を向ける。

それと同時にクラス中の視線が私に向けられた。

中にはチラホラ嫉妬の視線もあつた。

あ、葉山くんの後ろにいる三浦さんは私をさつきより鋭い目で睨みつけてる。

ピンチを助けてくれたイケメンに笑顔を向けられる。

普通の女子ならここで葉山くんに対して頬を赤らめるのだろうか、生憎と私は普通の女子ではないのでそんなことはしない。

でも、助けてくれたことは事実なので、営業スマイルを浮かべてのお礼は言う。

ていうか、私の時にそんなことできるんなら由比ヶ浜さんの時も助けてやりなよ…

それに、あなたが私を助けたせいで三浦さんがさらに不機嫌になつてゐるよ。

さらに、あなたに好意を寄せているであろう、他の女子からの視線も痛いんだけど……  
こんな事で中学の二の舞になるのは私ごめんだよ？

三浦さんのことを気遣つてあげなよ……

ともあれ、釈放された以上ここに長居は無用。

さつさと葉山くんたちの前から消えて、これ以上女子の輦蹙を買わないうちに退散するでしょう。

葉山くんに笑顔でお礼を言つて、教室の扉を開けて退散しようとするところ――

「――何？ 富良野さん、道を通して欲しいのだど……」

目の前に雪ノ下さんが立っていた。

なんだか不機嫌そうだったので「ごめんなさい」と軽く謝つて脇によける。

にしても、J組の彼女がここに……？

そう私が思うや否や不機嫌そうな顔をしながら彼女はF組の教室に躊躇わずに入り由比ヶ浜さんの方に向かつていった。

何か嫌な予感がする…

これ以上の面倒事はごめんだ。

私は早歩きで周りの視線をもともせず、F組から逃げるように離れて行った。

…背中から聞こえる喧騒を感じつつ。

「あー……」

放課後、奉仕部での部活動もとい自習が終わり、帰り支度を終えて昇降口へと向かう。思わずググつと伸びをすると、なんて今日という日が長かったのかと感ぜられる。

日頃の2倍疲れてしまった、何しろ昼休みの後の午後の授業ではクラスの雰囲気あまりにも重々しかったからね。



昼休み終了間際にF組の教室に戻ってくれば、私が出て行く前よりさらに機嫌の悪い三浦さんがいて、彼女を葉山くんとその取り巻きたちが宥めているところだった。

そして、昼休みが終わるとおどした様子の由比ヶ浜さんが戻ってきた。

彼女が居心地悪くしているせいで自然とクラスの雰囲気も悪くなってしまった。

これは、私の推測だけど由比ヶ浜さんは雪ノ下さんと何か約束をしていたのだろう。

でも、なかなか待ち合わせ場所に由比ヶ浜さんが来なかったから痺れを切らした雪ノ下さんが彼女を迎えに行った。

でも、当の由比ヶ浜さんは三浦さんとトラブルを起こしていた。

そこで雪ノ下さんが介入、もとい三浦さんに喧嘩を売って、三浦さんの怒りを増長させた、って大体こんなところだろう。

やはり修羅場になっていた、あの時逃げたのは正解だったな。

さて、由比ヶ浜さんの所属するグループは気まずい空気になっていたけど、これからとうなることやら。

三浦さんは由比ヶ浜さんが自分の思う通りに動かなかっただけでなく、意中の相手である葉山くんが私の方を庇った、それに加えて雪ノ下さんが自分に突っかった。

今日の三浦さんはさぞご機嫌斜めだったことだろう。

グループの中心人物がご機嫌斜めになったことから自動的にグループの雰囲気も悪くなる。

それ自体はどうでも良いけど、周りに被害だけは撒き散らささないで欲しい。

ただ周りのことなどどうでもいい、自分たちだけがすべてだと考えるのが嫌なトップカーストの人たちだ、私の予想だけであの人たちはこれからも迷惑をかけ続けると思う。

特に今日、私を助けてくれた葉山くんが：

って、こんな事を考えても仕方ないな。

早く帰らないと：

厨二病のラノベ作家に平穩を脅かされたくない。

「……がいるの！」

「……から見たらお前らがも……だがな」

「いいから。そういうのはいいから、中に入って……くれるかしら」

ある日のこと。いつものように私が奉仕部の部室へ行くと雪ノ下さんと由比ヶ浜さん、そして比企谷君が部室前で何やら言い争っていた。

「どうしたの？」

「あつ！ ぶらのん！ 実は部室の中に変な人がいるんだよ！」

状況が飲み込めず、何が起きているのか聞くと由比ヶ浜さんが私に部室のドアを指差しながら声を上げる。

変な人、由比ヶ浜さんの言葉を疑問に思つてドアの隙間から室内を見ると初夏だというのに暑そうなコートを着た太った男が部室にいた。

なるほど、確かにあの格好では不審者と思われてもおかしくないな。

はつきり言つて気味が悪い。

「誰？ あの人……」

私が雪ノ下さんに聞くと彼女は『さあ？ 知らないわ』と返答した。

「どうするの？ このままだと部屋に入れないよ？」

「大丈夫よ、そのためにこの男がいるのだから」

由比ヶ浜さんが心配そうにみんなを見渡して言うと言いつつ雪ノ下さんが比企谷君を指差して言った。

「中に入って様子を見てきなさい、どうせ貴方ならどうなつても誰も悲しまないでしょうから」

「ほっとけ」

雪ノ下さんが命令するように比企谷君に言った。

それにしても相変わらず酷い言い草だ、平塚先生つて本当にこの人の元で更生させる気なの？

言われ慣れているのか平然と返している比企谷君も比企谷君だけ……

そう思っていると、比企谷君が扉を開けて中に入る。

扉を開いた瞬間、潮風が吹き抜けて教室内にプリントがばら撒かれる。

そして、中心には1人の男子生徒がいた。

「クククツ、まさかこんな所で出会うとは驚いたな。　　ー待ちわびたぞ。　　比企谷八幡」

「…驚いたのと待っていたのとどっちだ。　　それで何の用だ、材木座」

「むっ、我が魂に刻まれし名を口にしたか。　　いかにも我が剣豪將軍・材木座義輝だ」

長つたらしいアニメのようなセリフを言い終わると材木座義輝と言った男子はぼさつと着ているコートを力強く靡かせて、ぼつちやりしたオタクっぽい顔に似つかわしくないキリリつとやたら男前な表情を浮かべてこちらを振り返った。

驚いたのに待ちわびたと見事に矛盾した事を言っている材木座君は初夏に近いのにもかかわらず、汗をかいてまでコートを羽織り、指ぬきグローブをはめていた。

「ねえ… それ何なの？」

不機嫌、というより不快感を露わにして由比ヶ浜さんが呟く。

まあ、私も同じような事を思ったけどさ…

「比企谷君、あちらはあなたの事を知っているようだけど…」

「まさか、この相棒の顔を忘れたとはな…　　見下げ果てたぞ、八幡」

「あの人、相棒って言ってるけど…」

材木座君の発言に雪ノ下さんと由比ヶ浜さんが比企谷君を冷たい目で見る。

まるでクズはクズかごに、みたいな事を訴えるような目だ。

でも、その視線に動じないところを見ると彼はそんな目で見慣れ慣れているのかな？

そんな事を考えていると、材木座君は比企谷君に指を突きつけて言葉を続ける。

「そうだ、相棒。 貴様も覚えているだろう、あの地獄のような時間を共に駆け抜けた

日々を……」

「只体育でペアだっただけだろ」

そう言うのと、材木座君は『愛などいらぬ！』等と苦悶の表情で窓の外を見た。

「類は友を呼ぶというやつね」

雪ノ下さんが納得したように頷いた。

「別に友達じゃないが」

それをあつさり否定した比企谷君。

「何でもいいのだけれど、その相棒？ お友達？ あなたに用があるんじゃないの？」

「雪ノ下、間違つてもこいつと俺が相棒だとか友達だとか言うな。俺にはそんな人間は一人としていない」

「ムハハハ！、さすがは我が相棒。良く分かつているではないか。我らに相棒も友もない」

「だから相棒なのか相棒じゃないのかどつちなんだ」

さつきから思つてたけど、この人ブレブレすぎるでしょ…

芯の通つていそうな雪ノ下さんとは真逆の人間だ。

それにしても、いつまでこんなくだらない茶番を続けるのかな？ 冷やかに来ただけ

けなら帰つて欲しい…

「あの、材木座君だっけ？ 奉仕部に何の用かな？ 何か依頼があるんでしよう？」

このままでは埒があかないので、材木座君にどうして奉仕部にきたのか理由を聞く。

「む、むう… は、八幡よ、奉仕部とはここで良いのか？」

「ええ、ここが奉仕部よ」

私が話しかけると、材木座くんはさつきまでの威勢はどこにやら、数日前の由比ヶ浜さんを連想させるキョロ充のように返答した。

さらに、比企谷君の後ろに引っ込んでいた雪ノ下さんが前に出て答える。すると、材木座君は私と雪ノ下さんを交互に見た後にすぐさま比企谷君の方に視線を向ける。

「どうやら、女子に免疫がないみたい。」

「……そ、そうであつたか。平塚教諭に助言いただいた通りならば八幡、お主は私の願いを叶える義務があるわけだな？ 幾百の時空を超えてなお主従の関係にあるとは………これも八幡大菩薩の導きか」

「別に奉仕部はあなたのお願いを叶えるわけではないわ。ただそのお手伝いをするだけよ」

「……ふ、ふむ！ で、では八幡よ、我に手を貸したまえ！ ふふふ、思えば我とお前は対等な関係、かつてのように天下を再び握らんとしようではないか！」

「だから、主従なのか対等なのかどっちなんだよお前」

比企谷君が呆れたように言う。

まあ、材木座君のブレブレを見ていればそれも分かるけど……

「うわあ……」

それまで黙って成り行きを見ていた由比ヶ浜さんはドン引きしていた。気持ちはわかる。初対面で材木座君を好印象に捉える人なんていないだろうから。

「比企谷君、ちよつと……」



雪ノ下さんが比企谷君の服の裾を引っ張って何やら耳打ちしている。

さらに、途中から聞き耳を立てていたのか由比ヶ浜さんも2人の話に加わっていた。  
私？

材木座君の暑苦しく長つたらしい言い回しを黙って聞いていたよ、彼が何を言っていたのか殆ど覚えてないけどね。

しばらくして話し合いが終わったのか比企谷君たち3人が材木座君へと向き直る。

「とりあえず、あなたの依頼はその心の病気を治すつてことで良いのかしら？」

「……。八幡よ。余と汝は契約の下、朕の願いを叶えんがためにこの場に馳せ参じた。それは実に崇高なる気高き欲望にしてただ一つの希望だ」

雪ノ下さん言い方悪いよ……

材木座君も雪ノ下さんの質問に答えずに比企谷君の方に視線を向けてるし。

「話しているのは私なのだけれど。人が話しているときはその人の方を向きなさい」

材木座君の態度が気に食わなかったのか、冷たい声色で雪ノ下さんは彼に言う、材木座君の襟首をつかんで無理矢理正面に向かせた。

「もは、もはは、もはははは……これはしたり」

雪ノ下さんが襟首を離すと、材木座君は奇妙な笑い声あげる。

雪ノ下さん、材木座君の性格を考えなよ、目が泳いでて汗もさつきより多く出ているし言動も挙動不審になっているよ。

「その喋り方もやめて」

「……」

そのけんもほろろの言い方にとうとう材木座君は下を向いて黙り込んでしまった。

まあ、こうなるのは当然だろう。

先ほども思ったけど、雪ノ下さんは真つ直ぐな性格で曲がったことが大嫌いな人間だ、対して材木座君はブレブレな人間だ、どっちが優位に立てるかなんて一目瞭然だ。

「まあまあ、本題に戻ろうよ、材木座君はどうして奉仕部に来たのかな？」

私は営業スマイルを浮かべて材木座君に優しく問いかける。

まあ、放つておいても埒があかないし、これ以上材木座君の相手をするのもごめんだ。それに、彼をこのまま放つておいたら雪ノ下さんますます彼を追い詰めるだろう、見た感じ材木座君は三浦さんのように気の強い性格ではなさそうだから反論はできないだろう。

私の営業スマイルに材木座君は幾分か緊張がほぐれたのか口を開く。

「う、うむ…… 以来というのはそのことなのだ」

材木座君は教室に散らばったプリントを指差す。

「何これ？」

由比ヶ浜さんがそれを一枚取りそれを覗き込んだ。

見るとそれは原稿用紙だった。

「これは、小説なのかな？」

「ご賢察痛み入る。如何にもそれはラノベの原稿だ、とある新人賞に応募しようと思っているのだが、友達がいないので感想が聞けぬ。読んでくれ」

やはりそうだったようだ。

なるほど、材木座君は新人賞に自分で書いた小説を投稿しようと思っている、でも、自分の書いた小説が面白いかどうか分からない、誰かに読んでもらいたいが友達がいないためそれができない。

そこで平塚先生からの紹介でこの奉仕部に来たというわけか……

「それならネットに投稿して評価してもらえばいいだろう」

「それは無理だ。彼奴らは容赦がないからな、酷評されたら多分死ぬぞ、我」

「ふーん……」

そう言いながらたまたま拾った私は小説の一部を流し読みする。

なるほど、ラノベは図書館で借りたものしか読んだことないけれど、ありがちなラノベのキャラクターやストーリーだね。

「なあ、材木座、本当に俺たちが感想を言っているのか?」

「もちろんだ、私の自信作に感動し、むせび泣いても一向に構わんぞ」

比企谷君の言葉に材木座君は自信ありげに頷いた。

どうやら自分の書いた小説によほどの自信があるらしい。

でも、由比ヶ浜さんはまだしも、雪ノ下さんと比企谷君は容赦しないと思うけど……

そう言っていると下校時刻になり、ラノベの感想は明日ということで話はまとまった。

翌日、私が部室に向かうとそこにはすでに雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、比企谷君の3人が座っていた。

由比ヶ浜さん以外の2人は材木座君の小説を徹夜で読んだのかフラフラと眠そうにしていた。

由比ヶ浜さんはいつも通り元気だからあのラノベは読まなかったみたいだね。

由比ヶ浜さんがフラフラしている雪ノ下さんを「ゆっきのーん、おきてー。あさだよ」と揺すつて起こす。あさだ

がたりと音がして雪ノ下さんが目覚めた。

その後、比企谷君も私が起こしたが2人は未だに眠そうだった。

「その様子だとみんな苦労したみたいだね」

「ええ……徹夜なんて久しぶりにしたわ。私この手のもの全然読んだことがないの

よ、……あまり好きになれそうにないわ」

私が言うとうと雪ノ下さんが頭を抑えながら呟いた。

だろうね、あなたのイメージに合わないし。

「あー、あたしも絶対無理」

「お前は読んでから感想を言えよ」

由比ヶ浜さんに同じく眠そうな比企谷君が口を挟む。

由比ヶ浜さんはそれにムツとしたのか鞆から材木座君の原稿を取り出す、よりにも

よって折り目の一つもついてない、綺麗な保存状態の原稿だ。

あれじゃあ私は一枚も読んでいません、みんなの前で宣言しているようなものだ。

「頼もう！」

その時、荒々しいノックと共に古風な呼ばわりで材木座君が入ってきた。

材木座君は部屋に入ってくるなり椅子に座り、腕を組んで偉そうにしていた。やっぱり自信作というだけあり自分の作品に相当な自信があるらしい。 やつ

まあ、もつとも自信作Ⅱ名作という方程式などないのだけれど。

「ごめんなさい、わたしにはこういうのはよく分からないのだけれど……」

そう前置きをして雪ノ下さんが切り出す。

「つまらなかった、読むのが苦痛ですらあったわ、想像を絶するつまらなさ」

「げぶう！」

「まず文法がめちゃくちゃね、なぜいつも倒置法なの？ 『てにをは』の使い方知ってる

？ 学校で習わなかった？」

「そもそも人に読ませる気があるのかしら。 そうそう、読ませると言えば話の先が読

めすぎて、一向に面白くなる気配がないわね」

「そして、地の分が長いしつこい字が多くて読みづらい。 というか、完結していない物

語を人に読ませないでくれるかしら？ 文才の前に常識を身につけた方が良いわね」

うわあ… 雪ノ下さん容赦ないね。

雪ノ下さんの容赦ない酷評を前に材木座君は撃沈。

身体をピクピクさせながら床に倒れていた。

はつきり言つて気持ち悪い。

「とりあえずこんな所かしら？ 次は由比ヶ浜さんね」

雪ノ下さんは倒れている材木座君を冷たい目で見た後由比ヶ浜さんに話を振った。

まあ、そもそも彼女は材木座君の小説すら読んでないだろうけど…

「え？ あたし？ え、えーつとね、難しい言葉をたくさん知ってるね！」

「ひでぶっ！」

由比ヶ浜さんの追い討ちをかけられた材木座君。

さつきまでの自信満々な姿は微塵もない。

由比ヶ浜さんは首を傾げているけど、材木座君がああなつてもしょうがないよ。

だって、その言葉の意味を言い換えれば『小説自体には何も無い』と言われてるに等しいからだ。

「ぐぬう……は、八幡。お前ならば理解できるであろう！ 我の書いた世界、ライトノベルの地平がお前にならば分かるな？ 愚物どもには理解する事が出来ぬ深遠なる物語が……」

材木座君は最後の希望とばかりに比企谷君の方に這い寄ってくる。もはや、気持ち悪いを通り越して哀れな姿だ。

でも、比企谷君はそんな材木座君の希望を粉々に打ち砕いた。

「お前の小説は理解できない、そもそもアレのどこがライトノベルなんだ？ もはや小説ですらない。選考に送ったら一行目を見ただけでゴミ箱行きレベルだったぞ」



「ぶぎやらっ!!」

希望を打ち砕かれた材木座君はカエルのようにひっくり返った。

「それにお前…」

比企谷君はそこで言葉を区切って最後の言葉を言った。

「あれ、どこの小説のパクリだ？」

「ぶぎやらっ!!」

比企谷君の感想と言う名の批評を聞かされ、さらに追い討ちをかけられた材木座君は奇声をあげて床にひっくり返った。

それからしばらく経ってムクリと起き上がると私の方に顔を向けた。

「ふ、富良野さん… お主ならどうだったのですか…?」

瀕死、まさにこの表現が当てはまるような有様だ。

さっきのシヨックに合わさって、女子に慣れていないからかさつきよりも言動も変だ。

自信作の小説を3人からあれほど酷評された時点で限界だったのだろう。

これ以上、酷評されたら彼は倒れてしまいそうだ。

なら、私は…

「私は材木座君の小説の世界観は面白かったと思うよ、登場人物の個性の強さもユーモアがあつて良かったからね」

「……え？」

「設定は面白いから雪ノ下さんたちの言った通り、文章の書き方を勉強したら言い文章が書けると思うよ」

私がいつもの笑顔で説明すると周りは口をあんぐり開けていた。

雪ノ下さんたちだけでなく床に這いつくばっていた材木座君もだ。

「そ、それは本当か!?? 我の小説は本当に面白かったのか!??」

床に這いつくばっていた材木座君はさっきの様子とは打って変わって私に詰め寄った。

「う、うん。 まあ、設定は面白かったからね…君には独特の感性があると思うよ…」

詰め寄ってきた材木座君に若干引き気味になりながら返答する。

私の発言に瀕死状態だった材木座君は水を得た魚のように生き生きとしだした。

「誠か!?? 例えば、どのあたりが面白かったのだ!??」

「えーっと… それはねー…」

―富良野英理華 side end―

―比企谷八幡 side―

目の前で起きていることが信じられない、そういうのは今の状況のことを言うのだから。う。

その信じられないこととは、材木座の小説が褒められていると言うことだ。

自慢じゃないが、俺は今まで幾多のラノベや小説を読んできた。

国語の成績も学年トップクラスだ、だから文章を書くときの文法の使い方や話の構成も雪ノ下ほどではないにせよ分かる。

そんな俺が昨日、徹夜してまで読んだ材木座の小説の出来栄えははつきり言つて酷いものだった。

雪ノ下が言つたように文法は使いこなせていないし、話の構成も滅茶苦茶、はつきり言つて材木座には文才がないと言えるだろう。

さらに、どこぞの小説かラノベの文章をそのまま引用したような箇所も多々あつた。

こんな舐めたようなラノベが新人賞に応募したところで結果は見えている、落選しか考えられない。

なのに、こんな小説を目の前の人物は褒めている。

いや、全面的に褒めているわけではない、直した方が良い箇所はちゃんと指摘している。

俺たちの時とは違い、材木座はシヨックを受けた様子もなく熱心に富良野の言葉を聞いている。

ただアイツの小説を否定するだけだった俺たち、ある程度アイツの小説を肯定している富良野、どっちの言葉を聞くかなんて考えるまでもない。

彼女は『助言を与えるもの』としては満点が与えられるだろう。

それは俺も素直に彼女はすごいと思う。

でも……

同時に俺はこう感じられた。

「何かコイツからは危険な匂いがするー…」

コイツ、つまり富良野からはそんな危険な匂いがするのだ。

幼少期からずっと人から嘲笑の対象にされ、いじめの標的にもなり、人間の醜い部分だけを見せつけられてきた俺は人の内面や心の動きに敏感だ。

そんな洞察力の高さには自信のある俺から見ただけ富良野はそう見える。

側から見れば富良野は顔に優しい笑顔を浮かばせながら材木座の小説の良い点と悪い点をバランス良く指摘していて、理想の形と言えるだろう。

だが、俺からしてみれば富良野がそんな事を本心で言っているのかと思えてくる。

俺から見た見た富良野は顔に本物のような笑顔を貼り付けて、口からオートで出てくるお世辞を言い、俺たちの批評を美化して伝えているだけのように見える。

材木座のことなんて考えてはおらず、ただ材木座に合わせているだけのような…  
まるで機械のように…。

そう考えている間に2人の話は終わったのか材木座が立ち上がり。

「富良野さん、ありがとう！ また、新作が書いたら持ってくる」

富良野にそう言い残して材木座は満面の笑みで部屋を出て行った。

―比企谷八幡 side end―

―富良野英理華 side―

「いろんな意味ですごくかつたね〜」

「ご機嫌で材木座君が去っていった後、部室で由比ヶ浜さんが呑気な声をもらす。

「お前な、こんな徹夜明けで眠いんだ。あんまりにもお気楽発言を傍でされると怒りが湧いてくる」

「ご、ごめん…。…って、それはなんか酷くない!??!」

「ごめんなさい由比ヶ浜さん。私も比企谷君と同意見だわ」

「ゆきのんまで!??!」

雪ノ下さんの意見にショックを受けている由比ヶ浜さん、まあ確かに自分たちが睡眠時間を削って苦労したのに、彼女だけ寝不足でないのを見れば怒りも湧くだろう。

そんな中、比企谷君がポツリと呟く。



「そういえば意外だったな… 富良野が材木座のあんな小説を褒めるだなんて…」  
「そうね、比企谷君と同じ意見なのは誠に遺憾だけど、正直あんな駄作の何が良かったのかしら？」

比企谷君の疑問に雪ノ下さんも便乗する。

由比ヶ浜さんはもともと材木座君の小説を読んでないためポカンとしていた。

2人の疑問は最もだ。

おそらく自分たちがあれだけ酷評した材木座君の小説を私が賞賛したように見えただろう。

「確かに文章はちよつとおかしかったかもしれないけど、個人的には設定はユニークで面白かったからね、だから、雪ノ下さんの言った通り文章を勉強すれば良い小説が書けるんじゃないかな？ それに奉仕部は『解決のためのお手伝い』がモットーの部活でしょ？ だから、良かったところと改善すべきところの2つを提案した方が良いんじゃないかと思っただよ」

営業スマイル浮かべて私がそう言うと雪ノ下さんと比企谷君は驚いた顔をした、最初に私がこの部活の名前を『奉仕部』だと当てた時のように。

「た、確かにそうね… 驚いたわ… 少しは賢いみたいね。でも、私ならもつと良い解決策を考えついたでしょうけど」

平静を装いながら雪ノ下さんが私に言う。

その視線と声色には些か嫉妬の感情が入り混じっているように聞こえる。

なるほど、雪ノ下さんの性格から考えて今回のことは納得できないだろう。

彼女は優秀だ、それは彼女自身がよく分かっているだろう、彼女の周りでは常に自分が中心だったに違いない。

この奉仕部では尚更そうだ、部長である自分が中心でないと彼女は気がすまなかったのだろう。

本来ならば自分が依頼を解決するはずなのにそれを私が成し遂げた。

ましてや、その解決を成し遂げた相手が自分に並ぶ成績を取り、一方的に見下してる相手だったならば、プライドが高い彼女がそれを納得するはずがない。

現に今も不機嫌な顔が隠せてない。

私は雪ノ下さんたちに見えるように小さくため息を吐いて雪ノ下さんに営業スマイルを浮かべて話しかける。

「そうだね、雪ノ下さんだともつと良い解決策を思いついたかもしれないね、でもね、私

にはあれしか解決策が思いつかなかつたんだよ」

私は入部の時と同じようにそう言つて雪ノ下さんにゴマをする。

なんだかんだ言つてもこの奉仕部のトップは彼女だ、下手に楯突いて不仲になるよりもトップにゴマをすれば平穩に過ごせる。

自分に対してプラスな意見を言われて機嫌をよくしたのか雪ノ下さんの頬が緩む。

由比ヶ浜さんもそれに便乗して『ゆきのんつてすごいよね〜』と言いだした。

どうやら、ゴマすりは上手くいったみたいだ。

でも、その中で比企谷君だけは私のことを怪訝そうな顔で見ていた。

「うん？ 何かな？ 比企谷君」

目つきの悪い腐った目で私を見る比企谷君に私はそう言う。

「なあ、お前……」

「あら、ゴミ谷君、富良野さんのことを何いやらしい目で見ているのかしら？ 貴方のよ  
うな腐った目で見られるなんて彼女に迷惑だからやめなさい」

「ふらのんのことそんな目で見てたの？ ヒッキーキモい！」

何かを比企谷君が言おうとした時に横から言葉が飛んだ。

雪ノ下さんと由比ヶ浜さんだ、比企谷君が私を見ていたことに対して不平を言っ  
てい  
る。

比企谷君は冷静に2人に言葉を返しながらも私の事をチラリと見ている。

その時にふと彼と目があつた。

彼が私を見る腐った目の奥、そこには私に対してであろう様々な感情を含んでいた。

雪ノ下さんたちのような比企谷君に対する見下したような感情でも、私に対してプラ

スの感情でもない。

——彼が私に向けている感情は——……

疑い、不信任、これらマイナスの感情が当てはまるような感情だ。

私には彼の目がこう言っているように見える…

『お前、本当にそう思っているのか？』と…

わたしは突然冷や水を背中に浴びせられたような気になった、家族からの虐待、学校でのいじめ、これらの時とは全く違った感情だ。

でも、私はこの感情が何なのか知っている。

この感情は…

『恐怖』

家族や周りから受けた恐怖とは全く違う『恐怖』

私が最も味わいたくない感情だ。

でも、それを彼は自分に向けてくる。

そう思った瞬間、さらに背筋が寒くなり、彼が自分に向ける視線が怖くなった。

そうになると、彼はさつき何と言おうとしたのだろう。

いや、考えるだけでも怖い…

私の思い込みかもしれないし、これ以上考えるのはやめよう…

でも…

—彼には気をつけた方が良いみたい…

私は比企谷君の疑いの視線から逃げようように提案する。

「ねえ、今日はもう終わりにした方が良いんじゃないかな？ 雪ノ下さんも比企谷君も

疲れてるようだし、その状態では依頼が来てもまともに対応出来ないと思うよ」

「そうね、富良野さんの言う通りこのまま続けていても効率が悪いわね、今日はもう終わりにしましょう、由比ヶ浜さんもそれでいいわね？」

「おい、俺の意見は無視か？」

私の提案に雪ノ下さんが賛同したので部活は解散ということになった、雪ノ下さんと由比ヶ浜さんは比企谷君を無視して後片付けを始める。

でも、比企谷君も片付けをしているので帰ることに依存はなさそうだ。

比企谷君の注意がそらせた、無意識にホッとすする。

それにならって私も後片付けをする。



「それじゃ、私は先に帰るね、じゃあね〜3人とも」

「ええ、さようなら由比ヶ浜さん」

挨拶とともに由比ヶ浜さんが一足先に教室から出て行く。

「それじゃ、私は鍵を返しに行くから」

「ああ、じゃあな」

「さようなら、雪ノ下さん」

そう挨拶を交わすと今日は解散になった。

帰り道、私は今日のことを思い出す。

小説のことで材木座君にはああ言ったけど、実は私は材木座君の小説は雪ノ下さんたちと違ってほとんど読んでいない。

何故って？

あんなのに割く時間ももつたいないからだ。

私が材木座君の小説を読んだのは、最初の十数枚だけで残りは読んでない。

はつきり言って材木座君の小説は雪ノ下さんたちの言った通り酷いものだった。

文章は稚拙だし、初っ端からろくな説明もなしに必殺技らしき名前を主人公が叫んでいて、話のつかかりが理解できない。

比企谷君の言った通り1行読んだだけでゴミ箱に行きも納得できる作品だった。

おまけに材木座君個人に対しても少しも好感が持てなかった

依頼の時に材木座君は言っていた、『ラノベの新人賞に応募しようと思っている』と。

普通ならば本当に新人賞に応募しようと考えているのならば、自分の作品をもっと多くの読者に読んでもらうためにネット上の小説投稿サイトに投稿するはずだ。

それならば、こんな小さな部活の人たちに読んでもらうより多くの人たちに読んでもらえるだろうから、彼の欲しい様々な感想か寄せられる。

そこから修正して文章や話の構成を学ぶ事だつてできないことはないだろう、私たちに読ませるより、この方法の方が良い作品を作るために最も身近で効率的な方法だ。

なのに彼は『ネット上の読者は手加減を知らないからな、批判でもされたら死ぬ』と言っていたくらいだ。

従つて、彼は感想が欲しかったのではなく、自分の小説を褒めて欲しかったから奉仕部に来たということだ。

それならば顔が見えずに、ズケズケと批判や批評を言うネット上の読者の方々より同じ高校の人たちの方が褒めてくれるだろうと思つたのだ。

おそらく、材木座君があんなに自信満々な態度だったのは自身の書いた小説が自信作ということだけではなく、本人が目の前にいるのだし批判はしないでだろうと思っていたのだろうが、まあ、雪ノ下さんたちにはそれが裏目に出たみたいだったけどね。

つまり、材木座君は自分の作品を肯定して欲しかっただけ、新人賞に応募するために書いたあの小説も所詮は自己満足のものだ。

それに新人賞に応募するのならば私たちに見せるという事自体がおかしいということにも彼は気づいてない。

あんな小説しか書けない文章力で批判が怖いまま、新人賞に応募しても落選してそれに対していろいろ言われて挫折するのがオチだ。

批判が全くない万人に受け入れられる小説なんて私は聞いたこともない。

彼の依頼の本当の解決方法は、誰かが小説投稿サイトに彼の小説を代わりに投稿することだったのだろう。

彼が遊びではなく本気でラノベ作家を目指していたのなら、少なくとも甘ったれた考えから目覚める必要があった。

キャラもブレブレだったが、やってることも彼はブレブレだ。

何もかもが中途半端、所詮は彼の自己満足に付き合わされただけ。

比企谷君や雪ノ下さんはご苦勞様なことだ、『骨折り損のくたびれもうけ』だったって

のに：

私が材木座君の小説を賞賛したのは、雪ノ下さんたちのように酷評して角が立つのを避けたかったからだ。

材木座君が自信作の小説を酷評されてもめげずに小説を持つてくるといふタフな性格ならばそんな心配はないけど、あいにく材木座君と私は昨日会ったばかりだ。

彼がどんな人間なのか分からないし、自信作の小説をボロクソに酷評されたことで平塚先生やらに泣きつくかもしれない。

そうになると、あの時に一緒に彼を非難していたら私の方にも平塚先生から余計な火の粉が飛んでくるかもしれない。

だったら彼の小説をとりあえず褒めて解決策を提示すれば良い。

つまり『設定が面白い』だの『独特の感性を持つているね』ということとはどんな小説にも当てはまる、当たり障りのない褒め言葉を言ったに過ぎないのだ。

後は、小説を最後まで読んだ雪ノ下さんや比企谷君の意見から解決策に使えそうな部分を引用して自分の意見とすれば良い。

とどのつまり、私は材木座君の小説なんて興味もない、傑作だなんて思いもしない。いわば、彼は私の当たり障りのない建て前の感想を貰って、それが自分の実力だと思いで込んで舞い上がってるだけなのだ。

その前の雪ノ下さんたちの酷評などなかったかのように一人で盛り上がっていたからね。

でもまあ、彼の依頼である『小説の感想を聞かせて欲しい』という依頼は達成したし、小説を書くモチベーションも上がったみたいだから依頼達成なんじゃないのかな？

まあ、彼はまた新作が書けたら持つてくると言っていたし、またその時は同じようにすれば良い。

それよりも問題はあの人だ…

私に対して疑い、不信感を含む視線を向けたあの人…

彼はあの時、私に何を言おうとしたのか分からない。

考えても、考えても、考えても分からない…

『分からない』。だからだろうか…

心の奥底から気持ちの悪い何かが上がってくる。

自分を奈落の底に引きずり込もうとするような感情だ。  
人通りの少ない住宅街の帰り道で私は小さく呟いた。

『彼が………』『怖い』………』

た。彼女のそのか細く小さな声は誰かに聞かれることもなく夕闇の中に溶け込んでいっ



その日の帰り道はいつにも増して足取りが重かった…

テニス部の男の娘に平穩を脅かされたくない。

「富良野さん！　いくよー！」

カコーン

「はーい」

カコーン

今、私はテニスのラケットを持ってペアになった人とボールの打ち合いをしている。

今は体育の授業だ、今日から体育はテニスかサッカーを選択して授業を受ける事になったのだが、私はテニスを選んだ。

理由？　決まってるでしょう、サッカーのような集団競技とテニスのような個人競技とどちらを選ぶのか聞かれれば、私は迷う事なく個人競技なテニスを選ぶ。

集団競技は私の嫌いな競技の1つだ。

周りに合わせなければならぬし、なかなか個人プレーを認めることもしない、そんな面倒なことは真つ平御免だ。

ちなみにテニスは希望者が多かったために人数を調整するためじゃんけんでどちらに振り分けられるか決められたのだが、私は無事にテニスに振り分けられた。

私はクラスでぼつちだが、テニスのペアを作ること簡単にできる。

やり方は至つて簡単、どのクラスにもこういうペア作りでグループからあぶれた人は必ず1人や2人いる、そんな人を見定めて得意の営業スマイルを浮かべて友好的に話しかけて相手を誘えば大抵の人はOKを出してくれる。

現に私がそうやってペア学習の時は相手を作れているのだから。

そうしてペアになった相手としばらく打ち合いをしていると、だんだんくたびれてきたので私たちは少し休憩を取る。

ふと向こう側を見ると比企谷君もテニスを選択したらしく1人で壁打ちをしていた。

彼は私と同じくぼつちだけど、私と違って人と上手く付き合おうとする意欲もないみたいだし、それを実行する行動力もコミュニケーション能力もなさそうだ。

だからこそペアを見つけられず、授業前に体育の担当教師である厚木先生に『調子が悪いから1人で壁打ちをします』と言っていた。

まあ、協調性がないからと言って体育の評価がマイナスになるかもしれないけど、彼は成績が悪くないみたいだし問題視させられることはないだろう。

実際、厚木先生も彼に特に何も言っていない。

それにしても、こうやって彼をみているとどこにでもいる冴えない男子高校生にしか見えない。

見た感じ友達もいないし、人付き合いも下手そうだ、他にも特に能力があるようにもみえない。

あの時、私に恐怖心を抱かせた人にはとても思えなかった。

ならば、私があこの時に彼に抱いた恐怖はなんだっただろうか？

あれから何日か経って、しばらくは彼を警戒していたけど、あの日以来彼からあの時のような恐怖を感じることはなかった。

……でも、今思えばただの勘違いだったような気もする。

そうだとしたら、私はとんだピエロだ。

よく知りもしない相手からちよつと見られて何かを話しかけられそうになっただけで過剰に警戒して怯えてるなんて。

っていうか、冷静に考えてみたら比企谷君が私の本性を知るはずがないのだ。

私は外面を取り繕うのには自信がある、コミュニケーション能力も普通の人より高いから自分の本性がバレることなんてあり得ない。

それに、比企谷君とは最近会ったばかりだ。

同じクラスだから完全に初対面だというわけではないけれど、彼とちゃんと会話をしたことは奉仕部に入部させられるまで一度もない。

部活に入部したあとでも彼との会話は挨拶のみの場合が多い。

つまり、私も彼のことを知らないけれど、比企谷君も私のことをよく知らないはずなのだ。

そんな彼が私の本性に気付くはずがない。

そう考えたらなんだか心がスツと軽くなった。

比企谷君への恐怖が少し薄れたからだろうか、それならばこれ以上気に病まないで良いからそれが良いんだけど…

「うらあつ!!? おおつ! 今のよくね? やばくね!!?」

「今のやつばいわー! 絶対とれないわー! 激アツだわー!」

その時騒がしい声が聞こえてきたので、なんだろうと振り返って見てみると、そこには葉山くんを中心とした葉山グループの人たちが派手に打ち合っていた。

ていうか、なんでサッカー部の葉山くんがテニスしているんだろう…

てつきり、サッカーの方にすると思ってたのに…

「やつべー葉山くん今の球、マジでやべえつて。曲がった? 曲がったくね? 今の」

「いや、打球が偶然スライスしたただけだよ。悪い、ミスった」

「マジかよ! スライスとか『魔球』じゃん。マジぱないわ。葉山くん超。パナイ

わ」

「葉山くん、テニスも上手いじゃん。さっきのスライスってやつ、俺にも教えてよ」  
あつという間に葉山くんはこのテニスの授業でも中心的な位置に存在するようになり、葉山くんのグループに属していない他の人たちは静かになる。

葉山くんを中心としたあの場所とそれ以外の場所で、空気に大きな格差が生まれていた。

「よーし！ おれもスライスだ！ スツライース!!？」

葉山くんの取り巻きのチャラそうな男子が持ち前の大声とともに打球を放つ。

しかし、打球はスライスすることなく、葉山くんから大きく外れてコート片隅に飛んでいった。

あれ？ あそこはたしか…

「あつ、ごつめーん、マジ勘弁！ えつと、えー…。」 ヒキタ二君？ ヒキタ二君、ボール取ってくれない？」

「…ん」

「ありがとうねー」

呼び声に対して無愛想にボールを拾うと葉山くんたちに投げ返す比企谷君。

比企谷君、貴方って名前すらも覚えてもらえてないんですね…

クラスメイトの名前を盛大に間違えているみんなの王子様、葉山隼人くんが朗らかに笑いながら『ヒキタニ君』こと比企谷君に手を振っている。

それに対して比企谷君は、葉山くんの名前を間違えられた事に反応する様子もなく黙って壁打ちを再開する。

どうやら、トップカーストの人たちと馴れ合うつもりはないらしい。

まあ、私もそうなんだけどね……

「おーい！ 富良野さん！ 私たちもテニスを再開しようよ！」



おっと、そんなことを考えている間に休憩時間は終わりのようだ。

私のペアの相手の女子がラケットを持って私に手を振っている。

「あ、うん。分かった！」

私はいつもの営業スマイルを顔に貼り付けてペアの相手とテニスを再開した。

―放課後―

「無理ね」

「おい、決断早すぎだろ」

放課後になり、私がいつものように奉仕部の部室に行くと雪ノ下さんと比企谷君が何やら言い争っていた。

「どうしたの?」

「あら富良野さん、それが、この男がね!…」

鞆を椅子に置きながら雪ノ下さんに何で言い争っているのか尋ねる。

雪ノ下さんが言うには、今日の昼休みに比企谷君が、クラスメイトの戸塚彩加という男子から『比企谷君ってテニス上手いね! よければテニス部に入ってくれないか』と頼まれて、自分がテニス部に入部できないかと、奉仕部の部長である雪ノ下さんに頼んでいたそうなのだ。

ところが、雪ノ下さんはただでさえインドア派で引きこもり体質の比企谷君が、そんなテニス部なんですアウトドアな部活ができるはずがないと言い張り、さらにこの奉仕部でも団体行動が碌にできない比企谷君のような社会不適合者にはそんなのは無理だ、というのだ。

なるほど、確かに雪ノ下さんの言い分も頷ける。

でも、私からしたらそれは雪ノ下さんにも言える事だと思う。

総武高校の中では雪ノ下さんは『氷の女王』という異名を取るほどの有名人だ、誰にも靡かない孤高の存在として。

でも、それは裏返せば誰とも円満な関係を築けないという事でもある。

根拠は、雪ノ下さんと出会ってから私が見た限りで彼女が他人という姿を見たことがないからだ。

雪ノ下さんは優秀だ、学校の成績はこの進学校でもある総武高校でも学年トップを常にキープし、容姿にも恵まれ、親は県会議員と千葉県でも大きな企業である雪ノ下建設の社長を務めている。

これほどまでに優秀という言葉が当てはまる生徒はなかなかない。

だからだろう、彼女が他人と円満な関係を築けないのは。

前に私にしたように彼女は常に周りを見下している、自分が優秀だということを信じて疑わない。

私が奉仕部に入部させられた時に彼女が言っていたような『私はあなたたちより優れているのよ』という態度が無意識に表に出ているのだろう。

だからこそ、周りの人たちは彼女のことを取っ付きづらい人だと見ており他人が寄ってこない。

そして、プライドの高い彼女は自ら他人に歩み寄ることは絶対にしないだろう。

だからこそ、彼女は常に一人なのだろうと私は思う。  
故に雪ノ下さんにも比企谷君と同じことが言えるのだ。

それに比企谷君もただ単に戸塚君のためにといいわけではないと思う。

おそらく比企谷君はテニス部に入部すると見せかけてそのまま奉仕部を辞めてテニス部からもフェードアウトするつもりだったのだろう。

確かにぼつちでコミュニケーション能力もない彼なら存在感なんてゼロに近いから、簡単に傾合いを見計らって辞めることなんて出来るだろうしね。

彼は奉仕部にそんなに思い入れはなさそうだから良いチャンスだと思っただろう。

でも、そうは上手くいかずに雪ノ下さんがそれにストップをかけたのだ。  
なるほど、2人が言い争っている理由が分かった。

「とにかく、あなたの入部は却下よ。　いいわね？」

「へいへい」

私がそう考えている間に比企谷君がいつものやる気のなさそうな返事がした。

どうやら、テニス部の入部は認められなかったみたいだね。

「やつはろー！ みんな、依頼人を連れてきたよー！」

その時、由比ヶ浜さんがやって来た。

「こ、こんにちは。 あ、比企谷君！ また会ったね！ 比企谷君の部活って奉仕部だったんだ」

挨拶に伴って入ってきた依頼人に視線を送ると、とても可愛らしい容姿のジャージを着た生徒がそこにいた。

明らかに女子に見えるけど、この人こそがさつき比企谷君が言っていた戸塚彩加君だ。

戸塚彩加君と私は同じクラスだから彼の顔は知っている。

「さいちゃんの事情はヒツキーも知ってるよね!!? だから奉仕部としてあたしが紹介したんだ」

「あの、由比ヶ浜さん、貴女は部員じゃないわよ?」

「えっ!!? そうなの!!?」

依頼人を連れてきて得意げの顔をしていた由比ヶ浜さんは雪ノ下さんの『奉仕部の部員ではない』という発言に驚いた声を上げる。

あれ？ 由比ヶ浜さんって部員じゃなかったの？

私がこの部活に入れられた後もこの部活に入り浸っていたからってつきり部員かと思っていたのに。

「入部届を貰ってないし、顧問の承認もないから部員ではないわよ」

「入部届書くよ！ 今すぐ書くよ！」

そう言つて彼女はルーズリーフに『にゅーぶとどけ』とひらがなで書いて雪ノ下さんに渡した。

つてか、入部届くらい漢字で書きなよ…

「それはともかく戸塚、依頼内容は大体分かつてるが具体的な説明を頼む」

由比ヶ浜さんの低脳さに呆れながらも比企谷君が戸塚君に説明を促す。

比企谷君に言われて戸塚君が口を開く。

「うん。 えっと、僕のテニスの実力を強くして欲しくて。 僕自身が強くなる事が出

来ればみんなきつと強くなるうと思うから、だからさ、テニス部を強くしてくれるんだ

よ…ね…？」

「そう、残念なことに奉仕部はあくまで自立を促す部活なのよ、強くなれるかどうかは貴方の努力次第だわ」

雪ノ下さんがそう言うのと戸塚君は肩を落とした。

まあ、確かに奉仕部の理念に反しているならその依頼は受けられない。

ただ、サポートや指導とかならできるかもしれないけど…

「えー！ ゆきのん手伝ってあげようよ！ さいちゃんかわいそうだよ!?」

「由比ヶ浜さん、私は手助けをしないと云っているわけではないわ。手助けはするけど、結果は本人次第で私たちにその結果を保証することはできないというだけよ」

「えっと、なんかよくわかんないけど、助けてあげようよ！ あたしも奉仕部の部員として頑張るから！」

いや、説明があつたんだから分かるでしょう…

由比ヶ浜さん、貴女は高校生でしょうが…

「由比ヶ浜さん、貴女はどんな説明をしたの？ 部員でもない時に勝手な説明をしない

でちようだい。そのせいで彼の希望はなくなったのよ？」

肩を落としたままの戸塚君を見て雪ノ下さんは由比ヶ浜さんを責めるような視線で見た。

打ち碎かれたとか、本人の前で言うかな？

それは暗に『貴方の願いはもう叶いません』って言ってるようなものだよ。

現にそれを聞いて戸塚くんさつきより肩を落としてるし。

その視線に由比ヶ浜さんはたじろぐ。

「で、でも、ゆきのんたちなら何とかできるでしょう？」

責めるような視線に耐え切れず、咄嗟に由比ヶ浜さんが発した一言を聞いて、雪ノ下さんの表情が変わる。

由比ヶ浜さんは苦し紛れに言ったのだろうが、雪ノ下さんは妙な受け取り方をしたよううで。

「貴女も言うようになったわね。由比ヶ浜さん、その2人はともかく私を試すような言い方をするなんて」

彼女を変に意識させたらしく、私と比企谷君をチラリと見た後、ニヤつと口角をあげて彼女は返答した。



「分かったわ、その依頼を受けてあげるわ。戸塚君、依頼は貴方自身のテニスの技術向上ということでもいいのよね？」

椅子から立ち上がり、戸塚君に依頼内容の確認をする。

……え？ 受けるの？ そんな簡単に…？

雪ノ下さん、由比ヶ浜さんにちよつと甘すぎでしょ？

依頼を受けるか受けないかを私たちに相談せずに独断で受けたよこの人…

今回は大した依頼じゃないみたいだからいいけど、今後とんでもない依頼がきた時もそうするなんてことないよね？

思わず顔をしかめるが、私のことなど気にもせずに話が進んでいった。

「う、うん。それでお願います」

「で、何やらせるんだ？」

戸塚君の依頼が受理されたので、比企谷君がその具体策の考えに移った。  
雪ノ下さんは口を開く。

「そうね、死ぬまで走らせて、死ぬまで素振り、死ぬまで練習かしらね」

「……」

それを聞いてみんな啞然とした表情になる。

この部活の依頼の解決法ってそんな横暴なの？

雪ノ下さんそれあまりにも非合理的すぎなんだけど……

確かにテニスに限ったことではないけど、人の実力を上げるためには練習は大事だ、それでも死ぬまでやらせて戸塚君が潰れたら元も子もないよ？

戸塚君も面食らった顔をしてるし、雪ノ下さんの案を受け入れるとは思えない。

でも、雪ノ下さんはそんな様子を気にせず自分の案こそ正しいと思ってるのか笑みを浮かべている。

戸塚君は面食らった顔から色白の顔を青白い顔にしてガタガタと小刻みに震えていた。

「僕、死んじゃうのかな……？」

不安そうな顔で戸塚君が比企谷君に助けを求める視線を向ける。

戸塚君、相談するところを間違えたね。

雪ノ下さんと由比ヶ浜さんは明日からやることを2人で話して、比企谷君は戸塚君に助けを求められてる。

私はまるつきり蚊帳の外だ。

(まあ、依頼を受けたのは雪ノ下さんなんだから彼女がなんとかしてくれてでしょう)

独善的で愚直なほど自分の考えが正しいと疑わない彼女でも、自分の責任は自分で取

れるでしょう。

話し合いに参加する必要がないのなら、いつものように教科書とルーズリーフを取り出して勉強を始める。

そうしているうちに下校時刻になり、今日の部活は終了した。

ー翌日ー

戸塚君の依頼を受けることになった翌日から彼を鍛える特訓が始まった。

昼休みにテニスコートに全員が集合する。

私と比企谷君と由比ヶ浜さんと戸塚君は学校のジャージ姿、雪ノ下さんは制服姿、そ

して何でいるのか分からないけど材木座君はいつものコート姿。

「おい、何で材木座がここにいるんだ」

当然のようにいる材木座君に比企谷君が突つ込む。

「なに、我が友が、過去に危険すぎて禁じられた修行に赴くと聞いたのでな、我はその雄姿を見届けようと思つたまですよ」

「いや、ただテニスの特訓するだけだから。しかも特訓するの俺じゃないから、戸塚だから」

「えーと、材木座、くんだよ。戸塚彩加です。よろしくね」

戸塚君が材木座君に挨拶すると、材木座君はビシリと固まって動かなくなった。

「おい、どうした？」

「……………八幡よ」

動かなくなった材木座君に若干呆れたように比企谷君が問いかけると、ようやく材木座君が復活し、しみじみと語りだした。

どうやら材木座君は戸塚君を男子だと勘違いしていたらしく、いつものように厨二く

さい長つたらしい言い回しをして比企谷君と話をしていた。

材木座君はその人間性が理由で話しかけられるということが全くといっていいほどない。

それがごく自然に、しかも戸塚君のような女子とい見間違えるくらい可愛らしい容姿をしている相手に話しかけられたたのだから、それに感動したのだろう。

「馬鹿なことをやってないで始めましょう。 良いかしら、戸塚君」

「は、はい！ よろしくお願ひします！」

材木座君に呆れた雪ノ下さんが開始を宣言する。

「それでは、戸塚君に足りない筋力をあげていきましょう。 上腕二頭筋、三角筋、大胸筋、腹筋、背筋、大腿筋、これらを総合的に鍛えるために腕立て伏せ…… とりあえず

は死ぬ一歩手前ぐらいまで頑張つてやってみて」

「ちよつと待て、なんだよ死ぬ一歩手前つて。お前は戸塚を殺す気か」

「許さんぞ！ 我の天使に手をかけようなど！」

雪ノ下さんの無茶な特訓メニューに比企谷君と材木座君が抗議の声をあげる。

「いくらなんでも厳しすぎだ。お前は加減という言葉を知らんのか？」

「私を馬鹿にしているのかしら、それくらい知つているに決まつてるでしょう。あな  
たこそ超回復というものを知らないのかしら？」

今度は雪ノ下さんと比企谷君が言い争いを始めた、比企谷君が雪ノ下さんに無理だと言え  
ば雪ノ下さんがそれに反抗する。

ていうか、雪ノ下さん：

貴女の特訓メニューには流石に無理があるでしょう：

確かに筋肉は痛めないと成長しない、だけどトレーニングなんていうものは無理のない範囲でするものだ。

プロのアスリートだって無理なトレーニングはしない、下手をすれば故障してしまうかもしれないからね。

でも、雪ノ下さんは死ぬ直前まで頑張つて鍛えれば筋肉が超回復して、一気にパワーアップできるのだと言う。

それは、ちよつと無理がある。

でも、彼女はそんなことに気づかず、自分の意見を『間違いだ』と否定している比企



谷君をお得意の毒舌を交えながら嘲笑っている。

ねえ、さつきから思ってたんだけど本当にこの人たちは戸塚君の依頼をやる気あるの……？

失礼だけど、雪ノ下さんは自分の意見を強引に押し倒して戸塚君のことを見ていないように見える。

比企谷君たちも、今回は戸塚君の依頼だというのに完全に彼は蚊帳の外に出させている。

雪ノ下さんと比企谷君の言い争いははつきり言って無駄だ、そんな暇があるなら戸塚君の依頼である技術向上の相談をした方がまだ合理的だというのに……

それに雪ノ下さんは、私たちと違って制服姿でジャージにすら着替えていない。

どうみてもこれから運動するようには見えないから、おそらく指導者として参加するつもりなのだろうけど、それでこの依頼が上手くいくとは思えない……

私がそう思っていると、比企谷君が雪ノ下さんに『そういうお前は死ぬ直前までできるのか?』と挑発の口調で言われて、それに乗った雪ノ下さんが脚を由比ヶ浜さんに抑えてもらって腹筋を始めた。

「はあ… はあ… はあ…」

といつても、5回くらいしたところで息が上がって倒れてしまったのだ。

雪ノ下さんはそれでもなんとか続けようとするが、やはりできずに力尽きて倒れてしまった。

「」「」………「」「」

誰も何も言わない。

それはそうだ、あれほど大口を叩いておきながら、自分は10回もせずにギブアップしているのだから。

「ゆきのん、体力ないんだね…」

由比ヶ浜さんも雪ノ下さんのあまりの体力のなさに啞然とした声を出していた。どうやら、雪ノ下さんに指導役を任せるのは間違ってるみたいだね…

「とりあえず、筋力をつけるという雪ノ下さんの意見は正しいよね、だから腕立て伏せに腹筋にスクワットから始めようか」

動けなくなった雪ノ下さんを私と比企谷君で木陰まで運んで休ませると、私は改めて戸塚君の依頼についての提案をした。

戸塚君の改善点は雪ノ下さんの見立て通り筋力が足りてないことに間違いない。

ならば、そこにウエイトを置いて、戸塚君に必要な基礎トレーニングを重ねていくことが一番良い。

いつもの営業スマイルを浮かべながら、私がそう提案すると、なんと戸塚君が私に指

導役になってくれとお願いしたのだ。

雪ノ下さんがダウンしたというのもあつてか、材木座君も由比ヶ浜さんもそれに便乗して、今日だけの指導役に私が推されたのだ。

比企谷君は黙ったまま微妙な表情を浮かべていたけれど、多数決により押し切られて反対はしなかった。

そうして、改めて戸塚君の特訓が始まった。

「戸塚君、フォームが乱れているわよ。もっとしつかりやりなさい」

「は、はい、はい！」

特訓を始めてから数日が経ち、現在、戸塚君は雪ノ下さんの指導の下ひたすらラケットを振っていた。

特訓を始めてから数日は基礎訓練だけだったが、今日ようやく戸塚君の特訓は第2フェイズに移行した。

と言つても、何か特別なことをしているわけではなく、コートを使つて雪ノ下さんの指示の元で戸塚君が動いているだけ。

雪ノ下さんは木陰で本を読みながら状況を把握して時々思い出したかのように戸塚君に檄を飛ばし、由比ヶ浜さんは最初は戸塚君の練習に付き合っていたのだが、すぐに飽きてしまい、しばらくは私と一緒にコートに散らばったボールの回収をしていたが、それも長くは続かずに今は雪ノ下さんの指示の元、籠から取り出したボールを戸塚君に放り投じている。

材木座君は『自分の魔球を開発する』とか言つて、コートの片隅でボールとラケットを手に何やらやっていた。

つまり、実際に動いているのは戸塚君だけで、他はそれぞれの時間を過ごしているのだ。

ちなみに、今の指導役は雪ノ下さんになっている。

私が指導役になったのは雪ノ下さんがダウンしたあの日だけで、次の日になると『私の方が富良野さんより良い指導ができるわ』といつもの他者を見下したような口調で雪ノ下さんはみんなに言った。

確かに彼女の気持ちも分からなくはない。

彼女からしてみれば、優秀な自分が差し置かれて格下の人間が指導役を任されたようなものなのだろうから。

プライドが高くて、常に自分が中心でないと気が済まない自意識過剰な彼女からしてみれば、あの日の出来事は最高に面白くないシチュエーションだったのだろう。

だって、そう言った時の彼女はこちらを見下すように見ていたしね。

でも、ここで何か彼女に言い返そうものなら、絶対に彼女とトラブルが起ころるのは間違いない。

私は問題事はおめんなので、雪ノ下さんがそう発言した後、いつもの営業スマイルを浮かべながら、入部の時と同じようなゴマスリを彼女にして指導役の立場を渡した。

その時の彼女は誇らしげにしながらも嬉しさを噛み殺したような顔をしていたね。

まあ、それは私のごますりに気を良くしたんだろうけど……

私はそう思うと、木陰で優雅に本を読んでいる雪ノ下さんをチラリと見て、ボール拾いを再開した。

「はあ… はあ… はあ…」

私がそう思っている間も雪ノ下さんの指示に必死に食らいついている戸塚君。彼の額には彼の息切れを表すように玉のような汗が滲み出していた。

そんな中でも特訓は進んでいく。

「由比ヶ浜さん、もつとあの辺とかこの辺とか厳しいコースに投げなさい、じゃないと練習にならないわ」

雪ノ下さんの落ち着いた声とは対照的に、荒い息を吐きながら戸塚君はラインの傍やネット際をボールをさばく。

それを気に留めずに彼女はさらにボールを投げるように指示を飛ばす。

戸塚君はゼゼエ言いながら再びラケットを構えるが辛そうだ。

その後も練習は続いたが、素人の由比ヶ浜さんが投げるボールは、フォームは勿論狙いも出鱈目でそのほとんどがとんでもない場所へ飛んでいく。

それを捕らえようと戸塚君も必死で食らいついているが、20球目近くでとうとう限界が来たのか、膝から転んでしまった。

「うわー！ さいちゃん大丈夫!?？」

由比ヶ浜さんの手が止まり、ネット際に駆け寄った。

戸塚君は擦りむいた足を撫でながら、濡れそぼった瞳でニコリと笑い無事をアピールした。

「大丈夫だから、続けて…」



戸塚君の言葉を聞いた雪ノ下さんは顔をしかめる。

「まだ、やるつもりなの？」

「うん……、みんな僕のために付き合ってくれているから、もう少し頑張りたい」

「……そ。それじゃあ、由比ヶ浜さん、富良野さん、後は頼むわね」

そう言うと雪ノ下さんはくるりと踵を返し、すたすたと校舎の方へ消えてしまった。

それを不安げな表情で見送った戸塚君がポツリと漏らした。

「もしかして、呆れられちゃったの、かな……？　いつまで経っても上手くならないし、腕

立て伏せもろくにできないし……」

戸塚君が、ガクリと肩を落として俯いた。

雪ノ下さんに見限られたと思ったのだろう。

「それはないと思うよー、ゆきのんは頼ってくる人を見捨てたりしないもん」

戸塚君を慰めるためだろうか、ころころと掌でテニスボールを転がしながら、由比ヶ浜さんが言った。

でも、由比ヶ浜さんからそう言われても戸塚君の表情は暗いままだ。

このままだと特訓が再開できないので、今度は私が口を開く。

「安心しなよ、戸塚君！ 雪ノ下さんはその内戻ってくると思うから、練習を続けていいんじゃないかな？」

「……うん！ そうだね！」

私が営業スマイルを浮かべて優しい口調でそう言うと、戸塚君も気を取り直したのか、元氣よく返事をして練習を再開しようとする。

「あー！ テニスしてんじゃない！ テニス！」

その時、聞き覚えのある嫌な声が聞こえてきた…

振り向くとそこには葉山くんや三浦さんを中心とした2年F組のトップカーズのグループがこっちに向かって歩いてきた。

すごく嫌な予感がする……

どうやらこの依頼はただでは終わらないようだ…

傲慢な女王様に平穩を脅かされたくない。

「あ、テニスしてんじゃん、テニス！」

私のクラスメイトの戸塚君の依頼で彼のテニスの技術向上を行うことになったのだが、その最中戸塚君は足を挫いて練習が中断し、その介抱を私と由比ヶ浜さんが行なっている時にそれは聞こえた。

キャピキャピとはしゃぐような声のする方向に私たちが振り向くと、葉山君、三浦さんを中心としたトップカーストのグループがこちらに向かって歩いてくる。

三浦さんは私たちチラリと見るとそれを軽く無視して戸塚君に話しかけた。

「ねえ、戸塚ー。あーしらもここで遊んでいい？」

「み、三浦さん、僕は別に遊んでいるわけじゃ、なく……て……練習を……」

「ええ？ 何？ 聞こえないんだけど？」

間違いなく聞こえていたのでしようけど、三浦さんの望んだ答えじゃなかったのでしょう。

恫喝するような三浦さんの態度に戸塚君は押し黙ってしまったが、なけなしの勇気を振り絞って再び口を開く。

「れ、練習だから……」

「ふくん、でもさ、部外者も混じってるじゃん。っていうことは別に男テニだけでコート使ってるわけじゃないんでしょ？ だったら、別にあーしらも使ってもよくない？  
ねえ、どうなの？」

「……………だから」

再び戸塚君が言いくるめられそうになる。

そこで比企谷君が戸塚君を庇うように言った。

「おい、いきなりやって来て随分横柄な物言いだな。『あーしらも使ってよくない』だ  
と？ 良いわけないだろ、ここは戸塚が正式に顧問から許可を貰って使用している  
だ。誰が使って良いかは戸塚が決める」

「はあ？ だから何なの？ あんたも部外者なのに使ってるじゃん」

「俺たちは戸塚から許可を貰ってるから使ってるんだよ、それに俺たちは戸塚から依頼を受けて奉仕部として活動している。立派な関係者だ。部外者は男子テニス部と

も、奉仕部とも何の関係もないテニス部だ」

「はあ？ 何意味わかんない事言ってるの？ キモいんだけど」

どうやら三浦さんたちは、このテニスコートに乱入して遊びたいらしいとのことだ。

本当なら三浦さんの言っていることは、自分たちの意見を正当化するために過ぎないただの暴論であるのだけど、それを言ったところで今の比企谷君のように意味がない。

学校というのは『社会の縮図』だ、だからこそ権力者に平民は敵わない。

社会でも自分の要求を押し通すために権力者が権力を振りかざすのと同じように学校でもそれが行われているのだから。

クラスでいう権力者というのはトップカーストの人たちのことだ、2年F組なら三浦さんもそれに当てはまる。

だからこそ、私たちが何を言っても発言力がないため意味がない、それに三浦さんも私たちの話には耳を傾けたくないみたいだし。

三浦さんと比企谷君の言い争いの膠着状態が続いていると、2人の間に別の人物が

割って入る。

「まあまあ、優美子。そう興奮しないで落ち着けよ」

優しい笑顔で三浦さんを宥めるのはクラスの王子様である葉山君だ。

三浦さんを宥めた葉山君は今度は比企谷君の方を向いて、同じく笑顔で説得するように言う。

「ヒキタニ君も、あんまりケンカ腰にならないでさ。ほら、みんなで仲良くやった方が楽しいしさ、そういうことで良いんじゃないの？」

「……はあ？」

一瞬、本当に声が出てしまった。



でも、そんな声が出るほどのことだった。唾然とするというのは今のようなことを言うのだろう。

この人は何を言ってるの？

葉山君を見て私はそう思った。

一見するとみんなを丸く収めるように良い風に言っているように聞こえるけど、彼の言い分は三浦さんのとほとんど変わらない。

横柄な物言いにもほどがある。

見た感じ戸塚君に遊びでやっているような感じはなかった、葉山君たちもそれを見ていた筈だ、楽しく練習をする必要は何処にもないし、楽しいのは葉山君たちだけで私たちにはメリツトも何もない。

つまり彼も『俺たちもここで遊ばせろ』と遠回しに言っているようなものなのだ。

それにさつきから思ってたんだけど何で誰も教師を呼ばないの？

葉山君たちがやってる事が間違ってるってことは少なくともこの場にいる奉仕部の2人と材木座君は分かっているでしょう？

こうしている間にも昼休みはどんどん過ぎていって戸塚君の貴重な練習時間は過ぎて行つてるのに。

教師を呼んできたら、私たちが許可を貰つてることが調べられるから一発だというのに、誰も動こうともしない。

……はあ、仕方ないか。

ここは私が教師を呼んできてさっさと追い払いましょう。

そう思つてコートから抜け出して教師を呼びに行こうとすると。

「ね、ちよつと隼人おゝ 何ダラダラやってんの？ あーし、早くテニスしたいんだけど」

三浦さんの気だるげで甘えたような声が聞こえて来た。

完全に彼女の頭の中には自分の要求を押し通すことしか入ってない、話の脈絡を何一つとして理解していなかった。

「んー… じゃあ、こうしよう。 部外者同士でテニスで勝負、勝った方が今後テニスコートを使えるってことで。 勿論、戸塚の練習にも付き合おう、強い奴と練習した練習した方が戸塚の為にもなるし、皆樂しめる」

「負けた方は土下座ね！ 分かった？」

192 傲慢な女王様に平穩を脅かされたくない。

「……………はあ？」

また、声が出てしまった。

またピタツと足を止めるほどに啞然とした。

この人本当に何を言ってるの？

葉山君も三浦さんと同じで話の脈絡を微塵も理解していない。

葉山君たちは全員この練習に関係ない部外者だけど、仮にも私たちは戸塚君の方から練習を手伝って欲しいと頼まれた関係者だ。

さつき比企谷君が言っていたそれを理解できてないの？

それにそんな勝負を受けて私たちには何のメリットがあるの？

そもそも勝負なんてしなくても、元々テニススコートの使用の権利は許可を取った戸塚

君と奉仕部にある、葉山君たちにはそれをどうこうする権利はない。

それにその勝負に私たちが上手く勝ったとしても、結局は現状維持にすぎないし、負けたら葉山君たちに追い出されて、コートを取られてしまうわけだから私たちには何のプラスにもならない。

そもそもそのテニス勝負のために時間もコートも葉山君たちのために割いてやる必要もない。

それに、戸塚君の練習というのはこの場を上手くまとめるための詭弁だろうし、仮に彼が本当に手伝うとしても三浦さんたちが手伝ってくれるとは限らない。

テニスコートにズケズケと侵入した挙げ句、戸塚君の言い分を無視した三浦さんを見れば到底信用できない。

それに強いやつとやった方が戸塚君のためになるといふのは葉山君の勝手な言い分だ。

しかも上から目線のね。

さらに暗に戸塚君を弱いと言っているも同然だしね、まあ如何にもクラスでの人気者である彼の言いそうなことだけだ。

結局、葉山君の意見はどちらも尊重しているように見えるだけで、実際に損をするのは私たちだけだというものだ。

三浦さんの主張は明らかに自分勝手な我儘なもの、葉山君のは表面だけは整えているけど、三浦さんの我儘をそれっぽいな理由をこじつけて押し通そうとしているだけだ。

「それじゃあ、あんたらも勝負しろし！」

私がそう考えている間も言い争いは続いている。

常識的に考えると比企谷君の言っていることが正論なのだが、ぼっちでクラスの中でカーストの低い彼の言葉を三浦さんたちが聞くわけもなく葉山君の意見に決まりつつ

あつた。

三浦さんが葉山君の意見を間に受けたみたいだ。

まあ、三浦さんからしてみれば正々堂々と後腐れなくテニスコートを使えるんだと思つたらしい。

比企谷君は『勝手に決めるな』と説得をしているが、それらは全て『キモい』だの『みんなのでやった方が楽しい』だのという言葉に流されて結局は葉山君の意見通りやることになつてしまった。

自分勝手にもほどがある。

呆れながらテニスコートを見ていると試合形式が決まつたらしい。

どうやらミックスダブルスで、向こうは当然葉山君と三浦さんのコンビだ。

それでこちらはとりあえず比企谷君が出ることは確定だろう。

もう一人は、戸塚君は足を怪我しているから無理、材木座君は練習でバテているのでダメ、雪ノ下さんはこの場にはいないから論外。

そうなると思む相手は、消去法で私か由比ヶ浜さんになるわけだけどおそらく由比ヶ



浜さんだろう。

「ヒツキー！　アタシ頑張るからね！」

ほら、やっぱり由比ヶ浜さんになるよね：

でも、今までの練習で分かったけど由比ヶ浜さんの運動神経はお世辞にも良い方じゃない。

まだ私の方が動けるだろう。

それに、これなら2人が相手をするのはサッカー部のエースである葉山君。

それに三浦さんも中学時代にテニスでかなりの成績をおさめたと言っている。

つまり比企谷君と由比ヶ浜さんが組んだところで葉山君たちに太刀打ちするのは無理だ。

唯一何とかなりそうなのは雪ノ下さんかもしれないけど、たとえ彼女と組んだとしても体力がゼロの彼女とでは勝てる可能性はない。

だから、私がこの2人に期待するのは勝利することではなく出来るだけ試合を長引か

せることだ。

その間に私が教師を呼んできてこの現状を説明すれば、少なくともこの場を収めることはできる。

だから、私が教師を呼んでくれば……

「ちよつと待つし！」

その時、テニスコートに待ったの音が響き渡った。

コートにいた私を含めた全員が声のした方を見るとその声の主は三浦さんだった。

三浦さんは葉山君をチラリと見ると腕を組んで不機嫌そうな顔で私を睨みつけた。

嫌な予感しかない……

……え？ まさか……

「結衣、アンタじゃなくてそこにいる富良野がアタシの相手になりな、そいつのパートナーは富良野に決定な！」

その嫌な予感は的中してしまった……

三浦さんはコートを出ようとしていた私に指差して言う。

「……わ、私が？」

思わず私の表情は固まった。

三浦さんが私を指名した……？

驚いて思わず口から言葉が出てこなかった。

それでも、何とか声を絞り出す。

どうやら、三浦さんは本気らしく私に早くコートに戻ってこいとコートの方を顎でしゃくった。

ちよつと待つてよ、そうなると教師を呼びに行けないのに…

「おい、待て。この勝負は俺だけで十分だ。富良野は出なくていいだろ」

「そうなると君一人になっちゃうよ？ それならフェアにこつちも俺一人で出るけど…」

「いや、余計な心配すんな。お前らは2人で出る。俺一人でやる」

「ちよつと待つし！ 何勝手に決めてんの？ アンター一人じゃ意味ないんだし！ 富良野が出ないと意味がないんだよ！」

比企谷君が自分一人で相手をすると言った途端、三浦さんがすごい剣幕で反論した。彼女はどうしても私に出て欲しいらしい。

周りも最初は戸惑っていたが、三浦さんに逆らえるはずもなく、私が比企谷君のペアだという雰囲気になってしまった。

……はあ、これは覚悟を決めるしかないか。

「分かった、比企谷君よろしくね！」

いろいろ不満はあるが、権力者には平民は逆らえない。

私はさっきの顔を引っ込めて営業スマイルを顔に貼り付けて比企谷君の手を握る。

比企谷君も材木座君と同様に女子に免疫がなかったのかいきなり手を握られて少し動揺しているようだ。

だが、すぐに持ち直し、さっきのことについても釈然とはしていないようだが、決まった以上は反論しないのか『……おう』と無愛想に私に返答した。

「なあ、聞いたか？ 富良野さんと三浦さんがテニスするらしいぞ！」

「オオツ！ マジで!?？ これは絶対に見ないとな！」

その時、騒ぎを聞いた野次馬がテニスコートの外に集まってきた。

その中の男子の野次馬が群がり出してなにやら下世話な話をしていた。

それにしても思春期の性欲が隠しきれないよ…

私には色気がないし、おおかた三浦さんの運動をしている姿が目当てなんでしょう？

……………あれ？ 待って……………？

「三浦さん、テニスウェア着てくれねえかな？ そしたら迸る汗に揺れるおっぱいが

……………！」

「ああ〜… 女子の運動してる姿はいいよなあ〜…  
想像するだけで鼻血が……」

なるほど…… その手を使えば良いかもしれないね……

……さてと、勝負を受けるなら私も準備をしないとね。

私は『更衣室でジャージを脱いでくるよ』と比企谷君に言っ  
てテニススコートから出て、



ある人のところに向かった。

この問題を解消するためにも、まずやらないといけないことは――……

「ねえ、材木座君、ちょっとお願いがあるんだけど……」

「はほん……？　いったいどうしたのだ？」

私は未だに倒れている材木座君を営業スマイルを浮かべて起こして『ある事』をお願いした。

「富良野さん、本当にいいのかい？」

動きやすいように更衣室で着ていたジャージを脱ぎ、テニスウェアに着替えてくると言っていた三浦さんをコートで待っていた時、葉山君が私の肩を叩いて話しかけた。

「うん？ 何が？」

「いや、ヒキタ二君と一緒にだし… それに優美子に強引にテニスさせられたみたいだから…」

「心配ないよ葉山君、比企谷君の足引つ張らないように頑張るよ。私はテニスが得意じゃないからお手柔らかにね」

歯切れが悪く心配そうな顔をして私に話しかけた彼に営業スマイルで返答する。

今さらになって、心配してくれるような素振りをするならあの時に三浦さんを止めてくれたら良かったのに…

それに、そもそも葉山君がテニス勝負で決めようなんて言わなければこうはならなかったんだよ？

後になって、虫のいいことをしてももう意味がないのに…

そう私が心の中で葉山君に対して毒づいていると、葉山君は私の営業スマイルに気を良くしたのか『手加減はしないけどいい勝負にしよう』とイケメンに似合う笑顔を浮かべてスポーツマンらしいセリフを私に言い自分のコートに向かった。

ドンツ！

葉山君が私に背を向けた途端、私の肩に誰かの肩がぶつけられた。

後ろを振り返るとさつきより不機嫌な顔をしたテニスウェアに着替えた三浦さんが

立っていた。

三浦さんは葉山君をちらりと見ると私に顔を近づけて耳元で囁いた。

「あんま、調子に乗ってんじゃねーし、ちよつとばかし綺麗だからって隼人に色目使ってんじゃねえよ、アンタに身の程をしつかり分からせてやるから覚悟しておきな……！」

そう言うと、私に対する当てつけのつもりなのだろうか、私の肩にもう一度自分の肩をぶつけて自分のコートに入ってしまった。

あの三浦さんの顔は見たことのある感情を含んだ顔だった。

忘れたくても忘れられない感情を含んだ顔。

あれは私が中学時代にいじめられていた時に向けられた感情だ。

おそらく三浦さんが私に向けている感情は『嫉妬』だろう。

三浦さんは葉山君に対して好意を寄せているということは私にもわかる。

彼女は日頃から葉山君に対して熱烈なアプローチをかけているが、葉山君は自分に対してそういった感情は向けてくれないのだろう。

それでいて、おそらく彼女は嫉妬深い性格だ。

『葉山君が自分以外の女子に優しくして欲しくない』と常に思っているのだろう。

だから、今、葉山君に優しくされた私に対して嫉妬の感情を向けたのだ。

それに、試合の相手に私を指名したのはこの間の教室でのことを根に持っているからだろう。

本来ならあれは、私に対して突っかかってきた三浦さんとはつきり事情を説明しなかった由比ヶ浜さんが悪く、私はとぼちりを受けただけだったのだが、三浦さんはあの後にグループの雰囲気が悪くなったのは私のせいだと認識しているのだろう。

それに、あの時に葉山君が自分じゃなくて、私を庇ったのも彼女には腹ただしいものだったのだろうね。

だからこそ、今回のテニス勝負で私を『身の程を分からせる』と言っていたくらいに叩きのめすつもりなのだろう。

おそらく彼女は『そうすれば、アイツは隼人に近づかなくなる。同時に調子に乗っ

てるアイツにこの間の仕返しをすることもできる』とでも思っているのだ。

心配しなくても私は葉山君にそんな感情は持つてないのに…

クラスの女王からのなんとも理不尽な怒りの矛先にされたことにため息をつきながら私もコートに向かった。

「HA・YA・TO!!? フウ! HA・YA・TO!!? フウ!」

葉山君たちとのテニス勝負が決まり、私たちが準備をしていると、いつのまにかテニスコートにさつきより大勢の生徒が集まっていた。

最初は葉山グループだけだったのだが、何処からか話を聞きつけた生徒が、あれよあれよという間に押し寄せてご覧の有様だ。

ここにいる生徒の大半が葉山君の友人、もしくはファンであり、2年生だけではなく1年生、3年生もちろはらと見受けられた。

ちなみに葉山君は、いつもの笑顔に戻って、自分の名前を呼ぶギャラリーの声援に手を振って応えている。

由比ヶ浜さんはアタフタと辺りを見回していて、戸塚君は心配そうに比企谷君を見つめている。

「ねえ、ヒツキーにふらのん、大丈夫なの？ 葉山君はスポーツ得意だし、優美子は中学ん時に女子テニスで県選抜に選ばれてるんだよ？」

勝負が始まる少し前、アタフタと辺りを見回していた由比ヶ浜さんが私たちに何の助言のつもりだか葉山君と三浦さんのテニスの上手さを教えてくれた。

暗に『絶対に勝てないから、三浦さんたちにテニスコートを譲ろう』とでも言っているのだろう。

まあ、女王様の侍女の彼女らしい発言だが、今更取り消すなんてできないよ。

それに、貴女に言われなくなつたって、私もまともな勝負では勝てるわけないってことは分かつてるからね。

私は由比ヶ浜さんを見殺ししてラケットを握りしめた。

試合が始まったが、私の予想通り、流れは終始、葉山・三浦ペアにあった。

最初の数プレーこそ私たちはそれなりに渡り合えたけど、三浦さんが私を狙い撃ちし始めたことにより、点差がどんどん開いていく。

それからは葉山君と三浦さんの華麗なプレイの連続。

それらの連携は見事なもので私も比企谷君もろくに対処することができずに点を取られ続けた。



比企谷君も疲れが見え始めて、肩で息をしている、私も正直キツイ。

「悪いが、引き受けたのはヒキタニ君だからな。今更手加減するつもりはないよ」  
「そうだし、なんなら今すぐ土下座する？ だったら許してあげてもいいけど？」

そう私たちに葉山君と三浦さんは言う。

特に三浦さんは嘲笑の視線と態度を隠そうともしていない。

私と比企谷君は黙ったまま試合を続ける。

そんな私たちを心配そうにコートの外から見つめる由比ヶ浜さんと戸塚君。

葉山君たちのプレイを見て沸き立つギャラリィ。

「HA・YA・TO!!？」 「HA・YA・TO!!？」

ギャラリーのHAYATOはさっきよりも激しくなっている。

おそらく、集まってきた野次馬も私と比企谷君がボロボロに負けている光景に満足しているのだろう。

この試合は既に葉山君たちの勝利ムードに入ってるしね。

どうみてもここから逆転は不可能だ、みんながそう思っているだろう。

でも、私ならここから逆転できる……

テニスコートに集まった人たちを試合に熱中させて、試合だけに集中させる雰囲気を作り出すことは出来た。

「フフツ……」

さあ、そろそろ反撃開始だ……!!?

勝つために卑劣な手段を使っても平穩を脅かされたくない。

パコーン！ キツ！

「葉山君と三浦さんペア、マッチポイント…。」

三浦さんが得点を決め、審判の戸塚君が暗い声で手を三浦さんたちの得点だと告げる。

あの後も私たちは試合を続けているが、結局は挽回はできずに、気付いたら逆転は絶望的な点差ができていた。

運動神経の良い葉山君と三浦さんのダブルスに私たちが太刀打ちできずに翻弄されるばかりだった。

「はあ… はあ…」

私は肩で息をする。

正直言つてかなりキツイ。

運動がもともと得意ではない私は激しい運動が苦手なため今立っているのがやつとだ。

隣を見ると比企谷君も結構キツそうな顔をしている。

「フン、弱すぎて話になんないわ、あんたらテニスより土下座の練習でもした方が良くじゃないの？」

「まあまあ優美子、そんな風言うなよ。俺たちが少し力加減を間違えたただけだ、だからどうか？　今回は両者が頑張ったって事で引き分けで…」

そんな私たちを見て、三浦さんがわざとらしく口元に手を当てて嘲りを含んだ笑みを私に向けた。

葉山君もそれに便乗して、2人して余裕のある態度で私たちに引き分けにしようと忠告してきた。

まあ、既に勝利ムードに酔いしれている葉山君たちがそう思うのも当然だろう、ここから正々堂々と勝負をしては貴方達に勝つことは出来ない。

集まったギャラリーからも『弱すぎだろあのペア』『葉山君たちに叩きのめされちゃえ！』と言う私たちに対する蔑みの言葉が聞こえる。

私はラケットを持つ手を下におろして営業スマイルを浮かべて三浦さんに話しかけた。

「そうかな？　いくら負けているとは言つても、逆転出来ないとは限らないよ？　ここから逆転できるかもしれないし」

「はあ？　アンタ馬鹿あ？　この状況で逆転だなんてあり得ないでしょ？」

「そうだよな、さすがに逆転なんて無理だろう」

私がそう言うと三浦さんは怪訝な顔をして片眉をあげた。

葉山君も困ったような笑顔で言う。

「最後までやらないと試合は分からないよ」

「……つち！　気に入らない…　あーそう！　せっかく隼人が引き分けにしようって言ってくれたつてのにそれを袖にするなんて本当に馬鹿だね！　じゃあこれで決めて



やるし！」

三浦さんはそう言うとボールを高く放り投げて思いっきりサーブを放った。

バツシユユユユユユユユユユユン!!

ドゴツ!!

「……………っ！」

バタン

力の限りボールを打ったのだろう、放たれたボールは風を切つて派手な音とを立てて私たちのコートに向かつてくる。

そのボールを取るためにラケットを振ろうとした時の私の腹に命中した。

ボールが当たったところから、まるで腹を刃物で刺されたように痛みが襲つて来た。

ううっ… すごく痛い。

痛み能耐えきれず思わず膝をつく。

ギャラリーからざわざわと声が上がった。

「フン、ザマアないね。あーしの言った通りさっさと土下座すれば痛い目に遭わなかったんだし、さあ、アンタらの負けなんだから、早く土下座するし！」

三浦さんは膝をついて倒れている私を見て嘲笑うかのように言った。

三浦さんの言う通りこれで葉山君と三浦さんのペアの勝利が確定した。

試合を観戦していたギャラリーも望んだ通りの結果になったのだろう、早速私たちに蔑みの言葉を投げかけた。

「見ろよ、あいつらやっぱり負けやがったぜ！」

「葉山君たちに敵うはずないのにね」

「せつかく葉山君が引き分けにしようと言つてくれたのに無駄にしちやつて馬鹿じやないの？」

ギャラリーが私たちに蔑みの視線と侮辱の言葉を投げかけてくる。

コートの外を見ると由比ヶ浜さんはあまりの事態にオロオロと辺りに視線を彷徨わせ、戸塚君は私たちから目をそらしている。

どうやら、2人とも助けてくれる気はないらしい。

「ほら、約束通りあーしらに土下座するし！ あーしが良いって言うまで顔をあげんなよー！」

「土下座！ 土下座！ 土下座！」

三浦さんの言葉に調子に乗ったギャラリーが私たちに『土下座コール』をし始めた。集団からこうされてはもう逃げる事は出来ない。

「仕方がないね、比企谷君……」

「お、おい……まさか本気でやるつもりか……」

「こうなったら仕方がないよ、あの時に葉山君の提案になって引き分けにしてあげれば良かったんだ、比企谷君の分まで私がするよ……」

三浦さんとギャラリーの圧力に押されて土下座をしようとする私に比企谷君が動揺と驚きの混じった声を出す。

私はボールが当たって痛む腹に鞭を打って立ち上がり、比企谷君に営業スマイルで微笑んで三浦さんに向き合ってこう言う。

「分かった、言う通りにするよ。でも、比企谷君の分まで私がするってことで良いかな？」

「はあ？ 何？ ここまでできてアイツのこと庇うの？ 何アンタ、もしかしてあんな目の腐ったキモい男が好きとか？ ププツ… 趣味悪っ…！」

三浦さんには私が比企谷君を庇ったように見えたらしく比企谷君に対して勝手なこゝとまで言い出した。

「何？ あの女子ってあの腐り目のキモ男の事が好きなわけ？」

「オエツ… 気持ち悪…！」

ギャラリーからはさつきより蔑みと視線と侮辱の言葉が飛んでくる。

三浦さんは『早くやれし！』とテニスコートに足を踏みならして土下座の催促をした。

「土下座！ 土下座！ 土下座！」

それに倣うようにギヤラリーからはさつきより激しい土下座コールが飛んできた。

そして、私が膝をついたその時…

「ちよつと！ あなたたち何をしているの!?？」

テニススコートの外からよく通る女性の声が聞こえてきた。

全員が声のした方を見ると、そこには数人の教師が立っていた。

さっきの声を発したのは一番前にいた綺麗な教師のようだ。

確かあの人は鶴見先生だ。

鶴見先生は腹を抑えて膝をついて土下座のポーズをとりかけている私を見ると目を見開いた。

鶴見先生と共にいる他の教師たちも驚きに満ちた顔をしている。

「こ、これは、一体どういうことですか!?? 何で女子生徒に土下座なんてさせているんですか!??」

「つ、鶴見先生!?? ち、違うんです! これは…」



土下座の体制の私に驚愕しながらこの状況の説明を求める鶴見先生。

葉山君は顔を青くして慌てたように弁明を始めるが追求の手は緩まなかった。

「それに富良野さんはお腹を抑えて蹲っているじゃないですか！」

鶴見先生が『大丈夫ですか!?』と言って未だに蹲っている私に駆け寄った。

「お、お腹に三浦さんの打ったボールが当たって……」

「ええっ!??!」

鶴見先生がそれを聞いてがばつと私の来ていた体操着を他の人に見えないように持ち上げた、見ると内出血を起こしているのだろうか、当たった部分が青く染まっていた。

他の教師もそれを見てただ事じゃないということに気づき、私をテニスコートの近くのベンチに連れて行って座らした。

その後、養護教師が持ってきてくれた氷の入った袋で傷口を冷やして応急処置をす

る。

その後、少し私が落ち着くと私がどうして土下座のポーズを取っていたのか理由を聞いた。

私は最初から最後まで包み隠さずに本当の事を話した、もちろん試合前に三浦さんにされた事もすべて。

鶴見先生はそれを聞くと他の教師に私を任せて再びテニスコートに戻っていった。

「話は全て聞いたわ、三浦さん。あなたは試合前に富良野さんに『テニスで身の程を分からせる』等の恐喝まがいのことを言ったそうね、もしかして貴女は富良野さんにわざとボールをぶつけたんじゃないかしら？ そうだとすればこれは立派な暴力行為よ」

鶴見先生がそう言うのと全員が三浦さんに疑惑の視線を向けた。

「き、恐喝なんてしてないし！ それにあれはわざとじゃないよ！ あーしのボールを富良野が打ち損ねて勝手に当たったんだし！」

三浦さんは鶴見先生から『恐喝まがいのことをした』『故意に当たったのでしよう』と言われたことで向けられた疑惑の視線を振り払うように慌てて弁明し始めた。

そして、わざとしたんじゃない、当たったのではなく当たったのだということの説明するが、鶴見先生はそれを信用しなかった。

そしてさらに追求する。

「そして貴女はテニスの勝負で『自分たちに負けたら土下座』という約束を強引に取り付けて、試合に負けた富良野さんたちに土下座を周りで見ていた人たちと一緒に強要していたわね？」

「そ、それは……」

これには流石の三浦さんもおし黙る、『試合に負けたら土下座をしろ』と言ったのは事実だし、試合に負けた私たちにギャラリーと一緒になって土下座を強要したのも事実だ。

教師からの追求にギャラリーもこの自分たちの置かれている立場が不味いかもしいないと察したのか、自分たちも巻き込まれることは回避したいらしくこの場を去ろうとし始めた。

でも、こんな状況でそんな事は許されるはずがない。

「ちよつと待ちなさい、何逃げようとしているの？ あなた達にも聞きたいことがあるのよ」

逃げようとしていたギャラリーは鶴見先生と一緒にいた他の教師から逃げようとしていたところを見つかりこの場に止まるように言われる。

こうなつてしまえば逃げるができない。

逃げることができなくなったギャラリーが再び騒ぎ始めた。

「ねえ、三浦さんの主張って何か言い訳っぽくない？ あたしこの前、教室で三浦さんが相手の富良野さんの事を酷く悪く言つてたの見たんだけど…」

……そう言ったのは誰だろうか、その発言が聞こえるとギヤラリーは一気に三浦さんに視線を向けた。

当然、好意的な視線は一つもなく、それらの視線は『疑惑』や『悪意』のこもったマインスな感情を含むものだった。

三浦さんの主張が言い訳じみたものと疑い始めたのか、それともその事実に対する驚きだろうか。

……いや、恐らくその両方だろう。

ギヤラリーからの負の感情を含む視線に晒されて、三浦さんの顔から一気に血の気が引いた。

さすがの三浦さんも自分が置かれている立場がだんだん悪くなっていくということくらいは察しているらしく冷や汗を流している。

そうしている内に、またギャラリーが騒ぎ始めた。

「ねえ、もしかして本当に三浦さんってわざと当てたんじゃない……？」

「だよね、三浦さんならありえるよね、そうだとしたら富良野さん可哀想……」

「いくらなんでも怪しすぎるよな……」

テニスコートを囲むギャラリーからの不信感を含んだ発言がいくつも聞こえた。

その発言のどれもが三浦優美子に対する不信感を含んでいた。

それらは周囲に感染するようにどんどん広まっていき、あつという間にテニスコートは三浦さんに対する不信感に包まれた。

ギヤラリーからの容赦ない非難の嵐に三浦さんは狼狽え、葉山君に助けを求める視線を向けている。

葉山君は勢いに押されて押し黙っておりどうしたら良いのか分からないのか右往左往している。

最早、これは最悪の状況だ。

三浦さんは鶴見先生ら教師の登場に自分が富良野に怪我をさせたと言う疑いをかけられたことに動揺し、三浦さんの隣にいた葉山君はこの事態に対処できずに右往左往するだけ。



「この馬鹿騒ぎはどうしたのかしら？」

その時、救急箱を手に持った雪ノ下さんが現れた。

なるほど、さつきいなくなったのは怪我をした戸塚君のために救急箱を取りに行っていたのか。

雪ノ下さんの登場に由比ヶ浜さんは泣きつくように縋り付きこの状況を説明した。

由比ヶ浜さんは雪ノ下さんに『この状況をなんとかしてくれ』と助けを求めている。

「全くどうしたらこんな事態に陥るのかしら？ 呆れて何も言えないわね…」

「そ、それでゆきのんどうしたら良いのかなあ？」

雪ノ下さんは事情を聞くなり呆れた眼差しを由比ヶ浜さんに向けた。

助けを求める由比ヶ浜さんを一瞥するとテニスコートにいる全員を見回してよく通る声でこう言った。

「決まってるじゃない、聞いた話だどう考えてもあちらが悪いんだから、ここにきてくださっている教師の方々にありのままを話すのよ」

雪ノ下さんはこのまま鶴見先生ありのままを話すという提案を出した。  
いかにも正論だけを盾に話す彼女らしい提案だ。

「本当にそれしかないの？ ゆきのん… このままじゃ…」

「…仕方ないじゃない、こうなれば先生方の判断に任せるしかないわよ」

はあ、やっとその結論に行き着いたか…

私は痛む腹を抑えながら心中で呟いた。

既にこの問題は学生だけで解決出来るような問題じゃなくなっている。

教師の介入が必要だ、でも教師が介入すればこの問題は間違いなく大事になる。

それだけは、この場にいる全員が避けたい事だ。

「ま、待ってください！ 鶴見先生！ 優美子は本当にわざとしたわけじゃなかったんです！」

「隼人……！」

その時、今まで黙っていた葉山君が三浦さんを庇うように前に出たて駆けつけた教師に『故意にやったんじゃない』と言い出した。

自分が好意を寄せている葉山君が自分を庇ってくれたことに思わず三浦さんは喜びを顔に浮かばせる。

必死に三浦さんの無実を説明する葉山君だが鶴見先生は冷めた視線を彼に返すただだった。

「悪いけど葉山君、故意にやったんじゃないというのは信用できないわ……」

「な！ 何故ですか!?!?」

鶴見先生の言葉に葉山君は目を見開いて驚いたが、鶴見先生は冷静な口調で言葉をつなぐ。

「だって、三浦さんは富良野さんにボールを当てても、平然としていたし土下座を強要していたじゃない」

「……あ」

「それは見過ごせないわ、試合に負けたらこんな大勢の前で土下座を強要させるだなんて… それにさつきも言ったけど、彼女は相手にボールをぶつけても駆け寄ることもしなかったし、平然としていたでしょ？ 悪いけど信用できないわ…」

「そ、そんな……」

葉山君の声が震えている、確かにそうだ。

故意にしたのではないのなら、ボールが当たって蹲るほどの場合は介抱するとまではいなくても、『大丈夫？』だのの状態確認はするのが普通だ。

でも、三浦さんは状態確認をするどころか、蹲った私を嘲笑い、その後も不快な言葉を吐いて私や比企谷君を罵倒し、挙げ句の果てにはこんな大勢の前で土下座まで強要したのだ。

こんな状況でそれを信じろと言う方が無理がある。

仮に故意にボールを当てて怪我をさせたわけじゃないという事が信用されても、試合に負けたくらいで土下座まで強要したということは見過ごせる事態ではないだろう。

反論する言葉を必死で模索している様子の葉山君にさらに鶴見先生は畳み掛ける。

「どっちみち、このテニス勝負は報告させてもらうわ、さっきも言ったけど、この試合の映像を撮影していた生徒がいてね、その生徒の報告と映像によつて試合中何が起こっていたのかも全部分かっているのよ、ただで済むなんて思わない方が良いわね」

鶴見先生がそう言うと、葉山君は顔面蒼白になっていた。

その横にいる三浦さんは地面に頭を抑えて蹲っている。

あれだけ囃し立てていたギャラリーも今は水を打ったように静まり返り、『ヤバイぞ……!』や『どうすんのよ……!』などと動揺の声がチラホラ聞こえている。

彼らはこの後が怖いのだろう。

テニスの試合に負けたくらいでこんな大勢の前で面白半分とはいえ一緒に下座を強要させたのだから。

遊びでテニス観戦をしていたらこんな最悪な展開になってしまったのだから……

流石に葉山君にもそれは分かっているのだろう、三浦さんを庇い立てていた葉山君もそれ以上は何も言わなかった。

その後、騒ぎを聞きつけて他の野次馬もテニスコートに集まつて来た。

その中には平塚先生の姿もあつた。

当初は生徒の自主性を育てるためと私たちに任せていたらしいが、鶴見先生が『テニスコートで女子生徒が暴行事件を起こした』と知るとすぐに対応してくれた。

テニスコートを囲んで『土下座コール』をしていた生徒たちにも罪があるため、聞きたいことがあるということになり、奉仕部と戸塚君を除いたコートにいた全員が連行されていった。



ふふっ、まさかここまで上手いくとはね……

「  
」

その時、テニスコートの隅に置いてあつたカバンから音が聞こえた。  
これは私の携帯のメールの着信音だ。

画面を見るとそこにはこう表示してある。

『材木座義輝』と…

メールの内容を見て思わず顔がほころぶ。

「ふふっ……」

作戦が上手くいった喜びか思わず笑みがこぼれた。

「……………」

でも、私は気づかなかつた。

それを不信感を含んだ目で見ている人物に…

―富良野英理華 side end―

―比企谷八幡 side―

「ふふっ……」

携帯のメールの着信音が鳴り、メールを見ている目の前の女子生徒の富良野英理華。彼女はそのメールを見て笑っていた。

俺たちの前でしたような綺麗な笑顔ではなく、ミステリー系のドラマの犯人がするような冷たい笑顔だった。

悪事を成し遂げてニヤリと笑う顔、俺が見た彼女の笑顔はまさにそんなもの。

その笑顔から俺は目を離せなかった。  
と言つても、綺麗だったからとか魅力があつたからとかいうプラスの感情だからではない。

俺がああ笑顔に抱いた感情は……

『恐怖』

だからだ。

長年ボツチの俺は人の悪意に敏感だ、虐められていた中学時代にも悪意のある表情に恐怖を抱いたことはある。

でも、富良野のあの笑顔はそんな類のものじゃない。

あいつのあの笑顔は虐めをしている奴らがしているような生半可な悪意のある笑顔じゃない。

強いて言うなら悪意の塊のような、材木座に倣って言うなら『悪魔のような笑顔』だったからだ。

俺と同じように、その笑顔を見た者の背筋を凍らせるほどの冷たい笑顔、それを富良野はしていた。

でも、俺はこれこそが富良野の本当の顔なんじゃないのかと思う。

もしかして、富良野は俺や雪ノ下たちと違って常に仮面を顔に貼り付けているのではないだろうか。

常に他人に合わせて自分の本心を本物のような作り物の笑顔で覆い隠して毎日を通

ごしているのではないだろうか。

誰にも本心を明かさずに偽りの自分を演じているのではないだろうか。

「……………」

何故か背中に嫌な悪寒が走った。

もしそれが真実だとしたら、この富良野という奴はとんでもない爆弾を隠している女子かもしれない。

あの悪意の塊のような笑顔の裏にはどんな感情が隠されていたのだろうか。

そう思ったら、さっきのテニスコートの事件もコイツが起こしたのではないかと思えてくる。

……いや、まさかな…。

さすがにそれはないだろう。

漫画じやあるまいし、あんな事が出来るなんて…  
自分も痛い思いをしているんだぞ？

さすがにあり得ないだろう……？

俺は首を振って自分の考えをかき消した。

↓比企谷八幡 side end ↓



―富良野英理華 side―

材木座君から送られてきたメールには私の怪我を心配する文面と作戦が上手くいった事が書かれていた。

試合が始まる少し前、倒れていた材木座君を起こして営業スマイルを浮かべながら彼にこう頼んだのだ。

『材木座君、この試合をムービーでこっそり撮って試合が終わったら、すぐに近くにいる教師にこの事をムービーと一緒に報告してもらえる?』

普通なら変に思われるだろうけど、私には彼なら断らないだろうと確信があつて頼んだ。

見た目や性格から女に縁がないであろう彼なら、この間の依頼の件で信頼を勝ち得て

いるのもあって、私からの頼みでも断らないだろうしね。

予想通り、彼は私にそう言われて彼は二つ返事で引き受けた。  
そうすれば、もうこちらのものだった。

この計画の全貌はこうだ。

実は、あの時に私は三浦さんの放ったスマッシュにわざと当たったのだ。

だから、葉山君の引き分けの提案も無視して試合を続行させ、わざと三浦さんの気に入らない事を言つて彼女を怒らせて本気のサーブを放たさせた。

痛かつたのは本当だったが、これで三浦さんを追い詰める材料が出揃つた。

後は試合が終わつてギャラリーや三浦さんに囁し立てられている中で時間を稼いで、

材木座君の呼んでくれた教師がテニスコートに来るのを待っていれば良い。

そうすれば、テニスコートで土下座を強要されながら腹を抑えて蹲っている私を見れば、教師は何があつたのかを絶対に私に聞く。

そうなれば、私が事のあらましを説明すればその場の流れは完全に私たちの方に向く。

そして、私が試合前に三浦さんにされた事を言えば、その場の状況からわざと私にボールを当てたと勘違いさせることが出来る。

後は放っておいてもギャラリーや三浦さんたちが勝手に話をややこしくしてくれるから、戸塚君の依頼は邪魔されずに済むし、同時に私に理不尽に怒りを向けていた三浦さんに仕返しをすることも出来るというわけだ。

我ながら上手くいったと思う。

私は戸塚君の方を向いていつもの営業スマイルを浮かべて話しかける。

「戸塚君、今なら練習が再開出来るんじゃない？でも、足を怪我しているなら無理しないでね」

「う、うん、ありがとう。富良野さんこそお腹は大丈夫？」

「大丈夫だよ、痛みも引いてきたし心配しないで、それより練習再開した方が良いんじゃない？」

「うん… そうだね… でも大丈夫かなあ… 三浦さんたち…」

戸塚君は三浦さんに対して心配そうに言うのを比企谷君が『気にするな』と言ってないだめ。

戸塚君はどうやら三浦さんをあそこまで追い詰めた事に罪悪感を感じているみたいだ。

でも、何で貴方がそれを感じる必要があるの？

貴方はあの時何もしなかったじゃない。

そもそもテニスコートに三浦さんが乱入して来た時に、貴方が三浦さんにもっと強く

言い返していればこんな事にはならなかったしね。

自分からテニス部を強くしたいと依頼しておきながら自分よりクラスで自分より立場が上の人が来ると、それを忘れて縮こまる。

あの時の戸塚君は情けないっつらありやしなかった。

それに言い返せなくても、私がしようとしていたように教師を呼びに行くなり怪我をしても出来たはず。

戸塚君がしていたことといえば、馬鹿みたいにオロオロしながら試合を私たちに丸投げしたことぐらいでしょう。

私が怪我をした時も貴方は何もせずにおろおろしてただけだったからね。

そんな貴方が何を今更になつて綺麗事を言っているのやら……

それに、こう言ったらなんだけど、私は戸塚君のこの依頼そのものが無駄だと思う。

何故なら、戸塚君が頑張つて実力をつければ、本当にテニス部員がやる気になつてくれると思えないからだ。

私は戸塚君の理想通りになることはほぼあり得ないと思つている。

ただでさえ弱く、全体のモチベーションも低い中で、戸塚君一人が努力して、みんなを引っ張つて1つにまとめあげ、部活を強くしていく。

そんな青春ドラマなんかであるような展開は現実では殆ど起こり得ない。

青春ドラマが面白いのは、そこで起こる出来事

が、私たちが現実でほとんど味わえないからだ。

例えば、ドラマとかでよくある、主人公が頑張っているからみんながそれについていかなんて展開は非現実的にもほどがある。

戸塚君の望むことに至ってはまさにそうだ。

戸塚君1人が努力して頑張ったところで他の部員も戸塚君に倣って強くなろうと思うとは限らない。

寧ろ1人だけ真剣にやっているのを疎ましく思うかもしれない。

そうなたら全くの逆効果だ。

まあ、本当に部員たちがやる気になってくれるかもしれないけど、そうなる可能性はかなり低いだろうね。



でもまあ、戸塚君が三浦さんに対して罪悪感を抱くのも少しだけなら領ける。

確かに、私もさっきの三浦さんの反応を見る限りではやりすぎた面はある。

でも、私には戸塚君とは違って罪悪感はない。

どう考えてもあの試合は私たちが正々堂々とプレイしたところで葉山君たちに勝てるわけがない。

私は何もしなければ、私と比企谷君は問答無用で土下座を強要されてテニスコートは葉山君たちに占領されてしまっていただろう。

冗談じゃない。あなたたちの身勝手な行動で、こんな事で私は平穩を脅かされたくない。

だから、三浦さんには痛い目にあってもらったのだ。

恨むなら身勝手な理由で軽はずみな行動をした自分自身のことを恨むんだね。

私は怪我をさせられた被害者だ。  
私に全く非はないのだから。

私はそう思いながら痛む腹を抑えながら、  
手当てをしに保健室へ向かった。

―翌日―

昨日は本当に寝苦しかった：

三浦さんから受けたボールによりできた青タンが一晩中ズキズキ痛くて眠れなかったのだ。

保健室で消毒と大きな絆創膏を貼ってもらい、こつそり家の冷蔵庫で氷を作って袋に入れて痛みを引かせていたが、それでもなかなか痛みは引かなかった。

そのため今日は寝不足だ、昨日より痛みは幾分かマシになったのは良かったが、その分睡眠不足でフラフラする。

私が教室に入ると教室内が異様なほどに騒がしかった。

何があったのか状況を掴めずにいると、いきなり緊急集会が開かれて、生徒たちは体育館に集められた。

緊急集会では、やはり昨日の三浦さんの暴行事件のことだった。

三浦さんは最後まで『あれはわざとじゃない！ 事故だった！』と主張していたそうだけど、証拠の映像があり、その後の罵詈雑言も録画されているため、三浦さんの主張を信じる人は居なかった。

さらにテニスコートに集まって『土下座コール』をしていた野次馬の何人かが自分たちの罪を少しでも軽くするためか『三浦たちは戸塚たちが練習していた時にテニスコートを横取りしようとしていたんだ！』と言い始めたのだ。

それは三浦さんのテニスウェア目当てで集まっていた男子たちだったそうで、彼らは最初から見ていたから事のあらましを全て知っていたのだ。

つまり、三浦さんたちがテニスコートの使用の許可を取らずにテニスコートで遊ぼうとしていたということがバレてしまったのだ。

すぐに確認がとられ本当だと言うことが判明したため、三浦さんはさらに立場を失ってしまった。

もう三浦さんの味方はいなかった。

こうなると学校側も何らかの処分を下さなければならぬ。

結局、土下座コールをしていた生徒たちは人数が多かったということもあり、悪ふざけとして判断され嚴重注意というだけで済んだ。

騒ぎのきつかけとなった三浦さんを除いた葉山グループは全員が反省文と部活に所

属している者は1週間の部停の処罰が下された。

そして、今回の騒動の主犯である三浦さんの主張は言い訳として受け取られ、彼女は暴行事件を起こしたとみなされ2週間の停学を言い渡された。

事態のあらましを校長からオブラートに包んで説明され、『今一度生徒諸君は自由と勝手は違うことと慎みを持ち規律を遵守することを心がけるように』との、毒にも薬にもならないありがたいお話を聞いて解散になった。

本来ならこれで事態は解決するのだが、三浦さんが停学中の教室では彼女に対する罵詈雑言が飛び交っていた。

今までの彼女の傲慢で傍若無人な態度に不満を持っていた者は多かれ少なかれいたのだらう、

これは、停学が明けても彼女には災難が待ってそうだ。

私は他人事のように心中でそう呟いた。

「あ、あのさあ… 結衣、姫菜…」

「な、なに？」

「……………ご、ごめん、悪いけど、また今度ねえ…」

2週間後の休み時間、仲良く話し合っていた由比ヶ浜さんと海老名さんのところに三浦さんが近づくと、海老名さんはぎこちなく微笑み、由比ヶ浜さんは三浦さんからそそくさと離れていく。

あの日以来、トップカーस्टのグループには大きな亀裂ができてしまっていた。

グループの誰もが三浦さんと一線を引いて距離をとっており、由比ヶ浜さんだけでなく、葉山君たちも三浦さんを避けるようになっていた。

その原因は間違いなく先日のテニスコートの事件にあった。

三浦さんの後先を考えなかった行動のせいでグループの人たちまで巻き込んでいたからね。

私の見ている限りでは、停学が明けても三浦さんはグループの人たちに謝罪する様子はなかった。

その2週間という長い時間は彼女達の心を三浦さんから離すのに十分な時間だった。

まるで普段から自分たちをそんな風に思っていたのかと疑いだし、自分たちのことを友達だとも思っていなかったんじゃないかと思いはじめたんだろう。

そのため、2人は三浦さんのことを信じられなくなり、前のような関係にも戻れなくなってしまうのだ。

さらに、葉山君たちも三浦さんに対して塩対応になり始めた。

なんでも葉山君も入れた4人は部活にそれぞれ所属しているらしい。

クラスメイトが話しているのを聞いた話だと、その部活の顧問に騒ぎを起こしたきっかけが自分たちだということがバレて嚴重注意をしかれたのだ。

彼らは一応部活のレギュラーらしいから、それを得るためにかなり苦労したはずだ。

それなのにこんな事で今までの努力が水の泡になったら全てが台無しだ。

だから、彼らはトラブルの火種になる三浦さんと関わりを断ったのだ。

そのため葉山グループの中で三浦さんは完全に孤立した。



彼らは三浦さんのいないところでは元のように騒いでいるが、三浦さんがそれに加わろうとするとたちまち騒ぐのをやめて静かにしている。

おそらく彼らは三浦さんに『このグループから出て行け!』と暗に言っているのだらう。

でも、だからって私は彼女に同情はしない。

彼女はいつかこうなる運命だったんだと思う。

おそらく今回のことはただのキツカケに過ぎなかったのだ。

私の知っている限りだけど、彼女はこの間の由比ヶ浜さんが雪ノ下さんとご飯を食べようとしていただけで、三浦さんに激しく責められていたからね。

あの時ははつきりしない態度をとり続けていた由比ヶ浜さんにも非はあるけど、それ

以上にあそこまで高圧的な態度で責められるいわれはなかったはずだ。

あの時でも思ったけど、三浦優美子という人間はわがままで自己中心の自分が何より可愛い人間。

それに加えて自分につき従わない者は嫌という独裁者のような性格。

おそらく今回の事も自分が悪くないと心のどこかで思っていて、自分が『友達』だと思っているグループの人たちが味方になってくれると思っていたのだろう。

だから、由比ヶ浜さんたちに謝らなかつた、彼女たちがいつも自分の思うがままに動いて自分に従っていたから。

でも、彼女たちもいつまでも傲慢な女王様のわがままに付き合うほど馬鹿じゃない。

そのため、今回の件でとうとうグループの人たちが三浦さんに愛想を尽かした。

つまり彼女は流れが変わった途端にあっさり切り捨てられたのだ。

城を追い出され、1人になった女王様には何の権力もないため以前のような振る舞いをするにはできない。

日ごろの態度から誰もクラスのみんなは彼女に手を差し伸べない。

いわば、こうなったのは彼女の自業自得だ。

どこに同情の余地があるの？

それに、そもそも三浦さんが『テニスコートで遊びたい』なんてわがままを言わなければこんな事にはならなかったのだ。

しかも、そのせいで私の平穩が乱されそうになったのだ。

私の平穩を脅かしたのだからその人たちがどうなろうと知ったことか。

以前のような元気がなくなり、ポツンと教室で一人寂しく椅子に座っている彼女を見て、いい気味だと私は心中で彼女を嘲笑った。

それから数日後、相模という女子が葉山君のグループに加わり、三浦さんの後釜に座った。

悪質なチェーンメールに平穩を脅かされたくない。

私にとって『平穩』というものは何物にも変えがたい大切にしたいもの。

戸塚君の依頼が終わり、三浦さんがいなくなったことでしばらくは平穩に過ごせていた。

そのため私は油断してしまっただろう、奉仕部に入部してから平穩な時間を過ごすことが出来なくなってしまうため、久しぶりに平穩を取り戻せたということが。

でも、現実はその甘くはない。

故人がよく言っていた『災いは忘れた頃にやって来る』という言葉があるように、私が油断してきた時に次の厄介事が持ち込まれてきたのだ。

しかも、その依頼主はこの間のテニススコートの一件により、女王様から平民に成り下がった女子のそばにいつも寄り添っていた王子様だった。

今回の厄介事はその王子様による依頼である。

「ひま〜…」

葉山グループとの騒動からしばらく経ち、奉仕部は戸塚君の依頼を完了して、いつもの部室で過ごす日常となっていた。

私は勉強、雪ノ下さんと比企谷君は読書、由比ヶ浜さんはだらしなく椅子に座ってポーツしているという静かな空間が広がっており、勉強する空間にはうってつけだ。

だが、そんな快適な空間を由比ヶ浜さんの間延びした声が壊した。

まあ、確かに暇なのは領ける。依頼が来なければ私たちはすることがないからね。

それにしても、由比ヶ浜さんはあのテニススコートの事件の後も何ともなく過ごせていることに驚いた。

あのテニススコートでの暴行事件の後、葉山グループのメンバーは三浦さんを見捨てる形で切り捨てた。

この間も思ったけど、今の彼女と一緒にいることは葉山グループのメンバーにはデメリットにしかならないからだ。

クラスでの権力を失い、トップカーストという城から追い出された女王様は今は今クラスでポツンと1人でいる。

正確に言えば、停学が明けてからも彼女は最初はいつも通りにグループの人たちに親しげに話しかけていたのだが、グループのメンバーは彼女と関わるのはデメリットが大きいことを分かっているため、彼女に対して塩対応になっていた。

さらに、日頃の傲慢な振る舞いから誰も彼女に手を差し伸べようとせず、グループの



メンバーでさえも彼女に話しかけることがなくなり、今ではクラスメイトからの陰口や罵倒などの嫌がらせも受けるようになっていた。

葉山君だけは、停学明けにみんなからボロクソ言われる三浦さんのフォローに回っていたこともあったけど、それもろくに意味をなさずに終わり、結局葉山君も三浦さんをクラスの雰囲気の流れされて切り捨てるしかなかったのだろう。

それから葉山グループには相模というクラスで2番めくらいのグループに属していた女子が三浦さんの後釜に座る形に入り、今は葉山グループはこの間のことなんて何もなかったかのように過ごしている。

彼らがギクシャクしていたのは三浦さんがグループにいる時までだった、故に三浦さんがいなくなった途端にギクシャクした様子はなくなったのだ。

ね…  
まあ、諸悪の根源がいなくなっただけで元通りなんて、何とも都合のいいグループだね…

そう私が心中で由比ヶ浜さんに毒づいていると、雪ノ下さんが口を開いた。

「暇なら勉強でもしたら？ 中間試験まであまり時間がないんだし」

「勉強なんて意味なくない？ 社会に出たら使わないし…」

優雅に読書をする雪ノ下さんに由比ヶ浜さんが勉強はやる意味がないと言い返す。

なんともまあ、貴女が言いそうな『馬鹿の常套句』だね。

「勉強なんて意味ないってば！ 高校生活なんて短いし、そういうのにかけてる時間もつたないじゃん！ 人生一度きりしかないんだよ？」

そう熱く語る由比ヶ浜さんに私は冷めた目を送る。

クラスの中のリア充の一員である彼女らしい言葉だけど、それらは奉仕部の2人によって切り返される。

「そういうことを言うやつに限って後悔する嵌めになるんだよ。『ああ、あの時もつと勉強していればこんなことにならなかつたかもしれないのに』とかつて」

「で、でもでも！そんな先の事考えたつてしようがないじゃん！今を一生懸命、楽しく生きようよ！」

「だからこそ今、一生懸命勉強するのではなくて？」

「うわーん、ゆきのんとヒツキーがいじめるー！ ふらのん、助けてー！」

由比ヶ浜さんは、自分のふざけた発言に対して正論で雪ノ下さんたちに言い返されたことに、泣き真似をしながら私に抱きついた。

そんな由比ヶ浜さんに私は密かに冷めた視線を送る。

貴女と違ってこっちは真剣に勉強してるんだ、鬱陶しい邪魔な茶番は貴女たちだけでやってほしい。

私はイライラする気持ちを心の奥底に引っ込めて、いつもの営業スマイルを顔に貼り付けて由比ヶ浜さんの話に適当に相槌をうち、彼女を自分から引き剥がした。

それからまた暫くたち、私を除いた奉仕部の3人は互いの進路について話し合い始めた。

と言つても私はあの人たちの輪の中には入れてもらえてないので、1人で黙々と勉強

に励んでいるのだけれどね。

そうしているうちに下校時刻になり今日の部活は終了した。

翌日の放課後、私が奉仕部の部室に到着すると由比ヶ浜さんと比企谷君が何やら言い争っていた。

「あら富良野さん、こんにちは」

「こんにちは、雪ノ下さん。比企谷君たち言い争っているけどどうしたの?」

私がそう尋ねると雪ノ下さんはため息をついて説明した。

「どうやら由比ヶ浜さんは比企谷君と一緒に部室へ向かいたかったそうで探していたらしいが、比企谷君は既に部室に到着しており、今後入れ違いがないようにメアドを交

換して連絡し合おう的なことになったそうさ。

いかにもリア充の彼女らしい考え方だな。

「あつ！ そうだ！ ぶらのんも私と交換しようよ！」

比企谷君とメアドを交換した由比ヶ浜さんが今度は私のメアド交換を申し出る。

「ごめんね、私はメールはしないんだ、電話番号なら良いよ」

「ええっ!!? そうなの!!?」

由比ヶ浜さんにいつもの営業スマイルを顔に貼り付けてそう言うとき由比ヶ浜さんは大げさに驚いた顔をした。

まあ、確かに今時の高校生が携帯のLINEもメールもしないなんて驚くだろう。

ましてやそれがメールやLINEを使う頻度の多そうな由比ヶ浜さんなら尚更のことね。

でも、私の持っているこの携帯は型落ちの古いタイプのガラケーだ。

義父に連絡用のためだけに買ってもらったガラケーなので余計なオプションはついてないし、私自身も要件は電話で相手に伝えるため、メールは全くと言っていいほど使わない。

だからといって由比ヶ浜さんの申し出を断れる雰囲気ではないので電話番号くらいなら教えてあげるよ。

私の携帯に由比ヶ浜さんの携帯番号を登録し、由比ヶ浜さんにも私の携帯番号を教える。

これで、私の携帯の連絡先の項目に由比ヶ浜さんの名前が追加された。

といっても私の携帯に登録されているのは義父母と信頼のただけだね…

この間の材木座君のはすぐに消した、彼と付き合い合ってもメリットはないだろうし、私も彼とはそんなに長い付き合いはしたくない。

私の電話番号を登録した後もキャンキャンとうるさく騒いでいる由比ヶ浜さんを煩

わしく思いながらも私はいつも通りルーズリーフと教科書を机に広げて勉強を始めた。

ーピロン……！

話を終えて数分後、ピロンと着信音のような音がする。

どうやら由比ヶ浜さんの携帯からのようで、私や比企谷君が彼女に視線を移すと、由比ヶ浜さんは曖昧な笑みを浮かべて、うつすらと誰にも聞こえないような、けれども深い溜息を吐いていた。

「どにかしたの？」

彼女のため息が聞こえていたのか、雪ノ下さんが声をかける。

「あ、うん……何でもない、んだけど。ちよつと変なメールが来たから、うわつて思っただけ」

「比企谷くん、裁判沙汰ざたになりたくなくなかったら今後そう言う卑猥なメールを送るのは止めなさい」

「なら訴えてみろよ、証拠もないのに訴えたら確実に負けるぞ。」

雪ノ下さんの根拠のない乱暴な物言いに比企谷君が反論する。

雪ノ下さんの頭の中は問題事Ⅱ比企谷君の仕業という方程式でも組み込まれているのだろうか？

「清々すがすがしい程のクズね。由比ヶ浜さん、今すぐ着信拒否することをお勧めするわ。でないと貴女あなた大変な事になるわよ?」



「いやー。ヒッキーは犯人じゃないと思うよ？内容がうちのクラスの事だし」

比企谷君の反論に早速雪ノ下さんが比企谷君をdisり始めた。

相変わらず口も悪いし、本人は事実を言っているだけだから何も悪くないと思ってるんだろうけど、相手のことを何も思いやれない物言いだね、こんな人が部長だなんてこの部活も末だな。

でもまあ、由比ヶ浜さんの言う通り、比企谷君は犯人じゃないだろうね、彼はぼっちで友人もないし。

あ、そういうえば、比企谷君は先日のテニスコートの依頼人である戸塚君と仲良く話すようになつてたっけ。

でもまあ、戸塚君と話している時の比企谷君はニヤニヤ薄気味悪い笑顔を浮かべていたけどね…

にしても、比企谷君は戸塚君のことを『天使だ…』とかうわ言のように言つてたけど、彼のどこが天使なのだろう。

私が彼に関わつたのは先日のテニスコートの一件だけだから、そんなに接点があるわけじゃないけど、私から見た戸塚彩加という人は『自分の意見をはっきり言えない、言っ

たことに責任を持ってない臆病者』だけどね。

先日のテニスコート時の依頼主は自分なのに、ちよつと問題が起きれば自分は何もせずオロオロとみつともなくコートの外で右往左往するだけで、面倒な問題事の解決は私たちに丸投げして、最後にいかにも心配してましたよという風に振る舞う『要領の低い卑怯者』ともとれるけど。

まあ、彼の捻くれてて卑怯者のような生活から相性は良いんじゃない？

なんて、こんなの考えてもしょうがないな…

私がそう考えている間にも雪ノ下さんの比企谷君への*d i s r i*は激しくなっていたが、比企谷君の『クラスメイトだけでなく、家族以外にもこんなメールを送る相手はいない』という何とも彼らしい卑屈な物言いのおかげで彼の潔白が証明された。

「そう、なら比企谷くんは犯人ではないわね」

そして、比企谷君の発言を聞いて雪ノ下さんのこの一言により、彼女も比企谷君の潔白を認めた。

……ちなみに、私もその怪しげなメールの犯人じゃないよ。

私はクラスメイトにもクラスの雰囲気にも興味はないし、もつと言えば自分以外に興味はない。

そんな私にクラスの内情に関するメールを送れるはずがないし、送る動機もない。

私は平穩に過ごしたい、だから、トラブルの火種になりそうな、そんな下らない怪しげなメールを送る暇があるのなら将来のために勉強していた方が合理的だ。

ーコンコン……!

そうこう言っているうちに陽が傾いて、そろそろ今日の部活も終了しようとしていた時、部室の扉をノックする音がした。

ノックをするということは平塚先生ではないね。

私が入部して後も何度か平塚先生はこの部室に訪れていたけど、ノックをしたことは一度もなかったから。

だから、おそらく依頼人だな。

でも、こんな時間に依頼だなんて誰だろう。

「どつどつ」

雪ノ下さんが返事をして部室の扉が開く。

「ーガチャ…！」

「お邪魔します」

イケメンによく似合う爽やかな笑顔とともに入って来たのは、クラスの王子様である葉山隼人君だった。

「こんな時間に悪い。ちょっと相談があつてさ」

葉山君はエナメルバッグを床に置くと、軽く断りを入れて雪ノ下さんの正面の椅子に座る。

その際、ちらりと比企谷君を見て、その後、比企谷君の隣にいた私が視界に入ったのか、顔を引きつらせたけど、すぐに雪ノ下さんに向き直った。

「いやー、なかなか部活から抜けさせて貰もらえなくて。試験前は部活休みにメニューをこなしておきたかつ」「能書きは良いわ」……た……」

優しい笑顔で快活に葉山君が話し始めるのを、途中でバツサリと遮る雪ノ下さん。その雰囲気は普段よりも刺々しいように感じる。

「何か用があるから此処ここへ来たのでしょうか？葉山隼人くん」

氷のような冷たい響を滲ませた雪ノ下さんの声にも、葉山君は笑顔を崩さない。

「ああ、そうだった。奉仕部って此処ここで良いんだよね？平塚先生に、悩み相談するなら此処だって言われて来たんだけど」

……え？ 平塚先生から紹介された……？

ここは紹介制で依頼を承る部活なの……？

でも、そうだとしたら何で平塚先生は私たちに相談もなしに生徒の悩みを聞かせるのにわざわざここを紹介したのかな、私たちがたまたまここにいたから良かったけど、いなければ依頼人は待ちぼうけだよ……

それに、大事な相談ならこんな高校生の子供に聞かせるより、生徒指導で色々な生徒を見てきた平塚先生が聞いた方がまだ良いだろうに……

何か変な違和感を感じる……

「それで?どんな用かしら」

「これなんだけどさ」

私がそう考えている間も依頼の相談は続いており、葉山君は雪ノ下さんに依頼は何かと聞かれて、カバンから自分の携帯電話を取り出し、画面を指差して私たちに見せる。

「あ……!!?」

葉山君の見せた携帯の画面を見た由比ヶ浜さんが小さく声を上げた。

「どうした?」

比企谷君が尋ねると由比ヶ浜さんは自分の携帯を取り出して見せてくる。そこには葉山君の携帯にあったものと同じメールがあった。

私も考えを中断して比企谷君と雪ノ下さんに倣い由比ヶ浜さんの携帯の画面を見る。

そこに表示されていたメールの内容はどれも似たようなものでこう書かれていた。

『戸部は稲毛のカラーギャングの仲間でゲーセンで西高狩りをしていた』

『大和は三股かけている最低の屑野郎』

『大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーをした』

要約すると大体こんなところで、それらがいくつものアドレスから送られていた。

「これは……」

「チェーンメール、ね」

雪ノ下さんが口を開くと由比ヶ浜さんがこくりと無言で頷いた。

「これが出回ってから、何かクラスの雰囲気が悪くてさ。それに友達のこと悪く書かれてれば腹も立つし」

そういう葉山君の表情は何処どこか疲れて、うんざりとしているように見える。

「止めたよんだよね。こう言うのってやっぱりあんまり気持ち良いが良いもんじゃないからさ」



そう言うってから葉山は、明るく付け足した。

「あ、でも犯人捜さがしがしたいんじゃないんだ。丸く収める方法を知りたい。頼めるかな」

なるほど、つまり葉山君の依頼を要約するところだ。

クラスメイトを貶すチェーンメールが出回っていてクラスの雰囲気が悪くなっている、しかも、それが自分のグループなためグループの雰囲気が険悪になっている。

だから、彼はグループの雰囲気はこれ以上悪くなるのを防ぐために、犯人を探すのではなくこのチェーンメールを止めて欲しいってところだろうね。

まあ、いかにもクラスの王子様らしい解決方法だな…。

「なるほど、つまり事態の收拾を図ればいいのね」

「うん、そうだね」

「では、犯人を捜すしかないわね」

「うん、よろし、え？ あれ、なんでそうなるの？」

前後の流れを完全に無視された葉山が一瞬驚いた顔を見せるが、次の瞬間には取り繕つくりつた微笑みで穏やかに雪ノ下の意図を問う。

…つていうか雪ノ下さん、今の葉山君の依頼内容聞いてた？

葉山君は『犯人探しをするな』と言ってるのに…

自分の理想通りに動かない雪ノ下さんに取り繕った笑顔をしている葉山君に密かに哀れみの視線を向けていると、雪ノ下さんが何かを告白するかのようには語り出した。

「チェーンメール……。あれは人の尊厳を踏みにじる最低の行為よ。自分の名前も顔も出さず、只ただ傷付ける為だけに誹謗中傷の限りを尽くす。悪意を拡散させるのが悪意とは限らないのがまた性質たちが悪いのよ。好奇心や時には善意で、悪意を周囲に拡大し続ける……。止めるならその大本を根絶やしにしないと効果が無いわ。ソースは私」

雪ノ下さんは何かの告発文を書いているように悔しそうにチエーンメールがどれだけ酷いものかを語り出した。

彼女のそれは私が初めてこの部室に連れてこられた時に聞かされたご高説と同じようなものだ。

それにしても、チエーンメールって雪ノ下さんの実体験だったんだね。

もしかして、彼女は過去に虐められていたのかな…？

「とにかく、そんな最低な事をする人間は確実に滅ぼすべきだわ。目には目を、齒には齒を、敵意には敵意で返すのが私の流儀」

私がそう思っていると、雪ノ下さんは冷たい目で『犯人を見つけるべきだ』と言い放ち、葉山君に向き直る。

「私は犯人を捜さがすわ。一言言うだけでぱったり止むと思う。その後どうするかは貴方あなたの裁量に任せる。それで構わないかしら？」

「……………ああ、それで良いよ」

葉山君、相談するところを間違えたね：

私のその考えに賛同するように葉山君は諦めたように言った、雪ノ下さんは机に置かれた由比ヶ浜さんの携帯をじっと見つめる。

それから顎に手をやって仰々しく考える仕草をした。

「メールが送られ始めたのはいつからかしら？」

「先週末からだったかな」

「あたしもそのくらいからかな」

「先週末から突然始まった訳ね由比ヶ浜さん、葉山くん、先週末クラスで何かあったの

「？」

「特に……、何も無かったと思うけどな」

「うん……いつも通り、だったね」

葉山と由比ヶ浜は互いに顔を見合わせる。

「富良野さん、あなたは？」

雪ノ下さんが私にまで何かクラスであったのかと聞いてくる。

そんな事を聞かれても私はクラスメイトとほとんど交流をもたないから何が起きたかなんて知らない。

「特に……何もなかったと思うけど……」

「そう……」

雪ノ下さんはそれを聞くと今度は比企谷君への方に顔を向けた。

「一応聞くけれど比企谷くん。貴方は？」

「二応って何だ、うーん… ああ、確か職場見学のグループ分けがあつたな… 確か3人1組で」

ああ、そういえばそんなのあつたな。

大体それくらいに職場見学の希望調査票も配られていたし。

確かに比企谷君の言つたとおり、3人で1組のグループ分けだったっけ。

……あれ？ もしかして……

「うわ、それだ、グループ分けのせいだ」

「あー… 成程な」

比企谷君は理解したようだけど、葉山君と雪ノ下さんはそうではないようで、由比ヶ浜さんの視線を向ける。

「どう言う事だ？結衣」

「どう言う事かしら？由比ヶ浜さん」

「いやー。こう言うイベントごとのグループ分けはその後の関係性に関わるからね。ナイーブになる人も、居るんだよ……」

やっぱりそうか…

由比ヶ浜さんの考えに私も同感だ。

いつも一緒にいる人たちが1人ハブられれば、その後の付き合いにも影響が出てもおかしい。

まあ、グループ分け程度で切れるような関係ならその程度の関係だったってことなんだろうけど。

「葉山君、あなたの友達が書かれているのよね？あなたのグループは？」

「ああ、そう言えばまだ決めてないけど、とりあえずその中の誰かと行くことになると思うけど」

「あ……！ 犯人わかつちやったかも」

その時、由比ヶ浜さんがげんなりした表情で言った。

「説明してもらえるかしら、由比ヶ浜さん。」

「ヒツキーも言ってたけど職場見学は三人一組だから一人がハブられるってことじゃん？ そのハブにされた人はかなりきついよ」

まあ、普通に考えたらそうだよね。

私の思った通りのことを由比ヶ浜さんが言ってくれた。



「動機はグループ分けで外されたくないからか」

「……では、その三人の中に犯人が居ると見てまず間違い無いわね」

比企谷君が賛同し、雪ノ下さんが『葉山君のグループの3人の中に犯人がいる』と、そう結論を出した。

その時、葉山君が声を荒げる。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！俺はあいつらの中に犯人が居るなんて思いたくない。それに、三人それぞれを悪く言うメールなんだぜ？あいつらは違うんじゃないのか」

葉山君が慌てたようにそう言い出した。

おそらく葉山君はグループの今後のことを心配しているのだろう。

チエーンメールの内容が自分のグループの自分以外の男子3人のことしか書いてないなんてどう考えてもおかしい。

それに、葉山君がこの奉仕部に依頼に来たのは、これ以上グループの雰囲気悪くさ

せないためだろう。

先日の三浦さんの一件でグループの雰囲気はとても悪くなっていて、相模さんがその三浦さんの空いた席に座ってグループのギクシャクした雰囲気が漸く落ち着いてきたその時に、チェーンメールという葉山君のグループに望まれない変化が起きていた。

葉山君は自分のグループの雰囲気を悪くしないために、その対応に追われて疲れ切っていたのだろう。

悪い事は続けて起こるとはよく言ったもので、平塚先生に『クラスに出回る悪質なチェーンメールをどうにかしたい』と相談したところで紹介されたのがこの奉仕部だったのだろう。

でも、この奉仕部で決定権を持つ部長は自分の依頼なんて全て無視して自分のエゴに従って依頼を行おうとしている。

もし、この部長に従って自分のグループの例の男子3人の誰かがチェーンメールの犯人だったらまたグループの雰囲気が悪化が険悪になってしまう。

そうなれば、葉山君にとっては最悪の事態だ。

でも、葉山君は犯人探しをするべきだと主張するこの奉仕部の部長である、雪ノ下さ

んには逆らえないらしく犯人探しをすることは受け入れたが、自分の考える最悪な事態になりそうで焦っているのだろう。

なんとも大変なものだ。

クラス王子様というべきか、空気清浄機というべきか：

「バカかお前？」

私がそう考えてると、横から低い声が飛んだ。

その方に視線を向けると比企谷君が持ち前の腐った目を葉山君に向けながら吐き捨てるように言っていた。

葉山は比企谷君の発言に怪訝な顔をする。

「何がだ？」

「その三人が犯人じゃないって、本当にそう思ってるのか？お前がどう思っているか？そんなことに意味は無いんだ。事実には全く関係無い」

比企谷君がそう言うのと葉山は悔しそうに比企谷君を睨んでいた。

まあ、実際に比企谷君の言っていることは間違っていない。

感情論で犯人じゃないという主張が通れば犯人探しなんてする必要はないからね。

「取り敢えず、その人達の事を教えてくれるかしら？」

雪ノ下さんに情報の提示を求められたので、葉山君は気を取り直したのかそれぞれの人柄を語る。

「戸部は、俺と同じサッカー部だ。金髪で見た目は悪そうに見えるけど、一番ノリ良いムードメーカーだな。文化祭とか体育祭とかでも積極的に動いてくれる。良い奴だよ」

「騒ぐだけしか能がないお調子者、と言うことね」  
「……………」

雪ノ下さんの一言に葉山が絶句した。

「どうしたの？ 続けて」

葉山君が急に黙り込んだのが、雪ノ下さんは首を傾かしげる。葉山君は気を取り直して続ける。

「大和はラグビー部。冷静で人の話をよく聞いてくれる。ゆったりしたマイペースとその静かさが人を安心させるって言うのかな。寡黙で慎重な性格なんだ。良い奴だよ」

「反応が鈍い上に優柔不断……………」

「……………」

葉山君は何とも言えない、苦々しい顔で沈黙したが、諦めたように溜息を吐いて続け

る。

「大岡は野球部だ。人懐っこくいつも誰かの味方をしてくれる気の良い性格だ。上下関係にも気を配って礼儀正しいし、良い奴だよ」

「人の顔色窺うかがう風見鶏、ね」

「……………」

酷い言い回しだね、雪ノ下さん。

雪ノ下さんからの例の3人への批評を聞いて葉山君の顔は明らかに引きつってるし。

雪ノ下さんはまずコミュニケーション能力と道徳を学んだ方が良いと思うよ…

そんな中でもマイペースに雪ノ下さんは自分が取ったメモを眺めながら唸る。

「どの人が犯人でも可笑しくないわね」

「お前が一番犯人らしいけどな」

「私がそんな事する訳ないでしょう。私なら正面から叩き潰すわ」

「こえーよ」

比企谷君の発言を無視して雪ノ下さんは今度は私たちに向き直る。

「葉山くんの話だとあまり参考にならないわね……。由比ヶ浜さん、比企谷君、富良野さん、あなた達は彼らのことどう思う？」

「え、ど、どう思うって言われても、」

「俺はそいつらのこと知らんからな」

「この時点では彼らが犯人だという明確な証拠はないからなんともいえないよね」

急に『彼らのことをどう思う？』だなんて話を振られても平穩に過ごしたいがために

人と関わりたくない私は葉山君のグループの男子なんて興味はない。

どう思うと聞かれても気にしたことすらないから彼らがどんな人間だなんて分かるわけがない。

それでも、自分の本性がバレないようにいつもの営業スマイルを浮かべてなるべく角の立たない言葉を返す。

雪ノ下さんはそれで納得したらしく再び私たちを見て命令するように口を開いた。

「じゃあ、調べて貰もらって良いかしら？グループを決めるのは明後日、よね？それまで一日猶予があるわ」

「う、うん」

雪ノ下さんに言われて、由比ヶ浜さんは嫌そうな表情を浮かべる。

「ごめんなさい、あまり気持ちの良いものではなかったわね。忘れて貰もらって良いわ」



「ううん。あたしやるよ！ゆきのんのお願いだし！」

由比ヶ浜さんは『ふんす！』と擬音が付きそうな鼻息を吐き出してやる気があることを示している。

ていうか、貴女のグループがチエーンメールの犯人に疑われてるのに引き受けていいの…？

その3人の中に犯人がいたら貴女のグループが壊れるかもしれないのに…

「それ、俺もやるのか？」

「貴方には最初から期待はしていないわ」

比企谷君は面倒臭そうに頬杖をついていたけど、どうやら拒否権はないみたい。

まあ、クラスでぼつちで社交性もない比企谷君があの人3人から情報を引き出すことなんてできなさそうだから、雪ノ下さんの言い分は正しいのかもね。

そして、私は部長からの命令に拒否権があるわけないから営業スマイルを浮かべて引き受けた。

こうして私と比企谷君と由比ヶ浜さんは、チェーンメールの犯人を捜すために、例の疑わしい三人を調べることになった。

―翌日―

翌日の昼休み、由比ヶ浜さんは同じグループの眼鏡をかけた女子に話を聞いてみた  
が、繰り出されるBLマシンガントークにタジタジになっていた。

由比ヶ浜さんはいろいろな一生懸命にグループの人たちに話しかけて調査をしている  
が、比企谷君は彼らを観察しているのか、ぼーっとしているだけなのかよくわからない  
表情をしていた。

ちなみに私は由比ヶ浜さんのように行動はおこしていなかった。

何故って？

よく知りもしない相手から情報を聞き出すのに、私のようなぼつちが話しかけたところで得られる情報はたかが知れてるよ。

ましてや相手はトップカースト、下手をすれば『ぼつちのくせに生意気』とか適当な理由をつけて、目をつけられて何かしらの嫌がらせを受けるかもしれないのだ。

もちろん、ただの可能性の話だけど、可能性がゼロでない以上は安全ではないから私は平穩のために危険を犯すような愚かなことはしない。

他人のために平穩を脅かされるなんて冗談じゃないからね。

でも、私も全く調査をしていないわけではない。

私がしている調査は由比ヶ浜さんのように話しかけたりして犯人探しのための調査ではなく、こうやって客観的な視点から例の男子3人の様子や態度を観察しているのだ。

由比ヶ浜さんだと例の男子3人とは親しい関係だから、無意識に悪いところを見えないようにしているかもしれないけど、私なら由比ヶ浜さんからは見えない部分が見えるか

もしれないからね。

今のところ、例の3人は葉山君を取り囲んで仲よさげに談笑している。

側から見ると仲のいいグループに見えるのだけれど、観察を続けているとそうでもないということが分かった。

葉山君がいないときにそれは顕著に現れた。

私は葉山君はグループのリーダーではなく、王様みたいなものなのだと思う。

何をするにもあのグループは彼が中心で動くため、彼さえいなければあのグループは崩壊する。

まさに扇子の要の位置に彼はいるのだ。

そんな事を考えていると、葉山君が比企谷君のところへと行った。

おそらく調査の進行状況を聞きに行ったのだろうけど、おかげであの3人の本当の關係が分かった。

葉山君が会話から離脱した途端、3人はピタリと談笑をやめて静かになったのだ。

ペーペー喧しかったチャラそうな男子は腕を組んで険しい顔をしているし、坊主頭の

小柄な男子は他の2人には目もくれずにポケットから出した携帯を弄っているし、巨漢でゴリラのような顔をした男子は他の2人の様子を眺めていた。

葉山君が抜けた後の彼らの中にはさつきまでの賑やかな雰囲気はなかった。

やっぱり扇子の要の部分が無くなったから、彼らは会話をやめたのだ。

おそらく、あの男子たちはクラスの中心人物である葉山君の威光が欲しくて集まったのだろう。

イケメンで文武両道、さらに親は弁護士という高スペックの男子は間違いなくクラスのみんなから人気が出る。

その人のグループに属していれば自分も中心人物からのお零れをもらえると知っているのだろう。

そうだとしたら、薄い信頼と人間の打算の上に成り立ってるグループだね、確かな信頼がないのならあのグループの男子3人は赤の他人同然、あのチェインメールを流した事で他の2人を蹴落とそうとしているというのも強ち否定はできないね。

それにしても、この依頼は考えれば考えるほど厄介なものだな。よくもまあ、葉山君はこんな厄介な依頼を持ってきたものだ。

犯人が誰なのかなんてあのチェーンメールだけじゃ分からないし、もつと言えば、犯人だと言えるのはあの3人に限ったことじゃないと思う。

もしかしたら、葉山グループの席を狙っている誰かが3人を蹴落とすために送っている可能性もあるしね。

そう考えれば、怪しい人は沢山いる、正直言つて犯人探しをするには情報が少なすぎる。

雪ノ下さんの言つた通り本当に犯人を探すのならば、この事を先日のテニスコートの時くらいの大きな騒ぎにして生徒の携帯をチェックするしかないだろう。

でも、それを葉山君が承諾するとは思えないからこれはダメだ。

それに、奉仕部の3人と葉山君は職場見学があのかチェーンメールの原因だと言つていただけ、私はそうだとは言い切れないと思う。

あのチェーンメールは由比ヶ浜さんの言った通り職場見学のためではなく、3人を蹴落とそうとグループ外の誰かが送った可能性もあるのだから。

考えれば考えるほど可能性はたくさん出てくる。

あー…！ 本当に厄介なことに巻き込まれたな…

ていうか、何で葉山君のグループの問題に私が巻き込まれなくてはならないの…!!?

とにかく犯人が誰なのか分からない以上は、1番良い方法なのはこのチェーンメールを送る犯人を挙げることなただけだな…！

……ん？ 待てよ……  
もしかしてこの方法を使ったら……！



その時、私の頭の中に1つの解決策が浮かんだ。

私のこの方法が上手くいけば、チェーンメールは一発で出回らなくなると思う。上手くいくかわからないけど何もしないよりかはマシだろう。

解決策が浮かんだ私は葉山君の方に視線を向けて話しかける。

「何だい？ 富良野さん」

爽やかな笑顔を浮かべるチェーンメール騒動の根幹に私は作り上げた笑顔を浮かべて彼の耳元で囁く。

「葉山君、チェーンメールの依頼のことでお話があるんだけど、放課後、部活が終わった後2人きりで人気がないところで会えないかな… 実は私、犯人が分かったんだ…！」

——問題事を持つてきたのは貴方だ……!

——さらにこの犯人の動機もおそらく貴方だ……!

——ならば、貴方の手でこのチェーンメールの騒動の幕を引いてもらう……!

一瞬驚いた顔をして、私を見返すと彼はグループの男子3人を見て「ほ、本当かい!!  
? なら放課後に……」と承諾の意思表示をした。

「ふふっ…」

顔に明らかに喜びの色を浮かばせた葉山君に思わず笑みが浮かんだ。

ふふっ… せいぜいグループを守るために頑張つてね、葉山君…

チーンメールを止めるのは協力するけど、私はそこまでしかない。  
それ以降は貴方の問題だからね…

私は私の平穏が護れればそれで良いのだから…！

犠牲なくして解決はないから平穩を脅かされたくない。

―放課後―

―雪ノ下雪乃 side―

放課後になり、私はいつものように特別棟に向かい、奉仕部の部室でいつものように奉仕部の部員たちを待つ。

もともと私だけの奉仕部だったけど、最近が入部者が3人も増えた。

といってもそのうちの2人は平塚先生の強制入部により入れられたのよね。

平塚先生は私に言っていた『優れた人間はあわれな者を救う義務がある』と。

平塚先生は私が優秀であることを始めて理解してくれた人だった。

私はこの奉仕部の部長になるまではある劣等感に苛まれていた。

それは、自分の姉である『雪ノ下陽乃』に対しての劣等感だ。

成績でいえば、私の方が優秀な部分もあるが、世渡りの上手さでは、圧倒的に姉さんが優越していた。

学校でも、地元の名士のパーティーでも、常に姉さんの周りには人だかりができる。

私生活でもそれは同じ、姉さんはいつでも人に囲まれていた。

でも、それが私を腹立たせる。

両親も私より姉の方を優遇している。

姉の方が私より優秀だから、姉の方が会社のためになるからという理由でだ。

両親の関心や期待が私に向いたことは数えるほどしかない。

周りもいつも姉と私を比べて『姉の方が優秀だ』と口を揃えて言う。

それが、歳を重ねるごとに私の中にある大きな姉に対する劣等感になっていった。

だからこそ、その劣等感を拭い去るために、姉を越えようと今まで私は必死に努力を

重ねた。

だが、どんなに歯がゆい思いをしようと、姉を乗り越えることなど不可能だった。

生まれ持った性格、過去のトラウマ……

姉が死にでもしない限り、この壁は厚く存在して……。

そんな時に、私に平塚先生は声をかけてくれた。

私を優秀だと見てくれて、始めて私を理解してくれた人のように感じた。

そして、私のためにこの『奉仕部』という空間で『優れた人間はあわれな者を救う義務がある』ということを教えてくれた。

今でも姉に対する劣等感は強く根付いているけど、以前と比べたら幾分かマシになった。

それも平塚先生のことであつて。

だからこそ、平塚先生の期待に私は答えなくてはならないのよ。

だから私を頼つて、平塚先生は問題のあり、矯正させる必要のある生徒を2人、この奉仕部に強制入部という形で入部させた。

1人は平塚先生に『小悪党』と称された腐り目で捻くれた性格の男子生徒。

もう1人は自分が密かに疎ましく思っていた、いつもテストでは自分と同じくらいの

成績をとっており教師からの評判も高い女子生徒。

といつても矯正させる必要があるのは腐り目の捻くれた性格の一人だけで、もう一人の女子生徒は頭も良く、気立ても愛想も良く、正直に言おうと、矯正させるところなど無いと思つただけけれど、平塚先生が彼女に思うところがあつたのだから連れてこられたのね。

と言つてもその女子生徒は私が優秀だという事をちゃんと理解していて、あの腐り目の男と違つて、私のすることこそが正しいということを理解しており、私に意向に逆らうこともしない。

彼女は私の優秀さをちゃんと理解しているのね。

まあ、あの変なコート男が『小説の感想を聞かせてくれ』という依頼を彼女が解決したのは些か気になつたけど……

とまあ、こんなことを考えるのは、これまでにしてそろそろ本題に移りましょう。

私が部室で椅子に座つて数分経つと、由比ヶ浜さんが来て、それから腐り目の男が来た。

今日は由比ヶ浜さんと富良野さんが例の容疑者3人を調査してその結果を報告し合  
い、誰がこのチエーンメールの犯人かの相談をするのだけれど。

「……………遅いわね……………」

私はイライラしていた。

「隼人君、来ないね〜」

由比ヶ浜さんの間の抜けた声が部室に響くのと同時に私の憤りも増す。

そう、私が何故こんな風に憤っているのかというと依頼人のあの男がなかなか部室に  
来ないのだ。

富良野さんは由比ヶ浜さんに『今日は急用ができたから部活は休むね』と言っていた  
からまだいいけど、依頼をした張本人が来ないなんてどういう事なのかしら？

これじゃあ、相談も解決策の報告もできないわ、もう下校時刻も迫ってきているのに、  
一体あの男は何のつもりなのかしら？



ーピロン…！

「……ん？ あたしの携帯だ…」

その時、携帯の着信音が響いた。

どうやら由比ヶ浜さんの携帯にメールがきたらしく彼女が携帯を開いて内容を確認する。

「え、何これ？」

内容を確認した途端に由比ヶ浜さんが目を見開いて驚いた顔をした。  
何が書いてあったのかしら？

「ねえ、これ見てよ、ゆきのん、ヒツキーこれ…」

由比ヶ浜さんが私と比企谷君にも見えるように携帯の画面を向けた。

それは、依頼人のあの男からのメールであり文面にはこう書かれていた。

『今日はゴメン、急用があつて行けなかった。それと、今回の依頼はなかったことにしてくれ』

………は？ 何を言ってるのこの男。

急用で来られないって、そもそも貴方の方が依頼を持ってきたんじゃない。

でも、当の本人が来なければ解決策の提示もできないし。

挙げ句の果てには『依頼を取り消す』だなんて何を考えてるの？

でも、依頼人からの依頼のキャンセルがあつた今、もう私たちが奉仕部として手を出す事はできない。

何なのかしら、本当にあの男は…！

私は葉山君に対してのイライラを膨らませながら今日の部活を終了させた。

―雪ノ下雪乃 side end―

―比企谷八幡 side―

富良野と葉山が部室に来なかった…

今日は放課後に誰がチェーンメールの犯人が個人が調査したことを報告しあい犯人を割り出す話し合いをするはずだったんだが…

富良野は『今日は急用で来れない』って由比ヶ浜に言っていたそうだからまだ良いとして、依頼主の葉山まで来ないなんてどういうことなんだ？

いつまで待っても葉山のやつが来ないから、雪ノ下は爪でコンコン机を叩いて見るからにイラついてやがるし、由比ヶ浜は機嫌の悪そうな雪ノ下を見てオロオロし始める。

ルーズな奴が嫌いであろう部長は、いつまでたつても奉仕部に訪れない葉山に相当イラついているのか、その部長のだすピリピリとした雰囲気には部室の空気がどんどん悪くなっていった。

ーピロン…！

その時、由比ヶ浜の携帯に『今日はゴメン、急用があつて行けなかった。それと、今回の依頼はなかったことにしてくれ』と葉山からのメールが送られてきた。

人をさんざん待たせたくせに、今になって突然依頼をなかったことにしてくれてな

にを考えてんだ、あいつは？

雪ノ下は突然の依頼の取り消しに、葉山に対して激しく憤ってるし、由比ヶ浜はそんな雪ノ下を必死に宥めている。

まあ、解決策をあいつが自分で思いついたんなら俺がこれ以上考える必要もねえしな

……

ーゾクツ……！

その時、俺の頭の中に何か嫌な予感が走った。

……何だ？ この嫌な予感は何？

この頭の芯がピリピリするような嫌な予感は…？

葉山の依頼が取り消しになったのなら、もう俺があいつの依頼に関わる必要はないの  
に…

思わず俺は部屋を見渡して、机の端っこに置いてある椅子を見つめた。

この椅子にはいつも決まってあいつが座っていた。

俺より後に、あのアラサー独神によって奉仕部に強制入部させられて、材木座の依頼を解決し、先日のテニスコート的事件で全てが終わった後、1人で不気味な笑みを浮かべていたあいつだ。

——そういえば、今日の昼間にアイツは葉山の耳元で何か囁いてたな……  
思えば、その後の葉山の様子も何かおかしかった……

——どうも嫌な予感がする……。――

この予感がただの杞憂であればいいんだがな……

そう思いながら、俺は雪ノ下たちに倣って荷物をまとめて帰路に着いた。

だが、この時、俺は知らなかった。



俺の予想を超える最悪のシナリオが既に動いていたことに…

―翌日―

俺がいつものように小町を学校に送り、総武高校へ到着して、自分の教室へと向かうと教室内が異様なほど騒がしかった。

何事かと思ひ教室の扉を開けるとそこには大きな声で騒ぎ立てるクラスメイトと教室の中央で顔面蒼白になって震えながら立っている体格の良い男子がいた。

確か、あいつは葉山の取り巻きの男子の一人である大和つて奴だったな。

葉山曰く、冷静で落ち着きがあり、人の話をよく聞いてくれる良い奴らしいのだが、今の大和からはそんな様子は全くなく、むしろ捕食されるのを待っている小動物のような

態度だ。

何でこいつがこんな事に…？

俺が顔をしかめて不審に思いながら教室の黒板を見るとそこには大きな字でこう書いてあった。

『悪口チエーンメールの犯人は大和！』

『クラスメイトを傷つけた裏切り者！』

『重罪人、大和は死刑！ 土下座して謝罪しろ！』

赤いチョークで書かれたその文字を背景にして大和は唇を震わせながら俯いている。

そして、その大和をクラスの連中が遠巻きに眺めている、いや包囲しているというべきか…

大和に対して暴言を吐く者、大和に侮蔑の視線を送る者、あるいは見て見ぬ振りをする者と反応は三者三様だが、一つ共通しているのは誰も大和の肩を持つていない

という事だ。

「あのさあ、大和君さあ、この黒板に書いてあることってマジなん？ 正直に言えよ」

「ち、違う、俺は、やってない！」

「前から怪しいと思ってたんだよ、いつつも、黙ってばっかで『だな』としか言わねえから……まさか本当にやるとは思わなかったけど」

「う、あ……」

大和と同じグループである戸部と大岡が大和に対して恫喝するように問いかける。

自分に対して恫喝する戸部たちに、周りからの突き刺さる視線におろおろとするばかりで、何一つまともに反論できない大和。

そんな大和に徐々に包囲の輪が狭まっていく。

「うわあ… マジであのクソゴリラやりやがったよ…」

「私もアイツがやったと思ってたんだ…」

戸部たちのクラスの連中は大和の事など信じておらず、大和に対してヒソヒソと聞こえるように話し始める。

そう思っていたって、お前ら少しもそんな素振り見せてなかったくせに…

だが、もはや教室内の空気は最悪だ。

そしてその数分後、葉山とこの間のテニスコート以来、三浦に代わって葉山グループに入り、三浦の後釜に座った相模が登校し、その後すぐに由比ヶ浜と眼鏡の黒髪ロングの女子が教室に入ってきた。

葉山はクラスメイトから責め立てられて、目を見開くと近くにいた生徒に『どうしてこうなってるんだ!?!?』と狼狽しながら聞いた。

そのクラスメイトは『大和が出回っていたチェーンメールの犯人であること』と『自分たちも大和を疑っていたこと』を淡々と葉山に説明した。

それを聞いて暫く黙って何かを考えるように俯いていた葉山は、やがて大和の方へ歩み出る。

「大和、これはどういうことか説明してくれないか?」

その口から出ていた言葉には普段の明るさは欠片もなかった、教室の雰囲気からコイツも大和を疑ってるクチか。

だが、大和はそれに気づいていないのか、葉山の方を見て縋り付くように葉山に訴える。

「ち、違う! 俺はチェーンメールの犯人じゃない! は、隼人くんなら信じてくれるよな……?」

大和はそう言うのと葉山に対して助けを求める。

葉山は大和を見返すと、視線をクラス全体に彷徨わせて齒切れの悪そうに口を開いた。

「や、大和… 悪いと思うなら素直に謝った方が良い… そうすれば、みんな許してくれるさ…」

「……………っ!?」

葉山は大和を庇おうとはせずに大和に謝るように言った。

やっぱりコイツも大和のことを何も信じてはいない。

何のために大和への確認をしたのか分からないが、クラスの雰囲気で察したんだろうな。

このクラス全員が大和を疑ってるって。

葉山からしてみれば、チエーンメールのことで責められている大和がみんなに謝って和解して解決させるつもりだったんだろうけど。

でも、それは助けを求めた奴からしてみれば天から垂らされた糸を目の前で切られる行為だ。

現に大和の顔はそれを聞いて絶望に染まってるしな。

「……大和、アンタ、マジキモいんだけど……そこまでしてウチらとつるみたかったわけ？ ベタベタ気持ち悪いんだよ！」

さらに、この間のテニススコートの事件から新たに葉山グループに加わって三浦の後釜に座った相模からの容赦ない追い討ちが加わる。

それからクラスメイトたちはさらに激しく大和を責め立てた、もう大和を助けてくれる人も、大和の味方もこの空間にはいない。

「おれはあああああ!!? やってねえ!!? やってねえんだよおおおお!!?」

突然奇声を上げ、周りの机と椅子を蹴り飛ばし振り回す。

慌てて葉山たちが取り押さえようとするが、既に遅かった。大和は涙と鼻水で顔をぐちやぐちやにし、叫びながら教室を飛び出していく。

おそらく、大和は限界だったのだろう。

暫くして、教室ではまたヒソヒソ話が始まる。

『なんだあれ？』

『動物園のサルみたい』

『あのクソゴリラ、頭おかしいんじゃないの？』

当然、好意的な言葉や心配する言葉は何一つない。



「大和君……」

大和に対しての悪意が溢れる教室に心配そうな声上がる。

例外は戸塚だけだった、おそらく大した証拠もなく犯人扱いされた大和に対して同情し悲しんでいる。

流石、俺の戸塚だ、マジ天使！

……しかし、何か変だ、このチェーンメールの騒動……

急に依頼を取り消した葉山とこの状況がそれを物語っている。  
どこぞのアニメの名探偵風に言うならそうだ。  
どう考えてもこの一連の騒動の流れは不自然だ。

葉山が奉仕部にチェーンメールを止めて欲しいと依頼してきて、その依頼を急に取り消した翌日に大和が犯人だと露見するなんて：

そう、どう考えたっておかしい。

なんだか誰かが大和を犯人に仕立て上げたという思惑が働いているような気がする。

動機は分かる。では、それは一体誰が計画し実行したのか？

やっぱり、あのチェーンメールの容疑者の他の2人か？

それとも、このクラスの全員が…？

「ふふ、ふふ……」

そう俺が考えていると、聞き覚えのある笑い声が聞こえてきた、笑い声に釣られてその方を見ると昨日、奉仕部に来ず、俺が不審に思っていた『そいつ』が席に座って俯いていた。

だが、俺の位置からははっきり見える。

顔が見えないように顔を俯かせて、肩を震わせて『そいつ』が笑っているのを……

——これは……まさかあいつが……！

昨日、俺が感じていた嫌な予感を超える最悪の展開になっていたのだ。

俺は教室の席に座り、昨日の思い浮かべた『そいつ』へ無意識に視線を移す。

「ふふふつ……」

『そいつ』は笑っていた。

クラスメイトから囲まれて非難の視線と共に責められて教室から悲鳴のような声を上げながら逃げていった大和を見ながら『そいつ』は笑っていた。

あの笑顔に俺は見覚えがあつた。

あいつのあの笑顔は三浦がクラスの立場を失つたあのテニスコートの事件の時と同じ笑顔なのだ。

あの時と同じ「悪魔のような笑顔」を『そいつ』はしていた。

友達であつたはずの葉山を始めとしたグループのメンバーや、他のクラスメイトたちから責められて泣き顔になりながら無実を訴えている大和を見て、そいつは嘲笑うような不敵な笑みを浮かべていた。

彼女の闇のような真つ暗な瞳から送られる笑顔にはどんな感情が含まれているのかからない…

無様に責められている大和への嘲りのつもりなのか…

それとも他の感情なのか…

「……………っ！」

――俺は腹が立っていた…。

何であいつは笑っていられるのか…！

俺はぼつちを誇りに思い、今までの経験から他人には干渉しないという理念を掲げている。

その俺らしくないが、この状況に対してだけは激しい憤りを感じた。

その憤りの正体が、クラスメイトからの激しい非難に涙目になりながら無実を訴えているが、誰からも擁護されていない大和への同情からくるものなのか、

それとも、他の理由なのか……！

何が原因なのか自分でもよく分からないが、それほどまでに俺の俺は目の前の状況に對して激しい憤りを感じていた…。

―比企谷八幡 side end―

―葉山隼人 side ―

「……………」

俺は自分の前でクラスメイトから罵詈雑言を吐かれているかつての友達を何も言わずに見ていた。

（やっぱり大和が犯人だと思われていたのか……）

俺が大和を犯人だと認めた途端、大和はクラスメイトたちからさらに激しく責め立てられていた。

大和の友達だと思っていた戸部と大岡でさえも大和に対して責め立てており、中には相模さんに突き飛ばされて転んだ大和を蹴るクラスメイトまでいる。

そして、周りからの視線と暴力に耐えられなくなったのか大和は悲鳴に似た声を上げて教室から逃げていった。

大和が居なくなつた後の教室では、そんな大和を心配する声は何一つ聞こえず、教室から逃げていった大和への嘲笑と、大和に対しての悪口のオンパレードが始まった。

それは、俺のグループでもそうだった。

「マジ、あいつ巫山戯んなつてよく！ 友達だと思つてなのに俺たちのこと裏切つてたんだぜ！ マジねえわ〜」

「それな、あんな奴死ねばいいのに」



いつものように机を囲んだところで、チェーンメールの被害にあった戸部と大岡が大和の悪口を言い出したのを皮切りに相模さんがそれに乗っかる形で大和への悪口が始まった。

「私、前から大和のこと気持ち悪いと思ってたんだ、いつも『だな』ってしか言わないし、不気味な奴だと思ってたんだよね」

「お！ マジで!?? 相模さんもそう思うでしょ!」

「それな」

姫奈と結衣は微妙な顔をしていたが、相模さんに『姫奈ちゃんたちもそう思うよね?』と途中から相模さんから話を振られて結衣は一緒になって大和への悪口を言い始め、姫奈は相槌を打ちながら曖昧な笑顔を浮かべていた。

「ねえ、隼人君もそう思わない?」

「……………」

俺にも相模さんが話を振ってきた、大和のことを信じるならここで大和を擁護すべきなのだろうが…

俺はクラスを見渡す。

クラスの誰もが大和のことをチエーンメールの犯人だと信じてらいるのか、1人も彼を気遣う言葉を言っている人はいなかった。

いわば、クラス雰囲気は完全に大和への悪意にあふれていたのだ。

それならば、俺は……

「ああ… そうだな… 俺もあんな奴なんて友達だともクラスメイトとも思いたくないよ…」

「でしよ〜？ マジあんな奴なんて人としてクズだよ〜！ マジ死ねって思った〜」

こうやって大和の悪口をみんなと一緒に言って言うしかない…

相模さんや戸部たちは俺が同調して気分を良くしたのか大和に対しての悪口がさらに激しくなった。

俺はその様子をしばらく何も言わずにみていたが、やがて何を勘違いしたのか相模さんが『葉山君が気に病む必要はないんだよ？ 悪いのは全部あの大和なんだから』と言ってきた。

そうして、グループのみんなも俺を氣遣う発言をし始める。

俺はそれに愛想笑いを浮かべて相槌を打ちながらさっきの教室でのことを思い返し

ていた。

大和はクラスメイトたちから責められていても必死に無実を主張していた。

嘘をついているようには見えなかったし、考えてみれば大和が犯人だという証拠はどこにも……

『ー明日あたり犯人がチエーンメールのことで責められるはずだよ、もし、その犯人が責められても葉山君が気に病む必要なんてないよ、その人の自業自得だよー…』

…ふとその時、俺の脳裏にある人の言葉が蘇ってきた。  
これは、昨日の放課後に言われた言葉だ…

……でも、落ち着いてよく考えてみたら、確かにこれは大和の自業自得なんじゃないか？

先ほどの出来事を思い返して考えてみたらそんな気もしてきた。

たかだか職場見学のグループ分けごときで、友達の悪口を書いてチエーンメールを出回して、それで他人を蹴落とすなんて最低な行為だ。

あのチェーンメールの犯人が大和なら、俺たちを騙っていたのは事実なんだし、クラスメイトから責められるのも当然の報いなんじゃないのか…？

大和が流したという証拠はないけれど、チェーンメールの犯人がクラスメイトが言っていた通り大和だとしたら、昨日の放課後にあの人に言われたことと辻褃があう。

やっぱり、大和が犯人だったのかもしれない。

そうなれば、俺が心配するだけ無駄だ。

そう考えると大和に対しての申し訳ないという気持ちがなくなってきた心もすつと軽くなった。

でも、ひとつだけ気掛かりなのは雪乃ちゃんには悪いことをしたな…

あれだけチェーンメールの犯人を見つけ出すなんて息巻いていたのに、まさかこんな形で解決するなんて思わなかった。

小学生の頃の蟠りも解決できると思ったのに、残念だ。

メールで依頼の取り消しを伝えただけ、雪乃ちゃんの性格上、ろくな説明もなしに依頼の取り消しをしたのは不味かったな…

後日奉仕部に行く機会があつたら、また改めて雪乃ちゃんと話をしよう。

俺はそう思うとチェーンメールを考えるのを辞めて奉仕部のことに考えを移した。

そんな俺を不気味な笑みで見ている女子生徒がいるのに気づかず…

―葉山隼人 side end―



―富良野英理華 side―

「いっふいっふ……」

目の前の光景に笑いが止まらないとは今のようなのを言うのだろう。

まさか、こんな予想通りに事が上手くいくだなんて思わなかった。

私は心の奥底から出てくる笑いを、周りに聴こえないように奥歯で噛み殺しながら笑い続ける。

かと言って誰かに笑ってるのを見られるのは不味いから顔を俯かせて周りからの視線を避けて笑いを押し殺す。

こんなに心の底から笑ったのは久しぶりだ、依頼を遂行したのは自分のためだったけ

ど、やはりここまで上手くいくと笑いも出てくる。

ことのあらまは昨日の放課後にまで遡る――…

―昨日の放課後―

夕日が傾いて世間が薄暗くなり始めた夕刻の頃、私は屋上の手すりにもたれかかって下校していく生徒たちをぼんやりと眺めていた。

今日は本来なら放課後の部活の時間に、今日1日を使って、例の疑わしい3人を私と由比ヶ浜さんと比企谷君が調査したのを元に、奉仕部のみんなで犯人探しをするはずな

のだが、私はそれには参加しない。

何故なら、今日はチェーンメールを止めるための大切な話があるからだ。

そして、その話をする人物はもうすぐここに来るはずだ。

それは、クラスの王子様で今回の依頼人でもある葉山隼人君だ。

昼間に彼に約束を取り付けた時、彼は『サッカー部の部活があるから少し遅れる』と言っていたけど、間違いなく彼は私のところに来る。

何故なら、彼はあのチェーンメールを何としてでも止めたいはずだからだ。

答えは簡単、テニスコートの時と同じように自分のグループの雰囲気が悪くなるのを防ぐためと、これ以上自分たちの悪評が再び広まるのを防ぐためだ。

テニスコートの一件以来、葉山君のグループは相模さんが加入するまで大きな亀裂が生じており、クラスメイトたちから『何でもできる王さま』の属しているグループとして憧れの的だった葉山君のグループがテニスコートの一件で冷たい目を向けられていたこともあった。

それが漸く落ち着いてきた時にこのチェーンメールだ。

しかもそれは悪いことに、今度は自分のグループの男子たちの悪い噂について書かれているものだった。

それが出回ったことにより彼はまた自分のグループの雰囲気が悪くなりそうなのだろう。

だからこそ、彼はグループのためにも世間体のためにもことを荒げずに平和な解決をしたかったのだろうが、相談した部活の部長がそれに納得せずに、結局犯人探しをすることになってしまった。

彼は今焦っているだろう、だから私が蜘蛛の糸を垂らしてあげるのだ。

私の平穩を掻き乱した、あなたの手でこのチェーンメールの騒動に幕を下ろしてもらうためにね。

さあ、クラスの王様、早くおいで。

——ガチャ……

それから数分後、屋上の扉が開いた。

「ーやあ、富良野さん。待たせて悪かったね…」

いつものように爽やかスマイルで登場しているが、いつもと違って少し顔が強張っている。

まあ、当然だろう、彼からしてみればこれから犯人の名前を言われるのだから。ましてやそれが親しい人なら尚更ね…

「それで、早速なんだけどチェーンメールの犯人って言うのは……?」

「うん、その事なんだけど…」

葉山君の顔から笑みが消えて、真剣な表情になる。

にしても、本当に必死な評価だ、いつもの爽やかな笑顔の面影は微塵もない。まあ、勿体ぶる必要なんてないから素直に教える、容疑者の名前を：

私はそれを見返しながら話すらそうな雰囲気を装いながら話す。

「犯人は、大和君だと思っただ……」

葉山君の忠実なる下僕、大和くんの名前を。

そこで再び王の目の色が変わった、滑稽なものだ。

「ち、ちよつと待つてくれ！　大和が犯人!??　そんなわけないだろ！　アイツは……」

やつぱり反論してきたね、でも、私には貴方を論破できるちゃんとした根拠が有るんだよ？

一からその根拠を説明してあげる、外部ではなく身内を疑うべきという根拠を。

貴方からしてみれば、ただの下僕である三下のゴリラがこんな愚かな行為に走った根拠をね。

「……だつてほら、よく考えて、奉仕部の人たちも言つてたけど、葉山君と残る三人の男子たちは、まだ職場見学の班が決まつてないでしょう？　でも、その職場見学の班は原則三人一組、必ず一人は炙り出される、だから葉山君から捨てられたくないとばかりに、他の誰かを貶めようとするしたんだよ」

「なら何故大和が！あいつは、穏やかでいつも落ち着いていて良いやつで……」

昨日、奉仕部でも話題に上がった推測を葉山君に話すと葉山君は分かりやすく取り乱して大和君を擁護する言葉を私にする。

でも、そんな彼に休む暇を与えずに私は話を続ける。

「メールの文面をよく思い出してよ、戸部君たちは『ゲーセンで西高狩り』や『練習試合でラフプレー』という暴力沙汰なのに一人はただの不倫だよ？ 流石に書かれている内容に差がありすぎると思わない？」

「そ、そんなのただの書き方の問題じゃ…」

「二人だけ何も言われなければ間違いなく犯人だと疑われる、だから被害者だと装えるように自分のことも書き入れたと考えた方が自然じゃない？ 他の二人よりも、噂になってもそこまで気に留められないレベルのね」



葉山君の反論を遮るように私は言葉をつなぐ。

そこまで説明すると、葉山君は口を開けたまま愕然とし動かなくなつた。

自分の下僕がそんなことをした、裏切られたのがそんなショックだったのだろうか。

テニスコートの時に自分は三浦さんを保身のために身勝手にも切り捨てた分際でよく言えるものだ。

それに、大和君を擁護する言葉も褒め言葉になつてない。

なんか褒めるようかところが見つからないから、無理矢理捻りだしたように感じるのは気のせいかな？

葉山君の言つてる『冷静で穏やか』つて、話に参加できないから簡単な相槌を打つ以外に何もしてないからでしょう。

私の見た感じ大和君はグループに属しているだけの何も発言しない、いわば案山子みたいな感じだったし。

私の容赦ない追求にさすがの葉山君も完全に動揺しているが、私は間髪入れずに畳み掛けるように言葉を続ける。

「それに、葉山君。 大和君がチェーンメールの犯人だと思ってるの私だけじゃないよ？」

「……………え？」

葉山君はさつきとは違って意表を突かれたような顔をした。

予想通りの反応だ、私は内心ほくそ笑みながら葉山君に構わずに話を続ける。

「私が犯人が大和君だと思ってるのはただの私だけの推測じゃないんだ、クラスのみんなも疑ってるよ、もっと言ったら葉山君のグループの戸部君とかも」

「そ、そんな……………」

「実は、今日の昼休みの後にね、葉山君がグループから抜けた後に戸部君と大岡君が話しているの聞いちゃったんだ、『俺たちはもしバレたらヤベエこと書かれてんに大和だ

「けちよつとした浮気を書きこされてるのはおかしい!」とか『もしかしてチェーンメー  
ルの犯人は大和なんじゃないか!』って」

「そ、そんなことなんてアイツらは言つてなかつたよ……?」

私の発言に震えている声で葉山君は言い返すが、私は容赦なく言い放つ。

「……言えるわけないよ、優しい葉山君に言つたらきつと自分たちを和解させようとする  
はずだもん、でもね、悪口を書かれた方からしてみれば、たとえ貴方から言われても和  
解をするなんて出来ないことなんだよ」

「……………」

葉山君はもう言葉も出ないらしく黙り込んでいる。

その滑稽な姿に私は内心で笑いが止まらなかつたが堪えて続けた。

「それにさつきも言ったけど、疑っているのは戸部君たちだけじゃないよ、大つぴらに言わないだけでクラスの何人かも疑ってるみたいだよ」

「ど、どうしてそう言えるんだい…?」

「だって、さつき話した私の推測は少し考えれば誰でも分かることでしょ? それにこの総武高校は県内でも偏差値の高い進学校だから、頭の良い人ならすぐに文面や職場見学のグループ分けの日が近いことから大和君が犯人だと疑っても不思議はないんじゃないかな?」

「……………」

葉山君は再びおし黙る、口を歪ませて視線を泳がせているところを見ると反論できる言葉を探しているのだろう。

そんな葉山君に私は営業スマイルを浮かべて優しく話しかける。

「葉山君は本当に優しいね、クラスの人たちが大和君を疑っていても葉山君だけは大和

君を信じているんだから……」

「……………」

私の皮肉とも言える言葉に葉山君は唇を噛み締めた、おそらく私が『さつき説明した大和君が犯人である根拠』と『クラスメイトやグループの人たちまで大和君を疑っていること』を聞いて葉山君自身にも迷いが生じているのだろうね。

苦悶の表情を浮かべている葉山君に、私は営業スマイルの仮面の下で葉山君を冷笑しながら決め手の一言を言い放った。

「明日あたり犯人がチェーンメールのことで責められるはずだよ、もし、その犯人が責められても葉山君が気に病む必要なんてないよ、その人の自業自得だよ」

「……………えっ?」

私は葉山君にそう言うと「話は以上だよ」と営業スマイルを浮かべてそう言って呆然としている葉山君を屋上に置き去りにして真っ直ぐに2—Fの教室に向かった。

それが下校時刻の15分前の出来事だった……

これが、昨日の放課後に屋上で起きたことの全てだ。

でも、やっぱり私の予想通りに事が運んだ。

葉山君はクラスの雰囲気飲まれて簡単に大和君を切り捨てた。

クラスみんなが大和君を疑っているということをはっきり示されれば、彼は保身のために疑われている大和君を助けることは絶対にしないだろうからね。

現に葉山君はクラスメイトたちの反応を見てから大和君に対して謝るように言ったからね。

そうなれば、葉山君も大和君が犯人だと認めたようなものだ。

クラスを中心人物である彼の発言力は絶大、その場の雰囲気は間違いなく大和君が犯人であるというふうになる。

でも、葉山君もクラスのみんなも肝心なところを見落としてる。

それは、『大和君がチェインメールを送った犯人だという『根拠』はあつても『証拠』はどこにもない』ということだ。

クラスのみんなが大和君が犯人だと思つて責め立てたのは、教室の黒板に『大和がチエーンメールの犯人だ』書かれていたからだ。

それ以外に大和君が犯人であるという証拠も根拠もどこにもない。

クラスのみんなも葉山君たちも黒板に書かれた文字を見て大和君が犯人だと思つているに過ぎないのだ。

だから、私はそれを利用した。

と言つても難しいことはしていない。

私がしたのは、葉山君と別れた後にそのまま2—Fの教室に行き、教室に生徒がいなくなるであろう下校時刻の少し前に黒板に赤いチョークで例の文字を書いただけだ。

でも、それだけで大和君を犯人だと思わせるには十分だったのだ。



葉山君にはああ言ったけど、本当は私にもチェインメールの犯人なんて誰だか分からない。

でも、この依頼を解決するには、犯人なんて分からなくても良かったのだ。

なぜなら、私の考えた方法は犯人を捜すことではなく疑わしい人を犯人に仕立てることなのだから。

奉仕部に依頼に来た時に葉山君が言っていた通り、チェインメールが出回ったことによりクラスの雰囲気は以前より微妙に悪くなっているというのは確かだった。

特にチェインメールで書かれていた、トップカーストの葉山君のグループの男子たちは表面上には出さなくてもピリピリとしたグループ内の空気に辟易し、心の奥底では早くこのチェインメールを何とか止めて欲しいと思っていたのだろう。

そんな時に大和君がチェインメールの犯人なのだと誰かが黒板に大きく書いてまで告発した。

そうなれば、私の用意した大和君犯人説の取っ掛かりの完成だ。

つまり、大和君はあくまで”犯人扱い”されただけであり、チェインメールの真犯人なのかは分からないのだ。

でも、あの状況でそこまでの確認をする思慮深い人なんてなかなかいない。

だからこそ、私の用意したこの取っ掛かりが完全な『大和君犯人説』の根拠になった。

取っ掛かりができればそこから疑惑に発展する。

故人の『人間は物事を自分に都合の良いように考えやすい』という言葉のように、黒板に書かれてあったというだけで葉山グループの男子たちは大和君が犯人であると疑うはずだ。

何故なら、大和君が犯人だと書かれた文字を見て間違いなくチェーンメールの被害を受けていた葉山グループの人たちや、チェーンメールを気にしていたクラスメイトたちは、犯人が示されたそれに飛びつくからだ。

そうすれば、間違いなく大和君がチェーンメールの犯人だとみんなに錯覚させられる

ことができる。

後は放つておいてもクラスのみんなが勝手に話をややこしくしてくれるだろうし、大和君が犯人だということに疑問を持つ人がいても、クラスの大和君が犯人だと信じる人たちが圧倒的に多いだろうから、その人たちにかき消されるからその疑問も無視されるだけだろう。

そうして追い詰められた大和君へのトドメは葉山君が大和君の無実を信じず、彼を見捨てることだ。

私の予想通りにことが運べば、間違いなく大和君は葉山君に助けを求める。

葉山グループに属している彼なら葉山君のことを『友達想いの優しい人』だと信じて

いるはずだからね。

でも、間違いなく葉山君は大和君を切り捨てる。

そのために屋上に呼び出してまで、『クラスメイトや葉山君のグループの人たちも大和君を疑ってる』だなんて嘘を言ったのだ。

そうすれば、葉山君には今朝の騒動は『大和君が犯人だと疑っていた人たちによるものだ』と信じ込ませることができる。

問題を大きくしたくない葉山君の性格上、クラスメイトのみならず、自分のグループの人たちまで大和君を疑ってるとなれば、三浦さんの時と同じようにするはずだからね。

そうして、信頼している葉山君が大和君を切り捨てれば、間違いなく大和君の心は完全に折れるはずだ。

教室で暴れることは予想外だったけど、あれで彼がチェインメールを流した犯人だということをクリック中が認識した。

そうなれば、葉山君の依頼のチェインメールの騒動は間違いなく収まる。

だって、犯人が本当に大和君ならこのまま終わるし、由比ヶ浜さんたちの言ったような葉山君のグループの他の2人が職場見学のグループ分けで誰かを蹴落そうとしても一人蹴落とされたのだから収まる。

はたまたそれ以外の人が犯人だとしても今回の教室で大和君が犯人だと決めつけられたことにより自分のチェーンメールの罪を大和君が被ってくれたわけだから、もうチェーンメールは流さないだろう。

とどのつまり、一人の犠牲によってチェーンメールの騒動は万事丸く収まったのだ。

犠牲になった大和君が可哀想？

まあ、確かに彼はあくまで”犯人扱い”されただけであって、結局のところ真犯人なのかは分からないからね。

でも、今更犯人は誰なのか調べる必要はあるのかな？

大和君が罪をかぶってくれたことにより、せっかくチェーンメールの問題が丸く収まったのに、またことを荒げるだなんて愚直な馬鹿のやることだ。

それに、彼が犯人でないことを主張しても今更聞いてくれる人はいない。

もうクラスの中では、大和君が犯人だと、決まってしまうているんだから……

それにこんな状況で名乗り出る馬鹿正直はいないだろうし、大和君が犯人でなくても

犯人は永遠に分からないのだ。

……それにそういうなら、何で彼が責められている時に手を差し伸べなかつたの？  
冷静に考えれば、大和君が犯人だという証拠は何もなかつたんだから彼を救い出すことなんて簡単にできたじゃない。

後からいくら綺麗事を言ってもそれはもう後の祭り、今更何を言つたつて無駄なんだから。

それに私がした事がバレたら、私一人が酷いと袋叩きにあうかもしれないけど、私からしてみればみんな同じ穴の貉だ。

誰も大和君のことを信じてあげず、大和君一人に罪を押し付けたんだから。

まあ、最終的にみんなが納得したのだからこれでも良かったのだろう。

1人傷ついただけで丸く収まったのだから、誰も文句は言わない。

だって、誰かの『犠牲なくして解決なんて出来ないんだから』ね…

それにこれで私の平穩が護られたのだ、私の平穩が無事なら他のことなんて知ったことか。

それに、依頼通りチェーンメールはこれで収まるだろうから依頼は達成したし、葉山君が恐れていたグループの雰囲気が悪くなるという問題も解決した。

我ながら完璧な依頼達成だ。

これのどこに文句の付け所があるのだろうか……？

「ふっ……ふはははは……！」

私はそう思うと、笑いをかみ殺すのをやめて浮かべていた笑みをいつものように引つ込めずに声を上げて笑った。

そんな私の笑い声は、教室を蔓延る哀れな大和君に対する罵詈雑言と嘲笑の中に溶け込んでいった。



成り行きと末路を見ても平穩を脅かされたくない。

―比企谷八幡 side 1

今現在、俺は机にうつ伏せている。

何故なら今日は、俺の大嫌いなグループ学習の班決めだからだ。

チエーンメールの騒動が解決し、クラスの奴らの興味は次の職場見学というイベントに向いている。

クラスのやつらは『班決めはどうする?』とか『〇〇に行きたい!』等と無駄にでかい声で騒ぎながら自分の希望する場所を黒板につるんでいる奴らとの名前と一緒に書いていくが、周りの奴らと違って組む相手も居ない俺には、何もする事が無い。

そもそも専業主夫を希望する俺は職場見学なんて行く必要性も感じない。だから、難に『自宅』と職場見学の希望調査書には書いたのだが、それをあのアラサー独身が許さなかったのだ。

だから、何もせずに空いた枠に自分が入るのを、こうして待っているのだ。だんだんと眠くなってきたところで、誰かが肩を優しく揺すってきた。

「八幡、八幡」

ソプラノの声で名を呼ばれ、沈みかけていた意識がゆっくりと浮上する。

「あ、起きた」

瞼まぶたを開けると、そこにはニコツと天使の微笑みで笑う戸塚彩加が居て、俺の顔を覗いていた。

「ど、どうした？」

天使の微笑みを間近で見えて思わず昇天しそうになった意識を何とか保って聞き返す。

「ねえ、八幡は誰とグループを組んだの？」

今現在、俺の所属している2―Fの教室では定期試験後に行われる職場見学のグルー

プと訪問先を決めている。

先日のチェーンメールの騒動が終結し、クラスも少し落ち着いた雰囲気を取り戻して、周囲の奴らは誰とグループを組むのか、どこへ向かうのかで騒がしく話している。

そんな雑音を他所に外を眺めながら座っていると、俺と顔を合わせながらマイエンジェルこと戸塚が聞いてきた。

「決まってねえよ、俺はどうせ余ったところに放り込まれるだろうから………ん？  
八幡？」

たしか戸塚は俺を『比企谷君』と呼んでいたはずだったが……

「う、うん。材木座君が八幡って呼んでたから、仲の良い人同士なら名前で呼んだほうがいいかなって思ったんだけど」

「おい、ちよつと待て。俺と材木座は仲は良くないぞ！ 絶対に！」

むしろあいつのことなんざ思い出したくもない。  
できれば一日中、いや一生無視するまでである。

「じゃ、じゃあ名前で呼ばないほうが、いい？」

わざとなのか、それともこれで素なのか。戸塚は上目遣いで尋ねてくる。  
健気な天使の頼みをここまでされて断れる気なんてなれなかった。

「い、いや、別に構わない」

「そっか、じゃあこれから八幡って呼ぶね。それと、グループが決まっていないうら僕とグループを組まない？」

「戸塚と？」

「うん。僕も誰と一緒に行くか決まっていらないんだ。……………八幡が迷惑でないならどうかな、って」

戸塚と班を組むだつて？

まあ、戸塚と班を組むなら文句は無いよな。

「ぐ腐腐腐……………」

「ちよ、姫菜。鼻血出てるし！擬態しなよ！」

「……………」

その時、俺たちの背後から不気味な笑い声が聞こえた。

その声のした方を振り返ると惨劇とも寸劇とも言える光景が広がっていて俺と戸塚は言葉をなくす。

その光景は葉山グループの黒髪の女子が不気味な笑い声をあげながら、鼻血まで出して俺と戸塚を気持ちの悪い顔で見ているものだった。

確か、アイツは『海老名』って名前だったな…

その近くにいた由比ヶ浜が鼻血を出している海老名さんを宥めていたが、やがて彼女は『キマシタワー！』と大声を上げて始めた。

ていうかあの海老名って人、腐女子じゃねえか。

葉山のグループの連中はどんだけ濃いやつが集まりなんだよ。

俺がそう思っている間に班決めは進んで行き、俺の班のメンバーは戸塚に決まり、もう一人は班決めで余った『佐山』という眼鏡をかけたおかつば頭といういかにも地味な印象のクラスメイトが入ることになった。

ー比企谷八幡 side endー

―富良野英理華 side―

「はい、書いてきたよ。 職場見学よろしくね」

「……………うん」

「あんがと……………」

私は営業スマイルを浮かべながら、黒板に自分の名前と班の他の2人の名前を書き自分の席に戻る。

今は私の所属している2―Fのクラスは職場見学の班決めをしているところだ、みんな自分の名前や友達の名前をあとでこーだ喧しく騒ぎながら黒板に書いている。

騒がしい雰囲気巻き込まれるのが嫌な私は早々にカースト下位の自分でも組めそうな人を見定めてその人たちと班を組んだ。

こんなグループ分けでは、私のようなぼっちは絶対に班決めで余るため問題が起きやすい。

なので、早いところ私のようなクラスから浮いている余りそうな人と組んだ方がいい。

私の班のメンバーは『川崎沙希』という眠そうな顔をしている目付きの悪い無愛想な青髪のポニーテールの女子と、クラスの元女王の三浦さんだ。

何故この2人と組んだかというと、私はこの2人なら私とでも班を組んでくれるだろうという確信があったからだ。

川崎さんは比企谷君と同じように協調性や社交性皆無だからクラスでぼっちなし、三浦さんはテニスコートの時以来クラスで孤立しているから班決めに困っていただろうからね。

……にしても、今の三浦さんを見ているととてもクラスの女王だった人物とは思えな



いな。

派手な金髪は黒髪のショートヘアというかおかつぱに近い髪型にして、長かつた髪をバツサリ切り落としているし、着崩していた服もキチンと正され、スカートの丈も校則の規定通り。

今時の女子高生らしい化粧もしていないし、表情もあの時と違つて常に暗い顔をしており、それがより彼女の今の姿を引き立てている。

クラスのトップカーストに属していた女王様の面影は全くと言つていいほどなく、以前の彼女しか知らない人が今の彼女を見たら別人かと錯覚するほどの地味な女子高生へとなつていた。

あのテニスコート的一件から、クラスの立場も友達も発言力も失つてしまった彼女には何の価値もないため誰も彼女をグループには誘わない。

今の彼女に寄つてくる人は誰もいないため、あれだけ自分が嫌悪していた私が誘つても受け入れるしかないのだ。

自業自得だとはいえ、クラスの女王様がここまで成り下がると哀れに見えてくる。かといつて同情はしないけど……

「いや、にしても、アイツ、マジでなかったな」

「マジそれな！ホンット、有り得ないわ。マジでヤッペーわ!!」

その時、一際大きな声で男子生徒の声が聞こえた。

思わずその声のした方を見ると、その声の主は3人1組でクラスメイトの名前が羅列されている黒板の前でたむろっている男子生徒だった。

その声の主は、ご機嫌で黒板に自分たちの名前を新たに書いているところだった。

それは、この間のチエーンメールの騒動の時の中心にいた葉山グループの男子の1人

である戸部君だ。

その隣には、同じく葉山グループの男子の大岡君、そして葉山君がいる。

大声で話しているのはおそらく昨日のチェーンメールの犯人として言及された大和君のことに關してだろう。

戸部君の台詞に大岡君が大袈裟な程に同意する。

かつてのグループに所属していたメンバーのことなんて元からいなかったように振る舞う2人。

その横では2人を見て複雑な表情を浮かべているクラスの王子様がいた。

「葉山くんもそう思わね？」

「……………」

自分たちに同意を求めて戸部君が葉山君に話を振る。

だが、話を振られた葉山は黙ったままだ。

「葉山くん？」

「……あ、ごめん。少しブーツとしてた」

「もしかして、あの事気にしてんの？」

「い、いや……」

「パないわ。あんな事しでかした奴のこと気に掛けるなんて、葉山くん、マジパないわ。」

戸部君の賞賛に葉山君は笑顔で応えるが、その表情は、私にチェインメールの犯人をカミングアウトされた時のようにどこかぎこちない。

だが、すぐにいつもの爽やかな笑顔で『そ、そんな訳ないだろ、もう俺もあんな奴ことなんて忘れたよ』と戸部君たちに返す。

少し顔が引きつってたけどね…

戸部君たちは葉山君が自分たちに賛同してくれたことに調子付いたのかさらに大きな声で大和君への罵倒を始めた。

一通り大和君の悪口を言つて気が晴れたのか、その後は『職場見学では〇〇がどうだ』や『〇〇に行けば』など、今度は小学生のようなトークを始める。

そんな彼らの会話を暇つぶし程度に聞くのに嫌気がさし、そこに意識を向けるのを辞めて、今度は彼らの話題に上っていた渦中の人物の席を見る。

「……………」

私の斜め前の席に座る大柄な男子生徒に、以前はあの王国の国民の一人だった男に。

以前はあの華やかな王国の国民の一人だった大柄な男は、もうあの華やかな空間にはいない。

今の彼はあの華やかな王国に属していた時とは、全く違う死人のような顔で椅子にポツンと座っている。

果たして彼は今の戸部君たちの喧騒をどんな気持ちで聞いているのだろうか。

柄にもなく私はそう思うと、この席に座る大和君が教室で暴れた翌日に意識を飛ばす。

チエーンメール騒動の次の日に、昨日の騒動こととチエーンメールのことで、担任や大和君の親も交えて話し合いが行われたそうだ。

大和君は最後まで『チエーンメールは俺がやったんじゃない！』と主張し、大和君の両親も息子の無実を信じていたため、クラスメイトの証言から大和君を疑っていた担任との話し合いは平行線のままで、完全に膠着状態となっていたそうだ。

だが、大和君の父親が『息子がチエーンメールを流したという証拠でもあるのか？』と担任に訴えたことで漸く話し合いが進んだらしい。

そう言われて、担任が大和君の携帯を調べたらチエーンメールを彼が送ったという痕跡はどこにもなく、結局は彼を無実として処理することになった。

履歴を消したのか、もしくは誰かの携帯からメールを送っていたのか等と不信感はあるが、問題を大きくしたくない学校側も大和君がやったという証拠がないため彼を無実と信じるしかなかった。

結局はチエーンメールのことは証拠もないため、それについての処罰は学校側からは下されなかつたのだ。

だが、教室で暴れたことは事実なので三日間の謹慎が大和君への処罰になり彼の両親もそれを飲んだ。

だが、クラスメイトはこの処罰に納得しなかつた。

大和君との話し合いが終わつたあと、教室で彼を責めたてた2年F組の生徒たちも、酷く疲れた顔の担任から『証拠もないのに人を犯人扱いするな、大和が帰ってきたら謝るように』と毒にも薬にもならない説教をされたからだ。

このクラスの中では大和君が犯人であることは、もう決まっていることなのに、自分たちも責め立てられたのだ。

当然、彼らが納得できるはずがなく、クラス全体が大和君への不快感をさらに募らせる結果になつた。

そしてこのザマだ。

このクラスでは大和君のチェーンメール犯人だということはもう決定されており、担任からああ言われても誰も彼を擁護しようとも謝ろうともしない。

その証拠に謹慎明けに彼が学校に登校すると大和君はクラスメイトから『クラスの恥』と罵られ、もう彼の居場所が学校にはなかった。

グループからはゴミを見るような目で見られ、近づいても露骨にグループのメンバーは自分を避ける、相模さんや悪口を書かれていた男子たちに至っては暴言や暴力を振るうこともあつたそうだ。

さらに、その日から彼の卑劣な動機がすぐさま拡散されていった。

特にチェーンメールにも書かれていた二股の件は伝染していくうちに誇張され、『他にも手を出した女子がいる』とか『金にものをいわせてレイプ紛いのことまでした』とかとの噂も立っている。

まあ、殆どはクラスメイトが昼食の話の肴にしているのを盗み聞きした話だからどこまで真なのかは分からないけど……

ともあれ、チェーンメールの騒動が解決したと同時に大和君の地位は失墜した。



その証拠に、彼が助けを求めた葉山君や由比ヶ浜さんたちも見て見ぬ振りを決め込んでおり、誰も彼の擁護をしなかった。

他のクラスメイトも誰も彼に救いの手は差し伸べなかった。

所属していた部活の部活メイトからも白い目で睨まれ、半ば追い出されるように退部。廊下を歩けば常にみんなから後ろ指を指される日々。

軽蔑の眼、陰口、そして根も葉もない濡れ衣の噂……。まさに至れり尽くせりだ。

大柄な体格も何だか以前より少し縮んで見える気がする。まあ、こんなにストレス晒されていればやつれていくのは当然だろう。

トップカーストという輝かしい王国から追い出された哀れなゴリラは、今では以前の傲慢な女王様と同じように一人でポツンと一人で椅子に座っている。

職場見学の班決めには、人数が足りず余ったグループに入れられたらしいけど、それでも良い顔はされていなかった。

つまり、大和君は完全にクラスで孤立したのだ。

だが、誰もそれについて悲しむ様子はなく、むしろ悪口メールの主犯を天罰をくだせたという身勝手な正義感に酔いしれて正しいことをしたというような顔をして、いつも通りに過ごしていた。

担任も目立ったイジメには発展していないため、見て見ぬ振りを決め込んでいる。

それでもしばらくは、葉山君だけは下僕の裏切りとも取れる行いへのショックから立ち直れなかったのか表情は暗いままだった。

しかし、彼はこのクラスでは王子様のように扱われている。

その証拠に――：

『いや、葉山君あんな奴のことまで気にかけてくれるなんてマジ優しいわー！』

『やっぱ隼人君ってカツコイイよねー！ あんなクズのことまで心配してくれるなんてくー！』

とのことだ。

あの場で彼を助けてあげることが出来たのにも関わらず、自分は保身のために彼を切り捨てた王様はこの有様だ。

グループの友達に裏切られた被害者にも優しい王子様、今まで以上に持て囃され、株もうなぎのぼり。

まあ、葉山君がこう思われるのは当然だろうね。

人間は自分が気に入った相手には他にも良いところがあるんだと勝手な先入観をプラスの面ばかりを見るからね。

現に葉山君の表面はプラスばかりだ。

イケメンで勉強もスポーツもできて、少なくとも表向きは誰に対しても優しい。

裏の顔はどうだか分からないけど、それを周りの誰かに勘付かせるようなことはない、いわゆる絵に描いたような完璧な人間だ。

戸塚君のテニス騒動の時は私によってあんな結末になったけど、それも彼からすれば『公平な提案』をしたということになっていくのだろう。

少なくとも周りの大多数の人たちははそう見ていた、だから三浦さんの滅茶苦茶な要求を通ったし、相手側に何の利益もないテニス勝負にまで持ち込めた。

いわば、彼の周りに敵がほとんどいない、周りにいるのは自分を慕う者たちばかりだ。そのため、皆が大和君の事で気に病んでいると思ひ込んだ。

実際には違おうのだろうけどね……

………本当に貴方がクラスの雰囲気優先する調子の良い王子様でよかったですよ。

せつかく解決したチエーンメール騒動を大和君への罪悪感からクラスメイトたちに喋られたりでもしたら、私が屋上で葉山君を言いくるめるためについた嘘がバレてしま  
うからね…

そうなれば、大和君への悪意の矛先が私に向いてしまい、私はあつという間に針のむ  
しろだ。

そんなの冗談じゃない、何で貴方達の友情ごつこのために私の平穩が脅かされなくて  
はならないのだ。

ーさて、もう職場見学の班決めは終わったし、やることもないなら勉強でもします  
か…

私は頭の中の考えを頭を振って払拭すると、テキストとルーズリーフを鞆から取り出して勉強を始めた。

「……………」

ふとその時、私の目の前を大和君が死人のような顔をしながら、フラフラと覚束ない足取りで教室から去っていった。

その様子を中位組のグループやかつてのグループのメンバーの数人がヘラヘラと嘲笑うのを横目で見たところで、軽くため息をついてシャーペンを持ち、勉強を始める。

今の光景を見て『やっぱり私の流儀は間違ってたな』と心の中で呟きながら…

中間試験まであと少し、放課後になって帰宅途中、いつもより大きめのバッグをコインロッカーから出しながら、私は個室のあるネットカフェに入って試験に向けて勉強しようかと考えていた。

共働きの義父母は、今朝から出張で明後日まで帰ってこないし、義弟の信頼も『今日は友達を家に泊めるから帰ってくるな』と私に言ってきたから今日はあの人に帰れない。

そのため、今日は安価で寝泊まりができるネットカフェか個室ビデオ店に泊まらないといけない。

『空いている部屋がありますように』と心の中で祈る。

まあ、こんなのは慣れっこなので、今更自分が哀れだなんて思わないし、対処法もちやんと考えている。

義父母も信頼が友達を呼ぶたびに私を家から追い出しているのは知っているが、私にその時のお金は渡さないため、こつそり義父か義母のへソクリからお金を調達しているのだ。

これは幼い頃から信頼もよくしていることなので、たとえ盗んだことがバレても信頼の仕業だと思い込んでくれているため、義父母はへソクリが減っていても何も言わない。

盗み出すのは簡単だった。

まあ、信頼が私に自慢げに『義父母のへソクリの隠し場所』と『自分が盗んでも叱られない』ということをペラペラ喋ってくれたからなんだけどね。

この時ばかりは、信頼の思慮の浅はかさに感謝した。

これ以外にも、私がかから締め出されてネットカフェやらで夜を過ごすのは、今の家族ではよくある事だ。

義父母や信賴の誕生日などの記念日などでは『俺たち家族の団欒の邪魔をするな!』と義父から言われているからだ。

今では、いつでも外泊できるように、自分でバイトした金で買った日曜消耗品と義父母から買ってもらった最低限の着替えが備わったバッグを納戸に常備するほどだ。

そして、学校に登校する時にコインロッカーに自分のバッグを預けて帰りに取りに行き、安価で休める場所で夜を過ごすのだ。

小学生の頃は公園で水で空腹を満たして寝泊まりしていたが、警察に補導されそうになつてからそれは出来なくなった。

それは私のためにも絶対に避けたいことだ。

警察に補導なんてされたら義父母や信賴が私にしている虐待のこともきつと露見する。

そうしたら、義父母は逮捕されてしまう、そうすれば私の将来はどうなるのだ。



犯罪者に育てられたとなれば、たとえ被害者だとしても世間は優しい目では見てくれない。

そうなれば、私の将来は苦しいものになってしまう。

それを避けるために、たとえば奴隷になつても今の家族には逆らわない方が身のためなのだ。

私が今の状態から抜け出すには、勉強するしかない。

私の志望校する大学は、国立の大学なのだから。

私立の大学なんて学費が高すぎてあの義父母が出してくれとは思えない、私が大学に進学するには学費が安く就職にも有利になりやすい国立の大学しかないのだ。

私は自分の将来のためなら努力は惜しまない。

本来なら誰もが持っている『親』というスポンサーを私は持っていない。

自分でも思うけど、私は社会のカーストの最底辺に位置しているのだ。

その最底辺の私が入並みに這い上がるには努力しかないからね。

利用できるものは全て利用する、成績が良ければ推薦枠も取ることは出来るので、単なる定期テストも一点でも高い成績を取りたいのだ。

ーと言つても、日頃から勉強に励んでいる私からしてみれば、今回の中間試験の範囲はそんなに難しいものではなかったから、少し心に余裕ができていくけどね。

ーピロロロロロロロ………！！

「……」

その時、突然私の携帯の着信音が鳴り響いた。

私は驚いて携帯を見る。

いきなり鳴ったから驚いたんじゃない。

私の携帯番号を知っているのは10人もいない、にもかかわらず、鳴ったから驚いたのだ。

慌てて携帯を開いて画面を見ると、そこには『由比ヶ浜結衣』と最近登録した人物の名前が表示されていた。

変な相手からの着信音じゃないことにホッとすると、通話ボタンを押して応答した。

「もしもしっ。」

『あつ！ ふらのん！ ねえ、奉仕部に新しい依頼が来たんだ！』

「………新しい依頼？」

「こんな時間に依頼？」

今日は奉仕部に依頼人はこなかったんだけど…

『とりあえず、ふらのんも来てよ！ 場所はねー！…』

私が疑問に思つてると由比ヶ浜さんが、ここに来てと場所を伝える。

私に来ることはもう決まつてるのか、相手の了承も得ずに話を続ける由比ヶ浜さんに内心憤りつつも了承の返事を返す。

幸いその場所は近くのカフェだったので、5分くらいで行けそうだ。

——また、厄介な依頼とかじゃなければいいんだけど…

この奉仕部に入部してからロクな依頼がない、今度はそうじゃないように心の中で祈りつつ私はそのカフェに足を進めた。

でも、私のその願いは簡単に裏切られる結果となった。

この奉仕部にいる限り平穏は訪れないのに……

恐れを抱いても平穩を脅かされたくない。

由比ヶ浜さんに電話で呼び出された私は彼女から指定されたカフェに入る。

宿泊用のバッグは雪ノ下さんたちに見せるわけにはいかないため、カフェの近くに  
あったコインロッカーに預けた、コインロッカーのお金が無駄になったからその分を切  
り詰めないといけないな……

そう思いながらカフェに入ると、他の学生たちも試験勉強をするためにここを選んで  
いたのか、高校生や中学生で店内はごった返していた。

「あつ！、ふらのん！、こつちだよ！」

マニユアル通りに接客する店員に適当に対応しながら、由比ヶ浜さんを探すために店  
内を見渡すと声がかかった。

声のした方を見ると由比ヶ浜さんが私に向かって手を振っている。

由比ヶ浜さんに言われるままに彼女が手を振っているテーブルに向かうと、そこには

彼女の他に雪ノ下さんや比企谷君の奉仕部のメンバーと戸塚君がいた。

その向かいには中学生らしき男女が座っている。今回の依頼人とは彼らのようだ。

1人は目がパッチリと大きく、アホ毛が髪にあるいかにも元気つ娘という表現が当てはまりそうな少女。

もう1人はイケメンの部類に入りそうだが、どこか内気で気の弱そうな印象を与える少年。

奉仕部の面々は雪ノ下さんはいつも通り澄ました顔で椅子に座っており、比企谷君は気の弱そうな少年を見つめている、いや睨んでいると言った方が正しいね。

『何か嫌な予感がする』という考えを顔に出さないようにしながら、私は由比ヶ浜さんに言われるままに椅子に座った。

「それで、一体どうしたの?」

私は椅子に座ると、依頼内容を聞くためにこの中では一番頭のいい雪ノ下さんに尋ねる。

私がそう聞くと雪ノ下さんが簡単に依頼人と依頼内容について説明してくれた。

簡単に纏めるとその少年はやはり依頼人で川崎大志と言って、依頼内容は姉が不良化して夜遅くに帰ってくるから何とかして欲しいということだった。

でも、驚いたな、大志君の姉が私と職場見学で一緒の班の川崎沙希さんだったなんて。

まあ、川崎さんは比企谷君と同じように社交性皆無みたいだから、クラスメイトとはほとんど関わり合いを持ってないし、私自身も川崎さんとの関わりは職場見学の班決め以外は持ってないから、彼女がどんな人間なのかは分からないけどね。

私が雪ノ下さんの説明にそう感想を抱いていると、話し合いが動き出した。

「大志くんのお姉さんっていつからそんな風になったの？」

「姉ちゃん、総武高校行くぐらいだから、中学の時とかはすぐえ真面目だったんです。それに、割りと優しくかったし、よく飯とか作ってくれてたんす。高1の時も、そんなに変わんなくて……。変わったのは最近なんすよ」



「高2になってからってことか」

比企谷君が言うのと大志君は「はい」と相槌を打って肯定の意を返す。

「それに帰りもずっと遅いし、親の言う事全然聞かないんすよ。俺が何か言ってもあんたに関係無いってキレルし……」

「遅いってどのくらい？ 高校生なら、遅くもなるんじゃない？ お兄ちゃんもたまにあるし」

「……でも五時過ぎとかなんすよ」

「いや、むしろ朝だな。寝れても精々、二時間やそこらか」

比企谷君がそう言うのと大志君が「そうなんすよ」と再び相槌を打つ。

「そ、そんな時間に帰って来て、ご両親は何も言わないの、かな？」

そんな中で、戸塚君が心配そうに話し掛ける。

「そつすね。うちは両親共働きだし、下に弟と妹居るんであんま姉ちゃんにはうるさく言わないんす。それに時間も時間なんで滅多に顔合わせないし……」

大志君はそこまで話すと目を伏せて、一旦話を区切った。

「まあ、子供も多いんで結構暮らし的に一杯一杯なんすよね。たまに顔を合わせても何か喧嘩しちまうし、俺が何か言っても『あんたには関係無い』の一点張りで……」

大志君は困り果てた様子で肩を落とす。

それを見て雪ノ下さんがポツリと呟いた。

「家庭の事情、ね……。どこの家にもあるものね」

そう言った雪ノ下さんの顔は今までに見たことがないほどに陰鬱なものだった。そ

の顔は悩みを話しに来た大志君と同じように、否、それ以上に泣き出しそうだった。

雪ノ下さんの家庭にも何か大志君と同じような問題があるのだろうか、まあ、私ほど酷くはないと思うけど……

私がそう思っていると、雪ノ下さんは気を取り直したのか、大志君に向かって口を開く。

「さすがに朝方まで総武高校の生徒が働いているのは見過ごせないわね。奉仕部として川崎さんを更生させましょう」

はあ……？ またなの……？

……とテニスコートやチェーンメールの時のように部長が、部員である私たちへの確

認めせず、自分で勝手に奉仕部の依頼として受けた。

つまり私もそれに含まれているということだ。

周囲のことを無視して自我を貫き通す、独りよがりな部長に思わずため息をつきたいが、何とかそれを飲み込んで話を聞く。

それから川崎さん宛あてに変な所から電話がくるらしく、『エンジェル』とかいう店で、大志君は「その店は絶対ヤバイっす！」と興奮している。

比企谷君の妹の小町さんと戸塚君はよく分かっているようにだが、比企谷君はすぐに分かったのか「キヤバクラエンジェルとかありそうだよな」というと、大志君は恥ずかしさの余り、テーブルに顔を突っ伏した。

……にしても意外だったのは、その依頼の承諾には比企谷君が特に異議を唱えなかったことだった。

怠惰で捻くれ者を形にしたような彼なら、雪ノ下さんたちにいつものように難癖をつ

けるとかするかなと思つていたけど、それを特にしなかつた。

疑問に思つてたけど、その理由はすぐに分かつた。

比企谷君が依頼人の大志君に『小町の彼女ならしばく』とか物騒なことを言つていたからだ。

どうやら比企谷君は妹の小町さんを溺愛しているらしい、世間一般でいうシスコンというもののようだ。

その可愛い妹がお願いしてるのだから、兄としていい格好をしたいのだろう。

でも、比企谷君のその姿は第三者の私から見ればこうだ。

『気持ち悪い』

この一言に尽きるけどね。

普通は妹のことが大事ならば、本当に彼が妹の彼氏だったとしたら、その彼氏と仲良くするべきでしょうに『俺の妹に近寄るな』と言つてるなんて、俺のものに近寄るなど言つてるようなものだろう。

見た感じ大志くんは不良やヤンキーのような人には見えないから、比企谷君の大志くんに対しての発言は妹のことを心配している感情からそう言ってるのではないのだ。

つまり、比企谷君が大志くんに向けている感情は、向けられた方からしてみれば理不尽なことこの上ないものであり、ただ『自分の妹を他人に取られたくない』という醜い独占欲からくるものだ。

何ともまあ醜いものだ。由比ヶ浜さんが比企谷君を『キモい』と言っている理由が少しだけ分かった。

とまあ、比企谷君のシスコンについて考える、軽い現実逃避はこれくらいにして依頼の方に考えを戻そう。

私がそう考えているうちにも話し合いは進み、奉仕部の3人と大志君たちは依頼について話し合っている。

でも、私は話し合いの最中はほとんど発言せずに、適当に彼らの話に相槌を打ちながら聞いていた。

……本音を言えば、私はこの依頼には関わりたくない。

ていうか、そもそも雪ノ下さんに言いたいんだけど、この依頼を受けることは私たちは大きなデメリットがあるのに気づいてるの？

大志君から『エンジェル』とかいういかにも夜のお店らしき名前が出てきた時、何だか依頼の雲行きが怪しくなってくるのを感じた。さらに、姉は朝の5時くらいに家に帰ってくるときている。

これから推測すると、おそらく大志君の姉がしている仕事はいわゆる『夜の仕事』なのだろう。

何の理由でそうしているのかは分からないが、夜の仕事をしている人に関わるのは私たちにとって大きなデメリットがある。

それは、私たちがその『夜の仕事』をしている人と関わったことにより私たちに火の粉が飛んでくるかもしれないからだ。

私たちは高校生だ、万が一深夜の店で働いている人と関わりを持ったことが知られたら最悪の場合は私たちまで停学などの被害を被る。

そんなの真つ平だ、何で赤の他人のために私がそんな目に合わないといけないのだ。

それに依頼を引き受けた時に雪ノ下さんが言った『川崎さんを更生させる』なんてことは出来ないと思う。

雪ノ下さんの考える川崎さんを更生させる方法は、彼女の性格とチェーンメールの時の行動から考えるに、川崎さんの働いてるお店に行つて川崎さんを説得するか、学校側に報告するかのどちらかだろう。

正論を振りかざして自分の自我を貫き通す彼女らしい選択だけど、そうになると私が危険しているような事態になってしまう。



そうだったら最悪だ。彼女は自分だけではなく私たちまで下手をすれば被害を被るのを理解しているのだろうか？

そもそも『夜の仕事をしている人を更生させる』と言っても弟の大志くんの言葉にすら耳を傾けなかったんだから、友人でもなければ恋人ですらもない赤の他人である奉仕部のメンバーが説得したところで結果は一緒だ。

むしろ、夜の仕事をしていることをバラしたとして大志くんが姉から責められるかもしれないのだ。

それなら姉弟の兄弟仲は却って悪化するから逆効果だ。

それに、私たちが関わったことにより深夜の店で働いていることが公になったら学校側から川崎さんには重い処罰が下されるだろう。

進学校である総武高校ならば推薦での進学は絶望的、処罰も良くて停学、下手をすれば転校という形の退学処分になってもおかしくない。

それに加えて夜の店で働いているということは店側にも年齢詐称して働いているのだろうから、店側からも損害賠償を請求される可能性だつて多いにある。

そうだと本末転倒、川崎さんには辛い未来が待っている。

他にも考えれば考えるほどデメリットがある。

正直に言つて、この依頼は私たちのようなただの高校生が何とかなる依頼ではない。それなのに雪ノ下さんは『総武高校の生徒が深夜働いているのは私は見過ごせない』などと言う軽はずみかつ身勝手な理由で受けた、彼女はこの依頼のリスクも事情も理解していないように感じる。

平塚先生に問いたい、『本当にこの人のもとで人間は矯正できるのか？ この人自身が矯正されるべきなのではないのか？』と。

奉仕部に入部させられるまでは、雪ノ下さんの表面しか私は知らなかつたから、成績も良く頭の良い人だと思つてたけど、これを見ているととてもそうだと思えないな…

まあ、問題は起こしたくないからそんな事はみすみす言わないけど…

私がこの依頼と雪ノ下さんたちへの不満を内心で呟いている間にも話し合いは進んでいる。

独裁者のような部長の一声により依頼を受けることが確定したため『川崎さんを更生させる』という名目の元で話し合いが進んでいるようだ。

「何にせよ深夜に高校生が働くっていうのはまずいよな、法律で禁止されてるんだからな」

「そうつすよね！ お義兄さん！」

「お義兄さんと呼ぶな、クソ野郎。……となると、その店は川崎が高校生だということを知っていてこつそり働かせているのか。それとも、川崎さんの方がそれを隠しているのか……」

「とにかく、これ以上は川崎さん本人に聞いて辞めさせるしかなさそうね」

比企谷君の意見に雪ノ下さんが川崎さん本人に確かめるべきだと言った。

てか、家族にも隠してるんだから、赤の他人の私たちが出しやばって聞いたところで正直に答えるわけじゃないでしょう……

「で、でも、どうすればいいのかな？だってどこで働いているのかも分からないし、働いているお店を辞めさせることができたとしても、また他のお店で働き始めたら意味無いよっ。」

戸塚君が核心を突いた事を言う、この意見には私も賛同する。

その通りだ、川崎さんは何らかの事情で朝方までバイトをしているのだから、依頼解決をするならその根本的な問題の解決をしないと意味が無い。

「つまり、対症療法と根本治療、どちらも並行してやるしかないというわけね」

「そうだな。ちょっと待ってろ」

そう言って比企谷君がスマートフォンを取り出した。

「何してるのヒッキー？」

「この近辺にある朝方まで営業している店で、エンジェルの名前が付く店を探しているんだよ。……………お、ヒットしたぞ」

「それで？」

「どうやら比企谷君は大志君が言っていた『エンジェル〇〇』に当てはまる店がないか検索をしていたようだ。」

「検索結果がヒットしたと聞いて、雪ノ下さんが先を促す。」

「あるのは二店舗だけだ。一つは『メイドカフェ・えんじえるてい』。もう一つは『エンジェル・ラダー 天使の階ぎざはし』」

「二つ目はメイドカフェだって分かるけど、もう一つのお店は何のお店なの？」

「戸塚君も興味を引かれたように聞いてくる。」

「こっちはバーだな。ホテルの最上階にある店みたいだ」

「川崎さんはどちらかの店で働いているとして、どちらから周ろうかしら」

「川崎が働いていそうな店から周ればいいだろう」

「そうだね、富良野さんはどちらだと思う？」

話し合いで発言しなかった私に戸塚君が意見を求めてきた。

そう言われても、こんなリスクの大きい依頼に関わりたくない私は川崎さんがどこで働いてるかなんてどうでも良いし、どうやってこの依頼から抜け出そうかの方に考えを移したいくらいなのに…

でも、そんな事を言えるはずないのでなるべくまともな意見を頭の中で検索してみんなに話すように返す。

「大志君はどう思うかな？　この中で川崎さんを一番よく知ってるのは、弟の大志君だと思うんだよね。お姉さんの性格や趣味から考えてどっちを働き先に選んだのかな

「？」

私は大志君に意見を求めた、何と言つてもこの中で川崎さんと強い繋がりのあるのは弟の彼だ。

私を見た限りだけど、ぼつちで協調性もなく無愛想な川崎さんは友人もいないだろうし、この中でもクラスのみんなでも川崎さんの事をよく知っている人はいないだろうか  
らね。

それならば、弟の大志君に尋ねた方が一番真実味がある。

大志君は私から話を振られて驚いた顔をした後『そつすね…』と顎に手を当ててしばらく考えこんで口を開いた。

「聞いたわけじゃないんですけど、姉ちゃんは『メイドカフェなんてくだらない』とか言いそうなんで、どつちかと言えばバーだと思うつす。今思い返して見れば、電話をかけてきた店長の人も、話し方が落ち着いているというか、紳士的というか、そんな感じがしたんで」

「ならそう見た方が良さみたいだね、川崎さんはバーで働いてるんじゃないかな？」  
「なら決まりね、今夜行ってみましょう」

「……………はあ……………」

私たちは大志君と連絡先を交換し、一度それぞれの家に帰ることになった。



なぜなら、こういうった店ではそれにふさわしい服装でなければ入店を断られるかもしれないらしい。今までバーになんぞ行ったことの無い私たちにそう語ったのは雪ノ下さんであつた。

ちなみに戸塚君は家に帰らなければならぬらしく、バーに向かうのは奉仕部の4人ということになつた。

私も戸塚君と同じように断つたのだが『貴女も矯正の一環として来なさい』と雪ノ下さんに言われて、由比ヶ浜さんからも『ふらのんも行こうよ！ 大志君のお姉さん助けてあげようよ！』と言つたため断れずに行かないといけない羽目になつてしまった。

私は川崎さんのお姉さんがどこで働いてるかの意見を出したら適当な言い訳でこの依頼から抜けようと思つてたのにこの有様だ。

おまけに雪ノ下さんの『ふさわしい服装に着替えてくるように』と言われた事で、大人っぽい服装なんて持つてない私は貸衣装屋を探し出して着ることになつた。

ホテルの最上階にあるようなバーに入るのに相応しい綺麗な服装は借り賃もとても高い、お金のない私は一番安い藍色のドレスっぽいのを借りたけど、借り賃だけで貯めておいた今月中のネットカフェの宿泊代の半分がなくなつてしまつた。

コインロッカーのお金を差し引いても予定外の出費に大赤字だ。

そのせいで今月はもし追い出されたら寝泊まりは公園で、水だけの食事をしないとい

けないかもしれない…

本当にこの依頼のせいで踏んだり蹴ったりだ、何で私がこんな目に合わないといけなのだろうか…

私がそう憤りながら待ち合わせ場所に向けて歩いてみると、比企谷君と雪ノ下さんと由比ヶ浜さんはもう集合していた。

ちなみに比企谷君はスーツ姿、雪ノ下さんは白いサマードレスに黒いレギンス、由比ヶ浜さんは上にはデニム生地の手短なジャケットを羽織り、下は黒いチノに金ボタンのあしらわれたホットパンツ。

「スーツは良い物なのに、目が腐っているせいで台無しね。比企谷くんはギリギリアウトとして……」

「アウトなのかよ」

雪ノ下さんが比企谷君にいつものように毒を吐くと今度は私の服装を値踏みするように見始める。

「まあ、富良野さんの服装ならそこまで言われなくてもいいでしょう。けれど、由比ヶ浜さんは厳しいかもね」

「え？だめなの？」

「ええ。女性の場合、そこまで小うるさくはないけど……」

そうやって雪ノ下さんは由比ヶ浜の服装を上から下まで目を通す。

まあ、確かに普通の彼女と同じような服装だからね、雪ノ下さんの言うようなバーへの入店は断られても不思議はない。

「しょうがないわね。私がコーディネートしてあげる。私の家に来なさい」

「え、ゆきのんの家、行けるの!? 行く行く……あ、でもこんな時間に迷惑じゃない？」

「気にしなくてもいいわ。私、一人暮らしだから」

「この子、できる女だ!？」

雪ノ下さんの一人暮らし宣言に由比ヶ浜さんが大袈裟に驚く。

てかその基準は何なのだろう、一人暮らししている女性は全員できる女だと思ってるのかな？

「じゃあ行きましようか。すぐそこだから」

雪ノ下さんが後ろの空を振り仰いだ先には、この一帯でも特に高級なマンションがあ

り、彼女の住まいは摩天楼の大分上らしい。

由比ヶ浜さんを着替えさせるため雪ノ下さん達と別れ、立っているのも疲れるので私と比企谷君はマンション内のエントランスにあるソファア―に腰掛けた。

流石、マンションのソファア―、家の物とは一味違うなど密かに座り心地を堪能して2人を待つ。

ソファア―の座り心地にリラックスしていると、横から声がかかった。

「……………お前、何でこの依頼を受けたんだ？」

「……………え？」

会話もなく静かな空間を壊すように比企谷君が私に問いかけた。

突然話しかけられた事にも驚いたが、何より質問の意図が分からずに思わず素っ頓狂な声を上げる。

ポカンとしている私に比企谷君はこちらを見ないまま話を続ける。

「お前、戸塚が『門限があるから帰る』と言つてた時に一緒に帰ろうとしてたよな、それに話し合いにも積極的に参加せずに戸塚に話振られるまで意見すらも出してなかつたな、あれはお前の『この依頼に関わりたくない』という意味表示だろ？」

『まあ、その後に雪ノ下たちのせいでダメになったみたいだがな』と比企谷君は言った。

比企谷君の言葉を聞いて私は冷や水を浴びせられたかのような錯覚に陥つた。

思わず比企谷君の方を見ると比企谷君は『あの時』と同じ目をしていた

『あの時』、それは奉仕部に材木座君がラノベ原稿を読んでほしいと言う依頼を解決して彼が帰つた時だ。

彼の腐つた目から『疑い』や『不信心』などのマイナスな感情を含んだ視線が私に向けられる。

比企谷君の目がこう言っている。

『お前、本当にそう思っているのか?』と

「あ………! あ………!」

背筋がさらに寒くなり背中に気持ちの悪い汗が流れ始めた、彼が自分に向ける視線に強い恐怖心を抱いた、あまりの恐怖に声も上手く出すことができない。

あの時のように心の奥底から気持ちの悪い何かが上がってくる、まるで自分を奈落の底に引き込もうとするような感情だ。

唇を震わせながら声にできない悲鳴を口から出していると、比企谷君は再び口を開く。

「気になるんだよ、それなのに何でお前がこの依頼を受けたのかが」

私が答えられずにいると比企谷君の疑いの視線がさらに強くなった。

普段ならよく回る頭も観察眼も今は恐怖心が理性より勝ってるせいか上手く働かない。

それでも必死に頭を働かせて言葉を引き出す。

「な、何を言ってるか分からないよ… わ、私は川崎さんを助けてあげられたらなと思っただからだよ…?」

必死に頭を働かせて何とか捻り出せたのは、いつもの自分なら失笑してしまうほどの陳腐な言い訳染みた言葉だった。

おまけに比企谷君の疑問にも答えられてない、自分で自分を首を絞めている。

でもそれを説明できるほど今は頭が働いていない、そのせいで私の中の恐怖心がさら



に大きくなっていく。

比企谷君は「ふーん… そうか…」と釈然としないような声を上げた。

これでは何も解決していない、彼の追及から逃れたい、私は心の奥底でそう叫んだ。

「それにお前…」あら、ゴミガヤ君、こんな所で不貞行為を働くのはやめなさい、富良野さんも怯えてるわ、警察に通報しましょう」……」

「ふらのんをナンパしてるの!!? ヒツキーキモい! ふらのんも嫌がつてるじゃん!!」

その時、横から聞き覚えのある2つの女性の声が聞こえた。

そこには、携帯を持って画面に110と表示された画面を見せつけるようにしている雪ノ下さんと、ドレスに着替え終わった由比ヶ浜さんが立っていた。

雪ノ下さんも着替えたらしく先ほどと打って変わって漆黒のドレス、由比ヶ浜さんは深紅のドレスを着ていた。

彼女たちには比企谷君が私に言い寄ってるように見えたのだろうか、いつもの罵倒とも比企谷君詰め寄る。

いつもなら内心で彼女たちの毒舌や理不尽さにツツコムのだが、今は彼女たちの登場に感謝している。

彼女たちの登場のおかげで比企谷君の視線から逃れることが出来て、この場を誤魔化せた。

「は、早く行こうよ、あまり遅くなると大変だしね！」

チャンスは今しかない、さっきのような状態に戻るのを防ぐために私は早くバーに行くように提案した。

思わず少し大きな声が出てしまったが、雪ノ下さんが『そうね、行きましよう』と言ったことで、由比ヶ浜さんも賛同し、川崎さんの働いているバーに早速行くことになった。

比企谷君は微妙な表情を浮かべたまま2人に着いて行っただが、それでも私は良かった。

あの場を切り抜けられたことに私はホツとして小さく息を吐いてソファアに力が抜けたように座り込んだ。

「ふらのん、どうしたの、行くよ？」

「う、うん… そうだね…」

由比ヶ浜さんの声に我に返ってソファから立ち上がる。

私は気持ちの悪い汗をハンカチでふき取ると、奉仕部の3人に足を引きずるように歩  
きながらついていった。

だが、比企谷君のあの疑いの視線は頭に焼き付いて離れない。

私はそれを払拭しようと頭を大きく振って雪ノ下さんたちを早歩きで追いかけた。

前を歩いている奉仕部の2人とそして私の恐れている彼を見て私は心中で一言呟いた。

いつになったら私に平穩が訪れるのだろうか……と……

## 自分のために平穩を脅かされたくない。

—富良野英理華 side—

「さあ、行きましょう」

あれから私は雪ノ下さんたちについていきながら恐怖心から震える身体と波立つ感情をなんとか鎮めて心を落ち着かせた。

でも、歩いている最中に比企谷君がこちらを見るたびに感情が波立ち心臓が早鐘を打ち、その度に自分の心を落ち着かせなければならなかったが、そこは辛い生活で培った自制心で何とか外に出さないように頑張る。

これから川崎さんが働いているかもしれないバーに行くのだ、私の正念場はここからなのだ、比企谷君に怯えて気を乱してなどいられない。

何とか心を落ち着かせて私は、先導する雪ノ下さんについていき、目的地のバーにたどり着いた。扉を開くとそこは異質な空間だった。

明かりは優しく穏やかで、どこか薄暗いとも感じる。きらびやかではなく、落ち着い

た雰囲気。

「間違いなく大人のバーだ、正直、私たちのような高校生が来るような場所ではない。

「ね、ねえ、あたしたち場違いなんじゃない？」

バーの空気に圧倒されたのか、由比ヶ浜さんは怖気づいている。

「そう思えば余計に場違い感が出るよ、もっと毅然としていた方がいいと思うけど……」

「なんでふらのんはそんなに自然としてるの？」

「だってここまで来て帰るわけにもいかないよ、だったらもうなるようになれだよ」

いまさらドタバタしたところでしょうがない、さっきのこともあるから比企谷君からは一刻も早く離れたいけど、そんな事を言えるはずもないから、ここは我慢するしかない。

「そうね。あまりキヨロキヨロしていると怪しまれるから、ごくごく普通にしてちょうだい」

「その普通が難しいよ……」

雪ノ下さんから言われても嘆いている由比ヶ浜さんを鬱陶しいと思いつつも、私と比企谷君と雪ノ下さんは奥へと進む。

てか、私を呼び出して率先して依頼を受けたのは貴女なんだから、ここまできて嫌だと騒ぐようなことはしないで欲しいんだけど…

私がそう由比ヶ浜さんに対して内心で毒づき、雪ノ下さんたちの後に続いた。

―富良野英理華 side end―

↓川崎沙希 side ↓

夜も更けて大人たちの時間になったバーで、私はバーテンダーの制服に身を包み、グラスを磨いていた。

此処でバイトを始め、しばらく経つが、やはりこんな夜遅くに働くと言うのは、周りの目が気になるし正直辛いことが多い。

今日もいつものように仕事をする、私が高校生だとバレないように最新の注意を払って。

私の家は裕福ではないし、今年中学3年生になって受験を控えた弟の志が塾に通うようになった。



来年、私の受験の時は大志は受験を終えて塾も辞めてるだろうし余裕はあると思う。でも今年は無理だ。

私は将来を見据えて今のうちから予備校や夏期講習とかに通いたいと思う。だからバイトをすることにした。

コンビニやファミレスとかの時給850円そこらのバイトでは塾の学費や予備校の夏期講習に参加できるだけの目標金額にはとても届かない。

それに、空き時間を全てバイトに当てるのでは勉強ができないから本末転倒だ。

そのため、私はどうせ同じ時間を割くならと深夜のバイトをすることにした。

もちろん怪しい職業で無く、ホテルのバーテンダーである、当然年齢は誤魔化して働く。

でも、寝不足は思った以上にあたしに悪影響を与えていた。

遅刻は増え、授業は集中できない日が増えていき、この間の行われた小テストでは平均点を下回る散々な結果になっていた。

嫌な事を思い出してため息をつきながら仕事をすると、弟達の事が頭を過ぎる。

今朝もまた『こんな時間まで何をしているんだ』と、大志から問い詰められて、最終的に口論になってしまった。

大志が心配してくれているのは、私にも痛いくらい分かっている。

しかし、明け方まで仕事をして、過労により疲れていたのと、もう何度も関係無いと言ったのに、未だに何をしているのかしつこく聞いてくる事に苛立つて、それを大志にぶつけてしまった。

大志だけでなく、両親や、下のきょうだいにも悪いとは思っているが、この事を話すつもりも、バイトを辞めるつもりも無い、大志たちのためにも辞める訳にはいかないのだ。

誰も気付かない程小さく、しかし、それに込められた苦惱は計り知れない溜め息を吐くと、カウンターに三名の客がやって来る。

ああ、客がやってきた。

ダメだ、仕事中にこんな事を考えるのは…

私は家族のことを考えて緩んでいた気を引き締めるとやりかけの仕事であるグラス磨きに意識を集中させた。

―川崎沙希 side end―

―富良野英理華 side―

「あ、あれ川崎さんじゃない？」

少し進んだところで、由比ヶ浜さんがカウンターに立つ女性バーテンダーを指す。

私ほどではないけどすらりと背が高く、顔立ちは整っていて、泣きほくろが印象的な女性、あの人は間違いなく川崎さんだ。

「あれが川崎か……」

「うん……。つてヒツキーも同じクラスじゃん！」

由比ヶ浜さんが比企谷君に小声で指摘しているが、同じクラスと言われても、ぼつちで他人との協調性が皆無の比企谷君にそう言われても分からないだろうね。

「とりあえず行きましょう」

雪ノ下さんが先陣を切ってカウンター席に座る。

「捜したわ。川崎沙希さん」

「雪ノ下……」

カウンター越しに座り、雪ノ下さんが話しかけると、川崎さんの顔色が変わる。その表情は親の仇でも見るかのようなもので、はつきりとした敵意が込められている。

近くで見ると、とても美人だけど彼女はもともと目つきが悪いのもあって、さらに怖い顔になっているけどね。正直に言ってヤンキーとかと間違えそうになった。

「いんげんは」

そんな川崎さんの気持ちを知ってか知らずか、雪ノ下さんは涼しい顔で挨拶する。

2人の視線が交差し、火花が散りそうな雰囲気だ。

「ど、どもー……」

雪ノ下さんに続いて由比ヶ浜さんも挨拶するが、川崎さんと雪ノ下さんの迫力を見てビビったのか、風見鶏らしい日和った挨拶をする。

「由比ヶ浜か……、一瞬わからなかったよ。そっちの奴は富良野か。じゃあ、残りの彼も総武高校の人？」

川崎さんは私のことも職場見学の班が同じだったため覚えていたようだ、でも、彼女もクラスメイトとの付き合いが殆どない比企谷君のことは知らなかったらしい。

「あ、うん。同じクラスのヒツキー。比企谷八幡」

「つーか、由比ヶ浜、俺のフルネームちゃんと知ってたのな。驚きだ」

「どう言う意味だ!?？」

「由比ヶ浜さん、うるさいわよ。それにしても、同じクラスの人に顔も覚えられてないなんて、流石は比企谷くんね」

雪ノ下さんが感心したような侮蔑の言葉を比企谷君に投げかける、自分が見下す相手には一々毒舌を吐かないと気が済まない性質なのだろうか。

そんな私達を見て、川崎さんはふっと何処どこか諦めたように笑った。

「そっか、ばれちゃったか。……何か飲む？」

「私はペリエを」

「あ、あたしも同じのをっ!？」

「富良野は？」

「……なら、私も同じので良いよ」

「比企谷だっけ？あんたは？」

「俺はMAXコー」

「彼には辛口のジンジャエールを」

比企谷君の注文を雪ノ下さんが容赦無く遮さえぎった。

川崎さんは注文を受けると慣れた手つきで、4人分のグラスにそれぞれの飲み物を注ぎ、そつとコースターの上に置く。

にしても、飲み物代の出費も増えたな… これは追い出された時は本当に公園生活を検討しないといけないかもしれない…

私は増える出費に内心泣きたくなつたが、何とか顔に出さないようにする。

「それで、何しに来たのさ？」

そんな私の内心とは裏腹に川崎さんは、雪ノ下さんと異なる冷たい視線で、私たちを見る。

大方、自分がこんな時間に働いている事を咎めにでも来たとでも思ってるのだろう。まあ、それ以外でここに来るなんて考えられないからそうなんだけどね。



「何、大した理由じゃない。最近帰るのが遅いことを心配したお前の弟に、相談を受けた。そして、此処ここで働いているんじゃないかと思って来た。それだけの話だ」

「そんな事言いになぞわざ言いに来たの？ごくろー様。あのさ、見ず知らずのあんたにそんな事言われたくらいで辞めると思ってたの？」

まあ、私の予想通りの返答だ。

身内である大志君の説得にも応じなかったのだ、赤の他人である私たちの説得なんて聞く耳を持つはずがない。

私はグラスに注がれたペリエを一口飲み、そう内心で呟いた。

「大志に何言われたか知らないし、どう言う繋がりかも知らないけど、あたしから言つと

くから気にしないで良いよ。……だから、もう大志と関わらないでね」

そう言って、川崎さんは目に強い拒絶の意志をはつきりと灯して、私たち4人を睨む。

「止める理由ならあるわ」

雪ノ下さんが川崎さんから左手の腕時計へと視線を動かして時間を確認する。

「十時四十分……。シンデレラならあと一時間ちよつと猶予があったけれど、貴女あなたの魔法は此処ここで解けたみたいね」

「魔法が解けたなら、あとはハッピーエンドが待つてるだけなんじゃないの?」

「それはどうかしら、人魚姫さん。貴女に待ち構えているのはバッドエンドだと思うけれど」

バーの雰囲気に合わせて、何とも洒落な掛け合いを二人は始める。

てか、雪ノ下さん…… そんなまどろっこしい言い方しなくて良いからさっさと趣旨を伝えればいいのに。

「……ねえヒツキー。あの二人何言ってるの？」

場の状況が理解できてない由比ヶ浜さんが説明を求めるために、比企谷君の肩を叩く。

由比ヶ浜さんは理解していないようだが、私には雪ノ下の言わんとする事が分かる。

十八歳未満の人が夜十時以降働くのは労働基準法で禁止されている。この時間まで働いていると言うことは、どう考えても川崎さんは年齢詐称と言う『魔法』を用いている訳だ。そして、それは雪ノ下さんの手によって解かれてしまった、大体こんな所だろう。

「辞める気は無いの？」

「ん？無いよ。……まあ、此処は辞めるにしてもまた他の所で働けば良いし」

しれつと答える川崎さんの態度にイラッときたのか、雪ノ下さんはペリエを軽く煽る。ピリついた険悪な空気の中、由比ヶ浜さんが恐々と口を開いた。

「あ、あのさ……川崎さん、何で此処でバイトしてんの？あ、やー、あたしもほら、お金無い時はバイトするけど、年を誤魔化してまで夜働かないし……」

「別に……。お金が必要なだけだけ」

「や、それは分かるんだけど……」

「分かる筈ないじゃん……。雪ノ下も由比ヶ浜にも、あと……。比企谷だっけ？ あんたにも分からないよ。別に遊ぶ金欲しさに働いてる訳じゃない。そこらのバカと一緒にしないで」

私達を睨み付ける川崎さんの目には力がある。邪魔する者を排除するような、そう力強く吠えている獣のような目だ。

どうやら、カフェの相談の時に言っていた、川崎さんの家はどうしてもお金が必要な理由があるのだろう。

「やー、でもさ、話してみないと分からない事ってあるじゃない？ もしかしたら、何か力になれる事もあるかも知れない……。話すだけで楽になること、も……」

由比ヶ浜さんの声は途中から途切れ途切れになる。

川崎さんの眼力にビビったのか、周りの険悪な雰囲気気後れしているのか由比ヶ浜

さんの声はだんだんと小さくなっていった。

そんな由比ヶ浜さんに私はため息を吐きたくなる。

そのような、『自分はいかにも心配している』かのような発言はこの場合では悪手だ、中途半端に分かった気になって相談に乗ると言われたところで、相手の反感を買うのは明らかだ。

おまけに具体的な解決策も無しに言った結果、打つ手無しと言うことになれば無責任にもほどがあるということになり、川崎さんの神経を逆撫でするようなものだ。

まあ、思慮の浅い由比ヶ浜さんのことだから、とりあえず力になろうと思っただけで、具体的なことはなにも考えていないのだろうけどね。

そんな由比ヶ浜さんを鼻で笑い、川崎さんが冷えきった視線で由比ヶ浜さんの言葉に嘸み付くように言った。

「言ったところであんた達には絶対分かんないよ。力になる？ 楽になるかも？ そう、それじゃ、あんた、私の為のためにお金用意出来るんだ。うちの親が用意出来ないものをあんた達が肩代わりしてくれるんだ？」

「そ、それは」

その言葉に困ったように顔を俯うつむかせる由比ヶ浜さん。

どうやら反論する言葉が見つからないようだ。

「その辺りでやめなさい。これ以上吠えるなら……」

雪ノ下さんが凍えるような声で言った。本人は制止のつもりだろうが、途中で言葉を止めたせいで、脅しているようにも感じられる、正直に言っただけに近寄りたくない。

川崎さんも一瞬たじろいだが、小さく舌打ちをして、雪ノ下さんに向き直り、さらなる火種を生み出した。

「雪ノ下だっけ？ アンタんとこつて金持ちなんでしょう？ だったら私の学費を出してよ、だったらバイトを辞めてもいいわ。確か県議会議員よね？ 県民が困っているんだから自分の資産をあたしに使ってほしいね。」

こんな事を言ったところで、雪ノ下さんにとつては、僻みにしか聞こえないだろう。

川崎さんもそれは分かっているのだろうが、言わずにはいられなかったのだ。

静かに囁くような口調で川崎さんがその言葉を口にした時、雪ノ下さん返ってきた反応は私の予想を大きく覆すものだった。

カシャンとグラスが倒れる音がする。

見ると、横倒しになったシャンパングラスからじわりとペリエが広がっており、雪ノ下さんは唇を噛み締め、カウンターに視線を落としていた。



「……雪ノ下？」

「……………え？あ、ああ、ごめんなさい」

あまりの反応に思わず比企谷君が声を掛けると雪ノ下さんはいつも通りの表情でテールをお絞りで拭く。

だが、態度からしてやはりどこか様子が変だ。

どうやら、雪ノ下さんに家族の話はタブーらしい、彼女の家には彼女の家なりの事情があるのだろう。

私がそう思っていると、カウンターがダンツと叩かれる。

「ちよっと！ゆきのんの家の事なんて今、関係無いじゃん！」

そこには、普段の彼女からは想像がつかない、強い語気で川崎さんを睨む由比ヶ浜さんの姿があった。

彼女からしてみれば親友を悪く言われたように感じたんだらうから、ここまで強く言うのだらうけど、私は彼女に軽蔑の感情をさらに抱く。

由比ヶ浜さんの言った事は間違っではない。

この場において雪ノ下さんの家の事なんぞ関係ないことだ、そこだけ見れば、由比ヶ浜さんは雪ノ下さんの事を氣遣って川崎さんに対して怒るといふ、至極当然なことをしてにすぎない。

川崎さんだって売り言葉に買い言葉で雪ノ下さんにきついことを言ったかもしれないしね。

けれど、川崎さんだって今の話に関係ない事を言った事の自覚ぐらいあるだらう。

ならば、『どうして川崎さんは雪ノ下さんにそこまで言ってしまったのだろうか?』

答えは簡単だ。

由比ヶ浜さんが知ったような口をきいて川崎さんの神経を逆撫でしたからだ。

それで川崎さんも頭に血が登ってしまい、つい余計な事まで言ってしまったのだらう。

もちろん、さっきの会話の流れから雪ノ下さんも川崎さんに対して刺々しい言い方をしたかもしれないが、それは雪ノ下さんと川崎さんの間でのやりとりであって、由比ヶ浜さんはそれに関与していない。

にもかかわらず、感情の赴くままに川崎さんに対して怒りをぶつける、彼女らしいけど相手や周りのことを本当に何も考えてない行動だ。

私にしてみれば救いようがない。

にしても、以前の三浦さんとかには強く出れなかったくせに、自分より立場が下と見ている川崎さんが相手だとう強く出れるものなんだね、相手が自分より立場が上の人間だったと言えなかったでしょうに：

まあ、流石は強者の腰巾着と言うべきだ。

「……なら、私の家の事も関係無いでしょ」

私がそう由比ヶ浜さんに呆れと軽蔑の感情を抱いていると、川崎さんのふて腐れたような声が聞こえた。

由比ヶ浜さんの責めるような言い分に川崎さんはそう吐き捨てる。

確かに彼女の言ってることはごもつともだ。

ぶつちやけ、私達は川崎さんとは何の関係も無い、彼女が間違った行いをしていても、それを咎とがめるのは教師や両親であり、裁くのは法だ。私たちではない。

川崎さんの言う通り、私たちには川崎さんをどうこうできる権利も理由もないのだ。

「そうかも知れないけどそう言う事じゃなくて！ゆきのんに」

「由比ヶ浜さん。落ち着きなさい。只ただグラスを倒しただけよ。別に何でもないわ。気にしないで」

カウンターから身を乗り出しかけていた由比ヶ浜さんの身体を雪ノ下さんが優しく制止する。その声は先程よりも落ち着き払っていて、その分とても冷たかった。

雪ノ下さんの反応から、触れられたくない事を川崎さんは言ったのだと思う。

しかし、それでも川崎さんは雪ノ下さんを強く睨んでいた。

彼女からしてみれば、雪ノ下さんは恵まれた人間である、だから、そんな恵まれた人間にそうでない者の気持ちなど理解できるはずがない、ましてや、そんな人間からの説教など聞きたくもない、とても思っているのだろう。

まあ、恵まれる人間云々に関わらず雪ノ下さんは自分中心の志向が強い人みたいだから、川崎さんでなくても他人の気持ちなんて理解できそうにないだろうけどね。

「……で、富良野、ずっと黙ってるけど、あんたはどうすんの？」

川崎さんは最初に注文をしただけで、後はずっと黙っている私の方を見る。

川崎さんにもこの依頼にも関わりたくない私は成り行きを見ながらグラスを傾け、チビチビと注文したペリエを飲んでいるだけだった。

「この中でアンタには話を通じそうだからね。もう分かったでしょ？あたしは働くの、辞める気無いから。アンタらが何を言ったって無駄だよ」

『アンタなら分かるでしょう？』と私に川崎さんは強くて毅然とした態度で言い、思わず私は目をパチパチと瞬かせる。

雪ノ下さんや比企谷君、由比ヶ浜さんも私の方を見る。

中でも由比ヶ浜さんは期待するような眼差しを私に向けてきた。

何を期待しているかは大体想像つくけど、私からの返答はこうだ。

『……何を勘違いしているの？ 貴方達』だ。

私はチラリと彼の顔を見ると、川崎さんに言う。

「そうだね」と

「川崎さんが何を勘違いしているかは分からないけど、私は別に川崎さんをバイトを辞めさせようとは思ってないよ？」

予想外の一言に、川崎さんだけでなく、雪ノ下さんと由比ヶ浜さん、比企谷君までも啞然とした表情になる。

私はそれを気にせず言葉が続ける。

「最初に比企谷君が言ったでしよう？ 川崎さんが此処で働いているかも知れないから確認のために来ただけだと、バイトを辞めるかどうかは家族内での問題だからね、私たちにどうこう言う権利はないし」

「ち、ちよつと！ 待つてよ、ふらのん！ それつて……！」

「貴女、川崎さんの弟さんからの依頼を無視するの……？」

由比ヶ浜さんと雪ノ下さんが信じられないと言いたげに私を見るが、私は冷静な口調で言い返す。

「無視なんてしてないよ、あの相談は川崎さんが本当にこのバーで働いてるか確かめようと言うことに落ち着いたでしょう、川崎さんがバイトを辞めるかどうかは別物じゃないの？」

「た、大志君から相談されたのに……！」



「あの場に最初からいた雪ノ下さんたちはともかく、私は相談『されただけ』だよ、私はせいぜい川崎さんが働いている店を特定して、大志君に教えて、川崎さんがバイトを辞めるかどうかの検討は川崎さんの家族に委ねようと考えてたよ、その方が赤の他人の私たちからいきなり『辞めろ』と言われるより説得力があるし、川崎さんも納得できるでしょう？　そもそも、川崎さんにバイトを辞めさせようつてのは、雪ノ下さんたちが言い出した事だしね」

私はそう言うと、ペリエを飲み干して席を立つ。

こう言えばここには用はない。

「どんな理由で夜遅くにバイトしてるかは知らないけど、頑張つてね」

私はそう言うと川崎さんに背を向けて歩き出す、この依頼はこれで完了だ。

「あ、ち、ちよつと待ちなさい！」

「ふ、ふらのくん！」

後ろから声が聞こえるけど、お会計を済ましてさつさとバーを出た。

―富良野英理華 side end―

―雪ノ下雪乃 side―

「あれはどう言うつもり…?!?」

ホテルから出て帰ろうとした富良野さんを私は肩を掴んで呼び止める。

「あれは、一体何のつもり…?」

「あれって…?」

彼女は私の問いかけの意味が分からないと言うように首をかしげる。

「川崎さんの事だよ！ふらのん！ 何であんな事言ったの!?!川崎さん可哀想じゃん!!」

由比ヶ浜さんが甲高い声で富良野さんに言う、それでも彼女は首をかしげるだけだった。

「私たちの目的は川崎さんにバイトを辞めさせることのはずよ、バイトを辞めさせるつもりがないってどう言うことよ……!」

私は富良野さんを睨みつけてそう言うと、富良野さんは片眉を上げて困ったように微笑みを浮かべて私たちに言う。

だが、次の瞬間、彼女から予想だにしない発言が飛び出した。

「あれしか川崎さんも大志君も納得できる解決は出来ないでしょう?」

「「はあ……?」」

彼女からの発言から私も由比ヶ浜さんも腐り目の男も疑問符を浮かべた声を出す。

富良野さんはそんな私たちを苦笑すると説明を始めた。

「さつきも言ったけど、川崎さんは自分が深夜に働いてるんじゃないかと勘付いてる弟の大志君の言葉にも耳を傾けなかったんだよ? 川崎さんとほぼ接点がゼロの赤の他人の私たちがいきなりやってきて『バイトを辞めろ』と言われて『辞めます』なんて素

直に川崎さんが言ったと思う？ 私たちが奉仕部の魚の取り方を教えるという理念を元にして出来ることは、川崎さんが働いている場所はこのホテルのバーだったことを川崎さんの弟の大志君に教える事くらいだよ、後は彼女の家族が解決する問題だよ、親とかに言われたら流石の川崎さんも辞めざるを得ないでしょう？」

「そ、それはそうだけど、あんな言い方って…」

「なら、川崎さんを他に納得させる解決策はあった？ 私はあれが最善だと思ったんだけど…」

困ったような笑顔から不安そうになって私に富良野さんは視線を向ける。

「……………」

私は答えられなかった、私の言うことは間違つてはないのに、川崎さんは私の助言を聞こうとする様子はない。

確かに彼女の言う通り、あの川崎さんを説得させるには赤の他人の私たちではなく彼

女の親御さんが適任であろう。

彼女の解決策の方が効率的で川崎さん自身も納得できると言わざるを得ない。

思わず唇を噛み締めて俯くと、富良野さんから声がかかった。

「まあ、私に出来るのはここまでだよ。優秀な雪ノ下さん達ならもつと良い解決策を考えついたかもしれないけどね、明日、私は大志君にこの事を報告するね、ここからは川崎さんの家の問題だし」

そう彼女はニツコリと笑って私たちに言った。

私は彼女に反論しなかったが、反論する根拠が見つからないため、黙るしかない。

彼女の言うことは理にかなっている、私たちより川崎さんの親御さんが説得は適任だと言うのも正しい。

彼女の言う通り、この依頼で私たちが出来るのはここまでだろう…

納得は出来なかったが、せざるを得ない。

大きな石が背中に乗ったような錯覚を覚えながら、私は『今日は帰りましょう…川崎さんの弟には明日、報告ね…』と言って重い足を引きずるようにして解散した。

―雪ノ下雪乃 side end―

―富良野英理華 side―

「……さて、本番はこれからだ…」

私は雪ノ下さん達が帰ったのを見届けると、ホテルの最上階を見上げた。

この依頼はここからが勝負だ、私の平穩のために彼女にはバイトを辞めてもらわなく

てはならない。

奉仕部の3人にはああ言ったけど、私の解決方法は奉仕部の3人の前では、今後のためにも使いたくなかったのだ。

私の本性がバレてしまうし、何より彼がいるからね…

さて、邪魔者が帰ったことだし、考えの甘いヒロインに駄目押しに行きますか…

私は営業スマイルを引っ込めてニヤリと笑い、来た道に戻りホテルのエントランスをくぐった。

↓富良野英理華 side end↓



―川崎沙希 side―

「……………」

奉仕部の4人が帰り、私は普段通りの業務に戻っていたが、その中の1人『富良野』の言葉が頭から離れない。

私は雪ノ下たちの口ぶりから大志から相談されてバイトを辞めさせるためにここに来たのだと思っていた。

私の推測通り、雪ノ下と由比ヶ浜は私にバイトを辞めさせようとしていた、比企谷とかいう腐り目の男はほとんど何も言わなかったが、おそらく同類だろう。

でも、富良野だけは『私をバイトから辞めさせるつもりはない』と言っていた。私のバイト先がこのバーである事を大志に教えて、後は私の家族に任せると言っていた。

……まあ、長く隠し通せるとは思ってたし、ここらが潮時だとは思ってたけどね。

どっちみちアイツらは明日にはこのバイトのことを大志にバラすだろう、そうしたら私はこのバイトを辞めざるを得ないけど、それならまた別のバイトを探せば良いだけのことだ。

アイツらに私の事なんてわかるわけが……『川崎さん』……………っ？

その時、私に声がかかった。

見るとそこには考え事の渦中にいた富良野が立っていた。

「何だアンタ……！ 帰ったはずじゃあ……！」

「ゴメン、ちよつとここに忘れ物をしてね、取りに戻ったんだよ…… あ、あった、あった……！」

私の問いかけに富良野は眉を下げて笑い、椅子の下にあったボールペンを拾いあげた。

……何だ、本当に忘れ物をしたただけだったのか…紛らわしい…

「何？ 用が済んだならさっさと帰ってよ…！」

「もちろん、すぐに帰るよ、仕事頑張ってね」

富良野はそう言うのと私にニッコリと笑って背を向けた、でも、次の彼女の一言に凍りつく。

「……仮に学校にこの事が知られて、処分を受けたとしてもね……」

「……えっ……!!？」

ニツコリと笑顔で呟かれたその言葉に、私はは動揺した。

「そ、それってどう言う事……?」

条件反射のように聞き返す、でも、富良野は笑顔を崩さないまま話を続けた。

「深夜に年齢を偽つての違法なバイト……学校にバレたら当然辞めさせられるし、両親も呼び出されるだろうね、処分は……良くて停学だね、この間の三浦さんのように……」

「……………」

私は唾然として言葉が出ないが、富良野は更に言葉を続ける。

「まあ、どちらにせよ何にせよ内申には響くでしょうね、だとしたら、進路にも酷く影響するね、まあ、総武高校ほどの進学校なら学校の名誉にも傷をつけないために、そういう問題のある生徒には退学もあり得そうだね……」

停学、内申、進路、退学。

富良野が放つ一言一言が、私の脳内に毒のように食い込んで侵食してくる。

「大志君も大変だろうね、姉が夜遅くにバイトをして、退学させられるなんて、それも朝帰りだと援交とか、淫らな仕事でもやってた、なんて根も葉も無い噂で苛いじめられたりしても可笑しくないよね……」

…大志が虐められる…!!??

私のせいで……!!??

「それに、この店側も、貴女が年齢詐称した事で訴えてくるかも知れない…… このバーはどう考えても未成年の高校生を雇うとは思えないしね。そうなったら、一体どれだけの迷惑が家族に掛かるのだろうか……?」

「……………やめて……！」

語られる内容には私は戦慄する、顔は青ざめ、嫌な汗が背中から気持ち悪く出ており止まらない。

呼吸は乱れ、心臓は痛いくらい早鐘を打っている、手足は小刻みに震えていて、吐きそうな気分だ。

そんな私の沈みきった心象とは、逆に富良野は気味が悪いくらいの笑顔で終始話している。

富良野はさらに言葉を続けた。

「でも、良いんだよね？ 川崎さんは遊ぶ金欲しさに働く、そこらのバカとは違うんだつたよね、だったら、こんな事わざわざ言うまでもなかったよね、ごめんね」

「……………違う……………！」

「違法に働く事のリスクなんて、当然理解してるんでしょ？ だったら、それが露見した時の対応だってしつかりとしてあるんはずだよね、こうして私たちにバイトのことが知られても平然と『バイトを続ける』と言えるんだからね」

「そんなこと……！」

「だってさ、リスクも理解しないでこんな所で働いているような、考えの甘さなら……」

その時、富良野の声から感情が消え、顔に浮かべていた笑顔がフツと消えた。



「『あなたには関係ないこと』なんて無責任な台詞は言えない筈だからね」

「……………っ!!?」

私は一瞬息が止まった気がした。

当然、それは錯覚に過ぎなかったが、その時本当に意識を刈り取られたかのように感じた。頭の中はもうどうにかなりそうだった。

さつきまでの笑顔を消し、こちらを真っ直ぐ見つめる富良野の瞳には暗殺者が宿っている、闇のような真つ暗な瞳に潜んでいる、暗殺者は逃げる自分をこちらに飲み込もうとしているような錯覚に襲われた。

まともに思考する事もできない。

それでも、私はどうにか富良野に声を絞り出して問いかけた。

「……私が、このバイトを辞めないなら……富良野はこの事を学校側に報告するの……？」

富良野は『そんな事はしないよ』とニツコリとさっきの笑顔に戻って言った。

「そんな脅迫じみた事はしないよ、何度も言ってるでしょう？ 別に私は川崎さんのバイトを辞めさせようとは思ってないって……」

そこまで言って一旦言葉を止め、富良野は「でもね」と言って私に向き直った。

「私が黙ってても、意味は無いかも知れないね、ここにいた奉仕部の3人も、川崎さんがここでアルバイトをしている事は知っているし、私と違ってあの人は川崎さんのバイトを辞めさせようとここに来たみたいだったからね」

「……そんな……！」

確かにこのバイトを知られたのは富良野だけではない、雪ノ下と由比ヶ浜、比企谷までも居るのだ。

この中の誰か一人でも、この事をバラせば、私たち一家は終わりだ。

富良野の言った通りとまではいかないだろうが、それに近い悲劇が自分達家族を襲うだろう、全部私のせいだ……！

恐怖と情けなさで感情は限界を迎えて泣きそうだ、私は震える手でカウンターに視線を落とす、

「私から言いたい事はそれだけ、じゃあね」

言いたい事は言ったと言わんばかりにバーを出て行こうとする富良野、だが、ピタリと何か思い出したかのように足を止める。

「家族のことを思いやるなら、今日にでも辞めた方が良いよ？ お金のことが心配なのなら家族に相談すれば良いし、まあ、明日にはどっちみち雪ノ下さん達が大志君にこの

「事を話すみたいだからね」

「そう言い残してバーを出た富良野、私は後を追って言い返そうとしたが、言い返す気力すら残っていなかった：

―川崎沙希 side end―

―比企谷八幡 side―  
翌日

川崎が働いていたバーに行った次の日の放課後、俺たち奉仕部は今回の依頼人の大志

を呼び出して、昨日の事を報告するためにマックに来ていた。

平日の夕方だが、老若男女問わず人気のファーストフード店にはスーツ姿のサラリーマンや学校帰りの中学生など年齢問わず賑わっていた。

「あ、奉仕部の皆さん！」

待ち合わせの時間ちょうどに大志がやってきた、

俺たちのテーブルに向かってやってくる。

大志を見て雪ノ下が言いにくそうに昨日の事と、今後の解決策を大志に話そうとする。

「それで…その…言いにくいんだけど、『本当にありがとうございます！』…え？」

「皆さんのお陰で姉ちゃんは夜のバイトを辞めてくれました！　ありがとうございます！」

「「……………えっ。」」

いきなり満面の笑みでお礼を言われた俺は思わず面食らう、雪ノ下も由比ヶ浜も鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。

キョトンとしている俺たちをよそに大志は嬉しそうに奉仕部への感謝の気持ちを述べる。

「バイトを辞めるって言ったんすよ！ 姉ちゃん、今日の朝に帰ってきてから俺や両親に今までの事を全て打ち明けてくれたんす！ 店側には後日、バイトを辞める事を伝えるに行くって！」

「……………本当にそう言ったのか…？」

俺は思わず大志に聞き返す、流石に急展開すぎる。

昨日の川崎の様子からバイトを辞めない意志はとても強かったのに、それが今日になつて急に『バイトを辞める』だなんて言い出すなんて…

俺の問いかけに大志は『もちろんっすよ！』と喜色満面で言った。

「そ、それで川崎さんはどうなったのかなあ……？バイトがバレたのならお父さんたちに怒られたんじゃない？」

恐る恐る由比ヶ浜が問いかける、バイトのことがばれたのなら川崎はどうなったのだろう。

「その逆つすよ……ウチの両親は自分たちの不甲斐なさのせいで姉ちゃんを夜に働かせた事を悔やんでました……なんでも姉ちゃんが働いていたのは自分の予備校の学費のためだったそうで……俺が受験で塾に行き始めたから金に余裕がなくなつて……」

大志は苦虫を噛み潰したような顔をする、川崎の両親からしてみれば自分たちの不甲斐なさ故に娘を夜に働かせてしまったと思つたのだろう。

「でも、大丈夫つす！ウチの親が姉ちゃんの学費を稼ぐために貯金を切り崩して予備校に通わせるそうつすから、もう姉ちゃんもバイトはしないって言つてましたし！」

大志はそう言つて俺たちに『本当にありがとうございました！』と再度お礼を言つた。

これで依頼達成なのだが、どうも釈然としない……

何か都合が良すぎる展開だ…

バイトを辞めないとあれほど意固地になって言っていた川崎が今朝になって急に全てを話してバイトを辞めるだなんて…

…：これは、一体どういうことなんだ…？

俺はどうも釈然としないまま依頼が解決したのを見届けた。

…：そんな俺の近くで顔を俯かせて肩を震わせている『アイツ』がいるのに気づかずに…

↓比企谷八幡 side end↓



―富良野英理華 side―

〔富良野家 納戸〕

「フツ……！ アツハハハハハハ……！！」

自宅に戻り、私は自宅の自室になっている納戸で大きな声を出して笑う。

信頼は塾でいないし、義父母は夜遅くまで仕事をしているため家には今私だけ、今なら私が何をしようが義父母にも信頼にも気づかれない。

ここまで予想通りにことが運んだとは、あんな依頼の解決に流された、奉仕部の人たちの思慮の浅はかさや大志君のマヌケぶりに笑えてくる。

今回のことで比企谷君への恐怖心も薄まった、私の恐れるほどの人ならこの不自然さに違和感を感じるはずなのに彼は何も言わなかったからね。

私の予想通りに川崎さんは動いてくれた、私のような人でない限りは家族の話を持ち出されたら辞めざるを得ないからね。

それに学校側への報告するような匂わせも効果靚面だったようだ。

にしても、川崎さんもあの場では冷静に考えることができなかつたみたいだね、私たちが学校側に川崎さんのバイトのことを報告するはずなのに。

なぜなら、川崎さんのバイトのことを学校側に報告すれば、私たちもそのバーにその時間に行つてたことになり、学校側から処分が下されるからだ。

故に、川崎さんは脅える心配は何もなかつたつてこと、私たちから昨日のことを聞いて大志君から問い詰められても惚ければ済んだ話だし、最悪バレたとしてもそれは親御さんにだけで、店側にも学校側にもその時点ではバレる事はなかつた。

まあ、その事に自分の信念に愚直な雪ノ下さんや馬鹿な由比ヶ浜さんは気づいてなさそうだったから、バーで『自分たちでは川崎さんのバイトを辞めさせる事はできない、親御さんに任せるのが良い』と言つて学校側への報告を遠回しに辞めさせたのだ。

でも、それだけではまだ不完全だった。

大志君に報告しても川崎さんがバーのバイトを辞めなければ、痺れを切らした雪ノ下さんたちの誰かが外部にこの事を漏らす可能性があったからだ。

だから私は昨日、雪ノ下さんたちを帰らせて川崎さんのバーに戻ってあんな脅すような事を言ったのだ。

ああ言ったら、冷静に考えることが出来なかった川崎さんは急いでバイトを辞めるはずだからね。

店側としては驚いたかもしれないけど、川崎さんは半ば強引にその店を辞めたみたいだし。

まあ、強引に辞めてもそれで良かった、こうすれば雪ノ下さんたちが学校側に報告する意味はもうなくなるし、私たちが停学になるような事をしていたのも同時に隠蔽されるのだから。

川崎さんもバイトでのことは自分の家族のためにも言わないだろうしね。

川崎さんがその後もバイトをしたいのならそれで良い、深夜に働こうがどうでも良い、私は今度はそれに関わらなければ川崎さんが破滅しようがどうでも良いのだから。

今回のことを乗り切れれば彼女に関わらなければ、私の平穩は守れる、私はそれで良いのだ。

自分以外の方がどうなろうと私には関係ない、自分さえ何ともなければそれ以外のこ

となんて知ったことか。

てか、私が言えることじゃないけど、川崎さんとしてもこれで良かったんじゃないの？

学校側に報告されることもなくなつたし、予備校の学費は親が貯金を切り崩したり、もう一つ仕事をする事で工面できたんでしよう？

それに、私がした事がバレたら奉仕部の3人や大志君から袋叩きにあうかもしれないけど、私としてはこの解決策が一番良かったと胸を張って言える。

川崎さんは私に脅されてバイトを辞めざるを得なかつたけど、雪ノ下さんたちとして川崎さんにバイトを辞めさせたのだから不満を持つ理由はないし、大志君としても姉がバイトを辞めてくれて嬉しがつていた、寧ろ喜ぶべき結末なんじゃないの？

まあ、雪ノ下さんが聞いたら『奉仕部の部長として、人の弱みに付け込むようやかたちで辞めさせるなんて認められないわ』とか言いそうだけど、雪ノ下さんたちはあそこで奉仕部として何か行動を起こしてたのだろうか。

そもそもこの依頼は辞めさせるだけでは大志君の依頼は解決しても川崎さんのバイトの始めた目的は解決しない。

大志君の話の聞かなくても川崎さんはこう言っていた『どうしてもお金が必要だね。』

雪ノ下さんも由比ヶ浜さんも大志君も川崎さんが夜にバイトを始めた事にしか焦点を当てておらず、肝心な問題点であるバイトを始めたきっかけに目を向けてない。

川崎さんがバイトを夜遅くにバーで始めたのはあくまでも副次的なものだ、本質的には川崎さんはお金が必要だったから働いていたのだ。

大志君曰く川崎さんは自分の塾や予備校の学費のために働いていたらしいけど、進学校に通う人たちが目指す難関大に進学するための塾や予備校のお金はそう安くはない、だから自分の学費のために給料の良い夜のバイトを川崎さんは選んだのだろう。

でも、あの場で雪ノ下さんが川崎さんに強引にバイトを辞めさせても川崎さんの問題は何か一つ解決しないし、その後は川崎さんはどうやって金を稼げば良かったの？

結局、雪ノ下さんや由比ヶ浜さんのやり方では何か一つ解決しないし、黙っていた比企谷君は何を思ってたかは分からないけど、彼も似たようなものだ。

それに、雪ノ下さんにずっと言いたかったんだけど、奉仕部の理念は『飢えた人に魚を与えるのではなく、魚の取り方を教える』なんでしよう？

そうだったら、川崎さんのお金の稼ぎ方が間違っているとかなら、雪ノ下さんが問題

であるちゃんとしたお金の稼ぎ方、予備校の学費の工面の仕方などを川崎さんに教えるべきだったんじゃないの？

これが魚の取り方を教えるような解決策だし。

でも、雪ノ下さんは『バイトを辞めろと』頭ごなしに説得するだけ、だから話は平行線で何も解決できなかつた。

つまり、雪ノ下さんと由比ヶ浜さんのやり方では飢えた人間に魚を捕ることを禁止したようなものだ、これのどこが解決なのだろうか？

バーから出た時、奉仕部の人たちは不満そうだったけど、私のおかげで貴方たちも深夜にバーに来ていたという事が露見するのを免れたんだよ？

感謝しろとは言わないけど恨まれる筋合いはないと思っただけだね。

それに、川崎さんのバイトの理由にも私は失望した。

大志君は川崎さんのバイトの理由は予備校のための学費の言っていたそうだけど『そんな事のためにだったの!?!』と言いたかった。

私は深夜にバイトをするくらいだから、もつと大きな事情があると思っていたのに予備校の学費が欲しかったからという事に愕然とした。

塾や予備校の学費のために深夜にアルバイトをしていた？ ならば、私はどうなるんだ。

私は生まれてこのかた塾にも予備校にも通わせてもらった事はない、信頼と違って私はあの家族からしてみれば腫れ物のようなものだからね。

高校受験の時にも周りの設備の良い塾に通っている人たちを抜いて定期テストや学

力テストではトップを取っていた。

私は何も親からのテコ入れはされてない、問題集やテキストも買い与えられてないから、盗んだへそくりや信頼の使わないテキストやノートを駆使してそこまですたんだ。

私は自力で成り上がった、その私からしてみれば川崎さんはただの甘ったれだ。

川崎さんは甘えてるのだ、『塾や予備校に行かないと成績が伸びない』というのは私からしてみればただの言い訳にすぎない。

総武高校は進学校だから塾や予備校に2年生の頃から言ってる人は大勢いるだろうけど、その人たちを乗り越えて私はトップクラスに食い込んでるのだ。

川崎さんは私と違って家族というスポンサーがあるのにもかかわらず、そんな事をしていたのだ。

深夜にバイトをしてまで予備校に行くくらいなら親というスポンサーに頼むか、夜はじっくり寝て昼間に勉強した方が効率的だ。

私の知ってる限りだけど、学校での川崎さんはいつも眠そうだった。授業でも眠そうだったしね。

夜に働いて昼間の授業を受ける時に寝てしまえば本末転倒だ。

彼女はそれさえにも気付かずに夜のバイトなんてリスクいな事をしていたのだ、考え



が甘いにもほどがある、私からしてみれば贅沢な悩みだ。

私は自分のために平穩を脅かされたくない、川崎さんの甘えのために平穩を脅かされるなんて冗談じゃない。

まあ、川崎さんは最終的に両親がテコ入れのために貯金を切り崩して予備校に通わせてもらうことになったんだから、目的は達成できたという事だし、これで万々歳じゃないの？

奉仕部の3人は今回の依頼が突然解決したことに不満そうな顔をしていたけど、誰も傷つく事なく依頼が解決したのだ、これのどこに不満があるのだろうか。

私はそう内心で呟くと心の中のを吐き出すように笑った。

まるで、自分の抱えた不安や孤独、恐怖心を全て吐き出すように…

仮面の魔王に平穩を脅かされたくない。

―奉仕部部室―

「ふう……」

放課後、授業が終わり、私はいつものように奉仕部の部室で勉強をする、勉強が一段落ついたので少し休憩の意味合いを込めて息を吐く。

川崎さんのバイトの件が解決し、職場見学も終わり暫く学校行事はなく依頼人も来ないため、放課後は奉仕部で静かに勉強できている。

静かな環境のおかげで勉強が捗る。なにしろ、現在奉仕部には雪ノ下さんと比企谷君と私だけ、奉仕部が静かなのは常に騒がしい『彼女』がいないからだ。

彼女、由比ヶ浜さんは先日の職場見学から奉仕部に来ていない。

私は彼女がこの奉仕部の部員かどうかも怪しかったけど、あれだけ奉仕部に入り浸っていた由比ヶ浜さんが急に来なくなったのには、私も少し驚いた。

興味本位で比企谷君に『何か知らないか』と聞いてみると、原因は比企谷君が職場見学の時に入学式時の事故について言及したからだそうだ。

何でも1年前の入学式の時に比企谷君は車に轢かれそうになっていた犬を助けて、車に轢かれて怪我をしたらしい。

その時の犬の飼い主が実は由比ヶ浜さんで、その時のことを、比企谷君にクッキーと共に飼い犬を助けてもらったお礼を言いに来たのだそうだ。

でも、比企谷君は最近までそのことを知らず、知ったのはつい最近であり、彼の妹が助けた犬の飼い主が、お礼をしに来たと聞いたからだそうだ。

比企谷君はその時は会ってはいなかったそうだけど、彼の妹がその相手の名前を覚えていたため、由比ヶ浜さんと分かったそうだ。

由比ヶ浜さんのクッキーのことは、私が奉仕部に入部する前のことだから知らないけど、由比ヶ浜さんがその事故から『一年も経って』犬を助けてもらったお礼を比企谷君に言いに来たと聞いた時は驚いたな…

まあ、クラスでぼっちの比企谷君とクラスのリア充グループに属している貴女とでは

天と地ほどのカーストの差があるからね。比企谷君はその事故のせいで友達を作らなくて高校1年生の頃からぼっちだったんだらうから、由比ヶ浜さんもお礼に行つて比企谷君と関わりがあると思われなくなかったんだらう。

まあ、今なら比企谷君は自分が入り浸っている奉仕部の部員であり自分に近い存在になつたからね、由比ヶ浜さんもこれを機にお礼を言ったのだらう。

逆に言えば、比企谷君が奉仕部にいなければ、このままずっと彼に謝罪もお礼も言わなかつたんだらうけどね。

…グループの風見鶏、強者の腰巾着である、いかにも彼女らしい言動だ。

まあ、由比ヶ浜さんは比企谷君と気まづくなつても教室では葉山君たちといつものように親しげに過ごしてたから、それほど気にしてないのかもしれないけどね…

同じグループの人たちから奉仕部に行くのを止められてるわけでもなさそうだから自分の意思で来ないという事だし。

比企谷君は『同情で接するのは辞めてくれ』と言い、由比ヶ浜さんは涙目で比企谷君

を睨んでそのことに否定的だったそうだけど、それ以降は接してくることはないらしい。

多分由比ヶ浜さんが奉仕部に来ない理由は、奉仕部には気まづくなつた相手の比企谷君がいるためパツタリと来なくなつたということだろう。

まあ、孤独に慣れてない彼女からしてみれば、そんな相手がいる奉仕部に来るという選択肢はないだろうね。

……私としては、彼女がこのまま子ない方が平穩に過ごせそうなので、二度と来ないでほしいと内心では思つてたりするんだけど、雪ノ下さんと比企谷君はそう思つてないみたいだから彼女は近いうちに、またこの奉仕部にやつてくるだろうな……

私は内心でため息を吐いて、再びテキストとルーズリーフを用いて勉強を始めた。

……そして、そんな私の予想は的中するのだった。

「6月18日、この日が何か分かるかしら？」

「……さあ……？」

由比ヶ浜さんが部室に来なくなって数日後、奉仕部で私と比企谷君は突然訳の分からない質問をされた。

いきなりそんなことを聞かれてもピンとこないんだけど……

「……知らなかったのね……由比ヶ浜さんの誕生日よ」

「へえ、お前ら相手の誕生日を知るほど仲が良くなったのか？」

「いいえ、ただ彼女の携帯のアドレスに0618と入っていたから分かったのよ…」

「本人から聞いていないんですか…」

そんな不確かな情報なのね…その0618が彼女自身の誕生日かどうかの確証はないし…

それにしても誕生日ね…

年に一度、人間なら誰でもある記念日だけど、私には縁のないものだ。

むしろ、私は誕生日というものが嫌いだ。義父母か信頼の誕生日の時は毎年家から追出されて野宿かネットカフェで夜を過ごさなければならぬのだから。

あの家族からしたら腫れ物のような私は誕生日を祝ってもらったことなんてない、私にとって誕生日なんてただの年を重ねるだけの通過儀礼にしかすぎないのだ。

「つまり由比ヶ浜さんの誕生日を祝いたいのよ。だから貴方たちも協力しなさい」  
「由比ヶ浜の誕生日を祝いたいだ？誕生日なら葉山のグループが祝ってくれるだろ。  
俺たちがやる必要なくね？」

私がそう思っている間にも話し合いは進んでおり、雪ノ下さんはいつものように高圧的な態度で私たちに言い、それを比企谷君が捻くれた態度で返す。

「二人とも由比ヶ浜さんにはお世話になったことがあるはずでしょう？ それならこれまでのお礼に彼女の誕生日くらい祝ってあげるべきだと思うのだけど」

「…………お世話になった覚えはないんだがな……」

雪ノ下さんの道徳的に正しい発言を比企谷君が捻くれた態度でばやいて返す。

…………この2人の言葉の応酬はもはや見慣れた光景だけど、私としては今回ばかりは比企谷君に賛成したいな……

こう言ったら悪いけど、私は由比ヶ浜さんにお世話になった覚えはない。



奉仕部に入る前は彼女と会話したことすらもなかったしね。

奉仕部に入部してからもテニスコートの時は三浦さんの横暴を止めもせずオロオロしていただけだし、チェーンメールの依頼では調査をしていたかどうかも怪しいほどだったし、川崎さんの時に至っては無責任な事を言つて、彼女を怒らせてより一層ややくしくしたただけだったしね。

彼女にお世話になったことなんて一度もない、比企谷君はどう思っているか分からないけど、私が雪ノ下さんの発言を元に彼女の誕生日を祝う理由なんてどこにもない。

それに、誕生日というには『プレゼント』という名の貢ぎ物を買うために、また私は少ない所持金から金を出さないといけなさそうだから…それが最も嫌だ…

「それでは奉仕部で由比ヶ浜さんのお誕生日を祝つてあげましょう、彼女も喜ぶわ、貴女たちに拒否権はないわよ？比企谷くん、富良野さん」

私がそう思っていると、部員をコントロールするための魔法の言葉である『奉仕部として』が飛び出した。

これを言われたからには私も比企谷君も否が応でも由比ヶ浜さんのために動かなければならないだろうしね…

他人の誕生日を祝うなんて時間と金の無駄遣いだ、ましてや由比ヶ浜さんと私は友達ですらないし。

…それにしても、本当にこの部活の人たちは相手の都合を考えられる人はいないんだよね

否定的な比企谷君のことをスルーして雪ノ下さんが強引に誕生日会を実施することを決めてるしね。

テニスコートの時からずっと思ってたけど、雪ノ下さんは私たちのことを自分の言うことを何でも聞く駒とでも思っているのだろうか？

…まあ、こう思っただけでも仕方ない…

部長の決定に逆らうと平塚先生から何言われるか分からないし、私は平穩に過ごせなくなる。

何言っても私たちに拒否権がないのなら、この部活の支配者に平民は従いますか…

私は内心でため息をついて、雪ノ下さんに営業スマイルを浮かべながら、承諾と心にも思っただけの賛同の意を含めた言葉を送った。

「……………本当に最悪……………」

由比ヶ浜さんの誕生日近くの休日、私はショッピングモールの入り口で、数少ないよそいき用の私服に身を包み、カリカリと爪を噛みながら憂鬱に一言呟く。

少し早く来すぎたからか、まだ雪ノ下さんたちは来ていない。

今日は義父母は仕事、信頼は塾に行っているため、あの家には私一人だった。

そのため、今日は宿題や授業の予習をしようと考えていたのだが、部長の理不尽な発言のせいで親しくもない人の『誕生日を祝う』とかのくだらない友情ごっこに付き合わされるのだ。

おまけに今日は由比ヶ浜さんのためにプレゼントを買わないといけないのだ…

雪ノ下さんや比企谷君は誕生日プレゼントくらいは買えるだろうけど、私は貴女たちと違ってお金に余裕がない。

ただでさえ、川崎さんの依頼の時のドレスの借り賃で赤字になり掛けているのに、誕生日プレゼントまで買うとなると、追い出された時は私は本当に野宿をしないとイケなくなりそうだし……

……本当に踏んだり蹴つたりだし……！

何で私がこんな目に合わないといけないのだろうか……

私が爪をカリカリ噛みながら奉仕部への不満と憤りを内心で呟いていると、比企谷君と雪ノ下さんもやってきた。

比企谷君はいつもと違ってラフな服装、雪ノ下さんは柔らかそうな生地のスカーツに、いつもと髪型を変えて、ツインテールの髪型をしていた。

そんなこんなで集まったため、早速プレゼント選びが始まった。

「よう。それで、どういう店から回るつもりだ？ 目星はついてるのか？」

「……そうね、普段から使えてかつ長期間の使用に耐える耐久性を持ったもの、かしら」

「オーケー、よく分かった。それは目星とは言わない」

「そうかもしれないけれど、間違っではないとも思うのだけれど」

いや、そうだけどさ…そういうものじゃないでしょう…

日頃の行動も残念ならば、プレゼント選びすらも彼らは残念な会話をしている、まともなプレゼントをこれで買えるのだろうか…

てか、雪ノ下さんは自分が言った基準を満たしているものならなんでもいいと思ってるのだろうか？

それこそ、彼女の好みではない服や掃除道具一式などを渡されて喜ぶと思ってるのだろうか？

人と関わろうとしない私が言えることではないけど、雪ノ下さんのように難しく考え

なくても、普通に考えてが由比ヶ浜さんが喜びそうな物でいいでしょう？

由比ヶ浜さんの思慮の浅そうな雰囲気合うような物でさ……

まあ、高校生が買える誕生日プレゼントなんてたかが知れてるんだからそんなに悩む必要なんてないと思うんだけどね……

今までプレゼント買うなんて経験のなかった私には由比ヶ浜さんを喜ばせるプレゼントはどんなものかいいのかわからないけど、常識的に考えれば相手を不快にさせないプレゼントは買えるのだ。

目の前にいる2人はまだあーだこーだと無駄な会話をしているけど、私はその会話に入らずに成り行きを見ていてなるべく安価で由比ヶ浜さんの喜びそうなプレゼントを頭の中で模索した。

そうこうしている間に目的のエリアに到着する。

雪ノ下さんは手近な服屋に入ると、並んでいる品々を真剣に検分し始め、比企谷君も取り敢えず店内を適当にウロウロする事にしたらしい、私もそれに倣って安価なものを探す。

店員からの売りつけのための口説き文句や視線を受け流し、適当に時間を潰して雪ノ下さんの所へ戻れば、彼女は何やら手に取った服をグイグイと縦横に引っ張っていた。

「丈夫な物が良いなら俺のお薦めは防弾チョッキだな」

比企谷君がそう言うのと雪ノ下さんは手に持っていた服を畳んで棚に戻した。

「……仕方が無いじゃない。私、由比ヶ浜さんが何が好きかとか、どんなものが趣味かとか……少しも知らなかったのね」

雪ノ下さんの表情は暗く、前もってリサーチをしていなかった事に対しての後悔の念が伝わってくる。

でも、そんなのは当たり前のことだ。

雪ノ下さんの性格上、彼女の方から由比ヶ浜さんについて知ろうとしなかったんだから、彼女のことを何も知らないのは当たり前。

そもそも由比ヶ浜さんだって自分の事を雪ノ下さんに何も言わなかったんでしょ？

誕生日を祝うだなんて言うくらいだから、雪ノ下さん自身は由比ヶ浜さんとの間に少しは信頼関係があると思っっているのかもしれないけど、私からしてみれば貴女たちの中に信頼関係なんてあるようにみれない。

でも何の問題もない、寧ろ教えてもいないのに、自分の好みや趣味を知られてたら、相手からは気持ち悪いと受け取られる。

変な詮索をするより、自分の良いと思っただけのものをプレゼントする方が自然なのだ。

私がそう思っている間にも、雪ノ下さんは比企谷君とまた会話を始める。そして、会話の最中に何を思っただのか、こんな事を話し始めた。

「話した事もない男子から猫やパンさんのグッズをプレゼントされた事があるけれど全く嬉しくなかったわ……あの時は思わず鳥肌が……」

雪ノ下さんはそう言っって顔を歪ませて両腕を両手で掴む仕草をした。

いかにもわざとらしい仕草に私は内心で呆れる。

……ここに來て自分はモテますと言っう自慢？ 雪の下さんは哀れそうに言ってるけど、そう言うのは常人の前では嫌味にしかならないよ。



まあ、だから彼女の周りには人が寄ってこないんだろうね、今までの依頼から彼女に友好的に話しかける人は殆どいなかったし。

だか、次の瞬間、彼女は言葉を止める。

「好きなのか。猫とパンさん」

「……………」

比企谷君に言われて雪ノ下さんは顔を赤くして黙り込む、どうやらさっきのは失言だったらしい。

その後もいろいろ見て回って、プレゼントを買うために一時別行動を取ることになった。

私はその辺の雑貨屋で適当に見繕った、なるべく安価で由比ヶ浜さんのような人が好みそうなウサギのプリントされたマグカップを購入した。

購入したマグカップをラッピングしてもらい、プレゼントとして渡せるような見栄えになったが、財布の中身が軽くなったことに私はため息をこぼす。

親しくもなければ、お世話にもなったことのない人のために、なけなしのお金で物を貢ぐなんて本当に最悪だ……！ 何で私がこんな目に合わないといけないのだろうか……！

とはいえ買い物が終わった以上、ここに長居は無用、雪ノ下さんたちと合流してさっさと帰ろう……

私はそう気持ち切り替えて雪ノ下さんたちを探す、ペットショップのケージに行く  
と雪ノ下さんと比企谷君がいた。

「ごめんなさい、遅くなって……もう買うものはないよね？」

「……ああ、用事も済んだし帰ろうぜ」

「そうね」

私は適当に謝罪の言葉を述べて、2人に早く帰ろうと促す。

行きは雪ノ下さんの方向音痴を發揮したので、帰りは私が誘導することになった。

……はぁ……やっと帰れる……

今日の『誕生日プレゼント選び』という面倒くさいイベントがやっと終わることに、私が内心で息をついた。

その時……

「あれー？雪乃ちゃん？あ、やっぱり雪乃ちゃんだ！」

無遠慮な声はその場に響いた。

思わず声の主を捜して周囲を見ると、一人の綺麗な女性がこちらへ向かって来た。

その女性は友達と遊びに来ていたのか、後方にいた男女数名に「ごめん、先行って」と両手で拝んで謝るような仕草を送る。

「姉さん……」

さつきまでの柔らかくなくなった表情とは打って変わってとした様子の雪ノ下さんの声に振り向くと、雪ノ下さんはその女性を睨むように視線を向けて肩を強張らせていた。

「……え？ 姉さん？」

思わず疑問が口から出る。

私は目の前の女性と雪ノ下さんを見比べてみる、年齢は私たちより少し上、20歳くらいだろうか、服装は白を基調としたレースを縁ふち取った柔らかい印象の物、肌の露出が多いがそれでも不思議と上品に見えた。

雪ノ下さんが静かなの美しさだとすれば、彼女は動く美しさと言うべきだろうか、雪ノ下さんの姉だけあって、整った顔立ちで顔も似ている。

「こんな所でどうしたの？ ……あ！ デートか！ デートだなっ！ このこのっ！」

「……………」

雪ノ下さんの姉が『うりうり』と肘で雪ノ下はんを揶揄い始めたが、雪ノ下さんは冷めきった表情で鬱陶しそうにしているだけだ。

「ねえねえ、あれ雪乃ちゃんの彼氏？」

「……………違いわ、同級生よ」

「まったまたあ！別に照れなくても良いのにつ！」

「……………」

雪ノ下さんが鋭い視線で睨むが、雪ノ下さんの姉の方はニヤニヤと笑って受け流す、妹が嫌悪感を剥き出しにしているのにも関わらず、それを少しも意に介してないようだ。

「雪乃ちゃんの姉、陽乃です。雪乃ちゃんと仲良くしてあげてね」

「はあ…比企谷です…」

雪ノ下さんの姉に名乗られたので、比企谷君も名乗り返した、いつも通りのやる気なさそうな声で。

「比企谷……へえ……」

雪ノ下さんご姉は、一瞬だけ何かを考えるような仕草をとってから、比企谷君の爪先から頭のとっぺんまでざつと流し見た、さつきまで妹と話していた時とは雰囲気は違った。

「あの、俺の顔に何か付いてます？」

「ううん、何でもないよ。比企谷くんか、よろしくね♪」

雪ノ下さんの姉は比企谷君の問いかけにニコリと微笑んでいた、さつきまでの雰囲気は元に戻っていた。

「で、彼氏くん。雪乃ちゃんとはいつから付き合ってるの？」

「いや、彼氏じゃないですけど。何なら友達でもありません」

「またまた照れちゃってー。お姉さんにコツソリ教えてよ〜」

雪ノ下さんの姉はピッタリと身体を比企谷君にくっつけて左頬を指でグリグリ突っついている。

比企谷君の抗議にも御構い無しだ、『いつから付き合ってるの〜?』とか『照れないでよ〜』等と同じような質問をしつこく繰り返す。

……雪ノ下さんの姉には私が視界に入っていないのか、雪ノ下さんと比企谷君がデートをしているのだとしきりに冷やかしていた。

いや、私のことを敢えていない存在にして会話から外しているのだろう、分かりやすく言うとはづっているのだ。

まあ、私もあの会話に入ろうとは思わないから、それで良い。



このまま傍観者を決め込もう、そう思っていたら雪ノ下さんの姉がこちらを見た。

「あつれ、君もいたんだ……雪乃ちゃんのお友達かな？　雪乃ちゃんと仲良いの？」

雪ノ下さんの姉は今度は私の方を見てそう言った。

彼女の顔は笑顔だったが、威圧感を含んでいた。少し気圧されながら、私はいつものように営業スマイルの仮面を付けて、相手の喜びそうな言葉を模索して発言する。

「……ええ、まあそう言いますかね……　富良野英理華です、雪ノ下さんと比企谷君とは同じ部活に所属しています」

「そうなんだ……ふくん……」

雪ノ下さんはそう言うと、私の身体を比企谷君にしたようにジロジロ見始めた。

正直、あつて間もない見ず知らずの人物に身体を無遠慮に見られるのは嫌悪感と不快

感が湧き上がってくるが、彼女に逆らうのは危険だと本能で感じ黙っていた。

一通り私を見て彼女は顔を上げた、だが、その顔は先ほどのような笑顔ではなく、むしろ驚きの感情を含んだ顔だった。

そして、私に向かって一言こう言った。

「……君は不思議な子だね……」

雪ノ下さんは比企谷君と同じように私を見定めるように見たが、私を見た途端に真顔になってそう言った。

「まあ、これからよろしくね！ 富良野ちゃん！ 君とは仲良くなれそうな気がするよ！」

だが、それはほんの一瞬だけだった。

雪ノ下さんはさつきまでの表情なんて感じさせない笑顔になって、私の手を握り、私に対して友好的な態度をとる。

その態度に面食らったが、何とか営業スマイルを浮かべて『こ、こちらこそ』と返事を返す。

「……………姉さん、いい加減にしてちょうだい」

その時、底冷えするような低い声が聞こえた、それは今までずっと黙っていた雪ノ下さんだった。

雪ノ下さんは自分の姉への嫌悪感を隠そうともせず、すつと髪を掻き上げると、姉に侮蔑の視線を向けた。

「あー……ごめんね、雪乃ちゃん。お姉ちゃん、ちよつと調子乗り過ぎた……かも……」

妹からの侮蔑の視線に、申し訳なさそうに笑った雪ノ下さんの姉は、比企谷君に耳打ちして何かを話していた。

何かを話すと雪ノ下さんの姉は、比企谷君からすつと離れた。

でも、比企谷君は、じつと雪ノ下さんの姉の顔に視線を向けている。

「……ん？どうしたの、比企谷君？ お姉さんの事じつと見つめちゃって……」

雪ノ下さんの姉は『ちよつと恥ずかしいかな』と頬に手を添える、同性から見ても可愛らしい仕草に、近くに居た数人の男性たちが見とれて足を止めていた。

でも、比企谷君はそんな仕草に特に気を止める様子はなく、雪ノ下さんの姉に眩くよ  
うに問いかけた。

「疲れませんか？ 『それ』」

その一言で雪ノ下さんの姉の表情が変化した、笑顔を浮かべているが、その質が先程  
とは違う。

「……………へえ、分かっちゃうんだ」

「別にそれだけです」

陽乃はふくんと興味深そうに頷いた。

「君、面白いね」

「よく嘲笑の的にはされますね」

「あつははは！やっぱり比企谷くん、凄い面白いよ！」

雪ノ下さんの姉は、笑いのツボに嵌まったのか、爆笑して比企谷君の背中をパンパン叩いている。

「あ、そうだ。比企谷くん、富良野ちゃんも良かったらお茶して行かない？ お姉ちゃんとしては雪乃ちゃん彼の彼氏、友人として相応しいか、良く知っておかないといけないのです」

雪ノ下さんの姉は、胸を張るような姿勢をとって私たちに軽くウインクしてきた。

お世辞にもスタイルが良いとは言えない、妹に比べて豊かな胸が強調される。

「……………しつこい。只の同級生だと言っているでしょう、彼氏でもないし、友人でもな

いわ……」

聞くだけで身震いするような苛烈で刺々しい声が雪ノ下さんから放たれる、そこに含まれている感情は、完全な自分の姉への拒絶のように感じられた。

しかし、雪ノ下さんの姉は妹の強い拒絶を物ともせずニツコリ笑ってそれを跳ね除ける。

「だって、雪乃ちゃんが誰かとお出掛けするのなんて初めて見たんだもん。そしたら彼氏とか友人だって思うじゃない、それが嬉しくてさ〜」

くすくすと雪ノ下さんの姉は笑った。

………にしても、嬉しいねー……

「折角の青春、楽しまなきゃね！あ、でもハメ外しちゃ駄目だぞ？」

雪ノ下さんの姉は冗談めかすように、腰に左手を当てて前に屈むと、右手の人差し指

を立てて注意した。そのまま雪ノ下さんの耳元に顔を近付けると、小さく囁く。

「……………一人暮らしのことだって、お母さんまだ怒ってるんだから…」

その『お母さん』と言う単語が出た瞬間、雪ノ下さんの身体が僅かに強張った。

場を沈黙が支配する、騒がしかった周りの雑音も水を打ったように静まり返り聞こえなくなった。

一瞬の間を置いて、雪ノ下さんは絞り出すような細かい声で言った。

「……………別に、姉さんには関係の無い事よ…」

それは正面を向かず、地面に向かいながら出た言葉、いつもの威厳は微塵も感じられない、弱々しい態度だった。

だが、それを見ても雪ノ下さんの姉は笑顔を崩さない。

「そうか、そうだね、お姉ちゃんには関係無いね、雪乃ちゃんが考えてるならそれで良いんだ、余計なお世話だったね、ごめんごめん」



そう言うと、雪ノ下さんの姉はその場から飛び退くようにして離れて、誤魔化すような笑みを浮かべる。

「なら、良いや。比企谷くん、雪乃ちゃんの彼氏になったら改めてお茶に行こうね！  
じゃ、またね！」

最後に。パアツと華やぐような笑顔を浮かべて、雪ノ下さんの姉は比企谷君に別れの言葉を言いその場を離れようとするが『あ、そうだ』と何かを思い出したように足を止めてこちらに引き返してきた。

自分の妹の雪ノ下さんでも比企谷君でもなく、私の方に向かって彼女は歩いてきた。思わず警戒して身を硬くすると、彼女は私の耳元に雪ノ下さんにしたように顔を近づけて囁いた。

「…君とは個人的にもっとお話したいな…でもね、雪乃ちゃんに何かしようとするな

らしたら容赦しないからね……………」

「……………っ!?」

その言葉に私は肩をビクリと震わせた、最初の誘いと警告とも言える言葉に背中に気味の悪い汗が流れる。

雪ノ下さんの姉の顔は直視できなかつた、何か得体の知れない恐怖がこの人からは感じたからだ。

雪ノ下さんの姉は私から顔を離すと、何事もないように『バイバイ』と胸の前で小さく手を振って去っていく。

「……………っはぁ……………」

彼女の姿が見えなくなると思わず息をついた、理由はよくわからないけど、彼女が去ってホツとした。

何故かあの人は恐ろしい人なのだと思いの本能が察知しているのだろうか、比企谷君に感じた恐怖とは比べ物にならないほどの恐怖…

私はそのまま呆然と立ち尽くしていた、雪ノ下さんに声をかけられるまでずっと…

雪ノ下さんの姉が去った後、私たちも歩き始める。

しばらく沈黙が続いたが、雪ノ下さんが比企谷君に唐突に尋ねてきた。

「どうして分かったの？」

「何が？」

「さつき自分で言っていたじゃない」

「ああ、あの強化外骨格みたいな外面の事か」

「ええ、そうよ、あなたの言う通り、あれは姉の外面よ」

雪ノ下さんは一旦言葉を区切った。

「私の家の事は知ってるでしょ？ 仕事柄で長女である姉は挨拶回りやパーティーに連れ回されていたのよ。その結果出来たのがあの仮面……………良く分かったわね……………どうして?」

再度比企谷君に聞いてくる雪ノ下さん。

比企谷君は「どうしてと言われてもな……………」と言って目を細める。

「まあ、強いて言えば、お前の姉は完璧過ぎるんだよ、でもな、この世に完全な人間なんて存在しない。だからこそ、あの人の笑顔や行動は嘘偽いつわりそのものだ」

雪ノ下さんは驚いたような顔をした後、真剣な眼差しになり比企谷君の目を見る。

「……………腐った目でも、いえ腐った目だから見抜ける事見抜ける事があるのね」

「褒めてねえぞ、それ」

「褒めてるわよ、絶賛したわ」

「全くそうは感じなかったが」

「本当よ、私に褒められてるのだから光栄に思いなさい」

「でも何だかんだで姉妹だな。良く似てるぜ」

比企谷君がそう言った途端、雪ノ下さんの表情が曇った。

「……………似てないわよ」

「そうか？俺はそつくりと思えたんだが」

「それはあなたが姉さんの凄さを知らないからよ……………」

そう言つて雪ノ下さんは足を早めて、出口に向かい、比企谷君も頭を掻きながら雪ノ下さんの後を追う。

私といえば、2人の会話に加わらずに2人の会話と様子を見ているだけだった。

私はまだ雪ノ下さんの言われた言葉が頭から離れず、2人の会話に加わらずに黙つたまま雪ノ下さんたちの後についていき、デパートから出て2人と別れた。

―富良野家―

デパートから真つ直ぐに家に帰り、納戸で外出用の服から部屋着に着替えながら私は今日のことを思い返す。

プレゼントを買いに行ったことなんかより、記憶に強く残っているのは雪ノ下さんの姉の雪ノ下陽乃さんのことだ。

比企谷君は雪ノ下さんの事を『仮面を被っている』と言っていた

私にもそれは大体分かっていた、私と同じように仮面を人前で被っていたから、様子や態度を見れば分かる。

確かに人は時として苦手な相手でも無理矢理にでも笑顔で接しなければならない事もある、人間関係を円滑にするために作り笑顔をしなければならぬ時はある。

でも、私が見たあの仮面はそんなレベルのものではない。

雪ノ下さんが言ったように挨拶回りやパーティーに出ている、私たちとそんなに変わらない年であのような強固な仮面をつけられるのだろうか。

雪ノ下さんの姉は、私のように両親から虐待紛いの扱いは受けてなさそうだし、周囲の人間に近寄らないようにしている訳でもない。

ならば、どうしてあそこまで完璧な仮面を着ける必要があるのか。

私の推測だけど、雪ノ下さんの姉が私より強固な仮面を被っているという事は、彼女の内面が私以上に見せつけられない醜いものだからなのかもしれない。

人には見せられない醜悪な内面を覆い隠すために完璧な仮面をつけているのかもしれない。

そうだとすると……………

……………いや、やめておこう……………

これ以上、あの女性の事を考えると今より気が滅入る。

奉仕部に入ってから人の性質を細かく見る癖がさらに細かくなってしまったようだ。



あの仮面をつけた女性がどう思っただろうが、私に被害がこなければどうでも良いけど、あの女性は私に何故かわからないけど興味を持っていた。

私の耳元で囁いた彼女は獣の目をしていて、自分の暇つぶしに丁度いい面白い玩具を見つけたようなそんな感情を含んでいた。

正直に言っただけであんな気持ち悪い人とは二度と関わりたくない。

何の根拠もないけれど、あの人と関わるとそれだけで平穩が脅かされそうな気がしてきてならないのだ。

側から見たら私は根拠もない憶測だけで人を判別する酷い人間だと思われるだろうね。

でも、それでも良い。私は周りに何と思われてもどうでも良い。

誰になんと思われても、何と言われても私は平穩に生きたい。

でも、私の周りにいる人たちがそれを阻む、奉仕部やその依頼人たち、さらにはその関係者までが私の平穩を脅かす。

そのせいで、私に平穩な日常は訪れず、私はその度に危険な思いをしなくてはならぬ。  
い。

平穩が脅かされる恐怖と平穩を脅かされる憤りが入り混じった感情をぶつけるように私はドアを叩く。

力任せに叩いたが、非力な女子高生では大した音はせず、無駄に手が痛くなっただけだった。

一瞬の音が納戸と廊下に響き渡り、再び私の周りが静寂に包まれる。

私は誰もいない納戸で小さく呟いた。

『ああ……こんな事で平穩を脅かされたくない……』

## 遊戯部とのゲームに平穩を脅かされたくない。

職場見学、由比ヶ浜さんの誕生日などの面倒なイベントが終わり、私は奉仕部の部室でテキストとルーズリーフを机に広げていつも通り勉強に励んでいた。

奉仕部には先日の誕生会で和解したらしい奉仕部の3人がいつものような会話をしている。

雪ノ下さんが比企谷君をdisり、由比ヶ浜さんがそれに便乗、比企谷君が捻くれた言葉で返す。もはやワンパターンになりつつある言葉の応酬だ。

先日の誕生会には私も奉仕部の部員だから参加したけど、由比ヶ浜さんには誕生日プレゼントのマグカップを渡してからはほとんど会話に入らずに成り行きを傍観していた。

雪ノ下さんはエプロン、比企谷君は犬の首輪をプレゼントしていた。

比企谷君が犬の首輪をプレゼントしたことには、流石の私も少し引いたけど、それは彼女の飼っている犬用の首輪だったそうだ。

その時に由比ヶ浜さんが比企谷君に謝った。

職場見学の時に比企谷君に事故のことを言われてついカツとなって酷いことを言ってしまったこと、事故のことを一年間も黙っていたことなどを悲しげな表情を浮かべながら語って。

その時の由比ヶ浜さんは側から見れば自分の非を詫びている健気な女子に見えるだろう。

でも、私が由比ヶ浜さんの謝罪の言い分に抱いた感想はこうだ。

『何とまあ都合の良い言い訳』だ。

はつきり言って、気分の良いものではない。

つらつらと健気に自分の非を詫びてるように形だけは整えているが、結局自分の事しか彼女は考えていなかったというわけだ。

由比ヶ浜さんは事故の事を黙ったまま、職場見学でこれまで接してきた事を比企谷君に指摘され、謝罪もなしにその場から逃げて、挙げ句の果てに会わせる顔がないからという理由で、今日まで部活を休んでいた。

それを今更言うなんて『恩知らずの卑怯者』にも程がある。

由比ヶ浜さんが飼い犬をを救ってもらったのは入学式の時らしいから、もう1年以上は経っている、これまでにない程の今更だ。

そもそも由比ヶ浜さんは奉仕部に私が入部させられるより前に奉仕部にいたのだから、比企谷君にお礼を言う時間は腐るほどあつたはずだ。

それなのに、今の今まで何もせず、本人から言われてからやつと動くなんて、本当に彼女はどうしようもない。

それに由比ヶ浜さんは日頃から雪ノ下さんと一緒に比企谷君と罵倒していた。その態度から考えても彼女が本心からお礼をしたのかすらも私は怪しいと思う。

由比ヶ浜さんが比企谷君にお礼を言いたいのなら比企谷君が病院に入院している時、もしくは学校に来てすぐにお礼を言えば良かったはずだ。

しかし、彼女はそれをせずに1年以上も事件のことを隠してお礼も謝罪もせずにいた

のだ。

比企谷君はこう言っていた。彼の妹は由比ヶ浜さんと事故の後に面識があり、事故の後にお礼と菓子折を由比ヶ浜さんは彼の妹さんに渡したそうなのだ。

でも、それなら比企谷君が1年もその事故の当事者のことを知らないのはおかしい、つまり彼女は事故の後には奉仕部に入部するまで肝心の比企谷君には会いにも行っていないということなのだ。

結局、お礼をされたのは比企谷君の妹だけで肝心の彼には何一つとしてお礼も謝罪の言葉すらも彼女は言っていなかったと言うわけだ。

まあ、クラスのトップカーストに属している由比ヶ浜さんからしてみれば、ぼっちでカーストの最下層に属している比企谷君と繋がりがあるといえるのは避けたいだろう。

でも、それならどうして由比ヶ浜さんは今になって1年も前の事故のことにお礼を言おうと思ったのだろうか。

比企谷君がぼっちだったから、クラスのトップカーストにいる彼女なら、飼犬を助けてもらった恩人でも関わりたくないのには頷ける。

でも、そうだとしたらこのまま彼と干渉でいければ良いだけの話だったはずだ。彼に



は友人と呼べる人なんてその時はいないだろうし、彼も自分の発言力がない事くらい理解しているだろう。

それなのに、何で今になって風見鶏の彼女が嫌うギクシヤクした雰囲気を作り出してまでお礼を言おうと思っただろうか。

考えれば考えるほど由比ヶ浜さんの行動は謎だ。言ってることとやってることが矛盾しすぎている。

……でも、もつと驚いたのは比企谷君が由比ヶ浜さんの事の隠していた事故のことを流した事だった。

由比ヶ浜さんの誕生会の時に比企谷君が由比ヶ浜さんの事を流す的な事を言ってる時は、思わず椅子からひっくり返りそうになった。

比企谷君は由比ヶ浜さんが自分なんかと仲良くしているのは事故の事が原因なんだ

と想っていた、だから職場見学の時に『同情で接するのはやめてくれ』と言ったそうだが、由比ヶ浜さんの今更ながらの安い謝罪であんなにあっさり事故のことを流すだなんて思わなかった。

普通なら入学式の時に事故にあい、見舞いすらもろくに来ない、事故の加害者は自分であるのに対して1年以上もお礼を言わないのに日頃の彼に対してのあの態度。

どう見ても反省しているようには見えないし、彼女はただ事故の件がバレて空気が悪くなってるから謝ろうとしているだけだ。

そんな人を殆どがめもせず、水に流した比企谷君は優しいというより愚か者と言っても良いだろう。何かこんな人に怯えていた自分が馬鹿みたいだ…

それを腕を組みながら偉そうに見ていた雪ノ下さんも『筋の通った事しか認めないと』というような理論を日頃から掲げている割には、その由比ヶ浜さんの少しも筋の通っていない行動に何も言わずに呑気に誕生日を祝っていたからね。

親しい人が周りにいない比企谷君と同レベルくらいのぼっちの雪ノ下さんはおそら

く初めて出来た友人と呼べる相手、由比ヶ浜さんを失いたくないのか、それとも彼女自身が無事ならも考えられない人なのかは分からないけど、どっちにしても雪ノ下さんに人を見る目はないようだ。

私は奉仕部の人たちの都合の良さに呆れを通り越して笑えてくる。

この誕生会も明らかに互いの本心を曝け出さずに表面上で笑ってるだけの空虚なものと言わざるを得ない。

本来なら事件の加害者と被害者同士で加害者が1年以上も事故のことを隠していたのならこの後も仲良くだなんて普通はできない。でも、この人たちはこれから今まで通り仲良くしようとしているのだ。

はつきり言って気持ち悪い。加害者の由比ヶ浜さんといい、被害者の比企谷君といい、それを見ても何も言わない雪ノ下さんといよいよそんな事が平然と出来るものだ。奉仕部の3人は目の前のことが解決したのなら、もう細かいことはどうでも良いと思ってるようにしか見えない、でも、本当にそれで良いのかな…？

…まあ、あの人たちが納得しているならそれで良い。私に被害が来なければ知った事

ではないしね。

……そんな事を考えていると、部室の扉が勢いよく開かれた。

「頼もうー！」

その声に嫌な予感がしてドアの方を見ると、そこには小太りの体型に眼鏡をかけた男子が野太い大きな声をあげて立っていた。

……本当に嫌な予感ほどよく的中するものだ……

次の厄介事が派手な音と共に舞い込んできた時だった……

「……………というわけなのだ…」

「なるほど…」

依頼人は迷惑厨二男の材木座君、依頼は簡潔にまとめると、彼がよく行くゲームセンターで総武高校の男子に自分の夢のことを笑われてその事で揉めてしまい、勢いでその人と後日ゲームで勝負するという約束をしたのだ。

その男子は『遊戯部』と名乗る部活に所属しており部員は二人、でも材木座君はぼっちでこんな事を相談できるような友達がいなかったため、団体競技が出来ないので奉仕部に相談しに来たという事らしい。

「だから、勝負そのものをなかったことにするか、我が確実に勝てるもので勝負したいん

じゃよ。だからそういう秘密道具を出してよ、ハチえもん……」

依頼の説明を終えた材木座君は彼が唯一話せる相手の比企谷君に縋り付きながら訳の分からないことを言っている。

いや……彼の言ってる意味がぜんぜん分からないのはいつものことなのだけれどね。

「悪いが断る。今回の勝負は明らかにお前に原因があるだろ、刺される覚悟がないならそいつらを煽んな」

比企谷君が面倒臭そうに材木座君にそう言う。

これには私も全面的に賛成だ。ロクな勝算もなしに売り言葉に買い言葉でそんな約束をしてしまった材木座君が悪いのだから。

私が材木座君に密かに軽蔑の視線を送ると、材木座君は今度は立ち上がって私たちを

見渡して挑発するかのように言った。

「……はん、平社員の八幡に決定権などないことはすでに分かっているわ！」

材木座君はそう言うと、雪ノ下さんを見て見下したように言った。

「雪ノ下部長、奉仕部などと片腹痛いわ！目の前の人間一人救えずになにが奉仕か。本当は救うことなど出来ぬのだろうか？綺麗ごとを並べ立てるだけでなく、行動で我に示してみろ！」

「……ちよっ……！」

「あ、材木座、バカ……」

材木座君のその言葉に比企谷君が慌てたように声を上げる。私も無意識に口から声が出た。

この部長にそんな事を言ったら……！

「……………そう、では証明してあげましょう」

……………ほら、やっぱりこうなった……。

その後は材木座君の挑発にマンマとつた雪ノ下さんの独壇場で自分がどれだけ優秀かのスピーチを冷たい雰囲気醸し出しながら言い、結局、いつもの通り依頼を受け



ることが決まった。

比企谷君と材木座君は雪ノ下さんにガタガタ震えていた。

ていうか、比企谷君は断るって言ったのに、それを無視して依頼を受けるなんて本当にこの部長は自分が中心なんだな……

自己中な部長は部員たちの意見など御構い無しな材木座君に案内しなさいと言ってその遊戯部とやらに向かう。

……やっぱり参加するのは確定事項なのか……

この部活のトップに立つ身勝手な独裁者は、依頼人の安い挑発に面白いくらいに引つかかって、平民の部員たちに確認も取らずに参加を取り決める。

相変わらずの横暴だけど、もうここまで来たら反論するだけ時間の無駄だ、適当に勝負をしてさっさと終わらそう……

私はため息をつきたいのを我慢して、テキストを鞆に片付け奉仕部と材木座君に連れ

られるままに部室を後にした。

「遊戯部の部室に行く途中、私は今回の依頼で向かう『遊戯部』のことに現実逃避も兼ねて思考を飛ばす。

『遊戯部』は字面から察してサッカーや野球などの外でやるスポーツなどではなく、室内でのゲームなどをする部活だと思いが、よくもまあこんなふざけたような部活を許しているね。」

私の推測通りなら家でも出来ることをわざわざ学校の部活動にしてやる意味がわからない。

おまけに遊戯部との勝負事を受けたのは材木座君であつて、私がこの依頼で彼を助ける義理も理由もない。

それにしても、稚拙な小説を持つてきた時もそうだったけど、彼は本当に甘つたれだ。小説の時は批判されなくなつたから、奉仕部に持つてくることで自分のプライドを守ろうとした、今回は自分で受けた勝負に負けたくないから無関係な人を巻き込んでこれまた自分のプライドを守ろうとしている。

私から見た材木座君は自分で決めた物事を何一つ自分で出来ない無能、こんな人に情けをかける必要なんてあるのだろうか？

……まあ、人に頼つてまで勝ちたい勝負に価値なんかないと思うけどね。

私はそんな事を微塵も考えていないであろう材木座君に侮蔑の視線を送りながら、現実逃避のための自問自答を内心で繰り返して、彼らと共に遊戯部の部室に向かつた。

「たのもーう！」

『遊戯部』というプレートが掲げられた教室の前に到着すると、材木座君が口火を切って勢いよく入っていく。

「あ…剣豪さんだ、本当に誰か連れてきたんですね…」

部室の中にいる遊戯部であろう男子たちに『剣豪さん』という渾名で呼ばれる材木座君、彼は私たちの前では自分を『剣豪將軍』とか訳わからないこと言っていたから、彼らの時もそう名乗ったのだろう。

……何か、材木座君が彼らに馬鹿にされた理由はゲームの事だけではなく、この彼の厨二臭い言い回しも原因がある気がする……

「我に力を貸してくれると誓った、臣下達であるっ！」

そんな中、材木座君は調子に乗ったのか腕を広げて後ろにいる私たちを自分の部下を意味する『臣下』と言った。

……私としてはいくら社会のカーブスの最底辺にいても材木座君の臣下になるのは御免だ。

それどころか材木座君を臣下にするのも嫌なぐらいだ。

まあ、調子に乗った材木座君のその言葉に自尊心の高い部長は機嫌を損ねてるみたいだしね……

「ああ……あの人だよ」

「そうか…あの世間知らずの」

材木座君が入ってきた時こそ彼らは驚いたような表情だったけど、すぐにニヤニヤとした明らかにこちらを見下したような気持ちの悪い笑みを向けて来た。

彼らはネクタイの色と上履きの色から見て1年生、仮にも先輩の私たちに敬意を払うつもりは全くないらしい。

潔癖な雪ノ下さんが気持ち悪さに震える。私は信頼からの下品な視線に慣れてるか  
らそこまでじゃないけどね。

遊戯部の部室をざっと見渡すとたくさんの本やモニターゲーム機が沢山置かれていた。

こんなものを部費で落とせるわけがないからおそらく自前のものだろう、学校にこんなものを持つてきていることがバレたらどうするつもりなんだか……

私がそう思っていると、早速本題の話になり、雪ノ下さんを始めとして私たちも彼らに軽く自己紹介をする。

向こうも自己紹介を返した、彼らは相模と泰野と言うらしい。

「あ、二年の雪ノ下先輩じゃ……それに、もうひとりの人も……」

自己紹介が終わると、遊戯部の一人の相模は雪ノ下さんと由比ヶ浜さんを品定めするかように見て薄ら笑いを浮かべた。

……何か信頼が時折私に向ける笑みに似ている。はつきり言って気味が悪い。

彼は一通り雪ノ下さんたちを見た後、今度は彼の気味の悪い視線から逃げるために材木座君を縦にして後ろに身を潜めていた私に視線を向けた。

「へえ……この人もいいな……」

小声だったが、私にははっきり聞こえた。そのせいで余計に背筋が寒くなった…

そんな私の心情を御構い無しに雪ノ下さんたちは本題の話し合いを進めていく。

「ゲームで決着つけるって話だったけど…秦野君、ゲーム強いんだよね？何か他の勝負とかにできないかな…？」



「…まあ、いいですけど…何か見返りとかはないと…」

由比ヶ浜さんがおずおずと泰野にゲームではなく他の勝負に出来ないかと頼んでい  
る。

まあ、如何にもこんなゲームオタクのような人たち相手にゲームで勝負するのは流石  
に分が悪いからね。

でも、泰野も簡単には引かずに代わりの見返りを求めてきた。自分たちに無利益でそ  
んな条件は呑みたくないらしい。

「…材木座からの謝罪でいいんじゃないか？揉めたことに変わりはないんだし」

「…え？我？」

そんな中、比企谷君が口を開いた。

見返りは材木座君からの謝罪で良いのではないかと。

至極真つ当な意見だ。私たちは材木座君に巻き込まれたただだし、材木座君自身も彼らと揉めたのは事実なんだから。

「そりやそうだろ。こっちは付き合ってるだけなんだし」

「そうね、それで良いでしょう。やるゲームは貴方達に任せるわ」

雪ノ下さんの言葉で見返りは材木座君からの謝罪に決まったらしい。

材木座君はアタフタしているけど、人に迷惑かけてんだからそれくらいの責任は取りなよ。

そうして、話が纏まり本題の勝負のゲーム決めになった。その時、遊戯部の1人でさつき嫌な視線を向けてきた男子である相模が何やら考えて口を開いた。

「あ、よかったら、雪ノ下先輩たちも参加されませんか？簡単なトランプゲームなんで。お二人が勝つても、その劍豪さんたちの勝ちつてことにしてもいいですし」

「お、おい……」

それは雪ノ下さんたちもゲームに参加しろという誘いだった。何をやらせるつもりなのだろうか。

「…そうですね…それじゃあ…ダブル大富豪でどうですか？」

「……ダブル大富豪？」

相模はダブル大富豪というゲームを提案してきた。

大富豪なら私も知ってはいるが、ダブル大富豪なんて聞いたこともないゲームだ。

「……ルールは？」

「普通の大富豪と同じです。ただし、ペアを作って頂き、チームで交互にカードを出していき、カードがなくなったペアから勝ち抜け……って所ですね。ただしチーム内での相談は禁止させていただきますね」

「ローカルルールはあるのか？」

「そうですね……8ぎり、階段、革命、スペ3位でいいんじゃないでしょうか？とりあえず、5本勝負でどうですか？」

「……わかったわ」

「ペアの組み合わせはそちらで決めて下さい」

話を進めた結果、この遊戯部2人と『ダブル大富豪』なるゲームをすることになった。二人ペアで大富豪をするみたい。となると、この5人でペアを2つ作るには、誰か1人が抜けなくてはならない。

そうなると……

「私が抜けるよ、大富豪とか弱いしさ」

真っ先に私が手を上げて参加辞退を表明する。

ぶっちゃけトランプとか殆どやったことない私は大富豪のルールは知ってるけど、勝算なんて知らないし、殆どやったこともない。

それに、この遊戯部の男子からのさつき気持ち悪い視線は生理的に耐えがたいものだった。それならさつきと辞退して安全圏にいた方が賢明だ。

雪ノ下さんたちも納得をしてくれた、今回は私は私で見学で済みそうだ。

雪ノ下さんも大富豪をやったことがなかったらしいけど、あそこまで小馬鹿にされて黙って引き下がるほど彼女の気位は低くなく、今回は初めてだとしてもやるようだ。

私が抜かされてペア分けが行われ、比企谷君と材木座君ペア。雪ノ下さんと由比ヶ浜さんペアという男女が分かれたペアになった。

このゲームは最終的には2チームのどちらかが遊戯部のチームに勝てばいいので、仕部に圧倒的に有利だ。

でも、このゲームを提案したのは相手からだ…わざわざ相手に不利になるようなゲームを提案するかな…

まあ、私は見学するわけだからどうでも良いか…

私は勝負内容に少し引っかけかきを感じたが、参加しないのだから関係ないと考えないようにした。

脇の椅子に座りながら私は勝負の成り行きを黙って見守る。

初戦は比企谷君ペアが一抜け、雪ノ下さんたちが二抜けとなった。

「いやー秦野くん、負けちゃったねー。しまったな…」

「そうだな。相模くん。油断してしまった」

一回戦目は遊戯部の2人の負け、でも、遊戯部の2人は嬉しそうだ。

まだ一回戦目だから何かしらの勝算があるのか、それとも別の理由があるのか分からないが彼らはニヤニヤと笑っている。

「困ったね」

「困ったな」

「だって、負けたら服を脱がなきゃいけないんだから」

そう言って遊戯部の二人は着ていたベストをしゅつと脱いでしまった。

……え？そんなのありなの？

「なっ?!?何よそのルールっ!」



由比ヶ浜さんが目を見張って声を上げる。

私も思わず目を見開いた。

負けたら服を脱ぐルールなんて聞いていないのにいきなりそんな事を言われても困惑する。

でも、遊戯部の2人は取り合う様子はない。あくまでもこのルールを押し通すつもりのようなのだ。

女子としての最低限の嗜みは由比ヶ浜さんはあるのか帰りがたがっている。普通の人なら当然の行為だ。

負けたら服を脱ぐなんてバラエティ番組の野球拳じゃあるまいし、そんな事を常識的に考えて女子高生が好き好んでやるわけが…

「ゆきのん、もう帰ろうよ、付き合おうのアホらしいし……」

取り合わない遊戯部の2人の説得を諦めたのか、由比ヶ浜さんが雪ノ下さんに助けを  
求める。

私も彼女に視線を向ける。いくら愚直で独善的な部長でもこのルールを黙認するわ  
けが…

「そう？ 私は構わないけれど。勝てばいいのだしね。それに勝負する以上はリスクは当  
然だわ」

雪ノ下さんは何の問題もないと言いたげに承諾の意を返した。

「……………はあ？」

雪ノ下さんの『勝負を続行する』というカミングアウトに思わず声が出てしまった。でも、そんな声が出るほどのことだった。

この人何を言ってるの？

私は呆然とした。普段から潔癖そうに振る舞っている雪ノ下さんがこういう脱衣ゲームという下衆なゲームに付き合うことが。

「由比ヶ浜さんの誕生日プレゼント選びの時には『私は男子からの贈り物は気持ち悪い』とまで言っていたのに、今この場で異性に裸を見られるかもしれないというリスクがあるのを理解しているの？」

「勝つのが確定みたいに言っているけど、根本的に「服を脱がされるのが怖くないの？」  
女子が男子に肌を見せるようなそういうことするべきじゃないと言うのは世間一般の最低限の常識なのに。」

「問題ないわ。このゲーム、ローカルルールの多さ——…」

雪ノ下さんはこの光景を見ても引く気はないらしく『大富豪の必勝法を自分は知つてます』的な頭良いキヤラを押し出して勝負を挑もうとしている。

比企谷君に視線を送るも、お手上げみたいな顔されて何も言わない。ちよつと苦々しい表情をしてるけど、どうしようもないみたい。

この状況が異常なのに気付いてるのにも関わらず何も行動を起こさない。本当に頼りにならない。

「さあーはようーはよう始めようではないか！」

材木座君が早く試合を始めるようにせかしている。どうやらこの部室内の空気はもうすでに脱衣ルールを認める空気になっていた。

藁にもすがるつもりで由比ヶ浜さんにも視線を向けるが、空気を読んで合わせることはできない風見鳥は何も言わずに席に座ってオロオロしているだけ。

私がそう内心で思っている間に二戦目が始まった。

………何事も起こらなかつたら良いのだけれど…

二戦目が始まり、私は最初は傍観していたが、ふと材木座君の動きが何かおかしいということに気づいた。

こつそり遊戯部の人たちのカードを自分の長身を活かして覗き込むと、奉仕部の人たちの持つているカードより強いカードが多くあったのだ。

単なる偶然かと思ったが、その後のゲームでそれは違うと気づいた。

おそらく材木座君は女子の下着姿が見たいために奉仕部の人たちを裏切り、遊戯部の方についたのだ。

恐らく、遊戯部の人たちの奉仕部の人たちが男女のペアに別れたため脱衣ルールで不和を招こうという心理作戦なのだろう。

そして、恐らく彼らは結託して雪ノ下さんと由比ヶ浜さんの女子ペアを負かせるように動くだろう。

材木座君は女子の下着姿が見られるし、遊戯部の人たちもそれは同じ。利害関係が一致しているからね。

何とまあ汚い作戦だ、見ているだけで吐き気がする。

私の予想通りに相模君と泰野君、そして材木座君は雪ノ下さんたちを負かすように動き始めた。

だが、比企谷君がそれに待ったをかけて『2人の分の負けまで自分が背負う』と言いつ出したのだ。

それでも、雪ノ下さんたちの負けまで背負ったのと、材木座君の裏切りにより回数を重ねるうちに比企谷君はどんどん服を脱いでいき、5戦目にはとうとう下着一枚に、材木座君は普段から着膨れていたためか、まだ、ズボンもワイシャツも無事という何とも不公平な現状になっていた。

「よし……。絶対に、勝つ……」

ズボンを脱いだ比企谷君がそう言う。

この状況でまだそう言えるのは良いけど、もうほとんど勝つ可能性はない。

「ぶっふー！もうパンツ一丁の人がなんかかっこつけてゆー！みつともなーい！」



比企谷君の発言に材木座君が爆笑する。見渡すと、遊戯部の二人も遠慮なしに笑って比企谷君を貶しているし、雪ノ下さんも肩をぶるぶる震わしている。

流石にそれには比企谷君も反抗したけど、それすらも遊戯部の相模君たちと材木座君は笑いの肴にしている。

「……くくっ……落ち着け八幡。ゲームとは楽しんでするものだもつと余裕を持って」

材木座君が比企谷君を宥めるためか毒にも薬にもならない話をする。

だが、遊戯部の相模君たちにはそのスタンスが気に入らなかつたのか、それを今度は馬鹿にし始める。

そして、『アンタは夢を言い訳にして現実逃避しているだけだ。アンタは偽物だ！』と畳み掛けるように言った。

そして、ここで何を考えたのか雪ノ下さんが『材木座君の将来を考えるなら遊戯部の彼らの意見を聞くべきね』となぜか遊戯部の人たちの方が正論と決め打ちして彼らの方に味方をし始めたのだ。

雪ノ下さんが味方になって調子に乗った遊戯部の2人はさらに言葉を荒げる。

しばらくその応酬は続いていたが、やがて何を思ったのか相模君が言い争いをやめて私の方に視線を向けた。

「まだ、その先輩の方が強そうですね。比企谷さんのかわりに貴女が大富豪をしませんか？」

私を見て笑顔でそう言ったのだ。

………はあ？

相模君のそれを聞いて遊戯部の2人と材木座君の期待したような視線に私は思わず目が点になる。

……いやいや、目の前で男子が1人下着一枚になつてるのを見て参加しろと？  
そんなこと言つて参加する人がいると思うの？

私も女だ。こんな人たちに自分の裸を見られるなんて冗談じゃない。

遊戯部の空気は最悪だった。

材木座君の裏切りにより下着一枚に比企谷君がなってるのにも関わらず、材木座君は女子の下着が見たいという醜い欲望のために彼を遊戯部と一緒に嘲笑っている。

雪ノ下さんたちもゲームの勝敗のことで頭が一杯なのかこの異常さに気付く様子はない。

……………それなら……………

「ごめん、私は少しお手洗いに行ってくるよ」

わたしはそう言うど席を立った。

「なんですか？逃げるんですか？」

「いえ、すぐに戻ってくるから。それまで休憩してて」

ニヤニヤと嘲笑う遊戯部の相模君の視線を受けながら、私は頭の中で密かに考えていた打開策を実行に移すことを決める。

後ろから聞こえてくる声を無視して私は立ち上がり遊戯部の部室を見渡して、彼らへの思い思いの評価を心の中で小さく呟く。

私は雪ノ下さんと由比ヶ浜さんにも冷め切った視線を向ける。

この人たちはやはり私の思った通り、目の前のことをやり過ぎしたら後のことなんて少しも考えてない。

1年前の事故のことを許したのなら、これから新しく3人で信頼関係を築こうとして

いるなら、本来なら目の前で嘲笑わられている彼をあなた達が助けるべきなんじゃないのか…？

それにも関わらず、雪ノ下さんも由比ヶ浜さんも比企谷君を助けるどころか遊戯部の人たちに抗議もせずただ黙っているだけ、このゲームが脱衣ゲームだって知った時は猛抗議していたのに。

『自分が被害を被ってないんだから良い』、『被害に遭ってるのは自分たちが常日頃から見下している比企谷君だから良い』とか思ってるんでしよう？

私はこの遊戯部の人たちとのゲームの勝敗なんてどうでも良いし、材木座君の夢のことなんてもつとどうでも良いんだけど、ここまでになったらそんな事を言ってもらえなくなった。

校内で脱衣ゲームをしていたと言う事が知られたら私まで遊戯部と材木座君の性への欲望に塗れた罪に巻き込まれてしまうかもしれない。

本来なら脱衣ゲームだと知った時に奉仕部の人たちにはこのゲームを降りて欲しかったんだけど、奉仕部の3人はこのリスクに少しも気付いてないのかゲームを続行しているのだから頼れない。

本当に後先考えない人たちだ、奉仕部やその依頼に関わる人に常識のある人はいないのだろうか？

でも、私の身を守るためにはこの脱衣ゲームが露見するのを止めなくてはならない。

……こうなったら仕方ない……

……私が彼らに引導を渡すしかないか……

私はパンツ一丁になったまま顔を俯かせている比企谷君をニヤニヤ笑っている遊戯部の2人を軽く睨む。

そして、私たちを裏切り比企谷君を嘲笑う材木座君にも密かに同じような視線を向ける。

さらに、それを見て何も言わずに勝負に勝つためにカードを凝視している雪ノ下さんと、オロオロしているだけの由比ヶ浜さんにも同じような視線を向ける。

……私は人を見る目がないとは思ってたけど、それでもなかつたみたい。

……雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、比企谷君、やっぱり私にはあなた達の中に信頼関係があるとは思えない。

……材木座君、貴方は比企谷君のことを『相棒』とか言って友人らしく接していたけど、貴方は自分より立場が低い人をそう呼んでいただけにしか見えない……

そもそもこの依頼を持ってきたのは材木座君なのに急に遊戯部の味方をしたという



ことは材木座君も遊戯部の2人と同じく雪ノ下さん達の裸を見たいからと言うことしか考えられない。

貴方に友達ができないのにも納得した。こんな人をそばに置いておきたくないし、お粗末な妄想小説にお世辞を言うのなんて真っ平だろう。

……『因果応報』という言葉を知ってる？

自分のした事は自分に返ってくると言う意味だ。

少し危険な打開策だから使いたくなかったけど、ここまできたら仕方がない。

私はそう内心で呟くと遊戯部の部室のドアを開けた。

彼らに引導を渡すために……！

理解できなくても平穩を脅かされたくない。

―比企谷八幡 side―

富良野が部屋を出て行き、部屋には俺と雪ノ下、由比ヶ浜、材木座、遊戯部の奴らだけになった。

遊戯部の2人は未だに材木座の夢とそのスタンスを馬鹿にしている。

途中から雪ノ下が同調したこともあり、さらに調子に乗って材木座や俺たちに非難の言葉を投げる。

気の小さい材木座は何も反論できずに黙りこくっていた。

だが、その時に由比ヶ浜がポツリと絞り出すように呟いた。

「始め方が正しくなくても、中途半端でも、でも嘘でも偽物でもなくて……好きって気

持ちに間違いなんてない……と……思う……けど」

…と遊戯部の2人を真っ直ぐに見て反論した。

遊戯部の2人と雪ノ下はいきなり声を上げる由比ヶ浜に驚く。俺も少しだけ驚いた。

由比ヶ浜の発言に勇気づけられたのか、奴らに言われっぱなしだった材木座も言い放つ。

「我は作家やライターになれなくても書き続ける！好きだからなるのだ！」

……と自分の感情をぶつけるように泣き叫んだ。

そのタイミングで、俺はとっておきの6の札を4枚出す。

同じ数字のカードが4枚の役柄は『革命』だ。

これなら奴らに勝てるかもしれないとカードを集めてこっそり作っておいたのだ。

ところが、材木座が1の札を出し、『イレブンバック』を起こしてしまったため、この場に限っては革命が意味をなさなくなってしまった。

そして、場に出ているカードを全て暗記していたという驚異の必勝法を実践していた雪ノ下は、

自身の負けを悟り、サマーベストを脱ごうとした。

その時、雪ノ下に見惚れていたらしい遊戯部の1人、秦野がジョーカーの札を落とし、てしまう。

それを見た由比ヶ浜がさかさず自分のスペードの3を出し、次に雪ノ下が最後の札を出し、遊戯部との大富豪に勝利した。

俺の起こした革命が報われた瞬間だった。

こうして、勝利した俺たちに約束通り秦野と相模は軽く謝罪し、丸く納まった…

……と思われたその時、勢いよくドアが開かれた。

「おい！君たち！何をしてるんだ？！」

部屋に野太い大人の男の声が響き渡った。

いきなり部屋に響き渡った野太い大声に少しだけ感動的なムードだった雰囲気ガガ  
ラリと変わる。

ドアの方を見ると、それは教頭先生だった。

確かこの教頭は馬鹿が着くほど真面目で規則や生活指導にもものすごく厳しい事  
有名だ。

……何でそんな教頭がここに…？

そんな俺の疑問を他所に教頭は俺をみると目を見開いて大声で言った。

「だ、男子生徒がパンツ一枚に……！こ、これは一体どういことだね！！？」

教頭はパンツ一丁の俺を見て顔を真っ青にしながら俺たちに問いかけた。

その声でいきなりの教頭の登場に頭がフリーズしていた俺も自分の状態とこの状況に気づく。

不味いな…これは非常に不味い……！

「ち、違うんです…これは……！」

慌てて遊戯部の1人の相模が弁明を始める。だが、この状況でそれはかえって逆効果だ。

自分で言うのも何だが、中学の頃に虐められていた俺は濡れ衣を何度も着せられたことがある。



そんな経験をしている俺からしてみると、あいつのあの弁明は悪手だ。

ただでさえ疑われている状況であんな弁明をしても相手は言い訳にとしか受け取らない。

現に教頭は相模の言い分を信じているようには見えないからな。まあ、この状況なら仕方ないのかもしれないが……

「教頭先生、そこの人たちです。その1年生の2人と材木座君が脱衣ゲームを私たちに強要したんです」

その時、教頭の後ろから聞き覚えのある女子生徒の声が飛んだ。

聞き覚えのある声の女子生徒、それはさつき遊戯部の相模にゲームに誘われた時に部屋から出て行った富良野だった。

彼女は教頭の後ろから出てくると無表情で遊戯部の2人と材木座を指差す。

遊戯部の2人は顔が真っ青になり、材木座は自分までもが指をさされたことに頭の理解が追いついていないらしく口を金魚のようにパクパクさせている。

そんな材木座たちを気にせず富良野は教頭に『比企谷君はそこにいる遊戯部の2人に服を脱がされた』と説明する。

「な……何ですってえ……？」

無表情で淡々と教頭に説明する富良野は材木座と遊戯部奴らを的確に追い詰めていく。

富良野の説明を聞いているうちに教頭の顔色はだんだん険しくなり、富良野の説明が終わると材木座たちを険しい顔で睨みつけた。

そして、俺たちみんなを見渡してこう言った。

「き、君たち！とにかく職員室に来なさい！詳しい話はそこで聞きましょう！」

教頭は下着一枚の俺に自分の上着をかけて『服を来たら君も来なさい』と言い残し、材木座と遊戯部と雪ノ下たちを連れて部室を出た。

さつきとは打って変わって青い顔の遊戯部の2人と現状についていけず混乱している材木座と雪ノ下たち、そんな彼らをお構いなしに教頭は職員室にみんなを連れて行き、部室には俺と富良野のみとなった。

「……………」

唾然呆然とは今の俺のことを言うのだろう。俺はあまりの急展開に頭が働かなかつた。

教頭に上着をかけられたままぼんやりと雪ノ下たちの連れて行かれた遊戯部の部室のドアを眺める。

「早く行こうよ、比企谷君。みんな待ってるよ」

急展開すぎて頭が働かない俺だったが、声をかけられたことによりハツと我にかえる。

声をかけられた方に視線を向けるとそこにはこの状況に似つかわしくない笑顔に向けた富良野がいた。

俺自身も女子に声をかけられる時は、こんな綺麗な笑顔を向けられたことはないが、

こいつの笑顔には俺は見入ってしまった。

別に見惚れていたとかではない。いつも俺たちの前でしているような取っつけたような仮面の笑顔ではなく、テニスコートやチェンメールの時のような悪魔のような笑顔でもなく、本当に心の底から笑ったような笑顔を今の富良野はしていた。

いつもの仮面をつけておらず、目の前にいる富良野は本当の笑顔を俺に向けているように感じた。

「……………っ！」

……………気持ち悪い……………！

俺は富良野のそんな笑顔を見ていると背中に気持ちの悪い悪寒が走った。

こいつはこんな状況なのに、心の底から『嬉しい』『楽しんでる』というような感情を含む笑顔だ。

こいつの笑顔には材木座や遊戯部に対して怒りの感情は含んでいない。雪ノ下たちを心配している感情も含んでない。

——何故、こいつは笑っていられる…？何故、こいつはこんな状況でそんな笑顔ができる…？

「どうしたの？早く行こうよ」

俺が富良野に疑問の念を浮かべていると、富良野が俺の手を掴んで『早く行こうと』と急かした。

俺は制服を着直して手を掴まれたまま、富良野の後を追いかけた。

―比企谷八幡 side end―

―材木座義輝 side―

「ねえ…見てよ…!あのデブまた来てるよ!」

「あのクソデブ変態野郎、さっさと死ねば良いのに…!」

「本当に邪魔だわ」

「……………」

……はあ……またか……

クラスメイトからの心ない蔑みの視線と発言を背中に受けながら我、材木座義輝は顔



を俯かせたまま自分の席に座った。

『変態野郎！材木座義輝！』

『女子を襲おうとした強姦魔！』

『重罪人！死刑！』

でも、私の席にはいつもこんなものが書かれた紙がおいてある。

きつと、それはさつきからヒソヒソと敢えて我に聞こえるような声で話しているクラスメイトの仕業だろう。

前からクラスでハブられていた我だが、ここまであからさまなイジメは受けたことがなかった。

周囲の人間は誰もが我と距離を置き、誰一人として我に救いの手を差し伸べるような

ことはしない。

本当にどうしてこうなってしまったのだ…。私は机の上の手紙を片付けて周りの嘲笑や陰口を背中に受けながら全てを失ったあの日に意識を飛ばす…

教頭先生に職員室に連れられ、そこで教頭先生がことのあらましを校長と生徒指導の平塚先生に説明した。

そこからは平塚先生に生徒指導室に連れて来られた。我らは今『座って待っている』と言われて椅子に座っている。

チラつと横を見ると遊戯部の2人は顔を真っ青にしガタガタ震えている、おそらく我も同じような顔をしているだろう。

奉仕部の4人は教頭を呼んだ富良野さんを除いて状況についていけないのか視線を

彷徨わせていた。八幡だけは富良野さんに視線を向けていたが…

その時、ガラツと音を立てて生徒指導室の扉が開いた。

音に対して心がビクリと跳ねる。喉が渇き、背中に冷や汗が滲む。

扉を閉め向かい側に腰を下ろした教師、平塚静先生は我らを見渡して真剣な表情で口を開いた。

「さて、君たちをここに呼び出した理由は君たちにもわかっているだろう？」

「……………」

全員が無言。口は動かさず、より一層暗い顔をしてただ俯くだけだ。

我は何も答えられなかった。遊戯部の2人も青い顔のまま答えようとしない。

「沈黙は了承とみなすぞ、我が総武高校の生徒ならリスクリターンの計算はできると思っていたのだが……」

その言葉に無意識に我は顔の筋肉が動いたのを感じた。どう見てもただではすみそうにもない。

その後も話し合いは続き、最後に疲れ切った顔の校長から我々への処分が言い渡された。

「……君たちを庇ってやりたいのはやまやまだが、部室で脱衣ゲームなどをする事など

断じて許されるものではない。君たちの処分は未だ決議中でその間は無期限の謹慎処分となっている。少なくとも停学は免れないな……後ほど連絡がいくだろう」

そう言つてその日は解散となった。

家に帰るとすでに学校から連絡が入っていたのか、父親からは殴られ、母親からは泣かれ、その日は両親の怒声が我が家には響き渡っていた。

そして、次の日に学校から『処分が決まった』と報告が届き、我と遊戯部の2人には2週間の停学という処分がくださった。

2週間の停学があけて、我が学校に戻ってきたらそこにはもう私の居場所はなかった。

元からクラスで孤立していたからというのもあったが、クラスメイトは我を見るなり露骨に我を避けたり、我を遠ざけるようになった。

私の隣の席にはほとんど会話したことない女子生徒が座っていたが、その女子は我が教室に入るとあからさまに我と距離を置き、同時に『ごめん：席変わって欲しいんだけど：』と前の席の男子生徒に席をかわるように申し出ている。

席を代わった男子生徒も『脱衣ゲーム』をして停学をくらった生徒とは進学にも影響するから今後の学校生活に影響するから分からないが、私の近くには近づかない。

女子生徒に至っては我をゴミのように扱う。プリントを回される時は投げて渡されるし、我が通路を塞いでいる時は『死ねやゴミ：』と言われることもある。

担任も我がこうなったのは自業自得と思っっているのか手を差し伸べずに見て見ぬ振りを決め込んでいる。

両親にも助けを求めたが、あの遊戯部との勝負が発覚したときに学校側から連絡が

入っているため『自業自得』や『本来なら退学になるのを免れたんだからそれだけでもマシと思え』など言われ突き放されるのみだった。

学校としては部室で女子に脱衣ゲームを強要していたという事は、進学校としての名誉にも関わってくるので、あまり大ごとにしたくないらしく、外部にこのことが漏れるのを何とか避けるため、我らを退学にしなかつたのだろう。

だが、やはり後々今の我のような問題がどうしても生じてくるため停学の処分が下された時は担任の教師からは『転校』を勧められた。

だが、私の親は経済的に余裕があるとは言えず、引越しも転校も今は出来ないらしい……

つまり、私は逃げることも出来ないという事だ……

奉仕部の面々は富良野さんの証言と平塚先生の判断により『被害者』と見做されて注意だけで処罰は下されなかった。我に挑発されたとはいえ、勝負事には乗り気であった雪ノ下嬢も被害者とされることになった。

何故なら、あの子の話し合いで富良野さんから状況と話を聞いた平塚教諭が『雪ノ下は遊戯部と材木座に脱衣ゲームを強要されたのだ』と判断したからだ。

それに便乗するように由比ヶ浜嬢も『もともと依頼を持ってきたのは厨二でゆきのんは悪くない』などと言い始め、我がもともと奉仕部に依頼を持ってきたと言うこともそこで露見した。

最後のとどめは教師を呼びに行った富良野さんのこの証言だった。

『奉仕部の人たちは脱衣ゲームに巻き込まれただけです。材木座君が依頼という名目で来たので、遊戯部という部屋に向かい、そこで大富豪の勝負をしたのですが、負けたら服を脱ぐという行為を勝負が終わってから急に遊戯部の2人が話したのです。それまでは私たちは遊戯部の脱衣ゲームのことなんて知りませんでした』



『その後、遊戯部の人たちに強要されてゲームを再開しましたが、材木座君は脱衣ゲームに便乗して雪ノ下さんたちの裸を見たかつたらしく、私たちを裏切つて脱衣ゲームを強要した遊戯部の味方をしていました。その後も比企谷君が下着一枚になつても彼は率先して比企谷君を遊戯部と共に侮辱してました』

教師を呼びにいった富良野さんの発言力は強く、今のこの場で最も信用ある証言だった。

彼女の話に嘘はないし、我自身も雪ノ下嬢たちの裸が見たくてつい出来心で遊戯部の方に加担したのにも嘘はない。

話を聞いた教師陣も富良野さんの証言の方に信頼を置いた。

こうなればもはや我らの話など言い訳にしか聞こえないだろう。

我らが『奉仕部の面々もその勝負に同意していた』といくら言つても言い訳にしか聞こえないし、そもそもあの時に同意していたのは雪ノ下嬢だけで由比ヶ浜嬢と八幡と富良野さんは反対していた。

それに、どんな理由があつたにせよこの場で重要なのは『脱衣ゲームを強要した』と

いう事実だけ。誰がどう見ても我らに非があるとしか思われないのだから…

結局、我が思った通り今回の脱衣ゲームの件は我らに非があるとみなされ、我らは停学処分を受けた。

そして、停学が開けて戻ってきてみればこの有様だ。

遊戯部の2人も我と同様に悲惨な運命が待っていたようだ。相模という奴は転校し、もう1人の泰野という奴は不登校になり引きこもりになったらしい。

まあ、殆どがクラスメイトらが昼食の話の肴にしているのを盗み聞きした話だからどこまで真なのかは分からないが似たようなものだろう…

奉仕部の面々とはあれ以来は疎遠になっている。

雪ノ下嬢とはそもそも学科が違うため会うことはないし、由比ヶ浜嬢とはたまにすれ違うが、我の姿を見るだけで嫌悪感を剥き出しにした視線を向けてくる。

八幡とも疎遠になっている。というか怖くて会いにいけなかった。

八幡は我のたった一人の友達だ。我と対等に付き合ってくれて、批評が多いが我の夢であるラノベの原稿もなんだかんだで読んでくれていた。

そんな八幡からも拒絶の言葉をクラスの人たちのように投げられたらおそらくもう我は立ち直れない…

あれからラノベの原稿を書くのはやめた。もう読んでくれる人はいないのだろうか  
ら…

たった一回の出来心で信用もやつと出来た友達も失ってしまった…

本当にどうしてこうなってしまったのだ…

我は後悔の言葉を心の中で呟きながらクラスメイトの軽蔑と嘲りの視線を背に受けて毎日を送っている……

―材木座義輝 side end―

―富良野英理華 side―

「はあ……上手くいって良かった…」

生徒指導室の話し合いから解放され、教師から『君たちは帰って良い』という帰省の許可を得て、未だに周りについていけないのか呆然としている雪ノ下さんたちを放つて私は帰路に着く。

その道中で解決策が上手く行ったことにホッと胸を撫で下ろす。

今回はヒヤヒヤした。危険な打開策だったから使うのは躊躇ったけど上手くいっただけなら何もいうことはない。

材木座君たちが停学の処分を下された時は胸がスツとした。

この解決策を使ったのは自分の平穩のためだったが、材木座君と遊戯部の2人にも痛い目にあつて欲しかったという感情もあつたからね。

職員室の話し合いの時に、遊戯部の2人はともかく材木座君は最初は自分も咎められる意味が分かってなかったみたいだけど、私からしてみれば今回の元凶は貴方だ。

奉仕部に自分の夢を馬鹿にされたという依頼を持ってきておきながら、『土壇場で女子の着が見たい』という下卑な目的で遊戯部に寝返り、その後も脱衣ゲームを止めることも比企谷君を擁護する事もせずにはヘラヘラしていただけ。

あの時の材木座君は見てるだけで気分が悪かった。

普段は自分が被害を被らなければどうでも良い私だけど、あの時は材木座君にいつも以上の嫌悪感を抱いた。

脱衣ゲームを強要したと見做された遊戯部の2人も、『あれは一種の作戦だった』とか『相手の心理を揺さぶるためで本当にするととは思わなかった』と言っていたけど、第三者からしてみればそんな事はどうでも良い。大事なものは脱衣ゲームを強要したという部分だけなのだ。

自分たちの方から大富豪に負けたら服を脱ぐというルールにしたのは私たち奉仕部みんなが証人だし、現に比企谷君は下着一枚という現状だったのだ。

でも、この解決策を私が脱衣ゲームの時にすぐに使わなかったのはこの策には大きな危険が含まれていたからだ。

私が教師を遊戯部の部屋に連れてきたときに、比企谷君がその下着一枚の姿でなかったら、『遊戯部に脱衣ゲームを強要されたという』私の発言にあそこまでの説得力はなかったし、遊戯部や材木座君に惚けられたら彼らに引導を渡すには不十分だからだ。

それに、私が呼びに行っている間に比企谷君を助けなかったとして由比ヶ浜さんと雪ノ下さんにも目が向く可能性もあった。

あの2人がどうなろうと私には関係ないけど、生憎あの2人と私は奉仕部というバカな鎖で繋がれている。

依頼を受けたのは雪ノ下さんでも脱衣ゲームが行われた時にすぐさまそれを辞めなかつたとして私たち奉仕部全体に非難がいく可能性もある。

そもそも悪いのは遊戯部と材木座君の挑発にのつて馬鹿げた勝負に乗った雪ノ下さんなのだけけど、彼女の性格上『奉仕部として依頼を受けていました』とでも言うのだろ

うから、そうなるかと私の思い描いていた、『奉仕部は完全なる被害者』という計算が崩れてしまうからだ。

私たちがノーダメージになるには私たちは完全なる被害者と認識させなければならぬ、だからこそ私は遊戯部だけではなく、奉仕部に依頼を持ってきた張本人である場では何もいえないであろう材木座君を引き合いに出して彼の方に教師たちの非難を向けたのだ。

材木座君が悪者になれば私たちは『彼の依頼に巻き込まれた被害者』という私の狙い通りの結末になるからね。

私たちにも責任があるとみなされたら、たとえ教師を呼びに行ったとはいえ、私まで処分を受ける可能性も少しはある、そのため材木座君には私たちを守る壁役になつてもらったのだ。

いつも以上にヒヤヒヤしたけど上手くいって良かった。学校側は私たちを完全なる被害者と認識してくれたようだしこれで私は安全だろう。

流石にまるっきりの無罪放免というわけには行かずに平塚先生からの軽い説教と注意はされたけどね。

でもまあ、材木座君たちの事を考えるとほるかにマシだ。



奉仕部というある意味の元凶といえる存在も同時に助かるのは少し癪だけど、私の狙い通りの結末になるには下着一枚の比企谷君が属している奉仕部が悪者になるわけにはいかなかったのだ。

比企谷君は私たちが『被害者』で『加害者』は材木座君と遊戯部だという主張を証明するための証拠だし、その彼が属している奉仕部が悪者になってしまえば、奉仕部も責任があるという事になってしまい私にまで被害がきてしまうかもしれない。

それに、最悪の場合は今までのことを全部調べられてしまうかもしれないのだ。

チエーンメール、川崎さんの深夜のバイト、他にも後ろ暗いところが奉仕部にはたくさんある。

もちろんただの可能性の話だが、可能性がゼロでないのならその可能性を回避したい。

でも、成り行きとはいえ今回のことを引き起こした原因でもある奉仕部まで助かったのはやっぱり気がかりだ。

でも、私の平穩をためにも奉仕部にはどうしても『被害者』として助かってもらわなくてはならないから仕方ないんだけどね。

……にしても、生徒指導室で『被害者』である私たちの証言を材木座君が青白い顔で巨漢を震わせながら聞いているのは見ていて滑稽だったな。

『我は劍豪將軍』とかいつも偉そうに言ってる面影はどこにもない。あれはまるで謀反

がバレて処刑されるのを待つ罪人だったしね。

遊戯部の2人も、脱衣ゲームの時の余裕振りはどこにもなく、ただ処分されるのを待つか弱いウサギのようだった。

故人の言葉にこんな言葉がある。『人を撃つて良いのは撃たれる覚悟のある人だけ』という言葉だ。

今回のはまさにそれだった。遊戯部の2人はリスクを何も考えずに『脱衣ゲーム』なんてルールを提案したし、材木座君も遊戯部と同じくリスクを何も考えずに女子の下着が見たいという自身の下劣な欲望を叶えるために奉仕部を裏切ったしね。

つまりこれは彼らの軽はずみな行動による完全なる自業自得。どう考えても同情の余地はない。

これから彼らがどうなるかは知らないけど、少なくともこれまでと同じような生活は送れないだろう。

学校側としては進学校の名誉に傷をつけたくないだろうから自主退学とか転校を進めるかもね、でもそうなったとしても彼らが自分で撒いた種だ。

私はただ彼らが遊戯部で脱衣ゲームをしていたということを教師に報告しただけ、私には何の非もないのだから。

……でも、今回のことで私には1つだけ分からないことがある。

それは、遊戯部の2人が脱衣ゲームだとカミングアウトした時に、比企谷君が『俺が2人の分まで負けを背負う』と言ったことだ。

こう言ったら悪いけど、比企谷君が雪ノ下さんと由比ヶ浜さんを助ける理由はどこにあるのだろうか。

雪ノ下さんも由比ヶ浜さんも常日頃から彼を罵倒しているし、私的にはあの2人が比企谷君に友愛を持っているとは思えない。

そもそも比企谷君自身もあの2人とは「友達ではない』と言っている。つまりあの2人と比企谷君はただの部活メイトというだけで他人であり、あんな目にあつてまで助けるようなメリツトがあるとは思えない。

そんな人たちのために何でわざわざ下着一枚になるリスクを承知で脱衣ゲームを受けたのだろう。

比企谷君がどうして自己犠牲とも取れる行動をしたのかは分からないけど、私からしてみれば彼は本当に愚か者だ。

脱衣ルールを聞かされてもリスクを承知の上で勝負を受けると自分で言った自己中な部長と、その部長を止めもせず自分が下着一枚になってもオロオロするばかりでフオローもしない部員のわざわざ恥をかいてまで盾になったのだから。

はつきり言つて、私にはあの時の比企谷君は『漢らしい』というより『走狗』と言つた方がいいだろう。

彼の奉仕部の入部の経緯を聞いた時も思つたけど、本当に彼の行動は由比ヶ浜さんより矛盾している。

日頃から『無駄なことには面倒くさいから関わりたくない』という捻くれぶり見せているのに、遊戯部の脱衣ゲームに対して異常だと気付いていただろうに何も言わなかったし、『友達ではない』と自ら言つた雪ノ下さんたちの負け振りを自分を犠牲にしてまで背負うなんて：

本当に彼は何がしたいのか分からない。

無駄なことが嫌いなのなら、脱衣ゲームの時に理由を説明して自分だけ降りるか、雪ノ下さんたちを見限るとかすれば良かったのに。

私からしてみれば彼の行動こそが、彼自身が嫌う『無駄なこと』のように思えてならない。

……でも、遊戯部の部室から職員室に向かう時に彼が引きつった顔をしていたのは何故だったんだろう…

あの時の彼はいつもの気怠げな表情ではなく、何か怖いものを見た様な恐怖の感情を含んでいる表情だった。

しかも、その視線は私に向けられていた。

あの時は私に落ち度はなかったはずだし、比企谷君に声をかけた時もいつもの営業スマイルをしたつもりだったんだけど…

理由は全く思いつかない。私の作り笑いを見破ったとしても彼ならば川崎さんの依頼の時のような不信任感を含んだ視線を向けてくるはずだ。

それなのに彼はどうしてあの時に恐怖の感情を含んだ視線を私に向けたのだろうか…

……あの視線はどういう意味があったんだろう……

私は比企谷君が私に向ける感情が分からず、頭の中に浮かび上がった疑念を誰かに問  
いかけるように口に出す。

「……………どうして……………？」

千葉村に行くけど平穩を脅かされたくない。

「……………気持ちいい……………」

ひんやりとした冷気が満ちた室内。

勉強中の私はシャープペンシルを机の上に置き、休憩のためにググツと伸びをする。

ぼんやりと窓から外に目を向けて見れば、雲一つ無い青空では太陽がキラキラと輝き、アスファルトでは熱が反射される事により陽炎が発生し一層暑さに拍車を掛けていた。

今は夏休み。学生なら誰もが待ち望む夏のオアシスだ。この期間中は嫌いなクラス



メイトや教師たち、学校のルールに縛りつけられずに自分の好きな事をして過ごせる。

でも、夏休みになったからと言って、わたしは特別何かをする訳でもなく、普段の休日と同じように勉強か読書などをして過ごしている。

一つ違う点を挙げるならば、いつも以上に家から出ない事だろうが、私には長期休みに遊びに行く友人はいないし、外の暑さを考えれば出て行くのすらも無駄だと自己完結している。

今日は義父母と信頼は家にいない。

『夏休みにどこかに行きたい』という信頼のおねだりにより、信頼に激アマな2人がそれを聞いて、信頼を連れて3泊4日の旅行に行ったからだ。

当然私は家で1人で留守番。義父に4日間の食費だと言って渡されたのは千円だけだった。

四日間の食費を千円で賄えるはずもなく、私は足りないお金を補述するために義父母

の部屋や信頼の部屋などからバレても気にならない程度のお金を抜き取る。

今回は義父母から3千円、信頼からは2千円で合計1万円の収穫だった。

いつもより多い収穫に思わず頬が緩む。

……にしても信頼の財布には1万円札が2枚と千円札が7枚ほど入っていたけど、これだけお小遣いをもらっているのやら……

義父母がいないため昼間から家のエアコンをガンガンかけて、普段なら私が入る事すらも許されていないリビングで悠然と勉強をする。

静かで平和な空間のおかげでいつも以上に勉強が捗る。誰もいない静かな空間で平和に過ごせるなんてこんな幸せなひと時はないだろう。

今日からは一年の中で最も暑い月と言える八月だ。あと一月は静かで平穩に満ち溢れた夏休みを満喫出来ると思っていた。

ーでも、私は運命の神さまにはとことん嫌われているらしく、その幸せなひと時はいつまでも続かなかった……

「……………っ」

内心の苛立ちを誤魔化すために爪をカリカリ噛みながら、私は車の窓に映る景色を睨みつけるように見る。

辺りには爽やかな空気が漂い、緑に色付いた綺麗な森が見えている。

前にTVで『木に囲まれた森で深呼吸をするとリラックスできて癒される』と言って

いたのを思い出すが、今の私にとっては全くの逆効果で余計にイライラが募る。

行き先は千葉村という場所だ。群馬県にあるアウトドアの人気のレジャー施設だという。

平塚先生曰く、ボランティアのために行くそうだが、私からしてみれば本当にくだらないことのように思えてならない。

ボランティアなんて内申点目的以外で参加したことなんてないし、義父母と信頼がないため、あの家でゆったりと過ごすことが出来るはずだったのに、平塚先生の『奉仕部の合宿があるから来い』という横暴な要請によつてここに連れてこられたのだから。

義父母から追い出された時のために外泊用の準備はしてあるから、準備する必要は特になかったけど、そのせいで私の至福の時間がめちゃくちゃになってしまった。

おまけにその要請を受けたのはつい数時間前だった。

夏休みに奉仕部の合宿があるなんて事前に私は聞かされてなかったし、雪ノ下さんたちもそんな話はしていなかった。

いくら部活動だとはいえ、生徒を外泊させるんだから、事前に伝えておくのが指導者としての義務。普通ならあり得ない事を平塚先生は平然とした顔でやっているのだ。

本当に教師としての品性を疑う。よく分からない部活に『更生』と称して私や比企谷君を強制的に入部させたり、自身も奉仕部の顧問を名乗る割にはほとんど部活に顔を出さないでいたりしているのだから。

こんな常識のかけらもない教師が生活指導なんて総武高校の教師たちは何を考えているのだろうかと本気で思った。

ちなみに今回の合宿の事を知らなかったのは私だけではなかった。

比企谷君も今日初めて合宿があることを知ったらしいけど、彼の妹の『比企谷小町』さんも平塚先生とグルだったらしく、小町さんに合宿の事を直前まで知らされず、半ば強引に合宿に引っぱり出されたそうだ。

いわば、妹に強引に予定を決められたらしい。

私はそれを聞いて比企谷君の妹の小町さんに密かに軽蔑の視線を送つてため息をついた。

比企谷兄妹、妹の方は少し常識があると思つていたけどそうでもなかった。

比企谷君の妹の小町さんに言いたい、『今回はたまたま比企谷君に予定が何もなかったから事なきを得たけど、もし比企谷君に何かしらの予定があつたら貴女はどうするつもりだったの?』と

おおかた『友達もいない兄に予定なんてあるわけない』つて思つてたんでしょう?

比企谷君の妹の小町さんは兄の比企谷君と違って社交的で明るい人だったけど、私は彼女が人としての常識や思いやりがある人だとはとても思えないね。

でも、比企谷君は平塚先生や雪ノ下さんたち、小町さんに文句を言うまでもなく、戸

塚君まで来るとなると、むしろ嬉しそうにこの合宿に参加していた。

平塚先生や自分の妹がやってる事が異常だということに気付いていないのか、それとも気付いていて敢えてスルーしているのか分からないけど、反論もろくにせずには彼女たちに何も言わずに参加するなんて彼には一体彼女たちがどう見えているのだろうか。

何だか日頃から比企谷君が雪ノ下さんたちから罵倒されているのは、彼がこの異常さについて言及しないのにも原因がある気がする。

日頃の空気を読まない捻くれた発言は堂々と伝えるのに対して、自分が溺愛もしくは逆らえない相手には肝心なこととは何一つ言わない。

はつきり言つて、バカみたいだ。

「キャンプ、楽しみだねゆきのん！」

「由比ヶ浜さん。私たちはあくまでボランティアとして参加するのであって、キャンプ目的で行くのではないのだけれど」

「でも、なかなかこういう機会なんてないから楽しみだな」

そんな私の心情とは裏腹に後部座席の3人は呑気におしやべりに興じている。乗っている人数が多いので少しキツイが、他の3人は気にしていないようだ。

助手席に乗っている比企谷君はというと何も話さず、流れる景色を眺めていた。時折、平塚先生と何やら話しているので聞き耳を立てる。

「……なら私の話相手になってくれないか？君との会話はそれなりに楽しいんだよ」



「それは別に構いませんが、どこが楽しいんですか…？」

「君は年齢にしては、物事をよく見ていて現実にしつかり向き合っている。かといって堅苦しいわけでも、大人のように打算とかがあるわけではない。あとは他人に対して辛辣なところとか、見下しているような態度がなければ何も文句は無いのだがな」

「俺は俺の思うように生きているだけなんですけどね……」

平塚先生の比企谷君への称賛を比企谷君は素直に受け取らずいつものように捻くれた態度で返す。

やっぱり、比企谷君の普段の私たちや周りへの態度は彼の素なのだろう。

だが、平塚先生はそれを気にすることもなく『それがなかなかできないのだよ』と笑って言っていた。

平塚先生は『教師としてそういった部分が受け入れ難いが、個人の立場で見れば面白いと感じる』と笑いながら言って比企谷君を褒めた。

私は『部活に強制的に入部させたり。合宿の行事を直前で知らせるような非常識な教師に褒められたところで価値はないよね』と思いながら半分景色半分盗み聞きの意識で2人の会話を聴き続けた。

「……………」

「ん？どうしたのかね？」

平塚先生の称賛に比企谷君は何も答えずに黙る。疑問に思った平塚先生が尋ねた。

「……いえ、最近他の人にも平塚先生と似たようなことを言われたので……」

「……私の他にもそう感じる人がいるのか、ちなみにそれは誰だ？もしかして、雪ノ下か？」

「いいえ、その姉の方ですよ」

「………っつっ!?？」

2人の会話を聞いていた私は『雪ノ下さんの姉』という単語を聞き身体を思わず震わせた。

比企谷君が答えると、今度は平塚先生が黙った。

平塚先生もあの女性と何かあるのだろうか、私がそう疑問に思っていると比企谷君が片眉をあげて疑問の声を上げる。

「平塚先生？」

「…ああ…すまない。陽乃に会ったのか君は…」

「まあ、はい…。知っているんですか？」

「……………ああ…元教え子だ」

平塚先生は雪ノ下さんの姉『雪ノ下陽乃』さんについてしみじみと語りだした。

「……………雪ノ下陽乃は在学中は何をやらせても優秀でな…生徒からも教師からも評判も良かった。おまけにあの容姿から同学年の中では女神のように敬う生徒までいたんだが……………優等生ではなかったな…」

「と…と…?」

「授業中はうるさいわ、制服を着崩すわ、イベントで盛大にハメを外すわ」

「雪ノ下とは正反対ですね…」

「そうだ。だからこそ友達も多かった…」

そこで先生は一旦口を閉じ、『だがな』と重苦しい口調で続きを話す。

「世間で言う友達とはどこか違う、歪なものだった…と…?」

「……………ああ…そうだ。あいつにしてみれば私たちの言う『友達』というものは、自分にとつての信者かおもちゃのような存在だったのだろうな…………」

平塚先生はそう言う、『まあ、君には通用しなかったようだな』と苦笑しながら言った。

それからは比企谷君と平塚先生は他愛のない話に興じ始め、私はそこで2人との会話を聞くのをやめた。

……なるほど、『雪ノ下陽乃』の人物像が段々見えてきた。

会話を黙って聞いていた私は、2人に少しだけ感謝をし、その後は窓の景色だけに意識を集中させた。

「着いたー！」

目的地の千葉村に到着すると、由比ヶ浜さんが元氣よく叫ぶ。

「うわー、自然がきれいなところだねー」

「うむ、空気がおいしいな」

戸塚君と平塚先生も車から降りて各々の感想を述べる。まあ、平塚先生は煙草を吸いながら言ってるから説得力は皆無だけどね。

「ここからは歩いて移動する。荷物を下ろしておきたまえ」



平塚先生の指示に従ってみんなで荷物を下ろしていると、近くに1台のワンボックスカーが止まる。『何だろう』と見ているとそこから私たちがよく知る四人が降りてきた。

「やあ！ヒキタニくん」

「葉山？」

葉山君に相模さん、戸部君に海老名さんの四人がいた。ここにいるということはこの4人もボランティアに参加するのかな？

「雪ノ下さんに、結衣も参加するんだね！富良野さんも…」

葉山君は雪ノ下さんと由比ヶ浜さんと私を見て笑顔でそう言う。まあ、私を見たときは顔が引き立っていたけどね。

「葉山君、どうしたの…って…」

その後ろからクラスの現在の女王の相模さんが車から降りてきた。だが、彼女も私たちを見て少し顔を引きつらせる。

それは、先日の遊戯部の一件に私たちが絡んでいるからだろう。

…自分三浦さんの二の舞になるところだった出来事のね。

先日の遊戯部の一件で遊戯部の2人と材木座君に処罰が降され、これで一件落着かと思われたがそうではなかった。

遊戯部との出来事の翌日、私がいつも通りに教室に登校すると、教室がいつも以上に騒がしかった。

何事かと教室を見ると騒がしいのはクラスを中心である葉山君のグループだ。その真ん中でクラスの現在の女王である相模さんが青い顔をしている。

始めは相模さんがどうしてこうなっているのか状況が飲み込めなかったが、クラスの人たちの話を聞いてあるうちに理解ができた。

昨日の脱衣ゲームの件で処罰を下された遊戯部の1人『相模君』は、実は相模さんの弟で、今はそれが真実なのか相模さんにみんなが聞いているところなのだ。

なるほど、それなら今のこの状況にも納得がいく。

学校という狭い社会の中では良いことも悪いこともすぐに広まる。自分の事でなければみんな面白半分でそれを広めるのだから。

そして、それはつい昨日の出来事でも例外ではない。誰かが周りに話せばそれらはネットワークのように広がっていくのだ。

それならば、相模さんが青い顔をしているのと当然だろう。

おそらく相模さんは恐れているのだろう。自分の弟が『脱衣ゲーム』という馬鹿げた問題を引き起こして停学になったために自分が今のグループから追い出されるかもしれないから。

相模さん自体は昨日の脱衣ゲームには何の関係もないけど、脱衣ゲームをしていた生徒の姉という事で自分までもが針の筵になってしまいかもしれないからね。

実際、相模さんの周りに集まっている人たちの中でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべている人は何人かいた。人気者のグループの席を虎視眈々と狙っている獣の目をして。

……まあ、相模さんがそうなくても不思議はないだろう。

テニスコートの後から三浦さんの後釜に座った相模さんは以前の三浦さんと同じ、いやそれ以上に傲慢な振る舞いをしていた。

葉山君にすり寄ってグループのみんなに言いたい放題。三浦さんに発言力がなくなつたのも良いことにやりたい放題しているように見えた。

風見鶏の由比ヶ浜さんや海老名さんは単体だと以前の三浦さんのような発言力はないたため動きやすかつたのだろう。

相模さんには三浦さんの後釜に座る前には取り巻きが何人かいたらしいけど、彼女はその取り巻きたちのことも信用していなかつたらしく、自分だけが葉山君の隣にいたために彼女たちのことをそれで降は邪険に扱っていた。

まあ、だからこそその人たちもその仕返しのためか、人気者のグループの席に座るためか、どっちにせよ彼女を蹴落とすために、嫌な笑みを浮かべて相模さんに詰め寄ろうとしているのだらうけどね……

グループの男子の戸部君と大岡君は純粹な興味なのか野次馬根性なのか分からない

が、相模さんに一緒に詰め寄っており、由比ヶ浜さんと海老名さんは見て見ぬ振りを決め込んでおり相模さんを助ける気はないようだ。

しかし、その時……

「みんな、待ってくれ！」

クラスで1番の発言力を持つ王様の声が教室に響き渡った。

葉山くんは相模さんを守るようにして前に立ち、相模さんに詰め寄っていた人たちに向かって言う。

「人には誰にだって触れられたくない事はある！それにその出来事は相模さんの弟が起こした事であって彼女には何の関係もない！面白半分で触れられたくない事に踏み込むなんて最低だと思わないのか!?!?」

『……………』

その葉山君の鶴の一声で相模さんへの追及はピタリと止んだ。

相模さんに邪な気持ちを持っていた人たちも流石に王様に逆らおうとは思わないうしく、それ以降はその時の事をクラスのみんなが相模さんに言うことはなかった。

相模さんは自分を助けてくれた葉山君に感激したような顔を向けていた。

でも、私の見た限り彼は相模さんの事を純粋な正義だけで助けたわけではないと思うけどね…

おおかた、三浦さんや大和君のことがあったため、これ以上自分のグループに不和が起きる事を避けたかったのだろう…

今回は三浦さんたちとは違って本人には何の非がないため、相模さんを助けることは彼の発言力を持つていれば簡単だからね。

しかしまあ、何ともご苦労な王子様だ。いや、これは空気清浄機というべきかな……。

……そういえば、相模さんの他にもあの遊戯部の一件の後で変わったことがあった。

それはあれ以来、比企谷君が私を露骨に避けるようになったことだ。

遊戯部の一件が終わった後、雪ノ下さんは脱衣ゲームに乗ったことを密かに気にしていたらしく、暫くは落ち込んでいた。

だが、由比ヶ浜さんの『ゆきのんは悪くないよ！悪いのは厨二たちだよ！』という励まし、もとい事実から目を逸らす発言によりだんだん気が晴れていったのか、少しずつ立ち直って行った。

人に弱みを見せたがらない雪ノ下さんらしく、落ち込んでいるのを必死にいつもの鉄面子で隠していたが、隠し切れておらず、私からは落ち込んでいるのが丸わかりだった。



おそらく、自分の流儀に反する事を自分自身がしたという事を認めたくなかったのだろう。自分が常に正しいと信じている彼女なら尚更ね。

あの姉と違って雪ノ下さんは本当に良くも悪くも正直者だ。そこまで気にするくらいなら最初から勝負に乗らなければよかつたのに……

でもまあ、由比ヶ浜さんのおかげで雪ノ下さんはすぐに立ち直り部室にはいつも通りの雰囲気に戻つたのでよしとしよう。

この時ばかりは由比ヶ浜さんの調子の良さに私は感謝した。いつまでも部活の頂点に立つ部長が機嫌が悪いままだったら落ち着かないからね。

そうして、雪ノ下さんと由比ヶ浜さんのことは解決したのだけれど、比企谷君だけはあれ以来露骨に私を避けているのだ。

でも、彼は以前のような私に疑惑を持つているようなそういつた感情はあまりむけてこない。むしろ私に対して恐怖を抱いているような感情を向けているように感じた。

この合宿に私が来た時も思わず顔が引きつっていたからね。

比企谷君は私に対して向ける感情にはどういつた意味合いが込められているのか全く分からない……

でもまあ、それなら彼に脅える必要はなくなるわけだから良いかもとも最近はい思始  
めてるんだけどね……。

「…………ふむ……よし、これで全員揃ったようだな」

葉山君たちが集まり、平塚先生が全員を見渡して告げる。

「今回、君たちに来てもらったのは、小学生の林間学校サポートスタッフとして働いても  
らう。千葉村の職員、及び教師陣、児童のサポート。簡単に言えば雑用ということだな  
…………端的に言うると君たちは私たちの奴隷だ」

なるほどね。私たちは小学生や教師陣のサポートをするために呼ばれたわけか…

…ていうか、教師が生徒に向かって『お前たちは奴隷だ』とかの宣言するなんてどういう神経してんだか。

思わず平塚先生をジト目で見ることが、それに平塚先生は気付いてないのかさらに付け足す。

「この活動は学校行事ということで、最後までやり通せば内申点がもらえるし、自由時間は好きにしてもらって構わない…さっそく行こうか。荷物を本館に置き次第仕事だ」

そう言つて平塚先生が先導する。

私はため息を吐いて付き従つて歩き始めた。

平塚先生の先導についていくこと数分。

私たちは大きな広場にたどり着いた。平塚先生曰く、ここで小学生と顔合わせとオリエンテーションをするらしい。

小学生たちは、これから各所にあるチェックポイントを巡りそこにあるクイズを解き

ながらゴールを目指すらしい。

私たちの仕事は小学生のサポートと昼食等の準備らしい。

私は歩く道中で、近くにいた小学生に声をかけながら目的地へ向かう。

今のうちに小学生とコミュニケーションを取っていざという時に信用を持っていた方がいいからね。

あの家族やこれまでの生活から培った営業スマイルと機嫌取りスキルのおかげで小学生とはすぐに打ち解けることができた。子供は単純で本当に良い。

由比ヶ浜さんや相模さんたちも各々と小学生に声をかけられたりかけたりしていた。葉山君に至っては小学生の方から話しかけられている。

でも、比企谷君と雪ノ下さんの二人は声を掛けていない。

まあ、コミュニケーション能力が皆無の2人に小学生は話しかけようとは思わないだろうし、この2人が年下の小学生との接し方を理解してるとは思えないから納得だけだね。

そうやって歩いていく中で小学生の班で一つだけ、他の班とは明らかに違う形をしている班が私の目に入った。

このキャンプの班は5人で構成されていて、どの班も仲の良い友達同士で集まっているため、大体は1つにまとまっていた。

2つに分かれている班もちらほらあったけど、それでも2人と3人に分かれている。

でも、その班だけは明らかに違った。

班のメンバーは5人とともに女の子で、1人だけ他の4人から外れており、残りの4人はたまにその少女の方へ向かうが、クスクスと4人で笑うだけで相手にしていなかった。

対するその1人である女の子は、彼女たちのそうといった嘲笑とも取れる周りの反応を気に留める様子もせず、首からかけているデジカメを手持ち無沙汰に弄っているだけだった。

その1人である女子は綺麗なロングストレートの黒髪にすらりと伸びた手足、同年代の女子と比べると大人びた雰囲気に含まれており、鼻根目に見なくてもかなりの美少女だった。

でも、どう見てもこの4人が仲が良いとは思えない。

もしかして、あの1人である女の子は……

どこか彼女に親近感を覚えながら、彼女を遠巻きに観察していると、その彼女に話しかける者がいた。

「どうだい？ チェックポイントは見つかったかな？」

それは葉山君だった。いつものイケメンスマイルを浮かべながら彼女に声をかける。

「……いいえ……」



葉山君に女の子は困ったように笑って返事をする。

「そつか……じゃあみんなで探そうか。君の名前は？」

「……鶴見……留美」

「僕は葉山隼人。よろしくね。あっちのほうとか隠れてそうじゃないかな？」

葉山君はそう言って、鶴見さんの背中を押して森の奥に誘導していった。

いかにも『みんな仲良く』を信条にしているクラスの中心人物の彼らしい芸当だった。

「……………あまりいいやり方とは言えないわね」

遠巻きに鶴見さんの様子を観察していると、よく通る女性の声が聞こえてきた。

声のした方を見ると、厳しい表情をした雪ノ下さんが葉山君と鶴見さんを睨むように見ていた。

どうやら、声の主は雪ノ下さんだったらしい。

葉山君が鶴見さんをグループの中心近くまで連れて行くのを見て、雪ノ下さんはさらに表情を険しくする。

まあ、私にも葉山君の行動が悪手なのは理解できる。

鶴見さんは葉山君によってグループの中心に連れられていったけど、周りの子と一言

も会話していない。

だからといって、グループの残りの4人も彼女に話しかける様子はなく何もしない。鶴見さんを少し見ただけで、それからは彼女の存在を認識していないように振舞っている。いわば彼女たちは鶴見さんをハブっているのだ。

つまり、葉山君がした事はただの自己満足だ。葉山君自身は親切心で鶴見さんをグループに馴染ませるために彼女を連れていったのだろうけど、あんな扱いを受けている人間をグループに戻したら針の筵だ。

「……彼は本当に何も変わってない。救いようが無いわ……」

雪ノ下さんがそう呟くのを聞き流しながら、私は葉山君に連れられていく鶴見さんの

後ろ姿を見つめた。

以前も思ってたけど、どうやら雪ノ下さんと葉山くんには何かの因縁がありそうだ……

キャンプ初日の夕食。メニューはキャンプといえればこれとも言える定番のカレーだった。

ただ、家庭で作るのは違ってキャンプ場にはガスが無いので、炭で火を起こさなければならぬ。

「まずは火を起こす準備だ。おい、富良野。そのダンボールに炭が入っている。持つ

「はい」

平塚先生は私を指差して重ねられたダンボールの方を顎でしゃくつた。

「はい」

教師からの命令を断れる度胸は私にはないので、指示通りにダンボールを運ぼうとする。しかし、炭がたくさん入ってるからか重い。

「モタモタするな。さっさと運んできたたまえ」

身長は高いが、力があるわけではない私が炭の入ったダンボールをよろよろ運んでいると平塚先生に叱咤される。

『文句言うなら男子に運ばせればいいのに…』と内心で毒つきながら私は平塚先生の前にごさつとダンボールをおろす。

「うむ…それでは私が手本を見せよう」

私がダンボールをおろすと平塚先生は手馴れた手つきで炭から火を起こす。

「めちやくちや手馴れてますね」

「……ふっ…これでも大学時代はよくサークルでバーベキューをしたものさ。でもな、私が火をつけている間は後ろでカップルたちがいちやこらいちやこら…ちっ、気分が悪くなった」

自慢げに話していた平塚先生。しかし、モテない学生時代を思い出したのか、小学生には見せられないほど顔を歪める。

火を起こすのは平塚先生に任せて、私は小学生に混ぜつつカレー作りをし始める。

あの家族から奴隷のように扱われている私は家事は一通りこなせるので料理は得意だ。加えてカレーは私の得意料理ということもあり、サクサクとカレー作りは進んでいった。

向こうでは、葉山君と彼のグループが葉山君を中心として、小学生にカレーの調理方法を教えるなどしていた。彼の纏う空気に連れられてか、たくさんの小学生たちが葉山の下へ集まっている。

しかし、それを冷めた目で見ている少女が一人いた。それはさつきグループでハブラれていた鶴見さんだ。

葉山君は彼女の存在に気付いたのか、鶴見さんの元に歩み寄りつつ笑顔で声をかける。

「……カレー……好きかい？」

イケメンの高校生に笑顔で話しかけられる。女子なら誰もが憧れそうなシチュエーションだけど、彼女は葉山君に笑顔を見せるところか見向きもしない。

一見すると、葉山君は鶴見さんが一人でいる事に気を遣って声を掛ける優しいお兄さんのように見える。

でも、それは昼間の様子から推察するに葉山君の自己満足なだけで、結果的には彼女を追い詰めているだけだと思う。

葉山君は学校でもこのキャンプの中でも常に中心にいる王様のような存在だ。だからこそ、葉山君の行動に皆が注目する。



そして、それは鶴見さんをハブっているグループの4人も同じであるのだろう。

その4人からしてみれば、自分たちが虐めている鶴見さんが人気者の葉山君に声を掛けてもらっている事が気に入らないのだろう。

現に葉山君からは見えてないのだろうけど、鶴見さんをハブっていた4人は、葉山君に声をかけられている鶴見さんを忌々しげに見ているからね。

……何とも醜い嫉妬だ。私も嫉妬で虐められた事があるけど、それは虐められる方からしてみれば理不尽この上ないものだ。

「…………別に……カレーなんかに興味ないし…………」

葉山君に話しかけられた鶴見さんは、素っ気無く答えると黙ってその場を離れた。

おそらく彼女も薄々分かっているのだろう。ここで葉山君にまともに受け答えなんてすれば、今より状況が悪化してしまうのがオチ。だからといって人気者に話しかけられたのに無視なんてすれば状況は悪化してしまう。

よって、1番良い方法は黙ってその場から去ること。まあ、妥当な考えだ、私でもそうするからね…

鶴見さんはそのまま葉山君たちから離れた場所に腰を下ろす。

それはちようど比企谷君と雪ノ下さんの間だった。お互いが視界に入る程の距離だった。

その様子を見た葉山君は、少しだけ困惑したような笑顔を浮かべたが、すぐに気を取り直して再び集団の中に戻って行く。

「……じゃあ、せつかくだし隠し味入れるか！何か入れたいものある人？」

その言葉を皮切りに小学生たちは『〇〇が良い！』『△△が良い！』と隠し味の提案をそれぞれする。

それには鶴見さんを睨み付けていた4人も含まれていた。鶴見さんへと向けられていた嫌な視線も同時に消える。

「はいはいっ！あたしはフルーツがいいと思う！桃とかさー！」

その中に何故か由比ヶ浜さんも小学生と一緒に提案していた。

……ていうか『桃が良い』はないでしょう…

カレー入れるのならフルーツはせいぜい林檎が良いところ。それなのに桃って…

由比ヶ浜さんの味覚センスは小学生より下なのかな…流石の葉山君も表情を強張らせてるし…

葉山君が由比ヶ浜さんに何やら話すと、由比ヶ浜さんは肩を落として比企谷君たちのところに向かっていく。

どうやら葉山君に戦力外とみなされたらしい。

「……よし、こんなものだろうね……」

私は遠巻きに今の出来事を見る傍でカレーを作り上げた。小さな器に自分の作ったカレーを入れて味見をする。

……うん、我ながら美味しい。

私は出来上がったカレーと一緒に作っていた小学生の皿に盛り付け、最後に自分の皿にカレーを盛り付ける。

皿に盛り付けてカレーをどこで食べようかと辺りを見渡す。

「あつ、ふらのん！一緒に食べようよ！」

その時に横から明るい声で声がかげられた。声のした方を見ると由比ヶ浜さんが笑顔で手を振っている。

断つても良いのだけれど、必要最低限の付き合いとして、私はいつも通りの営業スマイルで由比ヶ浜さんの誘いを受けて彼女の元に向かう。

「……………人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るものよ」

「……………私は鶴見留美」

「私は雪ノ下雪乃」

「比企谷八幡だ。んで……このアホそうなのが由比ヶ浜結衣、向こうの……背が高い奴が富良野英理華だ……」

由比ヶ浜さんの招くところに来てみると、そこにはさつき葉山君から離れた少女と比企谷君、雪ノ下さんが何やら話し込んでいた。

比企谷君と雪ノ下さんの真ん中にいる虐められていた少女は『鶴見留美』というらしい。

どうやら互いに自己紹介をしているらしく、近くに由比ヶ浜さんと私がいたからついでに紹介したのだろう。

にしても由比ヶ浜さんはともかく、社交性皆無のこの人たちが小学生と自己紹介し合うなんて思わなかったな。

由比ヶ浜さんは比企谷君たち3人の様子を見て、それとなく察したようで、比企谷君たちの方をチラッと見ると鶴見さんの視線に合わせるようにしやがむ。

「あ、そうそう…あたしは由比ヶ浜結衣ね。鶴見留美ちゃん…だよな？よろしくね！ほら、ふらのんも自己紹介くらいしなよ！」

「私は富良野英理華。よろしくね、鶴見さん」

由比ヶ浜さんに促されて私も営業スマイルを浮かべて鶴見さんに改めて自己紹介する。

だが、彼女は由比ヶ浜さんの声に対して、頷くだけに止める。由比ヶ浜さんを見もしない。代わりに比企谷君と雪ノ下さん…そして私の方へと彼女は視線を向ける。

「なんか…そつちの二人は違う感じがする…あつちにいる人たちとは」

そう言うと鶴見さんは葉山君たちがいる方へと視線を向ける。

彼女の視線の先には、葉山君とその取り巻きたちが小学生と一緒に楽しそうに『スペシャルカレー』作りに挑戦していた。

「まあ…確かに違うわなあ…誰がどう見ても集団でいる人間と個人でいる人間だよ」

比企谷君がいつもの捻くれた口調でそう呟く。鶴見さんは気にせず口を開いた。

「私も違うの…あのへんとはね…」

鶴見さんは、自分に宣言することでそれを確かめるためなのか、彼女はその言葉を



ゆっくり嘸みしめるように言った。

にしても『あの人たちとは違う』という事は鶴見さんは集団で群れる事が嫌いという事だろうか。

まあ、虐められているならしかたないしれないけどね。

でも、それを聞いて由比ヶ浜さんの顔つきが真剣なものになる。

「…違うって…何が？」

「周りみんなガキなんかもん。まあ…私…その中で結構うまく立ち回ってたと思うんだけどね。なんかそういうのくだらないからやめたんだ。一人でも別にいつかなって思ってたさ…」

「で…でもさあ…小学生のときの友達とか思い出って結構大事だと思うなあ…」

「…別に思い出とかいらない……中学入れば、余所から来た人と友達になればいいしね」

……随分と横柄な物言いだね。

私は鶴見さんと由比ヶ浜さんの会話をカレーを食べながら聞いていたが、それに対しての評価はこうだ。

『鶴見さん、貴女は一体何様のつもり？』

彼女は自分を過大評価している。おそらく私たちの部長と同じくらいに。

『自分は上手く立ち回っていた』って言うけど、立ち回れてなかったから貴女は今こうやって虐められてるんだよね？

それに『自分はあるの人たちとは違う』って言うたよね。まるで自分が正しくてあの人たち（葉山君やいじめっ子たち）は愚かだと言って言いたげだったけど私からしてみたら

貴女の方が愚か者だ。

人間の問題事の多くは人間関係によるものだ。そして、普通の人は円滑に人付き合いをするために安全圏にいるために群れをなす。

貴女も前まではそうだったんでしよう？それなのに自分が虐められた途端に前まで自分もいたグループの人たちを馬鹿呼ばわり。

それって思いっきりブーメランだよね？貴女は過去の自分までも『バカだ』って言うてるようなものなんだよ。

過去の貴女がどうだったかは知らないけどね。

それに、さっきの自己紹介。仮にも年上の私たちに對しても無視するなどの態度。はつきり言つてあなたがあの4人に虐められてゐるのは貴女のその他者を見下したような態度が滲み出ていたからではないだろうかとも思える。

それに『中学生になつたらまた新しい友達を作れば良い』と言つてるけど、それつて貴女はさつき自分が馬鹿呼ばわりした人の群れにまた戻ろうとしてるつて事だよ。

結局、貴女は自分1人では生きていけない弱い人間なのだ。『1人でも良い』なんて言つて良いのは何があつても他人に頼らずに自分で生きていける人だけ。

貴女は結局のところ誰かに助けてほしいだけでしよう？

口では強がってるけど、本心ではそう思っているはずだ。

「残念だけど…そうはならないわ」

どこか期待を込めて言った鶴見さんを、雪ノ下さんが否定した。

「あなたの通っている小学校の生徒も、同じ中学へ進学するのでしょうか？ だったら、また同じことが起きるだけよ…しかも、今度はその『余所から来た人』とやらも一緒になつてね…」

「……………」

雪ノ下さんの意見に留美は黙りこむ。

でも、確かに雪ノ下さんの言う通りだ。鶴見さんがこのまま地元の中学校に通うのであればおそらく何も変わらないし、このいじめは続くだろう。

場所が変わっても、虐めつこたちがいなくなるわけではないのだから、『新しい友達と仲良くすれば良い』なんて甘ったれた考えは通用しない。

人間関係が変わるわけではないのだからね。

「やっぱり…そうなんだ……」

それを聞いて鶴見さんの諦めたような声が小さく漏れた。

「……ほんとにバカみたいなことしてた……」

「……もしかして、何かあったの？」

自嘲気味に呟いた鶴見さんに、由比ヶ浜さんは片眉を上げて尋ねた。

それに答えるように鶴見さんがポツポツと話し始めた。

「クラスの誰かがハブられるのは何回かあって……けど、そんなのはそのうち終わるし……それならまた話したりする、いわゆるマイブームみたいなもんだったの……」

鶴見さんはそこで一度言葉を区切った。

「……いつも誰かが言い出して、なんとなくみんなそういう雰囲気になっていたの……それがいつのまにか私になってた………何もしてないのよね」

鶴見さんは淡々と話すが、内容を聞いていると恐ろしいものだった。

これといった理由も無しにじじめの対象が決められ、その時点でクラス全体がそういった空気になる。私を受けたいじめとは違うけど理不尽な事この上ないものだ。

今時の小学生はこんなに酷いことをするものなんだね…

「そんで…？お前は「留美」……え？」

「お前じゃない…私の名前は『留美』」

「……悪い。んで？留美はどうしたいんだ？ターゲットが自分から変わるのを待つか、それとも、今すぐにでもこの状況を変えたいか……」

「……………」

比企谷君がいつものように尋ねると、鶴見さんは下を向いて黙りこむ。そんな様子を見て、由比ヶ浜さんが口を挟んだ。

「そんなの今すぐ変えたいに決まってるじゃん、そうだよね？留美ちゃん？」

由比ヶ浜さんが鶴見さんの顔を覗きこむが、つさんは由比ヶ浜さんの言葉に何の反応も示さなかった。

……まあ仕方が無いだろうね。



由比ヶ浜さんの台詞はいじめられた事が無いやつが吐く台詞だ。

鶴見さんのような人たちからしてみれば『いじめの辛さも知らないくせに、知ったような口きくな』と言う感じだ。

そんな人の呼びかけなんて彼女の心には響かないだろう。最も彼女の性格から応える気になんてならないだろうし。

てか、川崎さんの依頼の時も思っただけど、由比ヶ浜さんは本当に感情の赴くままにしか行動しないよね。相手や周りのことなど何も考えてない。

「……………由比ヶ浜はこう言ってるが、お前自身はどうしたいんだ？」

「……………変えたい……………とは思わう。辛いというか…嫌というか…なんか惨めだし。流石に惨めなのは嫌だから。でも、もうどうしようもないし…仕方ないっていうか…」

「何故そう思うのかしら？」

雪ノ下さんに怪訝そうに問われ、鶴見さんはいくらか話しづらそうだったが、それでもきちんと言葉にして雪ノ下さんに返す。

「さつきも言ったようにこのいじめはローテーションのようなものだったんだけど……長い間シカトされてるのは私だけなんだ……他の子はすぐに終わったんだけど」

そこまで話して鶴見さんは顔を俯かせた。よっぽど彼女にとって話しづらい事なのだろう。

「私が周りとの距離を余計に取っちゃったからかな……ここまでできたならもう仲良くできない。たとえば、仲良くできたとしても、またいつこうなるか分かんないしね。また、これも同じようなことになるんだったら、このままで良いかなって思い始めてるんだ……惨めなのは……やっぱり……嫌だけど……」

そう言いながら鶴見さんは、さつき自分が『馬鹿ばかり』と言っていた葉山君たちの

グループをぼんやりと見つめている。

その視線は『羨ましい』という視線なのか、自分はもうあそこには行けないという『諦め』の視線なのか、それとも自分にはもう関係ないと割り切っている視線なのか。

私的には彼女の視線にはそれら全てが当てはまっていると思う。

彼女は心の奥底では人との繋がりを強く求めている。

でも、彼女はいじめのターゲットが変わったとしても、もう以前のような関係に戻る事が出来ないということを心のどこかで理解しているのだろう。

でもまあ、彼女の言ってる事が本当なら彼女がこうなっている原因はやっぱり彼女にもある。

何しろこのいじめが彼女の言ってる通りローテーションのようなものだったとしたら、以前は彼女も虐める側の人間だったって事なのだから。

まあ、クラスのマジョリティーに逆らったら針の筵になるのは目に見えてるから、鶴見さんが虐めに加担したのも分からなくはない。

でも、以前は自分もその一人だったのだから、その報いが返ってきただけの自業自得

とも思わなくない。

鶴見さんは話し合えるとグツと嗚咽を堪えるように俯く。悔しいのか、情けないのか  
目には涙が溜まっていた。

それを見て、比企谷君と雪ノ下さんは顔を顰め、由比ヶ浜さんは心配そうに鶴見さん  
を見つめている。

奉仕部トリオが三者三様の反応を見せているなか、私は心の中で小さく呟く。

『くだらない』と。

時刻は九時過ぎ。

キャンプに来ている小学生達は就寝の時間。私たち高校生も今日のやることは全て終わっているのでこの後は自由時間だ。

それならば私は部屋に戻って自習をするか、さっさと寝るかしたいのだけれど、由比ヶ浜さんに半ば強引に連れられて施設のロビーで、特に何かする訳でもなく集まっていた。

そこには、葉山君のグループも雪ノ下さんたちもいた。

「大丈夫、かな……」

そんな中、由比ヶ浜さんが唐突にポツリと咳つぶやいた。

「……ふむ……？何か心配事かね？」

こんな所でも堂々と煙草を吸っていた平塚せんせが煙を吐きながら問う。それに葉山君が答えた。

「まあ、ちよつと孤立しちやつてる生徒が居たので……」

「そうよね〜…可愛そうだよねー」

相模さんが葉山君にそんな相槌を打つ。

まあ、葉山君に媚を売っているのがバレバレなので、本当に可愛そうだと思うのはいなさそうだけどね…

「それで、君達はどうしたい？」

平塚先生は私たちみんなを見渡して問いかける。

でも、その問いかけに答える者は居ない。みんな一様に口をつぐんでいる。

……どうしたいと聞かれても困る。

どうしたいかと聞かれたら私の答えは決まっている。

『関わりたくない』もしくは、『小学生の引率の教師に事情を説明する』の二択だ。  
私はいじめ問題になんて関わるのは真つ平御免だ。

彼女の抱える問題はそんな簡単にどうこう出来るものではないし、解決出来なかったり、事態を悪化させてしまった場合、責任を問われかねないからね。

それを理解している者も何人かいるのかもしれない。

それでも誰も何も言わないのは、『ここで何もしない』と言ってしまえば、『孤立している小学生を見捨てた人でなしだ』と言うレッテルを貼られてしまうからだろう。



まあ、今のみんなは誰かが意見を言うのを待っている状態だろうね。

誰かの意見に乗っかってしまえば、例えばそれが失敗したとしてもその人に責任を擦りつけられるかもしれないし、自分が主体的に動かなくても良いし。

でも、こんな空気の中で何か意見を出そうとする人は普通はいない。

……そう普通ならね。

私はそう言つて葉山君と雪ノ下さんに視線を向ける。

「俺は……」

そんな重苦しい沈黙を葉山君が破る。

「…出来れば…可能な範囲で何とかしてあげたいと思います」

葉山君のその言葉を聞いて思わず私の口角が思わず上がった。

何とも素晴らしい言い回しだ。

表面上は整えているけど、身勝手に自己満足の言い回しだ。

解決出来れば『すごいよ！流石葉山君！』と称賛され、解決出来なくても『やるだけはやったんだ。仕方無いよ』と取り巻きたちから慰められる。

成功しても失敗しても自分はノーダメージでいられる。常にみんなの中心にいて慕

われている彼だからこそ言える言葉だ。

何と便利で都合の良い言葉なのだろうか。グループの相模さんと戸部君は『流石葉山君だ!』と言いたげの視線を彼に向けているからね。

にしても、テニスコートやチェーンメールの時に葉山君がグループのメンバーを切り捨ててるのは自分たちも見てるのに何で彼のグループのメンバーは彼の意見を称賛するんだか…

彼のどこに信頼が置けるのか全く私には理解できないけど、もしかしたら彼らは葉山君のことを盲目的に信頼しているのかもしれない。

「貴方では無理よ。前もそうだったでしょう?」

その時、横から冷たい声が飛んだ。  
声の主は雪ノ下さん。彼女は葉山君の言葉を冷徹に切り捨てた。

雪ノ下さんの突き刺す様な冷たい視線と冷徹な言葉に、流石の葉山君も苦い顔を浮かべる。

「……………そう……………だったかもしれないな…でも、今は違う」

「……………どうかしらね」

苦々しい葉山君の答えを雪ノ下さんは肩を竦すくめ冷たく遇らった。

……どうやら、この2人には何かの因縁があらみたいだね……

誰も予想していなかった葉山君と雪ノ下さんの冷たいやり取りが終わると雪ノ下さんが平塚先生に尋ねる。

「これは奉仕部の合宿も兼ねかねていると平塚先生はおっしゃいましたが、彼女の案件についても活動内容に含まれますか？」

「……ふむ……そうだな。林間学校のサポートをボランティア活動と位置付けた上で、それを部活動の一環とした訳だからな。原理原則から言えば今回のそれもその範疇に入っても良かろう」

698 千葉村に行くけど平穩を脅かされたくない。

「  
そ  
う  
で  
す  
か  
…  
…  
」

「……………」

……………はあ？

雪ノ下さんと平塚先生のやり取りを聞いて思わず私は椅子からひっくり返りそうになった。

何とか踏ん張ったが、恐らく今の自分は嘔然とした顔をしているだろう…

でも、その反応をするだけのことだった。

この人たちは何を言ってるの？

『小学生の虐め問題』なんて、普通なら教師や親などの大人の人たちの介入により解決する事で、どう考えても私たちのような何の力もない普通の高校生が関与するべきではないでしょう。

それなのに何で『範疇に入れても良からう』という結論に至るんだが：

こういう時は私たちの誰かか、平塚先生が小学生の引率の先生にイジメの概要を伝えて対応するのが解決のセオリーだ。

それなのに平塚先生は『お前たちで解決しろ』という結論を出したのだ。

雪ノ下さんも『そうですか』って何で納得するんだよ。

どう考えても私たちにできることは何もないのに何で彼女を『自分たちで』助けるという結論に至るんだか：

彼女を救えるのは私たちではない、私たちより力のある大人だ。

それなのに彼女はそれすらも気づかずに自分たちが、正確には自分だけで助けたいというどこまでも自分本位な考え方だ。



この間の遊戯部の件から、彼女も自分の力や危機管理能力を少しは理解したと思っただが、彼女の本質はあれから何一つ変わってない。

まるで目の前の事に飛びついて、周囲やこれからのことは何も考えていない猪みたいだ…

そう私が思っていると、雪ノ下さんは平塚先生の答えを聞いて静かに目を閉じてこう答えた。

「私は……………彼女が助けを求めらば…あらゆる手段を持って解決に努めます」

暫く瞑目していた雪ノ下さんはハッキリとそう宣言した。

「……んで……助けは求められているのかね？」

「……それは……分かりません」

雪ノ下さんは苦々しい顔でそう言った。

彼女は助けを求めているのかは分からない。

そもそも私たちは少しだけ鶴見さんと話ただけで、彼女が虐められているという事は分かったが、何かを頼まれているわけではない。

彼女が現状をどうしたいのか、どうして欲しいのか、それは分かっているのだ。

そんな中、由比ヶ浜さんが雪ノ下さんの服を引っ張る。

「ゆきのん……あの子は言いたくても言えないんじゃないかな……？」

「……………どう言う事かしら？」

「……………うん…留美ちゃんは言ってたじゃん。ハブるのがクラスで結構あったって。自分もその時距離を置いていたって…だから、自分だけ誰かに助けて貰もらうのは許せないんじゃないかな……………」

由比ヶ浜さんは俯きながらそう言った。

その言葉には説得力があつた。クラスの風見鶏の彼女だからこそ、鶴見さんがハブる側だった時の気持ちができるのだろう。

「きつと留美ちゃんだけが悪い訳じゃないと思うんだよ。皆、多分そうなんだよ……話  
し掛けたたくても……助けたたくても……仲良くしたたくても……そう出来ない環境つてやつぱり  
あるんだよね……それでも罪悪感は絶対に残るからさ……」

由比ヶ浜さんはそう言った。

虐められている人へ周囲の環境を無視して話し掛ける事はとても勇気が必要だと、そ  
うしてしまう事で自分までもが虐めの巻きこまれ、自分も標的にされてしまうのではな  
いかと。

「……………つて…わぁー！何かあたし今すつごく性格悪い事言つたよね!?大丈夫なのかな……………!?」

「大丈夫よ…由比ヶ浜さん。とても、貴女らしいと思うわ……」

自分の発言に焦る由比ヶ浜さんに雪ノ下さんは穏やかな笑顔で答える。

由比ヶ浜さんは自分の発言が相当恥ずかしかったのか、顔を赤くして黙り込んだ。

「雪ノ下の結論に反対の者は居るかね？」

由比ヶ浜さんの発言を聞いて、少しだけ間を置いて平塚先生が全員に問い掛ける。反対の声を上げる者は1人もいない。

声を上げない者たちは賛成している。『黙っている者たちは雪ノ下に賛成している』と平塚先生は判断したらしく微笑んだ。

内心どう思っているかは知らないけどね……

「よろしい……それならば、どうしたら良いかは君達で考えてみたまえ……私は寝る……」

平塚先生はそう言うのと欠伸を噛み殺しながら席を立ち、さっさと部屋に戻っていった。

……もうこの人に期待するだけ無駄だ。

私は平塚先生の後ろ姿を見て内心でそう呟いた。

……とまあ、全会一致で問題に対処するために話し合いが始まったのだが、話し合いは早くも混沌の様相を呈してきた。

話し合いの議題は当然『鶴見留美さんはどうやって周囲と協調を図れば良いか』に設定されている。



「……やっぱり、皆で仲良く出来る方法を考えないと根本解決にならないか」

『みんなで仲良く』が信条の葉山君は問題の本質をまるで理解しておらず、当たり障りのない綺麗事を言うだけ。

「そんな事は不可能よ。一欠片の可能性もありはしないわ」

雪ノ下さんは意見を否定するだけで自身は全く案を出して来ない。

常に『自分は優秀な人間だ』と言っている割に代案は出さずに否定をするだけ、そんな事は彼女が嫌う無能な人間でも出来ることだ。

他の面々も酷いものだった。

相模さんは葉山くんに媚びを売ってばかりで話し合いにはほとんど参加していない。葉山君のグループの戸部くんは状況を理解していないのか当たり障りのない相槌を打っているだけ、海老名さんに至っては趣味の話になっており話の論点がずれている。

由比ヶ浜さんは雪ノ下さんと相模さんが険悪になる度に怯えたように縮こまる。

戸塚くんと小町さんは殆ど成り行きを見ているだけ、時折、葉山くんと似たような綺麗な意見は出すもののそれらを聞き入れられている様子はない。

比企谷君は一応意見は出すものの、多くは葉山くんや雪ノ下さんの意見の批評ばかり。

その度に場の雰囲気が悪くなる。空気を読めないのか敢えて読まないのか分からな  
いが、話し合いが円滑に進まない原因の一つは彼にあると思う…

当然それらは葉山君たち発言力ある人にブロックされて聞き入れられてないしね。

……ていうか、この人たちは解決策はおろか問題の本質すら理解していないのだろうか、こんなものは無駄な話し合いにしか思えてならない。

まだ、小学生の方がまともな話し合いができる気がする、この人たちにイジメ問題の解決を丸投げするなんて平塚先生は何を考えているのだろうか。

私？

私は面倒なことは極力避けたいから話し合いの成り行きを黙って見ているだけだよ。黙っていれば意見を求められることもないし。

まあ、内心で『早く終わらないかな』とは思ってるんだけどね。この体たらくでは大した解決策は出ないだろうし…

私はそう言うときみんなから見えないように欠伸を一つした。

結局、これだけ話し合いをしても具体的な解決策は何一つ出ずに話し合いは明日に持ち越しとなった。

そもそもここにいる大半の人たちは私も含めて本気で鶴見さんを助けたくて参加しているわけではないのだから、建設的な意見なんて出るわけがない。

言い出したのが発言力の強い葉山くと雪ノ下さんだったから、2人に反発する気が

ないだけだろうしね。

それに、さっきの話し合いを見ていたら、私を含めてこの場にいる人全員が鶴見さんのことを本気で助けたいとは思っていないのだろう。

葉山くと雪ノ下さんは自分の自己満足と理想のために鶴見さんを助けたいとしか思えない。

由比ヶ浜さんは心配はしているのかもしれないけど、ただそれだけ。

比企谷君は他人の意見に対して文句を言うばかり、正直彼が黙ってくれていた方がまだ話し合いが円滑に進んだ気がする。

他の人たちもそれぞれ似たような感じだった。どう見てもこんな人たちに鶴見さんを助けることなんてできるとは思えない。むしろ状況を悪化させる可能性だけである。

それに、みんなは大事なことを忘れてる。

それは、鶴見さん自身が問題の解決を望んでいるかということだ。

貴方たちは葉山くんや雪ノ下さん、平塚先生によつてすっかり鶴見さんを助けるつもりで話し合いをしていたけど、それは本当に鶴見さん自身が望んでいる事なのだろうか？

雪ノ下さんに至つては平塚先生に『私は彼女が助けを求めているなら助ける』的なのを言っていたのに、その舌も乾かないうちに『目の前の問題を解決したい』という自分のエゴを貫き通そうとしているからね。

そもそもみんなは鶴見さんのイジメ問題を解決するのは正しいことと認識している

のかもしれないけど、それは大きな間違いだ。

彼女自身が問題の解決を望んでいないのなら、葉山くんや雪ノ下さんたちが行おうとしていることは『余計なお節介』であり、それは貴方たちの身勝手な自己満足でしかない。

それに気づかないあなたは私にはこう見える。

『偽善者』に……。

「……………眠れない……………」

時刻は深夜0時を回ったくらいだろうか、私は眠れない夜を過ごしていた。

いや、原因はわかっている。

同室の由比ヶ浜さんたちがさつきまで雑談していたからだ。しかもすごい大声で話していたから煩くて仕方なかった。

仕方なく彼女たちが寝静まるまで布団を被りながら教科書で軽く勉強していたのだが、そのせいか彼女たちがやつと静かになったと思ったら今度は私が眠れなくなっていた。

本当に最悪だ…寝る時まで私はこの人たちに振り回されなくてはならないのか…



苛立ちからカリカリと爪を噛む。気持ちが昂ってきた事によりさらに目が覚めていった。

仕方ない。少し外に出て散歩でもしたら眠くなるかな…

私はみんなが寝静まったのを確認して靴を履き、バンガローを抜け出して夜の散歩へ向かった。

「……気持ちいい」

バンガローから出て夜の森をぶらりと一人で歩く私。夜の散歩は思っていたより気持ちよかった。

夏という季節もあつてか、吹き付ける強くも弱くもない夜風はとても心地の良いものだったし、昼間とは違う森の景色を見ているうちに苛立ちも嘘のように鎮まっていたからね。

森の散歩は人の心を落ち着かせるというのをどこかで聞いた事があるけど、あながちそれは間違いではないのかもしれない。

そう思いながら歩いていると、林立する木々の間に人影が2つ浮かび上がった。

「……………」

こんな夜中に自分以外に誰だと思いつつながら近づくと、人影が月明かりで照らされ闇夜から浮かび上がった。

「比企谷君と雪ノ下さん……………」

こんな夜中に何してるんだろう、私は2人から見えない所に身を隠し2人の会話に耳をすませた。

「…あの子の事を…何かしなればね…」

「知らん子の為ためにやけにやる気だな…」

2人の会話の内容はどうやら鶴見さんの事についてだった。まあ、今日の話し合いでは何も進展しなかったからね…

にしても、雪ノ下さん。本人から助けを求められてないのにもうあなた自身は彼女を助ける気満々なんですね。

本当に彼女が芯の通った人なのかそれすらも疑いたくなってきた。彼女は芯の通っているどころか言ってる事とやってる事が思いつきり矛盾しているのだから。

「今までだって知らない人ばかりだったわ。私は知己ちスキの仲だからって手を差し伸べる訳ではないもの。それに……彼女って由比ヶ浜さんと、何処か似ている気がしない？」

「そうか？」

鶴見さんが由比ヶ浜さんに似ているって？

それって風見鶏なところがかな？

鶴見さんも以前はいじめっ子たちと一緒にクラスの人を無視したりして虐めていたらしいしね。

まあ、それはおそらく自分の身を守るための保身だったのかもしれないけど、それでもイジメはイジメだ。

まあ、ボランテニアとはいえ一応は年上の私たちにも横柄な態度を取るくらいだから由比ヶ浜さんほどの風見鶏ではないだろうけどね。

「多分……由比ヶ浜さんにもああ言う経験があるんじゃないかと思ったのよ……」

「そりゃあ……まあ、あるだろうな……」

……まあ、そうだろうね。

比企谷君や雪ノ下さんと違い、人一倍空気に敏感で、強者や周りに従うのが由比ヶ浜さんだ。

そのため自分がそう言ったことを望んでいなくても、自分の友達もしくは自分より強者がやる様に言ったら、彼女は流されるままにそれらを行うだろう。

だからこそ、由比ヶ浜さんは罪悪感と言う感情を人一倍知っているのかもしれない。

その為、鶴見さんが今の現状を言い出せない理由にも真つ先に気付いたんだろうね。  
だからといって、私は彼女を肯定するつもりはないけどね。

「それと……多分葉山くんも……」

「まあ……そうだろうな……」

それにも同感だ。

私の見た限り葉山隼人という人間は、出来る出来ないはともかく、自分にとって良く



ない事が起きれば自分の信条である『みんな仲良く』に倣って即座に解決しようとする。言葉だけを見れば美しいけど、彼の行動はやられる側からすれば迷惑この上ないものでしかない。

出来ないなら出来ないで、余計なことをせずにももしないで放っておいてあげる方がよっぽどありがたいだろうに、彼はそれに気づかず自分のエゴで中途半端に引つ掻き回して、却って事態を悪化させるのだから。

彼の場合は昼間の鶴見さんへの気遣いが良い例だ。

あれは葉山君にとっては良いことだったのかもしいけれど、鶴見さんからしてみれば『いじめっ子』という猛獣のいる檻の中に放り込まれたようなものだ。

「……いや……そう言う事ではなくて……」

比企谷君の言葉に言葉を濁した雪ノ下さんはそれきり何も言わなくなる。2人の間に沈黙が流れる。

でも、それは決してロマンチックなものではなく、夜風が木々をざわつかせる音だけが聞こえてくるようなものだった。

やがて、その沈黙を破るように比企谷君が声をかける。

「なあ……お前さあ……もしかして葉山と何かあんの？もしかして元カレだったりするの  
か？」

比企谷君の言葉に雪ノ下さんの視線がこれまでにないほど冷たくなった。

元々夜の森は涼しかったが、そのせいで一気に氷点下まで気温が下がった様な感じがした。

雪ノ下さんは冷たい瞳のまま重苦しく口を開く。

「……違うわ……小学校が同じだよ。それと、親同士が知り合いね……彼のお父さんがうちの会社の顧問弁護士をしているの。因に彼の母親は医師よ……」

……へえ……!

なるほど、やっぱり雪ノ下さんと葉山君には何かの因縁があるみたいだね。

雪ノ下さんが葉山君に対して敵意に似た感情を向けているのは単に彼と反りが合わないからだけではなく、その『因縁』に基づいた他の理由があるからだろう。

それに、葉山君が雪ノ下さんを気にかけている理由にも納得がいった。

おそらく自分の親が雪ノ下さんの家の顧問弁護士だから、その娘の雪ノ下さんには気に入られたいだろうし、関係を悪化させないようにと親からも言われているからだろう。

「ふーん。という事は家族ぐるみの付き合いって奴か…お前も大変そうだな…」

「そう言った外向きの場に出るのは姉の役割よ。私はその代役でしかないから、よく分からないわ……」

そこまで雪ノ下さんは言うと、言いたい事は終わったのか、彼女は比企谷君に背を向ける。

「……………そろそろ戻るわ」

「そうか……じゃあな」

「ええ、お休みなさい」

そう言うのと彼女は振り返りもせず闇夜の森の中に消えていった。

暫く比企谷君もそこに佇んでいたが、やがて彼も自分のバンガローへと戻る。

2人が戻り私は1人になった、再びその場が静寂に包まれる。

そろそろ私もバンガローに戻ろうと思い、来た道を2人に倣って歩き始める。

しばらく歩いてふと空を見上げる。

都会のビル街が立ち並ぶコンクリートジャングルでは絶対に見られない満面の星空が広がっていた。

煌々と静かに輝く星に照らされながら、私はバンガローへの帰り道を明かりもつけずに歩いて行つた。

身勝手と理不尽に平穩を脅かされたくない。

—翌朝—

「ふああ……………」

「ふらのん…どうしたの？ 顔色悪いしすごい眠そうだよ？」

次の日の朝、眠い目を擦りながら私は朝食の席に着く。その隣で由比ヶ浜さんが心配そうに私の顔を覗き込む。

『寝る前に貴女たちが騒がしかったから眠れなかったんだよ』と眠気のせいで悪態を吐きそうになるがグツと堪えた。

しかし、眠気のせいでぼんやりする頭ではいつもの営業スマイルも気の利いた言葉も出てこない。



昨日の夜の散歩を終えてバンガローに戻って布団に入ったが、結局その後も眠れることはなかった。

私は普段は眠りがとても深く、いつもなら布団に入った途端に意識がないのだけれど、昨日はやけに目が覚めておりなかなか寝付けなかった。

仕方ないので、眠れる古典的な方法である羊を数えたりなどをして眠気を誘ったがそれでも眠れずに、布団の中で何度も寝返りをうった。横でグースカ気持ち良さそうに寝ている由比ヶ浜さんを見て叩き起こしてやろうかと思ったほどだ。

それもあつて最終的に眠れたのは午前2時過ぎだっただろう。

そのせいで寝不足だ。頭はフラフラするしイマイチ身体に力も入らない、寝不足のせいでいつも通り振る舞うことが出来ない。

全く散々だ。本当にこの合宿に来てからロクな目に合わない。

由比ヶ浜さんは返事を返さない私に見切りをつけたのか今度は雪ノ下さんの元に向かう。

「ゆきのん、具合でも悪いの？」

「問題ないわ……………どうかしたの？」

雪ノ下さんの隣に座り、私にしたように彼女の顔を覗きこむ。雪ノ下さんが質問の意図を尋ねる。

「いやあ…何か気になることがあるみたいだから…昨日の話し合いのこともあるし…」

「別に問題ないわ」

雪ノ下さんは淡々と由比ヶ浜さんに返す。

他人に自分の弱さを見せたがらない彼女らしく、自分の落ち度は隠したいようだ。

「そう…う…そうだったら良いんだけど…でも、ゆきのん…顔が引きつってるっていうか…余裕が無いっていうか……………」

「……まあ、そうね。私たちが鶴見さんのために何かできるのは今日が最後だもの。余裕はないわね」

鶴見さんからの助けは求められていないのに助けるのは変わらないのね…

雪ノ下さん、昨日の話し合いの前に『彼女が助けを求めてきたら助ける』と言っていたのに、自分のエゴで助けようとしているのだから。

一晩寝たら自分の矛盾くらいには気づくと思うんだけど、少しも気づく様子はない。

まあ、雪ノ下さんが焦るのも分かる。

私たちが鶴見さんを含む小学生と一緒に過ごすことができるのは実質的には今日が最後だ。

明日はすぐに車に乗って千葉に帰らなければいけない。つまり、彼女の問題を解決するのは今日がラストチャンスだからだ。

彼女の性格上、鶴見さんのイジメ問題を解決させないと自分自身が納得できないだろうからね。

「そう…なにかあったらいつでも言ってね！あたし、ゆきのんのためなら何でもするか  
らさー！」

「ありがとう由比ヶ浜さん」

でも、雪ノ下さんは由比ヶ浜さんの力強い協力宣言に少し勇気づけられたのか笑顔で  
返事を返す。

それでも、自分自身の矛盾には何一つ気付いてないようだけどね。

やがて朝食を全員が食べ終え、葉山君が平塚先生に『今日は何をするんですか？』と

指示を求める。

「うむ。今日はまず、今日の夜の最後に行われるキャンプファイヤーの準備をしてもらう」

キャンプファイヤーの準備か。これはどうやら昨日と違って力仕事をさせられそうな気がする…

「木材運びとフォークダンス用のライン引きを手分けして行いたまえ。分担は各自に任せる。それが終わり次第、昼まで自由時間とする。午後からは肝試しの準備だ。君たちにはお化け役及びコースの巡回をしてもらう。何か質問のある者は？」

先生に質問する者はいなかった。

まあ、今の説明は分かりやすかったし作業も単純だったから質問する必要ないと思うけどね。

「よし…それでは全員で朝食の後片付けをした後でキャンプファイヤーの準備をするぞ」

平塚先生の号令に全員が席から立ち上がり動き出した。

『働くときや作業をするときは、静かに黙々と取り組む方が効率が良い』。  
故人の言葉であるこの格言を私は正しいと信じている。

無駄な話や不必要な助言をもらってもそれは仕事や作業の妨げになるだけ、本来仕事

や作業というものは一人で黙々と行う個人競技のようなものだ。

それを履き違えて『作業も遊びと同様に明るく楽しくした方が良い』だなんていう人もいるけど、それは『怠けたい』という心情の裏返しだ。

別にブラック企業のような働き方が良いとは言わないけど、騒がしくされて働くのを邪魔する権利はその人たちにもないはずだからね。

「マジ重いわー！キツすぎっしょ！」

そう思っていると、私の耳にやたらと大きな声の男子生徒の声が入ってきた。

声のした方をみると、それは私と同じくジャンケンで負けて薪を運ぶ仕事になった葉

山グループの一人である戸部君だった。

にしても、相変わらず彼の知能の低そうなチャライ声は不快を募らせるな…薪運びで疲労が溜まっている今なら余計にそう感じられる。

現在、私たちがやっているのは夕方のキャンプファイヤーで使う薪運びだ。

今夜はここでキャンプファイヤーをしながら小学生たちがフォークダンスをするらしく、今はそのための準備に追われている。

作業の組み分けは葉山君が中心となって行つたが、どの作業を誰がするかで揉め事が起き、最終的にジャンケンで作業の分担が決まった。

だが、私には運さえもないらしく、ジャンケンで負けてしまい、力仕事の薪運びになつてしまったのだ。

「はあ…はあ…重い……」



キャンプファイヤーで使う薪はかなり多い、おまけに運ぶ薪は女の私には凄く重く感じられた。

174cmと身長が高いことから、私はスポーツが得意と勘違いされる事が多いのだが、スポーツ経験なんて体育の授業以外にはないため別に力があるわけではない。

そのため、昨日の夕食の時に平塚先生から炭を運ぶように言われた時と同じくよろよろと不器用に薪を運ぶ。

……少しだけでも気を紛らわせるために思考の海に沈んで軽く現実逃避していたのだが、さっきの戸部君の大声のせいで現実に引き戻されてしまったのだ。

「あああ！もう、この薪マジで重すぎなんですけどーやってられない！」

その時、私の近くに突然持っていた薪束を放り出して喚きだす者がいた。

『煩いなあ……』と見れば、その人物は三浦さんの後釜に触ったクラスの新しい女王の相模さんだった。

時折軽く後ろを振り向いては『可愛そうな自分を助けて』的なアピールを離れた所にいる王様に行っているけどね。

実は相模さんもジャンケンで負けて薪運びになっていた。だが、力仕事の薪運びなんて女王様はお気に召さなかつたらしく、すごい嫌そうな顔をしたいけどね……

したくない薪運びの仕事させられて、相模さんは薪を放り出して『嫌々』と小学生のような駄々をこねている。まるで誰かが助けてくれるのを待っているようだ、葉山君をさつきからチラチラ見ているのは彼に手伝って欲しいからだろうけど。

自分の力で成し遂げない、人に助けてもらうなんて考えが甘すぎる。そんな貴女を気にかけるほど、みんなは貴女に優しくないと思うし。

まあ、相模さんに構っている暇はない。

さつきと薪運びを終えて自由時間にしよう……

「……あーちよつとデカ女、こっちに來てよ！」

私が相模さんを見無視して彼女の前を薪を運んで通ると、相模さんが私に声をかけてきた。

名前を覚えてもらえてないのか、蔑称なのか分からないけど『デカ女』とは私の事を指すのだろう。

ため息をつきたいのを堪えて、相模さんに営業スマイルを張り付けて振り返ると、笑顔を見かけた相模さんが私を手招きしている。

相模さんを見て私の気はさらに重くなる。あの笑顔は中学時代に私を虐めていた人たちがしていた笑みだ。

もう嫌な予感しかないけど、クラスの中心人物に逆らうとろくな目に合わないのは経験済みなので、私は彼女の元に何も言わずに向かう。

「……………どうしたの?」

「アンタさ、ウチのこの薪を変わりに運んどいてよ。ウチ、足痛くて運べないんだわ」

「……………え」

「良いじゃん、ウチら友達でしょう? やつてよ」

相模さんの要求に思わず私は営業スマイルを崩しかける。今運んでいる薪だけでも精一杯なのに彼女の分まで運ぶと正直かなりキツイ。

難色を示す私に気づかないのか、相模さんが私にあの悪意のある笑顔を向けて私の恐れる鎖である『友達』という言葉を使う。

権力者が平民を使うための魔法の言葉が『友達』だ。

スクールカーストの権力者にその魔法の鎖が使われたら、私のような平民がそれを断

るのは虐めや無視という悪意の地獄に落とされる片道キップを渡されるようなもの。

実際、私と相模さんは友達ではないし、仲良くもない。それならもう間違ひなく私を自分の奴隷にするための魔法の言葉を使っているのだろう。

現に相模さんは私に『断らないよね?』的な感情を含んだ笑顔を向けているからね。

「……分かった。良いよ」

「ありがとう!助かるわ」

権力者に逆らうのは、いつだって強い意志を持つ反逆の意思を持つ反逆者だ。

でも、平穩を失いたくない臆病な私はそんな強い意志を持つ反逆者にはなれない。

そのため、私は権力者から握られている鎖をを断ち切ろうとせず、彼女に要求に素直に従う。

相模さんは私が承諾すると、『もうアンタに用はない』と言いたげに私に自分の運んでいた薪をドサッと押し付け、葉山君の元に走って行った。

てか、足痛いつて私に言ったんだからせめてその演技くらいはしなよ…走って行つてるし。

私は相模さんの後ろ姿を見ながら、彼女にそう毒づくのと相模さんの薪をその場に置いて自分の薪を先にキャンプファイヤーファイヤーをするグラウンドの中心に運ぶ。

運ぶ薪は後10束くらいかな。みんなで運んでいるから後2往復くらいすれば休めそうだし…

私はそう思い直すと息を一つ吐いてまた薪束を運びに行つた。

ふと、私の脳裏に今回の厄介事の中心にいる少女の顔が浮かび上がった気がしたが、頭を振つてその考えを打ち消した。

「はあ……疲れた……」

キャンプファイヤーの準備が終わり、昼までは自由時間という事で私は近くの木の木の陰で一休みしていた。

その近くでは由比ヶ浜さんたちが川の中ではしゃぎ回っている。彼女たちの楽しそうな声を聞きながら私は木陰の涼しさを堪能した。

本当は由比ヶ浜さんに『川で遊ぼう』と誘われたのだが、水着なんて持ってきてないし、さっきの薪運びでヘトヘトの私はそんな気になれずに断ったのだ。

てか、そもそも海に行くわけでもないのに、水着なんて何でみんな持つてるんだ？あの、雪ノ下さんまでも持っていたのには流石に驚いたよ……

「きゃははは！ 気持ちいいよ！ ゆきのんもほら〜」

「……………」

由比ヶ浜さんが雪ノ下さんにパシャッと水をかける。雪ノ下さんは黙ったまま彼女の胸を凝視している。

おおかた、由比ヶ浜さんのグラマーなスタイルを羨ましがっているのだろうけど、スレンダー体型も需要あると思うし気にしなくて良いんじゃないの？

そもそも由比ヶ浜さんの場合は頭の栄養分が全部胸に入ってると思うから気にしなくても良いと思うし。

そうこうしているうちに男子もやってきた。葉山君と戸部君も水着に着替えており、相模さんたちと一緒に川遊びに興じている。

「あれ？ ねえさいちゃん…ヒツキーは？ いないけど…」



由比ヶ浜さんが水着にパーカーを羽織った格好の戸塚君に尋ねる。私もつられて辺りを見渡すが比企谷君の姿が見えなかった。

「あ、うん。どこか適当な場所でぶらぶらしてくるって言ってたよ」

「そうなんだ…なんか残念」

「なんだ？由比ヶ浜はそんなに比企谷と遊びたかったのか？」

平塚先生がからかい気味に由比ヶ浜さんに尋ねる。

「…ち…違います！あたしはそんな、ヒツキーがないから残念とかじゃなくて、せっかくみんなで遊びに来たんだからみんなで遊べればよかったなあって思っただけで…！」

由比ヶ浜さんが顔をタコのように赤くして手を顔の前でブンブン振って分かりやす

く否定するが、途中から何を思ったのか無表情に戻っていく。

「……あれ？あたしなに言ってるんだろ」

無表情から今度は『たはは』と笑う由比ヶ浜さん。にしても慌てたり笑ったり彼女の表情筋は忙しく動くものだな。

「まったく……あいつは環境が変わってもあいつ自身は変わらないのか……」

今度は平塚先生がそう呟いた。まあ、比企谷君を『矯正』という名目の元に奉仕部に入れたんだから何かと思うことがあるのかもね。

でもまあ、虐め問題を生徒に解決させるような貴女に矯正させられるものなんて何もないだろうけど……

「仕方が無いと言えば仕方が無いが、あいつはもう少し協調性を身に付けてもいいように思うのだがね……まあ、自由時間なのだし、そこまできつくは言わないが。そこ

で座っている奴にも同じことが言えるがね」

平塚先生は比企谷君に対してそう言うのと、今度は分かりやすく私の方を見てそう言った。

まあ、私がこの奉仕部に強制入部させられたきっかけも『協調性が』とか言いながらのような理由だったからね。比企谷君と同じようなものだったのだろう。

それにしても、平塚先生。私は『薪運び』で疲れてるからこうして木陰で休んでるんですよ。由比ヶ浜さんたちと遊んでないからって協調性がないと判断するのはやめてもらえませんか？

「平塚先生、あんな男の事なんて気にしてもしょうがありません」

私がそう内心で平塚先生に抗議していると、今度は雪ノ下さんがキツパリと言う。

相変わらずの冷たい物言いに平塚先生は苦笑を浮かべて『何かあったのか？』と問い

かけ、由比ヶ浜さんと戸塚君が昨日の事を説明する。

戸塚君の説明を聞くと、平塚先生は急に真面目な顔になって『そのままだと君はいつか追い詰められてしまうぞ』と雪ノ下さんに忠告するように言った。

雪ノ下さんは平塚先生の言葉の意味が分かってないみたいだけど、おそらく平塚先生は雪ノ下さんに『自分だけで気負わずにもっと周囲を見ろ』的な事を言ってるのだろう。確かに雪ノ下さんは『自分が優秀だ』と常日頃から思っている自意識過剰かつ独りよがりな性格だ。

だからこそ、平塚先生の言ってる通り周りを見ずに自分だけでやり遂げようとする。今回の鶴見さんのイジメ問題に関してもそうだ。おおかた、チェーンメールの時ように『私が虐めっ子たちに話をつけて力づくでやめさせる』的なつもりだったのだろう。

まあ、昨日の話し合いの時点では反対意見しか言っていないから、彼女はただ単に自分

と因縁がある葉山君に対抗しているだけなのかもしれないけどね。

ていうか、そもそも平塚先生の雪ノ下さんへの助言もそんなに的を得てないように見える。

平塚先生は雪ノ下さんの事を思つて言つてゐるみたいだけど、平塚先生も雪ノ下さんの表面しか見ていない。

私は雪ノ下さんとの付き合いは平塚先生よりも短いけど、彼女に本当に必要なのは『周りを見て助けてもらうこと』ではなく、『自分の力量を把握すること』だと思う。

私が奉仕部として今まで関わつてきた依頼の大半は高校生の部活動が解決できる依頼ではなかった。

チエーンメール、深夜のバイト、遊戯部、そして小学生のイジメ問題など、どうみても高校生が解決できる依頼ではないにも関わらず、雪ノ下さんは『自分は優秀だから解決できる』という根拠のない自信からこの依頼を奉仕部として受けてきた。

別に貴女一人で受けるなら私は何も文句はないけど、その貴女の『奉仕部として』という鎖に私を勝手に組み込むのはやめて欲しい。

貴女には常に成功というビジョンしか見えてないみたいだけど、失敗したときの事を何も考えてない。

もし失敗したら奉仕部として受けた貴女のせいで巻き込まれたも同然の私や比企谷君たちまで被害を被らなければならぬのだ。

貴女にその覚悟はあるの？失敗した時の責任が取ることが出来るの？

どんなに成績が優秀でも、どんなに自分が優れていても貴女はただの高校生だ。貴女が出来ることは限られている。

全てに手を伸ばせるほどの力量は貴女にない。責任も取れずに依頼を安請け合います貴女は貴女自身が嫌う無責任というものだ。

ていうか、チエーンメール、遊戯部、深夜のバイトは私が行動しなければ大変なことになっていたかもしれないのだ。自分で言うのもなんだけど今までの依頼を解決したのはほとんど私で、貴女は依頼を受けただけで何も解決には携わっていないよね？

もうこれだけのことがあれば、比企谷君たちも平塚先生も雪ノ下さん自身も『雪ノ下雪乃は自分が思っているほど優秀ではない、ただの高校生だ』という事が理解できるはずだ。

そんな『ただの』高校生に小学生のイジメ問題を解決させるなんてできるわけがない。

それなのに平塚先生は私たちに問題を丸投げをする。この人は一体私たちに何をさせたいんだ？

そもそも私としてはこの生徒だけでは解決できそうにもない虐め問題を私たちに解決させようとする平塚先生にそんな事言われても綺麗事にしか聞こえないんだけどね。

私がそう思っているなかで平塚先生は雪ノ下さんに『後は君自身で答えを見つけなさい』とどこぞのドラマの教師が言っていたようなセリフを吐いて満足したようにどこかに行ってしまった。

平塚先生の自己満足のような綺麗事の演説が終わると、私はため息を一つ吐いた。  
……結局、何も解決していない。

それどころか、この場にいる人は誰も理解していない。自分たちのやろうとしている事がどれだけ愚かな事なのかすらもだ。

貴方たちが行動するだけで虐められっこの留美さんも貴方たちも不幸になる結末に

近づいているのにそれに誰も気づかない。

貴方たちは本当に進学校の生徒なのだろうか、勉強できるだけの能無しに思えてならないんだけど：

まあ、私の求めている答えはここにはない。こんな人たちに少しでも期待していた私が愚かだった。

でもまあ、私も知らぬ存ぜぬでいくわけにはいかない。

無視しようにも、この虐め問題には既に平塚先生の『奉仕部として解決しなさい』という鎖によって避けられないものになっている。それに『鶴見さんを助けなければ』とかいう偽善者によって傍観者でいることもできない。

……ていうか、昨晩の話し合いから察する限りこの人たちに任せて傍観者だと私の想像する最悪の結末を迎えそうだ。

そのため、この人たちが少しでもまともな行動をしてくれる事を期待したのだが、この体たらくだ：



……はあ……こうなったら……仕方ない……

この人たちから得られるものは何もない。ここにいるだけ無駄だ。私は涼んでいた木陰からため息と共に立ち上がりその場を離れた。

―富良野英理華 side end―

―比企谷八幡 side―

「あ、えくと…」

「……八幡だよ、比企谷八幡。自己紹介したばかりなのにもう忘れんじゃねえよ、ルミルミ」

「ルミルミじゃないよ、『留美』だよ。……八幡こそルミルミ言わないで」

戸惑った様子の留美は俺を『ルミルミ』呼びに顔を顰めながら言い返す。結構いいあだ名だと思っただがな…

「…そんで？こんなところで何してんだ？」

「散歩してるの……他のみんなとは一緒に居られないから…」

俺の問いかけに留美は顔を俯かせてそう答えた。

留美の手元にはカメラが握られている。なんでも親が友達と居る証拠に写真を撮つてこいとか言われたらしい。

……にしても虐められている娘に対して随分と残酷なことを言う親もいるもんなんだな。

昨日の話し合いでも結局結論は出なかつたし、留美の状況は少しも好転していない。こんな状況にも関わらず葉山たちは留美を無理やりみんなの輪に入れようとするんだからな。

まあ、所詮ぼっちの心は同じぼっちにしかわからんのだろうな…

あいつらに理解できるとは思えないしな。

まあこんなことを言ったところで、あいつらは聞く耳持つちゃくれないだろうが……

「……まあそんなところだ。恐らくお前と同じ悩みことだ」

「……同じって?」

「葉山って奴いただろ? そのリア充の奴らがお前を救いたいんだとき、全く笑える話だろう?」

「……救うってどうやって?」

俺の『救う』という言葉に少しは希望を見出したのか、留美は何かを期待するような眼差しで俺を見返す。

だが、生憎と留美の期待するような解決策を取ろうとはあいつらはしていない。

あいつらのやり方では留美の状況は何も好転しないし、むしろ現状を悪化させる事だつてある。

それは留美自身が一番わかっている事なのだろう。

だからこそ、俺がさっきのやり取りをありのまま伝えたら留美は青ざめた顔になり嫌悪感を顕にしたからな。

「みんなと話し合うだなんて無理だよ……そんなことで解決したらこんなことにはなつてないんだ……!」

「……だろうな……だが、あいつらにはそれがわからないんだろうがな……」

「もう嫌だよ……どうにもならないよ……」

まさに皮肉だな。

これはありがた迷惑どころか、単なる迷惑でしかない。

葉山グループの連中が留美のために起こす行動がまさか留美自身を苦しめているんだからな。

それは留美も分かっているんだろう。

あの集団の前では自分の意見を貫き通せるはずがない。ぼつちはどこにいても除け者にされるのだと…

絶望したような留美の目から涙がこぼれ落ちた。

もう自分はどうにもならない、もう諦めるしかないとそんな感情を含んだような顔を  
して…

「……なあ、本当に嫌なんだな？」

「嫌だよ……みんなと仲良くなるなんて無理に決まってる……絶対に無理だよ……！」

「……なら……俺に依頼をしないか？」

「……え？……依頼ってどういうこと？」

俺の言葉に留美が驚いたような声を上げる。

「……そういえば言ってなかったな。俺は学校では『奉仕部』っていう変な部活をやっている。そこではお前のような困っているヤツを手伝うことをしているんだ……」

それから俺は入部当初に雪ノ下が俺に説明していたことをまんま伝えた。奉仕部の活動理念は『飢えた人間に魚を与えるのではなく魚の取り方を教える』ものだ。

留美は直接助けるのと『手伝うのと何がちがうのか』と疑問に思ったらしいが、まあそれは置いておこう。

実際、俺自身もその違いがなんなのかはわからんしな。

「とにかくお前が助けを求めるとは俺は全力で応える…どうだ…?」

「……………八幡はあの人たちとはちがう。信じられる気がする」

「そうか…ならこの依頼は引き受けた。よろしくなルミルミ」

「だから…『あれ？鶴見さん?』…ルミルミじゃなくて留美だつて…えっ!?」



その時、俺たちの背後から女性の声がかかった。

声の主が誰なのかはすぐに分かった。だが、この声は俺が最も聞きたくない声だ。舌打ちをするのを堪えて後ろを振り返るとそこには…

「比企谷君も一緒だったんだね、良かったよ」

そこには不気味な仮面の笑顔を貼り付けた『あいつ』。富良野が立っていた。

「比企谷君、鶴見さんと一緒にいたんだね、いなくなつたから心配してたんだよ？」

「……心配？」

『あいつ』が俺を心配？そんな事なんてあり得ない筈だが…

疑問に思う俺をよそに富良野は今度は留美の方に視線を移し、人好きのする笑みを浮かべて親しげに話しかける。

「鶴見さんも比企谷君と一緒に良かったよ。実は私ね。君のことを探していたんだよ、私と一緒に来てくれないかな？」

そう言い富良野は留美に自分の手を差し出し『一緒に行こう』と言った。もちろん顔には笑顔の仮面を貼り付けているが。

「…あ…うん」

留美が俺の後ろから出てきて富良野の前に出てきた。さつきまで緊張で顔が強張っていた留美だったが、俺に悩みを打ち明けたことと富良野の纏う優しい雰囲気とを許しているのだろう。

確かに富良野は人に気に入られやすい。雪ノ下も由比ヶ浜も平塚先生までもが富良野には俺と違って良い感情を抱いているからな。

でも、あいつには…

——すっ…

「……………え？」

俺は富良野の元に行こうとしている留美の前に手をいれた。

「……………どうしたの八幡？」

「…………………………」

俺は留美の前に手を出して『あいつ』の元に行くのを止める。

留美が疑問の声を上げて俺を見上げるが、富良野は留美を止めた俺を一瞬だけ睨むように見つめたが、すぐにいつもの胡散臭い笑みを顔に貼り付ける。

「……………何？どうかしたの？比企谷君」

裏のある優しい笑顔に気圧されるが、俺は富良野から視線を外さずにこう言う。

「……お前、なんのつもりだ？」

「何が？」

「……今度はお前……何をするつもりだ？」

俺は富良野に問いかけた。そしてストレートに自分の抱く疑問をぶつける。

もちろん、これはただの推測にすぎないし今回の富良野への問いかけはほぼ俺の勘の  
ようなものだ。

「……………何の事かな？言っている意味が分からないんだけど…」

だが、富良野は俺の疑問に対して意に介したような素振りは全く見せず、いつもの優しい笑顔で言葉を返す。

「……………そう思うならさっさと帰れ。俺が今は留美と話しているんだ」

「…お話中だったならごめんね…でも、小学生の引率の先生が鶴見さんと呼んでるんだ、だから、鶴見さんとの話は後にして欲しいんだけど…」

「……………え？そうなの？」

「うん、そうなんだ。引率の先生が鶴見さんに話があるって言ってて私が鶴見さんと呼

びにいくつもりだったんだけど……」

『あいつ』の言葉に留美は目を丸くする。笑顔を崩さずに『あいつ』は続けた。

「引率の先生も鶴見さんの様子が変わったということに気づいていたみたいだよ。鶴見さんのメンタルケアでもするんじゃないかな？ 詳しい事は分からないけどね」

「……なら、何でその引率の先生とやらが直接呼びにこないんだ？ 小学生の様子が変わったと言うのならその先生自ら来るべきだろう？」

俺が反論すると富良野は『それはそうなんだけどね』と困ったような笑みを浮かべた。

「私もそう思ったんだけど、先生に直接呼ばれるのは流石に鶴見さんにも抵抗があるのでしょう？ だから、第三者である私が呼びに言ったほうが鶴見さんの緊張も少しは逸れる

かなと思ったんだよ」

「……なら、お前である必要はないだろ。こういうのは由比ヶ浜辺りが行くのが適切じゃないのか？」

「まあね。私もそう思ったんだけど、由比ヶ浜さんたち川で遊んでいて頼みづらくてさ。私は水着持つてきてないから川で遊べなくて暇してたから私が行くことにしたんだよ。何かおかしいの？」

『おかしいの？』と少し力の込めた言い方で富良野は俺に言った。まるでこれ以上は聞くなと言いたげに……

「……嫌……別に……」

「まあ、私の事なんか今はどうでも良いじゃん。先生待たすのも悪いしさ。鶴見さん、そろそろ行くよ」



「…………う、うん……」

留美も俺と言いき争いのようなものをした富良野に少し戸惑った様子だったが、富良野の留美に向ける視線や雰囲気は最初に会った時と変わらない優しいまま、留美も戸惑った様子だが、大した警戒はしていなさそうだ。

留美は差し伸ばられた富良野の手を取る。

「それじゃあね、比企谷君」

「……………また後でね……」

富良野は終始不気味な笑顔を浮かべながら。留美の手を優しく握り林立する木々の中に消えていった。

残された俺は自分の手を無意識に握りしめる。

「……………つち」

富良野の去り際に思わず舌打ちをする。だが、留美のためにもここでと争うのは悪手だ。

無理やり止めても事態をややこしくするだけ、歯痒さを覚えながら去る留美と富良野の後ろ姿を見つめた。

……………本当に富良野は何を考えているか分からない。

富良野と留美が向かった木々の間を見ながら俺は柄にもなく内心で呟く。

富良野は一体何が狙いなんだ？何が目的でこんな事を繰り返す？ まあ、いずれにせよ胸がムカつく気持ち悪い奴だということには変わりないがな。

さっきの富良野は笑顔を浮かべてはいたが、その笑みを浮かべる仮面の下では不機嫌そうに顔を歪ませていた事だろう：

原因はもちろん俺だ。

さっきの林で留美と話していた時に富良野は留美にこれまでと同じように『何か』、この依頼を終わらせる解決策という名の『何か』を吹き込むつもりだったのだと思う。

何のためにそんな事をするのかは分からないが、その時に俺が邪魔に入った。

富良野を留美に触れさせないようにするために真つ向から俺は『あいつ』に齒向かった。

富良野はその時に一瞬だけ顔を歪ませた。留美からは見えなかっただろうが、俺から

ははつきりとあいつの顔が歪んだのが見えた。

その時に目を引いたのは富良野の目だった。

俺が反論した時の富良野の目はまともではなく、まるでビクビク怯えている標的を殺すのを邪魔された暗殺者のような狂気を帯びた目をしていた。

奉仕部の入部時には富良野は、仮面は被っているが、どこにでもいる女子高生だった。だが、テニスコート、チェーンメール、川崎のバイト、遊戯部と奉仕部での依頼に関わっていくうちにあいつは変わっていった。

ーもし、富良野がまた干渉するつもりだったとしたら……

富良野は留美にどんな解決策を持ちかけるつもりなのだろうか？

まさか、葉山たちと同じように留美といじめっ子たちを話し合わせて和解を望ませる策を実行するのを手伝うとは思えないし、傍観するつもりならばさっきのような事をやる必要はないからな。

だったら富良野は今度はどんな手を打ってくるんだ…？

留美に『強くなれ』と独身のように熱血指導を行うのか？

それともいじめっ子を告発するかフルボッコにするかして強引な解決をさせるのか？

それとも留美の存在を消す……

……いや、そこまではしないだろう…流石の富良野もそこまでは…

……ダメだ、考えれば考えるほど富良野がとんでもないことをやらかしそうで寒気がする。  
……流石に最後のは俺の被害妄想だと思いたいが、きっとそうであって欲しいと願わ

ずにはいられない。

だが、もし富良野がやる気だというなら阻止しなければならぬ。

ただ相手の思考が読めなくてはこちらもどうやって動くか見当もつかないと、中々厳しい状況にある。

富良野の思考は俺にも読めない。日頃から何を考えているのかわからない。常にニコニコと笑顔を浮かべて誰にでも良い顔をしているが、その笑顔には裏があるような気がしてならない。

日頃のあいつはパツと見は『他者を思いやる善良な奴』のようにしか見えない。だが、俺には優しさの裏に悪意を忍ばせ、人の心の隙間につけ込み相手を操り破滅させる邪悪な『傀儡子』のようにはしか思えなかった。

その証拠に遊戯部の時に絶望している材木座や遊戯部の2人を見て楽しそうに笑っていた。

富良野に自覚があったのかは分からないが、あの時の『あいつ』は、人の不幸を、破

滅を、絶望を心から喜んで楽しんでいるような邪悪さを感じさせる純粋な笑顔を浮かべていた。

……今でもあの時の富良野を思い出すたびに背筋が寒くなる。そう思うといつもの富良野の笑顔までもが冷たい笑いを浮かべた呪いの仮面のように見えてしまう。

どうか富良野がボロを出してくれればいいんだがな……俺の経験から相手を倒すのに1番良い方法は弱いところを叩くことだからな。

今のあいつは弱いところを全て覆い隠している、でも、完璧な人間なんてこの世にはいない。お前のその嘘で塗り固められた仮面が剥がれるのも時間の問題だ。

……だから早く本性を現せよ、大嘘つき。お前が俺や留美をマリオネットとして操り踏みつけようとするなら、こっちはお前の操る糸を引きちぎってやる。

いつまでも傀儡子でいられると思うな。お前の操るモノは人形じゃない、意思と感情を持つ人間なんだからな。

……だが、この時の俺はまだ気付いていなかった。富良野の本当の狙いを…

この時点で俺は富良野の引く糸に絡まった、マリオネットになっているということ

…

俺は留美を富良野の元に行かせた事を後悔する事になる。

あの時に強引にでも留美を引きとめるべきだったのだと、気付いた時にはもう何もかもが手遅れなんだという事を…



さつき、留美を強引にでも引き止めておいたら今夜の肝試しで起こるあの悲劇を食い止められたかもしれないのに……

一人の少女に平穩を脅かされたくない。

―葉山隼人 side 1

キャンプファイヤーの準備が終わって、俺はベースキャンプへ戻る。

作業はライン引きだけだったので比較的楽に作業は終わらせることができた。

やっと一息つける。俺が休もうしたところで誰かが近づいてきた。ああ、これは……

「……………葉山くん！ねえねえ、ウチさ、さつきまで超具合悪くてえ〜」

「……………はは、大丈夫かい？」

一息つこうとした俺に背後から甘ったれた媚びるような声がかげられる。

振り返ると相模さんだった。どう見ても体調の悪い奴の態度とは思えない。それに

しても彼女はまた作業をサボっていたのか……

テニスコートの件から優美子に代わる形で俺のグループに加わり、正直彼女の普段の横暴な振る舞いや言動には鬱陶しいと思う事も少なくないが、だからと言って一応好意を寄せられている以上無下にもできないため、とりあえず彼女が喜ぶような言葉を模索して語りかける。

正直、彼女の相手などしてられない。俺にはやるべきことがあるのだから。

昨日の話し合いは実に残念だった。あの纏りのない話し合いのせいで俺の思い描いていた計画が狂ってしまったからだ。

留美ちゃんを俺が助けてやることで、俺が以前の俺とは違うことを雪乃ちゃんたちに見せて和解し、更にグループの俺への尊敬を高めるという計画。

俺の意見は模範とも呼べるべきものだった筈だ。グループのみんなも賛同してくれだし、俺は今までその方法で揉め事や話し合いを収めてきた。

だから今回もそのやり方が通じると思っていたのに、それを奉仕部の連中が真っ向か

ら否定した。

だ。  
それどころか、雪乃ちゃんやヒキタニは俺のやり方は間違っているとまで指摘したの

何故だ、一体どうして、どこがおかしいと言うんだ？

相手はたかが小学生の女子、俺が『仲良くしようよ』と言ってやればすぐに従って留  
美ちゃんも孤立から脱出できるはずなんだ。

これのどこか間違いだと言うんだ。何も間違いはないじゃないか。

彼女のことをもつと考える？

俺はちゃんと考えているよ。考えた上でこうやって行動しているんだ。孤立してい  
る留美ちゃんを仲間のところに戻してやればいいだけだろう？

そうすれば彼女は幸せになって、俺は過去の過ちを雪乃ちゃんに許してもらえん  
だ。

雪乃ちゃんが言ったように、虐めつこを制裁するだなんて、そんなんじやあ解決とは呼べない。

おまけにそんなやり方じゃ、ちつとも『活躍』できないじゃないか。

グループのみんなに、雪乃ちゃんたちに、小学生たちに、俺の手で解決したというところを見せつけなければ意味がないんだ。

本来なら昨日の時点で雪乃ちゃんたちを説得できれば問題なかったのだが……まあ、今は良い。

雪乃ちゃんを納得させられなかったのは残念だったが、俺がイジメ問題を俺の案で解決させれば雪乃ちゃんも俺を認めてくれるに違いない。

その内に戸部や大岡、姫菜も俺の所に集まってくる。

休憩時間が終わって役割分担を決める話し合いが終わり、奉仕部も面々もボチボチも集まったところで俺は話を切り出す。

「——それじゃ、折角みんなが集まってくれたことだし、昨日の夜の続きといこうか。留美ちゃんのことについて話してもいいかな？彼女を助けられるいい案を思いついたんだ」

「おっ隼人くんそれマジなん?! いっや、カッキーすわマジツベー!」

「だな」

俺のグループはみんなが盛り上がっている。これなら昨日よりはマシな話し合いができそうだ。

「それでどうするの? 留美ちゃんのこと」

役割が大まかに決まったところで、昨日と同じように結衣が議題を上げる。すると、その一言に全員が黙りこんでしまう。

まずはみんなに作戦を説明するのが先だろう。それからでも、説得するのは遅くはない。

「それで、俺の案についてなんだけどーー!」

俺は全員を見渡して自分の意見を話し始めた。

―葉山隼人 side end―

―比企谷八幡 sider―

休憩時間も終わりになり、再び俺たちは午後の肝試しの準備に取り掛かる、といっても午前のうちにあらかたは終わらせていたため、準備はすぐに終わった。

準備が終わると俺たちは肝試しの役割分担を決めることになった。

俺たちの役割は小学生が間違えたコースを進まないようにする、いわば見張り役のようなものだ。

この肝試しは中間地点の分岐点で待機する人と小学生を驚かせるお化け役に分かれる。

お化け役はノリノリの相模と戸部がやりたいということで、自動的に葉山のグループが担うことになり、戸塚はスタート地点で小学生を送り出す役、俺たち奉仕部メンバ―

はコースの案内役に決まった。

「それで、どうするの？留美ちゃんのこと」

役割が大まかに決まったところで、昨日と同じように由比ヶ浜が議題を上げる。すると、その一言に全員が黙りこんでしまう。

まあ、無理も無い。コイツらは昨日の夜に散々話し合っていたのにも関わらず結局建設的な意見は何も出てないんだからな。

ちなみに、この話し合いに富良野はいない。

なんでも、ここに来る前に由比ヶ浜に『少し引率の先生に呼ばれてるから先に役割を決めといて。私は余った役割で良いから』と言っていたらしい。

そんな中、まず葉山君が口を開いた。

「やっぱり、留美ちゃんがみんなと話すしかない、のかもな。話をすれば、最後には分



かってくれると思うんだ」

コイツの解決策は、昨日と同じく鶴見留美がみんなと仲良くなれるように手助けすることだった。

アホか。周りの連中にその意思がないからああしてハブられてるんだろが。どこに目をつけてるんだ。

「無理だよ。その場ではいい顔しても、裏でまた始まると思うよ？」

葉山の意見を切り捨てるは海老名さんだった。この人は葉山のグループの中では、まだまともに考える事ができるみたいだな。

「じゃあどうすればいいんだろう……。留美ちゃん、このままだとずっといじめられたままだよ……」

戸塚が悲しそうに目を伏せて言う。流石戸塚だ。

「留美ちゃんがみんなと仲良くなるために、俺たちにできることがきつとあるはずだ。留美ちゃんのためにも考えないと」

葉山が力強くそう言い切った。それこそ無理なことが、コイツはいまだに分かっていないようだ。

「無理だな。お前らにどうこうできるとは思えない」

考えるより先に口からそんな言葉が出ていた。

ぼっちの俺が葉山に反抗するとは予想外だったらしく葉山たちが一斉に驚いた表情で見てる。そしてそれは、雪ノ下たちも同じだったらしい。

「ちよつとヒキタニ。あんた何言ってるの？」

相模が口火を切った。喧嘩腰で俺に自分の意思をぶつける。

「何だよ？」

「何だよ、じゃねーし。あんた、留美ちゃんが可愛そうだと思わないの？」

「……それがどうした？」

「どうしたじゃねーし！あんたって人の心ないの？マジキモいんだけど」

詳しい説明もなしにカースト上位陣が下位の人物を虐げるパワーワードの『キモい』という言葉をつき捨て、俺を睨みつける。

コイツ昨日の話し合いで留美の事なんてほとんど気にしてなかったくせに何言ってるんだ？そんなに葉山の意見に反対したのが気に食わなかったのだろうか？

淡々と答える俺に相模が苛立つ。その様子を見かねた葉山が俺に引きつった顔で話しかける。

「ヒキタニ、いや、比企谷。どういふことか詳しく教えてくれないか？」

「ふーん、俺の名前知ってたのか。てつきり読み方知らないのかと思ってたぜ」

「それは別にいいだろう。今は君の意見について聞いているんだ。何故、無理だと言いつけるんだい？」

「やっぱりコイツは頭の中がお花畑だ。俺は一呼吸置いて葉山に吐き捨てるように言葉繋ぐ。」

「そもそも、お前らは前提からして間違っている。鶴見留美をみんなと仲良くさせよう？ そんなことを考えるよりも先にすべきことがあつただろうが」

「……………それはどういふことだい？」

葉山が苦し紛れに聞く。コイツ、本当に心当たりがないのか？

「なら聞こう。いじめを行っている奴らに話をして『いじめをしてはいけないから鶴見留美と仲良くしよう』と理解させることと、鶴見留美が他のみんなと仲良くするように」

なるのは本当に『イコール』となるのか？」

「………どういう事？ヒキタニ君」

「はあ!?!そんなん当たり前っしょ？」

「イコールもなにも、そうじゃないのか？」

相模と葉山はその通りじゃないかと俺に反論する。海老名さんは理解できないのか俺に説明を求めた。

俺の葉山の意見の反発と今の言い争いで話し合いと呼べるような空気ではなくなっていた。だが、留美のためにもコイツらには言ってやらねばならない。

「…………だから、それは…『ごめん。遅れちゃった』…………え？」

その時、聞き覚えのある女性にしては低めの声が俺の話の遮って聞こえてきた。

声のする方を見ると、セミロングの黒髪を靡かせ、いつもの笑顔を浮かべる長身の女性、富良野が険悪な場に似合わない笑顔を浮かべて俺たちの輪に入ってきた。

「…………あ、ごめん。少し遅れちゃった。なんの話？」

タイミング良いのか悪いのか、富良野が戻ってきた事により一旦話の流れが止まった。相模は不機嫌そうな顔になるが、富良野はお構いなしにいつもの笑顔のまま友好的に葉山に話しかける。

富良野を見るなり、葉山が少し顔を引きつらせた。戸惑いながら自分の解決策とそれを肝試しの時に実行するというまだ話し合いに出てないプランを富良野に何故か焦ったように話す。

富良野は葉山の意見を共感の素振りをしながら聞いていた。途中で雪ノ下の反論や相模の横やりが入ったが、富良野が上手い口上で納め、葉山の案を続けさせる。

葉山が話終わると、富良野は雪ノ下をチラリとみて今度は雪ノ下に意見を求めた。

雪ノ下は大体昨日の話し合いで言ったような事を富良野に説明した。

途中で葉山に關しての意見がどれだけ無謀なことかの批評が入っていたが、かいつまんで言う、『虐めつこたちに留美の現状を伝え、考えを改めないと親や学校に伝えて処罰を降す』と半ば脅すように言つて改心させる教育的指導を行うというものだった。

富良野は雪ノ下の意見も葉山と同じように共感の素振りをしながら聞いていた。

2人の意見は食い違つている。話し合いで解決しようと言う葉山と、脅して強引に解決させようとする雪ノ下。相反する意見を出させて富良野は何をするつもりなんだ？

葉山の意見を支持するのが葉山グループの全員、雪ノ下の意見を支持するのが由比ヶ浜と言つた感じだ。残りの奴らは中立といった感じだが、発言力の強いコイツらの意見だから決まつた方に流れるだろうな。

この場でどつちかの味方をするつもりか？

今までの富良野を見てきた限りだと、そんな行動するとは思えないが、一体何が狙いなんだ？

そんな俺の疑問を一蹴するかのように富良野は暫く考え込んだ後、またニツコリと笑

顔を浮かべて場の全員を見渡して言った。

「2人とも納得できる意見だよ。確かに葉山くんの言うような話し合いでの解決なら鶴見さんたちが和解しやすいし、彼女らが本当の友達になれるかもしれないよね」

何と富良野が葉山の意見に賛同をした。葉山と葉山グループの奴らの表情が少し和らぐ。

「……ちよつと富良野さん。私の意見聞いてたのかしら？それは万に一つの可能性もないって……」

だが、これに黙っていられないのが雪ノ下だ。雪ノ下は目を吊り上げ自分の意見に反対する富良野を冷たい目で睨みつける。

にしても、本当に恐ろしい目つきだ。みろよ、隣の由比ヶ浜なんてめちやくちやビ



ビってんじゃねえか…

富良野は今度は雪ノ下の方を見てニツコリと微笑み言葉を繋ぐ。

「雪ノ下さん。決めつけるのはどうかと思うよ？それに葉山君の意見は確かに雪ノ下さんがなるようなデメリットもありそうだけど、間違つてはいないじゃない」

「……なっ！」

「雪ノ下さんの言うように更なる虐めに発展するかもしれない。でも、そうなるかどうかは分からないよね。それなら脅すなんて事をするよりまず話し合いをさせる方が鶴見さんたちのためになるんじゃない？」

「そうだし！富良野、アンタ話わかるじゃん！見直したよ！」

さつきから葉山の意見を擁護するような発言をする富良野。相模は完全に自分たちの味方に富良野がついたと思つたのか機嫌を良くし富良野を手をつかむ。

だが、富良野がそう言うたびに雪ノ下の機嫌はどんどん悪くなっていった。冷気を纏ったようなオーラを出し。不機嫌な顔を隠そうともしていない。

「……そう。貴女は他の人たちと違って少しは賢いとは思っていたけど、私の見込み違いだったようね」

雪ノ下は富良野に『失望した』と言いたげに吐き捨てた。踵を返すようにその場から去ろうとすると、富良野が『ちよつと待つて』と雪ノ下を止める。

「雪ノ下さん、何を勘違いしているか分からないけど、私は貴女の意見を否定したつもりは全くないよ？むしろ、貴女の意見にも私は賛同してるんだよ」

……は？

「え？」

雪ノ下が足を止めてキョトンとした顔で富良野を見つめる。葉山たちも富良野の発言に目を丸くしていた。

「ち、ちよつと待つし！ふらのん、さつき隼人君の意見に賛同したじゃん！さつきと矛盾してるよ……」

「うん？矛盾してるってどう言う事？私は葉山君の意見に賛同したけど、雪ノ下さんの意見にも賛同するって言ったただだよ？」

由比ヶ浜が富良野に突っ込む。矛盾なんて難しい言葉をよく知ってるなど言いたいが、俺にも富良野の発言の意味が理解できなかった。

相反する二つの意見のどっちにも賛同するってどう言う事だ？コイツは一体何を言ってるんだ？

俺と由比ヶ浜だけではなく、全員が同じ考えなのだろう。富良野のことをキョトンとした顔で見つめている。

富良野は笑顔を崩さずに言葉を繋いだ。

「葉山君の意見にも賛同するけど、雪ノ下さんの意見にも私は賛同する。つまり、私はこの二つの意見を両方とも鶴見さんのイジメ問題を解決するには必要だと思つて事

だよ」

「……………だから……どう言うこと?」

理解できてない由比ヶ浜が富良野に問いかける。

「だからさ、今回のイジメ問題の解決には2人の意見の両方が必要ってことだよ。そもそもさ、こんなに良い意見を出していて、どっちかの意見しか採用しないなんてもったいないと思わない? 2人の意見を取り入れて解決するのが最善だと私は思うんだけど」

「……………あのさ、横から申し訳ないんだけど、隼人君と雪ノ下さんの意見を二つとも取り入れる解決策は無理だと思うよ? 2つとも意見は真逆だし」

今度は海老名さんが富良野に突っ込む。そこがみんなの疑問だ。当事者である雪ノ下と葉山もその点には納得できてないようだからな。

「真逆だからこそだよ。私は2つの意見を取り入れるべきだと思う。まず2人の計画に共通している夜の肝試しでイジメっこたちと鶴見さんたちの様子を伺う。そこでまず葉山君たちがイジメっこたちを説得する。そこですかさず雪ノ下さんが教育的指導と

してイジメっこたちに自分のしたことの罪の重さをわからせる。葉山君と雪ノ下さんの力量があればイジメっこたちを納得させられる説明ができるはずだし、こうすれば、葉山君の説得により良心が芽生えるかもしれないし、雪ノ下さんの指導により自分たちの罪を自覚して反省するかもしれないよね。二重に説得を重ねたら流石の彼女たちも反省して鶴見さんのイジメを辞めると思うよ?」

富良野は笑顔のまま葉山も雪ノ下の意見を兼ね揃えた解決策を提示した。その場が静寂に包まれる。

「素晴らしい!」

その時、拍手とともに平塚先生が俺たちの会話に入ってきた。平塚先生は感激したように富良野を見つめる。

つーか…この先生、一体いつからいたのだろうか? いたのなら葉山と雪ノ下の言い争いの時から止めて欲しかったが…

「富良野。私はお前を見直したぞ。奉仕部に入部してから成長したな。膠着していた話

し合いを纏め上げ、さらに双方納得いく解決策を提示するとは。解決策もなかなかのものであった。私も鼻が高いぞ！」

平塚先生は富良野の背中をバンバンと叩いて称賛した。富良野は『痛いですよ』と言いながら照れたように頬をかいた。

「富良野の意見に反対のものはいるか？私はこの案が最も納得できる案だと思うが…」

平塚先生に反対の声を挙げる者はいなかった。流石の俺もここで反対の声を挙げたらあの独身に殴られること間違いなしなので何も言わない。

「反対のものはいない。これで決まりだな。では、あとは君たちで解決したまえ」

平塚先生は豪快にそう言うのと満足そうに踵を返した。

おいおい…そこまで俺たちにやらせるつもりなのか…？この独身は…

俺はあまりにも放任主義な平塚先生に思わずため息が漏れる。だが、俺のそんな意思にお構いなしに平塚先生が賛同した事により、富良野の提示した意見が採用される流れ

になつていた。

葉山は自分の意見が採用されたことと、意見が纏まつた事に満足そうにしているし、雪ノ下は富良野を悔しそうに一瞬見つめ、葉山と同じだと言う事に不服そうにしながらも、富良野の解決策に納得したらしい。

馬鹿な由比ヶ浜は『ふらのん天才！』と言っているし、相模や戸塚たちは富良野の意見に納得したらしくこの計画の杜撰さに気づいた様子はない。

ただ一人、海老名さんだけが顎に手を当てて何かを考えこんでいるようだが、言い出す気はなさそうだ。

話題の中心にいる富良野は由比ヶ浜にまとわりつかれていた。困つたような笑顔をしながら由比ヶ浜を引き剥がす。

纏まつた意見に満足している奴らを見ながら俺は内心で呟く。

俺は富良野の意見に賛同できない。

一見までもそうに見えるが、富良野の話した計画は穴だらけだ。下手をすれば留美がさらに虐められる結果になるのにそれを指摘していない。

富良野が話しているのはそれこそ葉山と雪ノ下の意見のメリットだけ、デメリットの事を何一つ提示していない。

葉山や雪ノ下たちが、こつそりといじめグループの連中をルートから外れさせ、教育的指導をしたとしてもそれが留美を虐めている奴らに効果があるとは思えない。

俺の経験からして効果はゼロだ。その場では泣いて謝っていても、そのグループの奴らは、葉山たちが去った後に留美を憎しみの目で見るだろう。

『チクリ野郎が』、『高校生にまで泣きつきやがって』、大体こんな所を考えるだろう。

そして周りの皆に発破を掛ける。『鶴見留美は再び敵となった、排除しろ』と、そうなければ以前より苛烈なイジメになる、そうなれば完全に逆効果だ。

……このようなデメリットに富良野が気づかないとは思えない。なのにコイツはその意見を後押ししようとしている。

……コイツらしくない杜撰な解決策だ。

何だかまるで、この計画を無理やり押し通そうとしているような……



林の中で留美を見送った時と同じような嫌な予感がする。

だが、この場は平塚先生が賛同した事により、コイツの出した意見に纏まりつつある。俺が何を言ってもコイツらは聞く耳を持たないだろう。

……こうなったら俺も早めに動いておいた方が良いかもな…

話し合いが終わり、全員が肝試しに備えてそれぞれのグループに戻っていく。俺もそれに乗じて次の目的地に向かう。

その時、富良野とすれ違う。

170cm以上の身長を持つ富良野は俺と背丈がほぼ一緒だ。すれ違い様に俺の耳元に口を寄せて、まるで呟くように言う。

「……比企谷君、貴方は自分のやってる事が正しいと思ってる？ だったらそれは間違いだよ」

「……は？」

俺は思わず間の抜けた声で反応する。

富良野は俺の脇を通る時に俺にそう話しかけると、振り返りもせず林の中に一人消えていった。

↓比企谷八幡 side end↓

―鶴見留美 side 1

真夏の昼の熱い太陽が自然に溢れた自然公園を照らす中、私は昼食を食べて、自由時間になつて部屋に戻ると誰もいなかった。

以前の私なら寂しいと思つたのかもしれないけど、今はこの状況を少し嬉しがつているといふのは変わつているのだろうか。

なんにせよ、一人で静かに過ごせるのはちよつと気分がいい。こつそり持つてきた本でも読んでいよう。

でも、先生が来たらきつと面倒なことになるから周りに気を配りつつね。

「……………」

しばらく読書に勤しんでいると、やっぱり引率の先生が来た。

先生は、こんな時に一人で本を読んでいるのが大層不服らしく、『友達と遊びなさい』というパワーワードで私を半ば強引に部屋から追い出した。

部屋を出て、外へと向かう。

さて、これからどうしようか。とりあえずしばらくして先生がいなくなつたら部屋に戻つて本でもとつてきてどこか誰かに見つかりにくい木陰の下にでも行こうか…

『彼は君のことなんて何一つ考えてないんだよ。親身に君に向き合ってるように見えて内心では君のことを陥れようとしているんだよ』

『鶴見さん、君は昨日は誰も信用できないって言うっていたのにその舌も乾かないうちに他人に助けを求めるんだね』

『そもそも今の現状は君の自業自得でもあるよね？自分だけが悲劇のヒロインだと思ってるの？だったら君は本当に惨めだね』

『それって自分だけが良ければ良いって事でしょう？結局君も『君自身が愚かだ』と言っていた人たちと同類って事だよ』

…ふとその時、私の脳裏にある人の言葉が蘇ってきた。

これは、昼食前に八幡と別れた後、林の中であの人に言われた言葉だ…

あれからあの人に言われた言葉が頭にこびりついて離れない。

仮面のような笑顔を顔に貼り付けたあの人は今の私の心を見透かしたようにそう言った。

「……分かってる……そんな事分かってるんだ…」

あの人の言い分に私は何一つ言い返さなかった。いや、言い返せなかった。

最初はクラスにいじめられている子がいた。仲間に入れてもらえず、物を隠されたり、裏で悪口を言われていた。

可哀想だと思っただけ、同時に巻き込まれるのが怖いから関わり合いにならないようにしていた。

やがてその子は虐めの耐え切れずに不登校になった。

そして、クラスの皆が自分がその子をいじめていたとでつち上げ、今度は自分がいじめられるようになった。

先生もいじめをやったのが自分だと信じているから、助けてくれなかった。

無視され、陰口を言われ、物を隠されて——今に至る。

抵抗しようとした、抗おうとした。でも、それは全て数の圧力により押しつぶされた。だからもう全部どうでも良くなって現実を受け入れた。

私に残されたのは少しでも自分のダメージを軽くするための自己防衛だけだった。

みんなが馬鹿だ、周りのみんなはガキだ、そう思う事で自分のプライドと心を守ろうとした。

それをあの人は『悲劇のヒロインぶっている』と吐き捨てるように言った。そんな事ないと言いつ返したかったが、言いつ返す言葉が見つからなかった。

「……………っ！」

あの人の事を思い出すだけで無償に腹が立って外に出る。頭の中はもうぐちゃぐちゃだ。

あんな事を言われたら、もう誰を信じたら良いのか分からない。もう誰を頼れば良いのか分からない。

私は一体どうすれば良いの…？

「あれ、留美ちゃん？」

乱れた感情を少しでも落ち着かせるために、外を当てもなく歩いてみると、葉山さんに声をかけられた。

正直、1番会いたくない人だった。でも、変なことをしてそれがみんなの耳に入ればと考えると、拒絶の言葉は喉の奥に引っ込み、代わりに身震いしてしまった。

「……………はい？」

「みんなは、どうしたの？ いっしょじゃないの？」

空気を読まないのか察しが悪いのか葉山さんが、されたくない質問をする。みんなと一緒にこんなところに一人でいるものか。

「朝食を食べて部屋に戻ると誰もいなかったよ」

「……そっか、はぐれちゃったんだね。俺さ、みんながいるところを知っているから、良かったら、案内しようか？ それとも、みんなを呼んで合流しようか？」

……それ、絶対にやめて。完全に事態は悪くなるから。

「ううん良いよ……私は一人で大丈夫だから……」

「遠慮しなくて大丈夫だよ！ さあ、おいで」



精一杯の拒否をしても葉山さんは気にした様子は何もなく、葉山さんは遠慮なしに手を伸ばしてくる。この手を握れば、間違いなく連れていかれる。

虐めつこたちのいる悪の巣窟に、あんなところに戻るのはごめんだ：

「ごめんなさい、ちよつとトイレ」

そう言い残して私はその場を離れる。後ろで名前を呼ばれるが、振り向かない。気分はまさに馬車から逃げたドナドナ（子牛）の気分。逃げないと、馬車の運転手が追ってくる。

でも、私は気づかなかつた。

本当に私を追ってきているのは、すぐ後ろの馬車の運転手ではなく、その運転手の影に隠れている傀儡子である事を……

―鶴見留美 side end―

―富良野英理華 side―

「……ここまででは計算通り……」

予想通りに進んでいく計画に私は小さく微笑む。比企谷君が懸念材料だったけど、ここまで来れば彼のことなど関係ない。

「……比企谷君、やっぱり私には君の考えは理解できないなあ……まあ、君の人間性は大体理解できたけど……」

こんな話を聞いたことはないだろうか？

『世は全て事も無し』という言葉を。

この話を私はこう解釈している。

人生というものは、私たち人間が夢想するよりも平坦であるものなんだと。

それこそ平塚先生や葉山君たちが望むようなドラマ性に満ちていたりしないんだよと。

なぜ人は、あんなにもドラマやアニメといった空想世界に想いを馳せるのか。平塚先生がアニメが好きなように、そこには、現実にはありえない創作物の中だけ許される『i f』があるからだ。

運命的な恋愛も、できすぎのコメディも、悲劇的な結末も、すべてはお話の中の世界というフィルターがかかっているから、安心して空想を享受することができる。

要するに他人事なのである。誰かのドジも、愛憎も、悲劇も、自分に起こりえないとわかっているからこそ楽しむことできる。

何も珍しいことじゃない。今回の鶴見さんのイジメ問題に関しても同じことが言えるからだ。

虐めが悪いことなのは幼稚園生でも知っている事実。でも、それがなくならないのは何故なのか。

答えは簡単。人間とは常に誰かの優位に立ちたいと思う人間だからだ。それに虐

めっ子も周りでそれを見ている人も所詮は別世界の話だから手を差し伸べないし、せいぜい『可哀想』って思う程度だ。

だからこそ周りの人間は自分の世界に影響のない人間を虐めて快感を得たがる。

その人間の性がある限り虐め等はなくならない。大人でも子供でもそれは変わらないのだ。

被害者が嫌がれば嫌がるほど、加害者は『いけないことをしている』や『悪趣味なことをしている』というような背徳感に酔いしれ、さらに過激なものになっていく。

まあ、綺麗事が好きな教師や偽善者が「そんなことはありえない」「そんなはずがない」なんて寒いセリフをよく言うが、フィクションのお話の中の登場人物ですら、使い古された常套句だろう。

今回の虐め問題を止めようとしている葉山君がそれに当てはまる。

ぶっっちゃけ彼らの描いている解決方法はフィクションの中の解決方法だ。虐めっ子を説得させて和解させるなんて、そんな事か出来るならとつくの昔に彼女たちもやってるし、私たちが介入する問題にもなっていないからね。

彼は綺麗事の塊だ。昨日の話し合いからそれがよく分かる。彼の意見は美しく模範

というようなやり方だが、そんな模範のようなやり方だけで解決できるほど甘くはない。

奉仕部の雪ノ下さんたちにも同じ事が言える。というか、こっちは葉山君よりたちが悪い。

葉山君たちはまだ鶴見さんのために、良くない動きであつても彼女のために動いていることから、その点は評価に値するけど、雪ノ下さんたちはそれすらもしていない。

雪ノ下さんは昨日の話し合いで、否定意見を出さばかりで意見を出さず、場の雰囲気悪くしただけだし、由比ヶ浜さんは話し合いに参加できていたかどうか怪しく、雪ノ下さんについて行っているだけだった。

それに、今回の鶴見さんの問題に関して、さつき私が思った通り『所詮は別世界の事だ』と無意識にみんな思っている。

彼らは準備が終わった後に呑気に川で遊んでいたからだ。問題を私たちに丸投げした平塚先生も一緒にね。

本気で彼女のことを助けたいと思っているのなら、昨日の話し合い体たらくを反省し、みんなで協力するのがセオリーだ。まあ、常識的に考えたらこんな問題をただの高校生の私たちが解決するというのがおかしいのだが。

てか、雪ノ下さんに関しては奉仕部の理念を無視してまで、自分から手を貸すと言っ

ているのに、それを無視して川で遊ぶという事をしているから始末が悪い。これこそが彼女が嫌う無責任というものなのではないだろうか。

雪ノ下さんは、これまでの依頼でもそうだったが、今回も正攻法で問題を解決できると思っている。

葉山君と言い、雪ノ下さんと言いそんなことをしてキャンプが終わった後、鶴見さんの立場がどうなるか考えもつかないのだろうか。目先のことを乗り切ればその後のことなど考えていないのだろうか。

雪ノ下さんは敵を完膚なきまでに叩きのめすと言っていたけど、鶴見さんには、そんなものなどない。

自分の基準だけで物を見て相手のことを考えることをしない。イジメ問題を解決すると言っている割に彼女はそれにすら考えが及ばないと言うのか。

それにしても、雪ノ下さんの愚直なまでに自分のやり方を信じて疑わない、その姿勢は葉山君にそっくりだな。彼も話し合いで和解させるといふ解決策が正しいと思っただけ以外の考えを聞き入れてないから。

もしかして雪ノ下さんが葉山君を嫌悪しているのは過去の因縁だけではなく、同族嫌悪的なものもあるからではないだろうかとも思ってしまう。

雪ノ下さんは認めないだろうけど、葉山君と雪ノ下さん、2人の考えは双子のように

そっくりだ。

自分が正しいと常に信じていて周りを見ているようで見ていない。テニススコート、チーンメールでもそのような兆しがあったしね。

見れば見るほど、みんなの行動が矛盾している。私から見たら『鶴見さんのイジメは所詮別世界の話だ』と無意識にみんなが思っており、この問題を本気で解決しようと思っているとは思えない。

まあ、自分の正義感に酔いしれてる人とそれについて行ったら人しかいないのだから当然だと思うけど。

まあ、あの中で一番鶴見さんのために動いているのは比企谷君だろうか。彼は何かの心境の変化があったか、元々根っここの部分が『困っている人を放っておけない』という正義感に溢れた人なのかは分からないけど、鶴見さんを助けようとしていた。

だからこそ、私が林の中で鶴見さんに近づいた時に貴女はあんなに嫌悪感を剥き出しにした顔をしたのだろうね。隠し切れてない嫌悪感が『近づくな』と私にサインを出していたよ。

貴方の考えに賛同しても良かったのかもしれない。でも、私にはそれが出来なかった。

比企谷君。私は貴方のことを信じてないんだ。貴方の解決方法で私の平穩が脅かされないとは限らないでしょう？

私は常に自分のことしか信用していない。比企谷君の解決方法は大体の想像はできるけど、イジメっ子たちが納得しなければそれまでだし、もしかしたら高校生に虐められたと教師や親に密告する可能性も捨て切れない。

私はそれが怖い、恐ろしい。そうなった場合は責任があるのは余計なことをして引っこ掻き回した私たちにある。

そうなると他の人はともかく私には守ってくれる人がいない。

みんなと違って『家族』という城がない私はそうなった場合は破滅の道を進むしかない。それは私は恐ろしくてたまらない。

想像するだけで怖い、恐ろしい、恐ろしくてたまらない。



雪ノ下さんたちも、葉山君たちも、平塚先生も、比企谷君もこの問題の解決するとい  
うのが、これほどまでに諸刃の剣である事に気付いてない。

人は誰しも、自分には、いや自分の周りには、そんなことが起きるはずがないと信じ  
ている。確信していると言っている。昨日と同じ今日が、今日と同じ明日が、必ず来る  
と妄信しているが、そんなことはあり得ない。それは私が身をもって体験していること  
なのだから。

彼らは永らく生を謳歌してきた習性の表れで、そう思っているのかもしれないが、周  
りから迫害され、人の幸せのお溢れをもらって生きている私はそうは思えない。

貴方たちには理解出来ないかもしれないけれど、私のような人間は、平穩が無事な時間  
が続いてほしいという願っている。

故に今回、私に何のメリットもないイジメ問題なんかここまで奔走してるのは、わ  
たしの『平穩に過ごしたい』という願いの現れなのである。

でも、誰もそれに気づいてくれない。まあ、気づかせる気もないし、気づいてもらい  
たくもないかと、私は自分の平穩のために動く。

「……比企谷君、貴方の考えは分かっているよ。確かに君の考えは見る人が見れば正しいことなのかもしれない……でもね、それは見てくれる人がいればのはなしだ。誰も見ていない時の行動はただの無駄な足掻きでしかないんだよ……」

私はそう呟くと、歩き始める。

鶴見さん、悪因悪果という言葉を知ってる？

自分がした事は自分に帰ってくるという意味だよ。

今は貴女が被害者なのかもしれないけど、以前は貴女も同じことをしていたのでしよう？

おそらく貴女が本当に求めているものは加害者たちからの謝罪でも和解でもなく、今のこの現状から抜き出させてくれる人、もしくは本当に心の奥底から信頼できる友達なんでしょうね。

でもね、仕方ないとはいえ相手を傷つけておきながら自分だけ悲劇のヒロインのように振る舞って助かろうなんてそんな虫のいい話なんてないんだよ。

ならば、貴女もその報いを受けなくちゃ、その先に何かあるのかは貴女次第だよ。

でも、貴女は『友達なんていらぬ、一人で大丈夫』って昨日の夕食の時に言っていたから、何が起こっても一人で乗り切れるんでしょね。

まあ、貴女のその先の事なんて知ったことではないけど。全ては元を辿れば貴女のせいだということをお忘れなでね…

私は行動する。全ては私の求める平穩のために…

物語の中心の少女も助けようと思惑を重ねる少年少女も気づかない。

彼らをじっと見つめる傀儡子の心の中を。

どこまで話すか。どこまで聞かせるか。

ゆつくりと傀儡子は彼らを観察し、道筋を組み立てて行動する。

傀儡子は平穩に過ごしたい。

みんながこうやって問題を解決しようと動くのも、きつと自分を救うための手段の一つにするために。

もちろん彼女は忘れない。

比企谷たちの思惑と留美が本当に求めているものを。

それすら全て考慮に入れて、彼女は計画を組み立てる。

そして、それぞれの思惑を利用し自分の思い描いたシナリオ（計画）を遂行するためのマリオネットを作り上げる。

全ては、己の脅威の排除のために。

タネは全て巻き終えた。後は結果をご覧あれ。

全てが富良野の思うがままに動いていた。